ML
3750
T69
1933
v.1

Toyohara, Sumiaki
Taigensho

East Asia

PLEA

CARDS OI

UNIVERS

顧問　井上通泰先生
　　　山田孝雄先生
　　　新村出先生

正宗敦夫 編纂 校訂

體源鈔

自一本
至三本末

合資會社 日本古典全集刊行會壽梓

ML
3750
T69
1933
v.1

LIBRARY
MAR 28 1967
UNIVERSITY OF TORONTO

第一卷 〔○東北大學本目次ナシ。イ本ニヨル。誤ハ東北大學本ニ照シテ正シツ〕

笙ノ形風〔○鳳ノ誤〕ニ象ル事……四
笙ト云ヲ釋名等ニ釋事……五
古善吹レ笙唐人ノ事……六
笙簧ノ事……七
笙渡二我朝一并奏始事……七
古來以レ笙得名輩ニ〔○衍〕事……八
吹レ笙作法事……一〇
息入事……一〇
竹移事……一一
ウカウ事……一一
調子吹出ノ事……一一
付物ノ事……一三
十種供養伽陀事……一三
朗詠ノ事……一三
講莚ノ時音取事……一三
糸竹次第止樂事……一三
舞樂ノ事……一三
御遊ノ事……一三
調子姿ノ事……一四
六調子依レ文字口傳事……一四
又一說笛家々ノ記事……一二
吹留息事……一三
十二律宛ニ十二月一事……一三
調子合竹事……一三

調子安〔○案ノ誤〕譜法事……二四
調笙次第ノ事……二四
付物合竹ノ事……二五
舞入時笛調ニ笙ヲ付事……二六
八調子ノ事……二七
琵琶博士孝道作殘夜抄事……二八
六代樂ノ事……三三
清樂九代樂ノ事……三五
七言樂ノ事……三八
以二曲爲一樂事……三九
以兩朝樂爲一曲事……四〇
稅〔○祝ノ誤〕所吉事等不用樂事……四一
退出音聲ノ事……四二
秘事安〔○案ノ誤〕譜事……二四
自大至細注之事……二五
答笙ノ事……二六
管絃ノ時目祿〔○錄ノ誤〕出事……二七
十二調子配十二月十二時事……二七
第一樂ノ事……三〇
九夏樂ノ事……三三
有名ノ事……三八
半拍子ノ事……三九
以三曲爲一樂事……四〇
二曲異名事……四一
參音聲樂ノ事……四一
行道樂ノ事……四二

供花樂ノ事……四二
用参音聲樂ノ事……四三
用競馬曲ノ事……四三
用産所曲ノ事……四四
五音事……四四
八音事……四五
六調子諸曲古來口傳事……四八
雙調樂曲事……八一
多政方花下ニテ地久ヲ舞事……八九
源氏若紫巻ノ詞事……九〇
第二巻ノ本(二ノ本)
雙調樂殘ノ事(〇前巻、雙調曲ノツヅキノ意)……九四
白樂天詞ノ事……九九
林邕(〇邑ノ誤)樂ノ事……四三
用退出音聲曲事……四三
用相撲節曲ノ事……四三
用元服曲事……四四
七聲事……四五
呂律(〇律呂ノ誤)事……四六
平調樂曲事……四八
雜々詩歌物語事……八九
博雅卿事……八九
戀ト云コト私詞事……九二
博雅三位朱雀門ニテ笛吹事……九七
黄鐘(〇鍾ノ誤)調樂ノ曲事……九九

歌ヨミノ女房ノ螢ヲサタスル事……一三一
三體詩少々事……一三三
催馬樂樂合事……一三三
大食調樂曲ノ事……一三六
平調音神樂ヲ一越調改事……一五三
秦王重テ書之事……一五三
私詞ノ事……一五八
盤渉調樂曲ノ事……一六〇
鴨長明作無名抄事……一六九
蘓合半臂句事……一六九

第二卷ノ末（二末）

盤渉調樂殘ノ事〔〇前卷盤渉調樂曲ノツヅキ也〕……一七一
萬秋樂私勘事……一七一
萬秋樂異名ノ事……一七九
普賢菩薩勸發品ニ事……一八三
日蓮大士持法華問答抄事……一八四
日蓮大士秋元抄御書事……一九三
大二條殿御文サヨノネサメ詞事……一九六
青海波ヲ連哥ニ付事……二〇六

第三卷ノ本（三本）

壹越調樂曲事……二三三
長恨哥事……二四二
私詞ノ事……二四五
日與上人御連哥ノ事……二四七

愚哥一首載事……二四八
兼秋哥愚哥載事……二六七
乱聲ノ事……二七〇

第三巻ノ末（三ノ末）

壹越調樂殘事（〇前巻ノ壹越調樂曲ノツヅキ也）……二九二
古哥詩少々載事……三一七
鳳笙調子安（ママ）譜注之事……三二六
虫之記ノ事……三六一
八幡宮正月神事ノ事……三七三
文選已下古詞ノ事……三八〇
逍遙臺ノ事……三八三
陵王所作少々載之事……二四八
建武乱仍唐ヨリ磬ヲ進事（〇コノ目、亂聲ノ次ニアルベキモノ也）……二七八
源氏花宴乙女胡蝶ノ事……二九〇
基政歌并私詞佛法ノ事……三〇五
着（〇著ノ誤）聞抄云事……三二四
魏文帝煮豆詩事……三六一
愚哥少々載之事……三六五
日蓮大聖勸（〇觀ノ誤）心本抄云事……三九七
後（〇俊ノ誤）頼淀渡郭公事……三八二

體源鈔　一本

八角しる御めぐみ世にあまねくをはしませば、九重のうちまとに嵐のかぜも枝をならさぬ時にあひて、人の心ものびらかに、民のかまど烟たえずぞ有ける。かゝるにつけて征夷将軍仰かしこみ、世をおさめ給と、八嶋のほかまで・波〔も[イ]アリ〕しづかにして年久しく成にたり〔け[イ]〕。爰に〔[イ]アリ〕・いかなるにか有けん、畠山の兩家數年の爭なを不休して、去應仁元年正月於上〔御[イ]〕五靈合戰あり、こゝなれぬ人の心には、思ひあへぬ世のありさまこのみいひあへり。しかれども程なく靜謐して、もとの花のみやこ、風さだまり、鳥のねもうららかに、霞わたれる宿ごとの木立、心あるたぐひは目とゞめられ侍るに、又あやめふく軒のしづく人の袂に落そひて、ものさはがしき色ふしいできそめて、弓胡簶などもて行ちがふにあやまたず、やとなき大名達とを左右によせて武家の御所へまいりつごはれ、既及合戰半兩陣にわかれ、時の聲天地をうごかす、肝魂もみ〔○國人[イ]ニヨル〕にそはぬ躰等、中〱中にこゝたらず。委ハ諸家記被載之歟依畧之　しかれば治秋朝臣は院御所御警固のために祗候す。予ハ器大子丸已下抄物等山上西塔院南尾

に所緣の坊在之によつて預置さいりやうこして住山し侍る間、京中合戰の樣さだかにしるす斗に、去る正月の兩家戰早速に事行侍ごく、則可屬無爲旨存處、逆風なをしつまらず、野分にちかき秋の空にもをしうつり、龍田泊瀨の木すゑも尋みむとかたく、雲のうへの月をもよそに御覽せられ侍べきやうにさたのありしにつけて、國々所々の軍勢のぼりあつまり、堀をかさね構をまうけなごして、晝夜のさかひもなく合戰在之、如案すでに室町殿へ御幸行幸ならせをはしまし侍うへは不及申、されごも御敵はやすくせめおこされ侍ぬへかれごも、當座喧嘩なこの樣にありしうへ、かるからぬ大名だちなればながく御敵にふせらるべきならねばにや暫御勢なごもいだされず。さればはや及數ヶ月侍き。然に某荒序相傳事十七歲^{量秋例}霜月に可傳受旨存所に、悲母俄痛事出來してつゐに他界す、仍延引之不運至歎てもあまり有もの歟。殊亂世、更に難ㇾ期ㇾ後年ㇾ間此趣叡慮幷上意へ申上處、則御暇下され、亡父山上南尾へ登山して於光林院八月に大曲授之、同年十二月に八幡宮爲御神事知行北稻八間庄〔○庄ノ誤カ〕下向して時節の御神用に參懃す、これは八幡は御敵徘徊の在所なれは、御構よりは直に難ㇾ罷隨のよし申上によつて八幡山の近邊に居住して御神事に參懃在

之者神妙の由被成ニ御奉書一之間、一家者召具彼知行に在庄し侍る。其明とし應仁二二月に於
レ彼一庄兩入調傳之其已後嫡々相承深秘悉傳受之し侍。身の高運併ラ先祖の擁護によつて速ニカ
に一流を相傳、道の冥加不可過之、彌記錄以下可存知故實等傳之。無程三冬盡あらたま
の春にも太とし侍は、其三月上旬亡父爲御禮御構へ參洛す。下向の路次より中風煩出やう
〳〵いたはり療治して罷下といへども、はか〴〵しく本腹せず。ひとへに道の事猶可尋問よ
し再三申次に、諫言なからむ後には盲目の杖をうしなひ、幼少のめのとにはなれたらむが
ごとく侍らん時、悔ともたれに可習哉、そのありさまみるごとくに覺など涙をながして申さ
れ侍しと、既四十余回に及といへ共、更於其詞者わすれず、誠に子を思ふ心の闇、さこそ
侍つらんと存ずれば、愁歎徹レシ骨ニ舊涙遮レ眼ニ心今更のやうに侍れとも、なを道をたしなみ
稽古を嗜すことも侍さる事、一ハ不孝の科ものがれがたく、且は數代のすゑに如形性をつ
ぎ、道を傳てもつてこのまゝいたづらにうづもれはつべきさかひを存ながら、一人の嫡男
にもいまだ不傳之、他人にも執心之族なければ不ニ殘レシ之ヲ侍ラ事あまりになげかは〔〇は才ニ
アリ〕しく侍れば、老のねふりのさめやすきをたよりとし、茅屋の閑日くらしがたきをわす

れんがため、思ひ出るにしたがひて條々載書之、剰(アマツサヘ)道ならぬことの言もいらぬ事ごもなれごも、子孫の者見るべき時はかやうの事にて進退のあやまれる事を除て、よきとのすちにおもむかんなれば、故實ある人の筆跡ごも少々書入之侍る、殊ふつゝかに前後相違し、かたくなに侍るを、後葉のみるべきも辱存こいへ共、態こ漢字をも不書之、文旨の者みやすく心得やすき方には、殊才覺なからむも又幸なるべし。只道の執心一分の志を信じてこれをみるべしこ也

一、第一不審すべき條々思ひ出にしたがひて載之間次第不同なるべし。先非道の人笙はなにを象哉こ可問如何可答哉、鳳凰の音をうつせり、これは誰も世に知所也、聲はかりをうつすか、幸風俗通ニ十二簧像鳳之身トアリ、誠大方笙の躰鳥に似たるへし。唐の笙は口ながくして鳥の頸をのべたる樣に侍也。全躰彼鳥に象事勿論歟。又問、造始たる人如何、答ていはむに、其旨を不存者無左右いひがたし、是は深とにあらざれごも、もろこしの文なごうかゞひみざるものは家の秘事にて侍ればたやすく不可申よしなご申のがれんずらむなれごも、こふ程の人ならば大かた知てこふにぞ侍らんなれば秘事こ被仰事の安しらるゝ

文の侍は如何こて難言、禮記・爾雅・釋名・白虎通・說文・世本・通典・蔡邕月令章句・文選已下審也、事林廣記殊ニ嘗見ルレ人ノ文ごも也、隋（スイ）并女媧氏造之畢、この道はもろこしより傳來となれば此義尤本たるべしこいはれて始てき、知て心うさよこおもはゞ可及赤面、其時は如何譜代の家ニうまれてこの事をしらざるは恥なり、爰に大なる口傳の侍は如何、其旨を可聞、語ニ云、前ニ載所の旨ハ儒家ニ專知所也、然者樂道の家には秘叓こ藏（し叵）用所詮淨土庄嚴に菩薩聖衆妓樂をなす、殊に妙音菩薩の遊化し給處ニハ十万種の音樂器を調て隨たてまつることなり。さては隋女媧造テ奉侍歟、よもさる事は侍らじ。廿五菩薩の內ニ笙を吹給菩薩の御名教者ハしらるへき歟、我家ニハたしかに傳之、隋女媧ハ再興の人なるべしこいはむに何の不足か侍らん。此上に奥ふかき事侍は他人知て無用於子孫は極秘を可傳也（一流終テ傳之、仍不載れ(?)文此叵）

兼秋撰十三帖并血脉載之旨少々注之

釋名曰

笙ハ生也、象ルニ物ニ貫（ツラヌイ）レ地ヲ而生ルニハ、以レ匏ヲ爲（ツクル）レ之ヲ、其中空（ムナシウシテ）以テ受（ウク）レ簧（シタヲ）也

白虎通曰

笙之言施也、牙也、萬物始施而牙太蔟之氣也

說文曰

笙正月之音、物生故謂之笙、有十三簧、象鳳之身

世本曰

隋作笙　禮記曰、女媧之笙簧

邯鄲五經折疑曰

夫笙者法万物始生、導達陰陽之氣、故有長短、黃鍾之始象法鳳凰

又白虎通曰

笙有七政之節焉、有六合之和焉、天下樂之故謂之笙

晉夏侯湛笙賦曰

嗟万物之殊觀、莫比美乎音聲、惣衆異以合休、匪求而取成、雖琴瑟之旣麗

猶靡尚乎淸笙

古之善吹笙者

王子喬見ニ列仙傳ニ　　董双成見ニ漢武ノ内傳ニ
漢桓帝見ニ漢東觀記ニ　　魏ノ杜夔見ニ魏志ニ

已上

一抑笙の簧事、此字ハ同吹物ニテ別ニ在之樣ニしるし侍を笙の簧に用事古來不知之、但當家に傳之、叓林廣記なごにも載之上者世上に知所也、然を竹かふりをかきて黄トいふ字を書子細如何、是ハ秘中秘叓こすべし、先竹かふりハやうなく始テ竹ニテする也當時稲荷笙ノ少人吹之者しげくふくに損ずる間後にかねにて造之、これは勿論也、さて黄なる字を下ニ書事如何、答云、宮商角徵羽の中、徵の位は黄鍾調也、此音は半律半呂なるゆへに音律の中に是を本とす、陰陽をかねたるゆへ也。又黄なるは中央土の色、尤五音の內ニ王たるへし、心壹越調こ同、四方八方を兼テ位すぐれたり、管の中ニハ笙を本とする間此字を簧に用也、火相土也、又中央ハ空也、風ハ空をもつて自在也、口ノ中ハ空也、舌ハ風のはたらき也、此心尤深厚〔〇國原〔イ〕ノ一本ニヨル〕也、可秘之六調子ノ所ニ委有ベシ、通用事ハ可安ナリ

一笙渡我朝并奏始事

大同四年三月廿二日格ニ云、定雅樂雜樂師事唐樂師十二人内笞笙（○孝云、格ニハ「合笙」トアリ）ノ師一人云々

嘉祥元年格ニ云、广（○應ノ略字）減定雅樂雜色生二百五十四人事笞笙四人云々

國史云、文武天皇大寶二年正月癸未宴ニ群臣於西閣ニ奏五常樂太平樂

聖武天皇天平七年五月庚申天皇御ニ北松林ニ奏ニ唐樂幷新羅樂ニ云々

今案唐國樂有笙以之推之笙工渡我朝事已在天平之比歟、推古天皇之時呉樂無笙歟、仁明天皇之時音樂盛我朝掃部頭貞敏等（○國繁ニヨル）及大戸清上之輩渡唐國傳琵琶曲傳笛曲然而於笙者不載誰人傳之但　嘉祥四年格載笙師四人之由了不可疑事歟

古來以笙得名輩事

古老傳云　天曆御時有秋。龍元、其後時信弟子時光也、相次有名、時光者卽時秋祖父也、堀河院御時時光獨ニ步世上ニ朝成卿能吹笙卽是有秋弟子云々、延喜五年正月廿二日御記云、保忠令吹笙曲調頗比聽自賜橘皮笙（橘皮笙者是故大政大臣昭宣公弱冠時承和天皇爲令習學所給也、寛平年中以其名物召獻之、其後爲宜陽殿笙今尋舊意賜也）康保二年五月卅日御記云、召雅樂笙師丸部利茂小治田有秋令吹笙

我朝

昭宣公 基經 關白良房男　八條大將 保忠 左大臣時平男　朝成卿 三條右大臣 定方男　六條左大臣 重信 敦實親王男　中院右大臣 雅定　猪熊關白 家實　六角中將敦通　西園寺左大臣 公衡　中御門宰相宗雅

帝王

村上天皇 有秋御師　堀河院 時光御師

親王

致平親王 行見御師

當道

小納言小幡行見　同有秋　和迩部時延

豐原時光　同時元　同時秋

同利秋　同豐秋

武家

刑部烝源義光 伊豫守頼義三男、陸奥守義家朝臣之舍弟

已上私非擇古記載之

一吹笙作法事古記載之　兼秋撰十三帖同之、直ニ持事利秋已前者雖用之近來止之。笙を右へ傾テ額ニ付て頭を聊うつぶくべし、傾ルハ右へ者隱ス右ノ目ヲ故也、次閉レ臂事尤見苦、又ひろげたるも惡シ能可レ受ニ師說ヲ一也。私云、右の目をかくすこと亡父語云、當時不可用說也、いかにも直ニ頭をうつふかす額につけす可吹之也、臂の持樣は實にひろけず閉ずよき程にはからふべし。右の目をかくすこ侍る故、人の意趣これをしらず。是は兩の目にて物をみればもの〻いろめおほくみえて心のちる也。かた目にてみればしかこもの〻みゆるによりたる事也。大工の物のゆがみをみるには、目をすがめてかた目にて目侍るにて心得られ侍なり。是式事なれども道を深せざる者は此心を知べからず、うちまかせては人に不レ可レ語上より御尋在之者可申上也

一息入事

第一可吹氣枕ヲ至ル次辞頭まで不絕氣シテ可吹、次句ニ殊忠拍子を能可レ執。笙ハ專不絕音吹を以テ爲大事、達者不堪以之可レ弁、息のしたゝかは第一の難なるべし、すこしくいさきよく

吹べき也、大方樂をば笛の頭をつかむべし、序をばと葉よりさけかけて可吹之。時元云、
笙息者廿歳にて可定也云々、又云息入の樣は笙のすがたに可吹之、有口傳之

一竹移事

達シテ後可受師說、不然者無左右不可授、早傳へぬればくせ出來。次にいきまうけの手こ云事あり、僻事也。則いきまうけの手こいふと當稽古の者ニハきかする事にても不可有也。竹移こいき儲の手こを不知案內ノ輩まかう事あり、都以相替なり、能々可受師說。

一ウカウ事

當流之外無之（今世ニハ不知人可有口傳之）就中十乙九工

一吹樣不及注可受口傳

一調子吹出事

音頭之笙吹出テ殘合テ息ヲ替テ後付笙雖爲一人乃至十人以同前就中雖爲座上於不恐之輩者不替〔〇國賛石ニヨル〕息前ニモ付之、但講演之時者無骨ニ聞ユ、然而不恐ノ者けぢめ有べし、舞樂ニハ魂有テきこゆ、尤可有斟酌、早付モ遲付モ後の辭句ハチソキニ吹、然者人の口まねのよ

くに可吹、尤可有勇心(ヨウシン)也

一付物事

先以二音曲一ヲ爲レテ本ゆる〳〵としなやかに、さは〳〵とあざやかに隨音可付之。而當世の輩、は音よりは動(ヤヽモスレハ)さきになる事不可然。付物と号上者爭(イカデ)か可前立哉、縱後合(ソノロ)になることもいたます可付之。然者音を聞て付を云也、せめての事也。能々可得其心也。

一十種供養伽陁𠀋

打任テ略メ疊(タヽメ)ハ二つゝあるを始之時者四の句の終ノ合竹之句ヲ不可吹之、指置テ第二の伽陁之時悉可吹之𠀋々事雖爲何度如此

一朗詠之事

隨時二反モあり雖爲何度四の句之終の合竹皆以可吹之終句なきはわろき也。又不吹あひ竹してふく說も有也。本儀ニハ合竹伽陁ニ一度朗詠ニ二度可吹之。伽陁朗詠之付物尤可相替。又今樣之付物ゆゝしき大事也。伽陁朗詠ニ皆以相替也

一講筵之時音取事

式之第一㲉之終ニ可吹合之音取ヲ次第二㲉ニハ一竹ヲ可音取其已後ノ㲉々不可吹之。南都管絃者毎度ニ音取之其モ管絃者新ニ利秋之時始ヲ雖作出之ヽ堂〔○底當イニヨル下同〕上堂下之伶人者只一二㲉ニ不可過此事當時不用之、雖然知子細テ人ノ吹ヲ不可制之

一糸竹次第止樂之事

先有五反者ハ初反普通第二反より加拍子なり二反の終ニ止ニ打物ノ時、末座笙同皆以次第止之。上首之笙三反の中半ニ至可止。然而二反ナカラ中吹之也。次笛四反ノ中半止之。琵琶五反ノ中半ニ止之テ箏ニテ引終なり。音頭笙止之時平調太食調樂ニハ乙ニテ不止。他ノ調子モ如此。宮ニテ不止ヲ口傳之、尤秘㕝也。他人不知之當時者初心ノ樂人モ此旨存誰人傳之哉

舞樂事

一拍子相進定テ物つよく吹たるに不可過、但音頭ハゆゝしき大㕝也

一御遊事

可ㇾ爲ニ道ノ大㕝ニ能々受庭訓之後可望之。所作之躰、縦ハ秋草の花さきみだれたる中に幽玄なる男大口ばかりにてやさしけなから刀をさし、つかを拳(ニギリ)て如立可吹。はミかけすゝしく

やさしきものから、しやうねあるべし。雙調調子吹様又如此 奥ニ往古ヨリノ記故實可載之

一調子姿事

○平調ハ春風に柳のたをれかゝる如これを可吹

○盤渉調何にたとへつべくもなし。只しづかに延て吹べし。いづれよりも此調子をハ延テ可吹

○黄鍾調ハ銚子ニすみたる酒ヲ入たるをみるがどし

○大食調ハ板じきの下にてコトヒノ牛ノツノツキヲ〔○國コトヒ[牛]ツキヲ区ニヨル〕スルガ如シ

○壹越調ハ明障子に砂をうつが如シ。○双調々子ハ在御遊所 此外ニ又後ニ可注、但不用常之聊又古人秘與。此段ニ載之ヲ可沙汰者也

抑此六調子の姿如此者注侍ともたしかに可吹似様口傳之書も不見、他人ニ尋ともかつて知人なし。有時於閑所 北稲八間庄 亡父にこれを不審す。いみじくも尋侍。是ハ口傳のみならず、器を取て幾度も吹之テ心得べき事也とて笙を取よせ吹てきかせられ侍、一大事也可秘由堅被申侍。書ニ注事此文を始とみるべし。故人筆跡世にあるまじき事の第一と可思。穴賢々々

一平調 律 秋 西 金
　　　義 白 商 臣

先平といふ字の心、金ハ物をたいらぐる心あり、仍平調と名付也。次ニ姿事いかなるゆへに春風に柳のなびくが如シト侍る哉。此調ハ秋の音也、然者秋季にいか程も喩あるべき叓を春を引用事不審。これは故人も沙汰したる叓なし。當家に傳之、實に唯受一人ともいふべき歟。先秋季を春の調の喩に引事ハ、十二調子を十二月に配時正月ハ大蔟也。此名ハ平調也。然者春を用事尤歟。句又ハ手うつりに侍る哉。答これは至て大事の口傳也。第三句をば蜻蛉がへりといふ手也。此叓も八世にしらざる事也。この虫風ニふかれて自由ニ飛事、諸虫にすぐれたり。前へハいかほども飛ものあれども、後へそのまゝの羽づかひにて飛退虫なし。蜻蛉これをなす。凡ッ打テイ凡具氣イ凡放三度の手しな、青柳の糸のしなやかなるが、和風にふかれてなびくと、いづかたへもさかはずして、風過は跡へかへりたるすがたをみて喩たる也此手蜻蛉返と云尤也又眼メの手と云こと侍如何、調子/子秘說中詞也、譜ニ注之。又盤渉調音あり、これは律の通用金相水の心也。又能勝詞と云句、これも秘事也、褒たる詞也。いかにもしづかによの句よりも心を入て可吹之。入調事ハ荒序已後口傳極秘也。傳受輩もかりそめに

も不可吹。縦貴命成とも努々不可吹、道の守也隠手句ハ入調相傳之後可傳之

一雙調　呂　春　東　木
　　　　角　仁　青　民

先双調ト云事上無調を父として下無調を母として生たる音なる故に双調と云也。喩たる姿事者御遊所ニ注たると同之。これも春の調を秋季を引て喩事不審。答テ曰、此調ハ角也。角は牙ナリトテ一切の草木地より生始ハ紺牙紅甲として卒都〔石ニヨリ補〕婆かしらにして出也。これを芒角をいたゞくト注シタル也。大族の氣を牙といふも同心也。もろ〱の草木地より生てハ花さき菓なるを宗とす、花さかぬ木も色付を極とす、然者秋を心にきざすと思べし。腰の刀に手うちかけたると侍るは此心也。これは秘中秘事也。子孫一人に可傳之。

又問、喩のごとく可吹口傳在之哉。答、句をさして習との有も第一の習也。大方此調子ハえんにやさしく、しめ〱と、しかもすがたのうちに心有やうに可吹之、さかひに入ずば難知。いくたびも器を取て吹て師にきかすべし。トモ調と侍る手この調子を本とせり、これは共調也。双て調といふ心也。則十トアル所とにあるべし。但十トアル所とにハ有べからず、これは物とに有事也。其中にて詮有所をさして事にするが如し。又チ、ウ音と云手有

之、笛にチ、ウト云心なるべし。七尓イ具所五所歟。少有口傳之、器にて吹心みるべし、詞にては難分別者也

一黄鍾調　律　夏　南　火
　　　　　赤　智　徵　叓

先此調子を黄鍾と名付事、黄は火の色なり、火ハあかけれども、あかくかくハにざる也。黄に書ば似よし、分明也、中央の土と通義也。鍾ハさかつきとよむ、濫觴といふ事鶴執山と云山よりいづる水万水の源也。そのあなさかづきのおほいさにしてながれいづるよろづのみなもとを濫觴といふ。仍此調ハ半律半呂にて陰陽をかねたるゆへに、音律のみなもととするによつて鍾といふ。又姿事、銚子にすみたる酒を入たるを見がごとく可吹之如何。先にきよ〳〵とわひしき心なく心よろこばしき風情有べし。一切のもの〻さかりなるに喩たる也。又水音といふとあり。これは水調の曲在之、此調に水のこゝろある事以外之秘事也。南ノ卦と申は離中斷☲かやうに有之、上下の筋ハ火也、中ニ切たるハ水の心なり。水ハ黑色なるゆへに火ノ中なる物不見、北卦坎中連これは又上下斷☵上下は水、中ニ連タルハ火なり。水ハ黑けれども、上下のみつ中なる火にてらされて、千尋のそこまでもものゝみゆる也。

如此工能の侍る間、水音尤其謂有者歟。盤涉調音事ハ水ノ位勿論也トモ調音木の位木相火此心通用して可得其意也

一大食調 呂 平調ト同音

此調子大方平調ト同音にしてしかも呂に侍事不審。答云、五調子ノ内律三呂二也、然者陰陽一カクル謂ニ大食調ト名付テ呂を作出たる也。これまでは世に知所也。先大食トいふ枝調子ニ乞食調ト云事委注たる物なし、當家ニ傳之。五臟ノ音ヲ定時各音アリ、六腑に當時無之大食調ヲ此腑に當テミルニ尤其謂アリ、其義分如何。命門腑事醫傳を尋ニ語云、此腑は有に似て無カコトシ、霧霞ノゴトシト侍、この心如何。案之ニ無實様に侍れども、此腑尤肝要の事也。人の身ハ食事無テハアルベカラズ、命ハ食ニアリト侍。仍此腑は五臟の窕（クツロギ）ナリ。ハエル時ハ脹、消時ハ減ス、如此あらでは腹内食する事をうけがたかるべし。其用所此腑にあり。姿の吹様はコトイノ牛ノ板ジキノ下にて角つきするが如シトアリ。可吹様ハ口傳可有之、先息の入様後つよにはる心あるべし、可受師説也。アラ吹ト云句も角つきする心をもつて名付たる手しなと知べし。合吹といふ句、又笙を取て可習。盤涉調音事

者前に注之、命門ハ右腎ニ配盤涉調ハ水の音其謂有之。但性ハ火也、黄鐘ノ火ハ心の臓アラタに物を燒火也、臣火也。大食の火は天火日ノ心ナリ。暖氣ノ方君火トこれを習尤可秘之。如此配テミレバ有こ思へバアリ、無ト思ヘバナシト沙汰し侍心平調の同音律呂ノ不同斗也

一盤涉調　律　多　北　水
　　　　　黒　礼　羽　物

盤涉こ名付事、盤ハならへのする心、（又云盤ハワタカマルトヨム水ノ心トスト云々盤ノ字トカワルヘシワタカマル心ヲ本トスヘシ）涉ハわたすこあり。水はよく心をうかべのする能あり。吹様のすがた如何。何に喩つべくもなし。余の調子よりもしづかにのべかけて吹へしこ在之、この心いさゝか有口傳之。惣而水の心ハ陰ナリ、陰ハしつみてしづかなるに其德アリ、涼心もしづかなる所に有べし。火ハさかりににぎはゝしくて、あたゝかなるこ一切の盛ものに喩たるに對て此調の心をさこるべし。又生老病死ノ時ハ死ニ宛寂滅の心尤しづかなる方に所作の躰も有べし、他調子ニ侍る、盤涉音この調を本こすべし、（黄鐘大食ニテモ此句ヲハシヅカニ本調子ノゴトク吹之べシ、平調ハ勿論也）又千段活こいふ句、これも褒たる調なり、（詞獄[不]、不）亂句は秘事也、亂ノ字ニ聊又口傳在之。又舌音これは七下の所に有べし、實に舌ノ聲ナリ。喉ノ音、口ノ音、唇音アリ。七

下ハいく所ニモあれども所をさしていふ事如何。双調のトモ調ノ十ノ所ニさたするがごとし

一壹越調　呂　中央　土　黄　信　宮　君

此調ハ位中央ニシテ四方八方をかねてその徳すぐれたる也。仍一越ト名付也。君ノ位尤有之。姿事者明障子ニ砂をかくるが如しと侍如何。答これは此調子中にすなうつ手といふあり、前喩より名付たる歟。此句の手しな能吹おほせつれば調子のすがたをのつから心得べし。明障子に砂をかけてみるべし、こゝろこまやかにきこへて物にとりつかずあきらかに句うつりの手しなはら〳〵として執心の殘せさる様ニ有べし。平調などの蜻蛉がへりの手ハ句うつりもうつくしく執心有様なるべし、此調子に有をば如何吹べき哉。一定可吹替也。乞　丁　弟　亻乞　ヌ　具二反　乙〔〇圖と図ニヨル〕の後の亻乞を重テ吹を、此調子にてはかさねずして初心ノ人又ハ一大事の所作時のごとく可吹之、然者かさねて吹ハ略義歟。あながちに略義にはあらねども執シテ吹ニハあらぬが達者のわざと聞へ侍る、晴の時は斟酌する歟。姿を吹あらはさむと思はざる時ハ、かさねて常のごとくこれを吹べし。肝要かさねずして別々に吹てみよ。次の手ニうつる心執心なく、ほろ〳〵とあざやかにきこゆべし。これはつねに吹

て心得を知へき也

右六調子之姿就字習大方此義分也重箏之便在之者五常に配心可注之

又一說　此記者大神景範家記也

雙調曲者呂是發心音躰也

譬得春三草生出二木梢萠双調曲甬色々尓花榮匂曲、故謂雙調曲、甬木音云是則花嚴義音也

黄鍾調曲者半律半呂是循行音躰也

譬望夏草木花皆散畢、葉黄、鐘調、徵、故謂二黄鍾調一徵火音云是則大集義音也　私云此說不審

壹越調曲者呂是四憂厭躰也　四憂者生老病死也、大品者般若經也

譬四季中陸月老位、於壹越調、宮爲中横、故謂一越調、宮土音云、是則大品義音也

平調曲者律是菩提音躰也

譬至秋草木皆實定、椀悉堅平、調商、種々登麴芳、曲、故謂平調曲商金音云、是則法花義音也

盤涉調曲者律是涅槃音躰也

譬、成レ冬僅、見松栢計、四方草葉枯、梢葉散先、其根具大、地、盤涉調羽藏故、謂盤涉調、羽水音云、是則涅槃義音也

上无調者黃鍾能離、仍、變徵云、无本樂故謂上無調〔○圖ナシ、イニヨル〕商者上无調

下无調者平調能、哺仍、變宮云、无本樂、故謂下无調者、用可レ渡律樂一又勝絶調大食調異名、混平調半呂半律也賤者下无調也

自余之調子枝〔○圖拔、イニヨル〕調子也沙汰之外、但鸞鏡調壹越調之變故變宮云

夫於調子者以五調子爲本、然者、一、双、大呂ト云大食ハ混ス平、盤、黃律也、高賤渡律云々

是五行所レ主法也

一吹留事　本ハ七息今ハ五息是ヲ用、略シテハ三氣可吹之、猶略シテハ一氣、但舞樂管絃ノ終ニハ時々サモ侍べし、御遊には一氣ハ不可吹之。古記ニ載所也今ハ此沙汰ナシ

一十二律

大呂	十二月	斷金調
大蔟商下平調宮	正月	平調
夾鐘	二月	勝絶調
沽洗角五下无調宮	三月	龍吟調
仲呂上双調宮	四月	双調
蕤(スイ)賓變徴	五月	鳧鍾調
林鐘(マヽ)徴夕黄鍾調宮	六月	黄鍾調
夷則	七月	鸞鏡調
南呂羽中盤渉調宮	八月	盤渉調
无射(フンヤ)(〇傍訓ブエキの誤)	九月	神仙調
應鐘變宮丁上无調宮	十月	鳳音調
黄鐘宮(マヽ)六一越調宮	十一月	壹越調

一調子ニ合(アフ)竹ノ事

平調乙律一　　勝絕調卜呂比　　下無調下律工

雙調十呂几　　鳧鐘調美律己　　黃鐘調乞律乙

斷金調斗呂卜　　盤涉調一律下　　神仙調比呂也

上無調工律美　　一越調几呂乞　　鸞鏡調亡呂斗

一調子案譜法

打代厂　殘代戈　移代禾　氣替代乱　次第代第　一竹代ヶ　合竹代合　絕音代

色　叩代卩　呂一度ニ具放殘如此引合也　医美具乙合竹　匚言具乙合竹　卮一度ニ具放殘

如此　即火　延引ア

一秘亨案譜

月千前　合十拾　石下礙　走乙越　口工宮　白美鼻　皃一邈　金八鉢　耳也邯　手言權　貝七質　久行形　水上淨　不几梵

勿乞忽　王亡望　反比變

一調笙次第

先以高調合乙同音　以乙調七甲乙　以七調一同音　以一調下甲乙

以下調千 同音　以下調言 甲乙　以下調工 甲乙　以工調美 甲乙
以乙調八 同音　以乙調彳 甲乙　以彳調乞 同音　以彳調凢 甲乙
以彳調上 甲乙　以上調十 甲乙　以十調比 甲乙　以乙調乞 甲乙
以乞調凢 甲乙　以凢調上 甲乙　以乙調一 甲乙　以八調彳 甲乙
以七調千 甲乙　以千調言 甲乙　以言調工 同音　以千調工 甲乙
以凢調十 甲乙　以七調下 甲乙　以十調也 同音　以也調比 甲乙
以美調亡 甲乙　以亡調斗 甲乙　以斗調卜 甲乙　以八調七 甲乙
以卜調比 甲乙
一自大(フトギ)至細(ホソキニ)注之
乞一工凢亡乙卜下十美行斗七比言上八千也
一付物之合竹叓
平調凢合　⿰彳冬十合
下无乙合　⿰彳冬乞合　一説⿰彳冬行合

奴調下合　　終乞合　　始乙合　終行合

黄鍾調十合　　終一合　　始下合　終比合

盤渉調美合　　終几合　　修行合

壹越調一合　　終乙合

一答笙

竹十九今八十七猶以十五ニナル也、但竹バカリハ十七在之、舌ハ黄帯口管平盤ハ九寸一分或九寸二分ニアクル　以是准之、余竹ヲ次第ニホソキニ隨テアクル、但不同也。毎笙ニ相替歟、然者隨聲アクベシ

私云、竹ノ大細ニモヨラズ、又スアイノホソキニモヨラズ、聲ノヒヾキニ依テアクベキ也、習ノ外ナルベシ

一舞入時笛調子ニ笙ヲ付事

先笛調子ヲ吹出ニ第三句ニ付笙、一說に雖何調子其正音ニアタラム時可付之。タトヘバ平調ナラバ丅(笛)ノ音ニアタラム時乙(笙)ノ合竹ヲ吹ベシ。余調子又以准之可吹之

一管絃之時目錄出事十種供養之時等モ此調子ニアラバ同之

三臺　傾杯樂兩曲ヲバ破急之中ニ他樂ヲ書入テスル㕝在リ、以外之秘㕝也、口傳也、其故ハ兩樂共ニ不加拍子樂之間惣礼此等ノ破ヲシテ余ノ樂ヲヘダテ、スベシ、皮ノ急ヲスル也、一具ノ物ノ中ニ樂ヲヘダツル㕝メヅラシキ㕝也、自餘ノ樂ヲバモロ〳〵不可准之

一八調子

凫鐘調 艮(コン ウシトラ)　雙調 東　上無調 巽(ソン タツミ)　黄鍾調 南

壹越調 坤(コン ヒツジサル)　平調 西　下無調 乾(ケン イヌヰ)　盤渉調 北

一十二調子 配十二月 分十二時

凫鐘調 正月 寅　双調 二月 卯　上无調同音　角調 三月 辰　斷金調 四月 巳

黄鍾調 五月 午　一越調 六月 未　平調 七月 申　勝絶調 八月 酉

林鐘調 九月 戌　神仙調 十月 亥　下无調同音　盤渉調 十一月 子　鸞鏡調 十二月 丑

私云、六調子ノ姿事ノ已後注之條々者他譜ニモ皆可有之、秘傳之中ニ書入事如何ナレド

モ、專此等ヲ不知者器ノ調故實ヲ存朝家神叓佛叓等奉公アリガタシ、仍撰之入、故人道ヲ行稽古スル樣當時ニ大相替ス、當世者先目錄之面ノ樂ヲ吹畢テ一說ノ打物ヲ傳受シ、何時モ上ノ御用神用講演ノ人數ニ加ベキトハ叓ヲセズ、小樂廿斗吹スレバ渡物ヲ稽古シ付物ヲシ脇筋ナルコトヲ本トスル也。他人ハトモアレ子孫ノ者努々ミダリニ道ヲ不可沙汰也。一切物ハハシナルコトノアサキニ深事ノ有ベキト可知之。五常樂急ハ七歲ニテ笙始ニ吹樂也。誰モ能手ナレタルナレトモ故治秋ハ此樂ヨク吹タル人無之、我モ大事ナリト云テ常ニ吹カレシカ、常ノ拍子ニモ不替アリシ、能々傳テ後キ、侍ハ大ニ替也。大般若經ニハ心經ニ大事アリト云々　妙法蓮華經ニハ壽量品佛ニ成直道也。殊ニ末代ノ衆生下種益ノ時分此御經ヲ受持セズハ無間地獄ニ可墮ヨシ定ヲカレタレバ安コトニ一大叓ノアルコトノ手本也。タレカ今ノ世ニ南無妙法蓮華經ト唱ザル者ヤハアルナレ氏受持ノ義ナクバイタヅラゴト也。五常樂急又同之。不習ハ同ヤウニ吹ト思トモ可替　如此叓所々ニ注之

一琵琶博士孝道入道造之殘夜抄云

管絃のをこりは中〳〵文たうにはそのゆくちをしるこいへごも、これを傳たる家の人はう

るはしく知とかたし。樂の名調子の名も文字にはたがひたるそのゆへは、むかしは人のふるまひあながちにしゆくごくならず。中にも樂人舞人などいひけるものは、そのこちゞにこふべき事ありてゆき、こころを尋るに田かりにゆきたるときゝてそこへゆきて、笛の手さしをこふに、田かるかまのつかをふゑふくやうにして、手さしをおしへ、あるひはあしゐたるこごくにて、文字を見ぬものそらにことばをかざりて道をつたふ。かやうなるあやしき草のいほり柴の戸ぼそよりめでたき道のつたはりきたるなるべし、一にはこの朝のとにあらず、唐てんぢくかうらいなどより傳きたる道梵語唐聲韻釋訓しな〳〵かはるよみかならずその本説をたゞすこゝかたし。此朝のあそびにはよのはじまりより神のよに天照大神あまのいは戸をこぢて、天下をくらやみになし給へりしに、やをよろつの神々、よりあひて神めで給ほごのあそびさいふいまの神樂、つぎには我國のふぞくさいふさいばらふぞくさておろ〳〵殘たる事ども也

これは秘傳にあらざれども末代一文不通者のみ家に生て可誤事一定なるべし。能々若輩時文字を學樂道に可入程之事をば儒家に親近して可尋明者也

一第一樂事

樂ハ音曲ヲ以テ心ヲ調フ、宮商ノ五調子五德五戒ノ聲是ニヨリテ三業調道衆善自ラ生ス、故ニコレヲ見コレヲ聞ク者漸ク邪心ヲヒルガヘシテ終ニ正路ニヲモムク、貴哉ヤ　聖德太子此道ヲ弘メ給コトヨ、故アルカナヤ實アルカナヤ、夫妓樂ハ佛神ヲ敬フ儀式會場ヲ餝(カザ)ル莊嚴也、呂律ノ聲ヲ調フ本不生ノ理ヨリ出、宮商韻ヲ成ス岦梵〔不審アリ〕音聲ノ響ヲヘダテンヤ、然則大樹緊那羅琴鵝(俗名)王記ニ預リ妙音大士ノ秦王普現ノ身ヲ得タリ　如此之習不審也、雖然先法体ヲ能定テ信タル上ノ成佛ノ助行ニ用業ナルベシ、努々音律ノ通義ニテ可成佛コト不可有也

一呂氏春秋曰、音樂之所由來者遠矣、本於太一々々生兩儀、々々生陰陽、ミミ變化合而成レ章、形體既著莫不有聲、樂由此生

孝經曰、樂五聲之主

說文曰、樂五聲八音惣名也

蔡雍(サイヰヤウ)月令章句曰、五聲八音合爲樂

禮記曰、八音作諧(ヲンリトノホルヲ)曰レ樂ト也

山海經曰、祝融生太子長琴是處搖山始作樂
禮記曰、夔始制樂
毛詩曰、有瞽始作樂而合于祖有瞽在周之庭
禮記曰、夫樂清明象天、廣大象地、終始象四時、周旋象風雨
白虎通曰、樂者樂也、君子樂得其道、小人樂得其欲
國語曰、物得其常曰樂、々之所集曰聲、々相保曰和、細大不踰曰平
五經通義曰、功成作樂所以禁奢侈滌邪志通中和也
阮籍論曰、樂者使人精神平和衰氣不入天地交泰万物來集初學記
史記大央公曰、音樂者所以動蕩血脉通液精神而和正心也
漢書曰、聲樂蕩滌人之邪意全其正性移風易俗
孝經序曰、移風易俗無近於樂、同云王者作樂上以承祖宗下以化兆民
又云、黄帝世伶倫樂作、又云樂天地順四時當民德五穀昌疾疫作シテ妖祥ナシ故樂云
五經通義曰、東夷之樂持矛舞助時生也、南夷之樂持羽舞助時養也、西夷之樂持鉞舞助

時設也、北夷之樂持レ干舞助時藏ナリ
古今樂錄ニ云、夫歌者樂之始也、古人前レ詩而後レ歌以舞一象其事然後被之管絃一哥中未必有
レ舞舞中ニ未有歌
或書ニ云、君子須臾不可離樂、須臾不可離禮
或云、黄帝咸池樂洞庭野ニ張ルコレヲ天樂トイウ
禮記[イ]同云樂ハ音由生所其本ハ人心ノ感ズルニアリ、是故ニ哀ノ心感スルモノハ其聲噍トシテ以
殺、樂ノ心感スルモノハ其聲嘽トシテ以テ緩、喜ノ心感ズルモノハ其聲發安トシテ以散怒心感
ズルモノハ其聲粗シテ以勵、敬ノ心感ズルモノハ其聲直クシテ以テ廉ナリ。愛ノ心感ズルモ
ノ其聲和ニシテ柔緩ナリ。六ノ物性ニアラズ物ヲ感ジテ後ニ動ク聲。察（一本審[イ]ニヨル）シテ以テ
音ヲ知ル、音ヲ審メ以テ樂ヲ知ル、樂ヲ審ニシテ以テ政ヲ知ル、而シテ治道備ハル
荀子ニ云ク、樂ハ樂ナリ。人情ノ必免ザルトコロ也。樂宗廟ノ中ニ在時ハ、君臣上下コレヲ
聽テ則和敬セズト云事ナシ。樂閨門ノ內ニ在時ハ、父子兄弟和親セズト云事ナシ。樂鄕里

ニ在時ハ、族長ノ中ニ長少同クコレヲ聽テ和順セズト云事ナシ。故ニ樂ハ上ヲ審ニシ以テ和ヲ定ルモノナリ。物ニ比フルニ以テ節ヲ飾ルモノナリ。今奏シテ以テ文成スモノナリ。以テ一道ヲ率スルニ足レリ。以テ萬變ヲ理ルニ足レリ。是先王立樂ノ術ナリ。

一六代樂 天子祭禮皆用ニ六代之樂ヲ

一日雲門 黄帝樂　　名祀天神舞之也

二日咸池 堯ノ樂　　名祀地和舞之也

三日大韶 舜ノ樂　　名祀日聖 或日望 舞之也

四日大夏 禹ノ樂　　名祀山川舞之也

五日大濩 湯ノ樂　　名祀先妣舞之也

六日大武 周ノ武王樂　　名祀先考〔因ニヨリテ補〕舞之也

一九夏樂

一日王夏　天子出入ニ奏之

二日肆夏　祭祀尸出入奏之舜ニ云賓客入門ニ奏之

三日韶夏　同姓出入奏之
四日納夏　享四方奏之
五日章夏　納有功奏之
六日齊夏（サイ）（モノイミ）　祭亨奏之
七日族夏　族人特（トク）奏之
八日祴夏（コク）　賓醉而出奏之
九日鷔夏（カウ）鷔ハヤキ馬也　公出入奏之
又日
扶　伏羲氏樂
一咸池（カンシ又ハチトモ云）黃帝樂䚯
二六莖　帝顓頊樂　𧭈莖工行一本作誙又行
三五夏帝嚳　談謨[亻]ノ[亻]　䔮英工

扶持　神農氏樂
雲門　同
六䪫同　談[亻]ノ[亻]
圭水　同圭水一字歟乗歟　山ノサキ

四大商 或作革堯樂
五九韶 或招樂 舜樂 韶時 昭文ナフツクヒカル
六七夏 禹樂
七大句 古候反周公旦作
八大濩 湯樂 濩エ護　　大武 周武王 武王伐紂
謂之八樂 已上古樂
清樂 九代樂也
周 漢 呉 晉 宋 齊 梁 陳 隋
後謂之清商樂隋平陳周清商着物テ謂レ之ニ清樂ト
會要曰、讌樂部云、武德初未暇改作毎讌享因ニ隋ノ舊制ニ奏九部ノ樂ヲ一讌樂、二清商、三西涼、四扶南、五高麗、六龜茲又屈支、七安國、八疎勒又佉舍國 疏永、九康國也、唐至貞觀十六年十一月ニ宴ニ百寮ニ奏ニス十部ノ樂ヲ 先是伐ニ高昌ヲ取其樂ヲ 付ニ大常ニ乃チ増ニ九部ヲ為ニ十部ノ伎ト 今通典ニ所載十部ノ樂无扶南祇有ニ竺ノ樂亨ニ見ニ南豪樂ニ其後ニ分テ為ス立坐二部立部ニ有八、一安國周

平安齊ヲ所作周代爲之城舞ト、二太平樂亦爲ニ之五方師子舞ト三破陳樂、四慶善樂、五大定樂亦謂ニ之ヲ八紘同軌樂ト大宗平ニ遷西ヲ時ノ作也、六上元樂高宗ノ所作也、七聖壽樂武后ノ作舞時行列成字、字ニ有聖超千古道奏皇皇帝万年寶祚旀（祢イ）、八光聖樂玄宗所造、坐部伎有六部一讌樂、像文成所作（又イ）是又有四部、景雲樂、慶祥樂、破陳樂、承天樂　二長壽樂、武太后長壽季所作、三天授樂武太后天授年中所作、四鳥歌万歳樂武太后所造、五龍池樂玄宗所作、六破陳樂亦玄宗所作坐部伎

先四破陳樂ト云事アリ、皇帝、武昌、秦王、散手ナリ、九破陳樂ハ怨陳ヲ破シテ爲形樂故ナリ云々、付之案之、皇帝ハ武舞カタトリテ作ルユヘニナリ此字ヲヨバル、サレバ唐土ニテモ帶釵ニテ舞之、唐舞ノ繪本ニミヘタリ。又古キ舞席(〇續教訓抄「舞譜」トアルニヨルベシ)ニ四帖ニ太刀ヌク手アリトシルサレタリ。太平樂ハ戰陳アラズ、讌會ノ肴舞ニシイダセリシユヘニ、劒義ヲトル、仍此名アリ。又武將大平樂トイフモ同心ナルベシ、秦王ハ隋代ノ暴逆ヲ誅シテ作ラレシ故ニ名之。散手ハ新羅ノ軍ヲ平ラレシトキ奮冠ノ姿ヲ船ノ舳ニ現シ給シ故ニ名之、サレバ辰甲ノトキハヨズベカラズ、私云、奮冠散手ト云ベカラズトゾ申テ侍ルメル。此外ニ

又陪臚ハ戰陳ニシテ奏スル子細アル故ニ名之、私云、舍毛ノ辟也有口傳之 此舞樂ヲ奏スル音ヲキヽテ軍ノ勝負ヲ知ル事ノ侍ルナリ。皇麞ハ黄麞谷ノタヽカヒニ死セル事ヲカナシミテ作リイダサレタル故劒戈〔○戈ナラン〕ヲトラザレドモ名付テ侍ルナリ。此兩曲ノ破陳樂ノ名ハ世ノ常人シラデモヤ侍ランナレ𪜈、古記錄ドモニ見テ侍レバ載書之侍ル也。又五支樂ト云事アリ、大般若經第七十七ニ云ク、五支同音義云ク、絃管皷歌詠コレ五支樂ト云ナリト云々

又太子傳ニ云ク、太子供養三寶ニ用ヘシ諸蕃ノ樂ヲ或不肯學カハ習フ或習テモ不信トヽメ留與 而今永業ニ習傳テ宜ク免課役ヲ即令大臣奏舞

中原師元云、詩書禮樂此四者治國之大要也、以配四季詩春樂夏書秋禮冬以此也、今世漢以癈然而書者尙似用之、故以何者古者披書推吉凶、學者勘書注善惡、禮又雖亡爾似用禮神雖跡尙致祭禮、都絶者詩與樂也、見詩無知吉凶之人聞樂無知治世亡國音之人

又時元云、大甞會樂ハ上代於時其覺アル者一人奏之云々 私云、亡國ノ音可除之トナリ

賴義云、爲樂所預猶作之相繼之、是季一人造之奏之人內々尓語テコソ樂ヲバ定レ、近來不知有覺不覺不論堪能不堪能各以奉之、誠不足之言斗也

一有名

新樂　散樂　中樂　唐樂　林邑〻　童〻　高麗〻　新羅〻　胡〻　吳〻　妓〻　神〻　催馬〻　猿〻　田〻　度羅〻　女〻　奏〻　試〻　調〻　立〻　居〻　昇〻　降〻　延〻　早〻　於世〻　由利〻　寄〻　吉志那〻　百濟〻

已上

又貞觀十二年二月廿三日貞觀寺供養之時ハ雅樂寮唐高麗樂、大安寺林邑樂、興福寺天人樂奏云〻、又勅樂ト云事アリ。東大寺華嚴會ニハ西樂門左方新樂ヲ名付侍リ。八幡放生會ニハ朝座ノ終ニ中門ニ引烈立テ奏之、是ハ一天ノ君ノ行セ給ユヘニ其樂ヲ勅樂ト云也。凡樂ヲ作習、作者皆思トコロアリ、假令竹林樂ハ延テ作歟、千秋樂ハ事外ニ早ク作ルト見也、每樂如此意趣皆所見也、能可思推者也

一七言樂事

七言ノ樂ト云物アリ、所謂扶南郎（鑒良不ニヨル）君子陪臚、如此也、必不可違七言、笙ニ終ヲ吹延ル所尤可聞也。大貳入道重家ト申人或所ニテ有七言樂之由被命、或人云ク、詩ニコ

ソ七言ト云叓ハ侍レト云々尤故實ヲシラザル也。詩ト樂トハ是一躰異名ナリ、音ヲバ樂ト号ス、調ヲバ詩ト名ク、シカレバ彼命已ニ相叶歟。私云、ナゲカシキ哉諸樂ノ詞不知音バカリ殘テ誰モ吹ドモ詞ヲ不知、又少々殘モ大方也、詠詞則樂詞也、能々受師說可吹之、佛名經文口傳有之可知之

一半拍子事

樂ニ半ノ拍子ト云叓アリ、世常ノ人其名ヲダニモ不知哉、初蘓莫者破ノヤウナリ、半ノ拍子ノ樂五アリ、蘇莫者、澁河鳥、鷄鳴樂、甘州、只拍子賀殿破等也。

一以二曲爲一樂

以ニ輪臺一爲ノ序　以青海破爲レ破 共盤渉調曲

以汎龍舟爲レ破　以散吟打毬樂爲レ急 共黃鍾曲

以鳥向樂爲レ破　以白柱爲急 共盤渉調曲

以長元樂爲レ破　以千秋樂爲急 共盤渉調曲

或長元樂急非千秋樂別曲也 當家說也

以安城樂爲破　以越殿樂爲急 破ハ黃鍾曲、急ハ盤渉、或平調之曲

以新羅陵王爲破　以陪臚爲急　破ハ壹越調曲、急平調曲
以保曾呂具世利爲破　以賀利夜須爲急　破壹越調曲　急平調曲
以甘醉樂爲破　以林哥爲急　破壹越調曲　急平調曲
以顏徐爲破　以新河浦爲急共壹越調曲
一以三曲爲一樂
以朝小子爲道行　以太平樂爲破　以合歡鹽爲急
破ハ平調曲、道行　急ハ太食調曲
以鳥急爲道行　以嘉祥樂爲破　以賀殿爲急
共一越調曲
一以兩朝樂爲一曲
蘇合香ハ天竺所作　急一曲ハ唐土ノ作　霓裳羽衣ハ天上月宮曲　玉樹樂ハ唐土作
青海波ハ龍宮曲　輪臺ハ唐土作　秋風樂　結ハ唐朝曲　二三嗄（マヽ）頭ハ日本作　賀殿
急ハ唐朝曲　破ハ日本作

二曲異名

以輪臺號道行　以早輪臺爲序　以青海波爲破

以皇麞急延吹爲道行　破急　又如常一說入時急ヲ吹猶號道行

祝所吉叓等不用樂

廻骨　柳花苑　老君子　竹林樂　又皇麞舞取捨衆之姿也　扶南　玉樹　遊字女　王照君　想夫戀

参音聲樂

春ハ春庭樂、夏ハ應天樂、秋ハ万歳樂、冬ハ万秋樂、賀王恩　太上天皇御賀用之、宴涼州

內宴用之、溢河鳥　同上

臣下御賀ニハ萬秋樂　鳥向樂幷太平樂　慶雲樂

参音聲ニハ舞人懸一皷也、仍古樂太皷ヲ上也、タトヒ新樂タリト云トモ参音聲ニ用ル時ハ古樂太皷ニ上ベキナリ

高麗

顏序

　退出音聲

長慶子達用　還城樂行幸還御用之　夜半樂承和御時御遊用之　宗明樂御願供養上高座用之　海青

樂南池院始樂奏之　越天樂急

高麗

新蘇利古放生會御輿還御奏之　常武樂同前

行道樂

秋風樂　鳥向樂　澁河鳥　裏頭樂

高麗

黑甲序　狛桙　敦光　埴破　長保樂破

供花樂

弄槍　十天樂東大寺講堂供養始奏之興福寺蓮花會奏之　赤白蓮花樂　汎龍舟同寺法花會奏之　安城樂同

寺追儺會用之、號常樂會

林邑樂天竺ノ名ナリ、佛哲傳之

拔頭　陪臚　鳥　菩薩

又云、胡飲酒　蘇莫者　釼氣褌脫　輪鼓褌脫

用參音聲

春庭樂有舞時新樂奏之、仍加三ト拍子

賀王恩　御賀參音聲奏之、右ハ古樂、左ハ新樂、雖然參音聲時左右共付古樂拍子奏之

用退出音聲曲

酒胡子　武德樂　輪鼓褌脫　長慶子　常武樂　進蘇利古

用競馬曲

汎龍舟勝奏之　拔頭　陵王　蘇芳菲

小馬形　亦名狛龍

用相撲節曲

釼氣褌脫　拔頭古樂亂聲用之、勝方用之

吉簡號猿樂是也

用産所曲

長命女兒　千金女兒

用元服曲

券頭樂私云、此叓不審、古叓者大ニ蔣事也

樂ト云叓如此注之大畧諸記載之所勿論也、雖然當家ニ用說不用說相交以分別可沙汰者也

非秘傳トモ大用不可過之

一五音委細之說々重テ可載之

通典曰、古有宮商角徵羽五引、梁以三朝元會奏之、隋改爲五音

白虎通曰、音者飲也、剛柔淸濁和而相飲

五經通義曰、何謂聲何謂音、曰聲也人之本性也、性生ニテ於心ニ而形アラハルニ於聲ニ、々成ナスヲ文謂之音

又曰、五聲之聲爲文章、謂ニ之音ニ也

漢書曰、五聲者、宮、商、角、徵、羽

商章也、物成孰可章度也、角觸也、物觸地而出戴芒角也、宮中也、居中央暢四方唱始施生爲四聲綱也、徵祉也、物盛大而繁祉也、羽宇也、物聚藏守覆之也

七聲

樂書要錄曰、宮生徵、々生商、々生羽、々生角、々生變宮、々々生變徵

又曰、即有七聲以成音調、五聲二變經緯相成、未有不用變聲能成音調者也、故知二變者宮徵之潤色五音之塩梅

又曰、武王尅商自平旦至子凡有七辰、故加以七音所以變徵變宮起於周武

八音

通典曰、八音者八卦之音、卦各有風、謂之八風

新唐書曰、八音、一曰金爲鐘、二曰石爲磬、三曰土爲塤、四曰革爲鼓、五曰絲爲琴瑟箏筑、六曰木爲柷敔、七曰匏爲笙竽、八曰竹爲簫管

通典云、鐘聲鏗々以立號、々以立橫不以立武、君子聽鐘聲則思武臣、石聲磬磬（不比アリ以ノ誤カ疑ナシ）立弁、々以致死、君子聽磬聲則思死封疆之臣、絲聲哀々以立廉、々以立志、

君子聽琴瑟之聲則思志義之臣、竹聲濫々以立會、々以聚衆、君子聽竽笙簫管之聲則思畜聚之臣、鼓鼙之聲讙、々以立動、々以進衆、君子聽鼓鼙之聲則思將帥之臣　注曰號々令所以警衆也、横充臣謂氣作光滿也、弁謂分明於節義、簾廉隅濫之意猶擥聚也、會猶聚也、聞護鼚則人意動作

律呂

六帖律呂部曰律本注律歷志黃帝使伶倫自大夏之西取嶰谷之竹其竅厚薄均者斷兩節之間而吹之爲黃鍾之宮而〔乙因〕制ニ十二管以聽鳳凰之鳴其雄鳴爲六雌鳴亦六以此黃鍾之宮而皆可生之是爲律本、注曰大夏西戎國也、嶰谷々名也、竅孔也、取竹孔與肉薄厚均者截以爲管也、又曰六律六同〔不呂〕、注曰六律合ニ陽聲一也、六同〔不呂〕合ニ陰聲一也、此十二者以銅爲管、轉而相生、黃鍾爲レ首長九寸

史記律書曰六律、司馬貞曰律有十二、陽六爲律、黃鍾大蔟姑洗蕤賓夷則無射、陰六爲呂、大呂夾鍾中呂林鍾南呂應鍾是也、名曰律者釋名曰、律述也、所以述陽義也、律曆志曰、呂旅助陽氣也、案古律用竹、又用玉漢末用銅爲之呂、亦稱間故有六律六間之說、无間大呂二

間夾鍾是也、漢京房知五音六律之數、十二律之變至六十、猶八卦之變爲六十四卦也、故中呂上生執始、下生去滅、上下相生、終於南呂而六十律畢、

漢律歷志曰律以統ニ氣類一、呂以振レ陽宣レ氣、通典曰先王通於倫理、以候氣之管爲樂聲之均、吹建子之律、以子爲黃鍾、十一月之辰名子、々者孳也、陽氣至此更孳益シ而生故謂之子也、丑爲大呂、十二月之辰名丑、々者紐也、言居終始之際故以丑爲名、寅爲大蔟正月之辰名寅、々者律(〇津カ)也、津者塗之義、正月之時生万物之津塗故謂之寅、卯爲夾鍾二月之辰名卯、々者茂也、言陽氣至此物生孳茂也、故謂之卯、辰爲姑洗三月之辰名辰、々者震動之義此月物皆震動而長故謂之辰、巳爲中呂、四月之辰名巳、々者起也、物至此時皆長シ物起也、故謂之巳、午爲蕤賓、五月之辰名午、々者長也、明物皆長大故謂之午、未爲林鍾、六月之辰名未、未者味也、言時物向成皆有氣味故謂之未、申爲夷則、七月之辰爲申、々者身也、言万物皆身躰而成就故名爲申、酉爲南呂、八月之辰爲酉、々者猶縮之義、此月(〔有〕時アリ)物皆縮小而成也、故謂之酉、戌爲無射、九月之辰名戌、々者滅也、言時衰滅也言故謂之戌、亥爲應鐘、十月之辰名亥、々者劾也、言陰陽氣劾殺万物故ニ謂之亥、

已上五音并律呂悉以非所私擇、絲管抄被撰之旨載之爲明白、能々此上受師說可學也

一六調子諸曲古來ノ口傳故實可載之

但譜者略之說々多々猶尾餘殘在之者追書ニ可載之

一平調　大國名大平調本朝大畧之

樂書要錄曰夫金對使而能斷、其位西方以法制恩不畏彊禦、不侮鰥寡、賞賜不違所憎、誅罰不阿所愛樂、當宮於南呂、用鍾和樂於西郊

禮記月令曰孟秋之月日在翼、昏建星中日畢中　孟秋者日月會於鶉尾而斗建申之辰也　其日庚辛　庚之言更也、辛之言新也、日之行秋西從白道、成就万物、月爲之佐、時万物皆肅然、改更秀實新成、又因以爲日名焉　其帝少皥其神蓐收　此白精之君金官之臣自古以來、著德立功者也、少皥金天氏、蓐收少皥氏之子、曰該爲金官

其蟲毛　象物應涼氣而備寒狐爲貉之屬生族毛者也　其音商　三分徵益一以生商、々數七十二、屬金者以其濁次宮臣之象也、秋氣和則商聲調、樂記曰商亂則改其官壞也　律中ニ夷則ノ　孟秋氣至則夷則之律應、夷則者大呂之所生也、三分去一、律長五寸七百二十九分寸之四百五十一、周語曰夷則所以詠歌九則平民無貳

三臺塩　新樂　中曲　亦名天壽樂有囀近來絕畢

答舞　皇仁　又長保樂　本酣醉樂　玉監物賴義綿譜曰無舞云々序四帖（拍子各八或云序四段）
破（拍子各十六）　急三帖（拍子各十六）　件序犬上是成舞師タリシ時コレヲ秘スルニヨリテ不傳、
仍永ク絶畢、又說云ク、序二帖（拍子各八）　樂二反ヲモテ舞一帖トス、仍十六拍子者也　破
（拍子各十六）　有嗄頭八拍子秘之

此曲唐國乃物ナリ、醉鄕日月曰高宗ノ后則天皇后所造也、初拍子（五）已下（八）一帖二帖共ニ拍子
不加、此破本三帖ナリ、其時ハ終帖ニ加三度拍子ヲ、而今世終帖絶タルニヨリテ不加拍子
ト云々、狛則季モ申由基政等カ記ニ見タリ、狛光時自筆舞譜ニ云ク、破二帖終帖餘ノ舞ニ
准メ三度拍子ヲ可打、而近代不打之、頗其故ヲ不知、或記云ク、終帖ノ始ヨリ打三度拍子ヲ
云々、此說已ニ光時詞ニ叶歟

又曰（云[イ]）、三臺破不付嗄頭侍也、其故ハ舞絶也、絶樂ヲバ嗄頭マデ吹テアリガタキコトヲサタ
シイタス間ニ不付ヲ爲秘ト、而六條入道蓮道鳥羽院ノ御前ニシテ此樂ヲ吹　仰ニヨテ嗄頭ヲ
吹時不付、鳥羽院仰云ク不付之條口惜ト云々、侍從大納言成道（基政弟子）說云、末二拍子加三
ト拍子云々、依此說ハ一反時モ二反ノ時モ末二可加之、彼賀殿破等ニ准之、所謂拍子加ル

說世常人不知上ハ加サランヲ本トス、只其日ニトリテサモト思ハン時此說ヲ斗テ可加也、加說ヲモテ秘說也、當破ト傾坏樂破共ニ拍子ヲアケス、然而兩曲ヲ用ハ三臺ニハアクベカラズ、傾坏ニハ上ヘシト云ヘリ、此條今案トキコヘタリ、兩曲元ヨリ拍子ヲ上ヘカスハ一日兩曲奏ニヨルヘカラス可上儀タラバ一曲ヲサスベカラス、只蕉合三四帖同奏ノ日コメ拍子ヲハ一ニハ不可打、同ハ四帖ニ可打由イヘルガ如シ、然バ更正義ト云ヘカラス、抑終帖絕タリトイヘトモ殘所終帖ニ加拍子條眼前也。賀殿 元四反 今二反 陵王 元二切 今二切 万歲樂 元七反 今三反 甘州 元七反 今五反 裹頭樂 元五反四反 今三反 賀王恩 元五反 今三反 感城樂 元五反四反 今三反 秋風樂 元五反 今三反 還城樂 元七反 今二反 三イ

傍例一曲ニアラザル上ハ三臺ニ至テ不可加拍子由稱條、頗ル所見セバキニ似タリ、當流ニヲイテハ加拍子說ヲモテ秘說トスル也 狛光時說 尤同前 一反ノ時ハ未二加拍子、二反ノ時ハ終帖初ヨリ可加之

急三帖 拍子各十六 有陵頭 四拍子

初拍子 五 以下早四拍子、終帖ニ加一拍子、常用之、一說加三度拍子、秘曲云ク、第二反第五拍子ヨリ加一拍子、南宮親王御說ニ云ク、加三度拍子ヲ用否可尋、又秘說云ク、傳供并ニ

行道ナドハ加三ト拍子ト云々、又知足院禪定殿下仰云ク、此急彈物ハカリアル時笛ヨリ吹出コトアラバ吹出四拍子、ステ、第五拍子上由中下中ヨリ吹出頗興アル說也云々、舞立時此急ハ早吹ベシ（舞手アラスミ〔〇ソシ〕テ延タルハワロシ）賀殿急（延テヨシ手コミテ早ハ舞損ト云也）每度如此叓心仕アルベシ、樂人舞人相談ヲ故實トス、舞出時吹調子（品玄）入時當急ヲ重吹テ舞人南向時加拍子、或云、保延元年十月廿九日內裏舞御覽ニ三臺破ニ反拍子不加之、傾坏樂破第二帖加三度拍子、抑此兩曲勅定ニヨテ如五常樂ノ入時舞人皆入綾ヲ舞ベキヨシ仰下サル、仍各忠節ヲツクス、誠ニ未曾有也、自今以後勅定ノ外不可有之、畢

抑唐高宗皇帝ト申御門ヲワシマス、此御時臣下ニテ張文成ト云人アリ、姿カタチアリサマナマメカシウキヨラニテ色ヲ好ミ、ナサケ身ニアマリタリケレバ、世ニアリトアル女サナガラ心ツヨクハヲボヘザリケリ、此時ニアイハナメカセ給后ヲハシマシケリ、御名則天皇后ト申、アマタノ御中ニ勝テ聞給ケレバ、此張文成人ヤリナラズ物思ニシヅミテ、イケルカイナクト覺ケルマヽニハ、イネテモサメテモ只此叓ノ忍ガタキヲ、又云アワスル人ダニナカリケレバ、芹ヲツミ地ニフシテモ年來ニナリヌレバ、后アサカラズ心ノウチヲシラセ

給ニケリ、哀ニイミジクヲボサレナガラ心ニマカセヌ、御身ノフルマイニハナグサムカタ更ニナクテアカシクラサセ給、文成イミジクヲボユル文ヲ作テ后ニタテマツル、此文ハ遊仙屈ト中テ我朝ヘモワタリテ侍、后コレヲ見給度ニ、御身モホロビヌベクソヲボヘサセ給ケル、サテ自此曲ヲ作ラセ給テ、御心ヲナグサメ給トカヤ、高宗皇帝崩御ノ後后トシテ代テ位ニツカセ給テ、廿一年マデタモタセ給ヘリキ、此皇后ハ二代ノ帝王ノ后ニ立給ヘリ、

又云、此曲ハ殊勝ノ樂ナリ、則天皇后尼寺ト云トコロニ癡セラレテ作也、第三句戀句ト名ク、第三句急也、第九大コ第十大コヲ云

又云、大唐ノ樂ナリ、三月内宴日、帝王、妃女、儲君仍三臺ト云、此說秘之号三臺塩　私云此塩ト云心有口傳　太宗所作也、此急初拍子ニ付レ笙コト龍秋始テ付之、早四拍子ハ第二ニ付之ハ法也、此急ハ初拍子五ニ當、仍第二ニ付之者延間初拍子付之、此說叡慮御感有之、御用說ニ成侍コト面目ナリ、此朝渡コト犬上是成渡侍ト云々

萬歲樂　中曲　新樂　名鳥歌万歲樂

答延喜樂　又地久　三帖拍子各二十以樂二反爲舞一帖有半帖二拍子ノ後反付初帖也、初拍

子五已下八延終帖加三度拍子此曲本ハ七反也、而今世五帖アリケレ𪜈又絕テ只三反ニナル也、一二五帖也三四帖ハ絕畢略時常ニハ十拍子ヲ舞、是ハ一帖ノ初十拍子ヲ舞也、則第八拍子ヨリ加之、一說末五拍子加之、但舞時不用講讀ノ時用之、一說ハ第五拍子ヨリ加之、サモト思フ時トソ中古ハ卅拍子一帖半ヲ舞其時ハ第一帖ト第五帖終十拍子舞ナリ、此時一反廿拍子ヲ吹テ又半帖ヘ反吹テ即加拍子尤爲秘說一帖廿拍子舞時ハ第一帖乃始十拍子第五帖ノ始十拍子舞テ半帖ヨリ加拍子也、近代ハナヲ略シテ初半帖十拍子舞、第八拍子ヨリ加之、口ニ注說ト同舞時努々末五加コト不用之

二代御記ニ曰、延喜ノ後年號八年ニテ改延長四年十月十九日大井河ノ行幸ニ雅明親王延喜之御子御歲七サイノ時常曲ヲ赴舞給三帖ナリ忠拍子說帝王感ニタヘサセヲワシマシテ半臂ヲヌギテカツケサセ給タリケレバ、親王肩ニカケテ拜シテ一曲ヲ乞給タリケルトゾ、山階寺ノ別當ノ元日ノ朝拜ノ次御遊アリ、其只拍子ノ万歲樂ノ時必首官一曲ヲ舞昔親王ノ一曲也、第三帖ノ舞ノ手ノ內忠拍子ノ曲ニテ傳來タル也始ハウチマカセタル御遊ノ忠拍子ノ由利吹半帖ヨリ於世吹ニナリテ青海波ノ程ニ早吹舞也、是ヲ中帖ノ曲ト云、以外秘叓也、此樂參音聲并船樂立樂ニ奏ニ用古樂一皷ヲ懸故也、仍古樂搔拍子加拍子、又云、此舞

ハ大曲ニ准ベキニヤ、大法會ノ入調ノ始ニ新鳥蘇ニ合タルコトノ侍也
〔○以下「山階寺別當云々」ノ文ノ邊ヨリノ行間ノ書入ナリ〕
中帖曲ハ先三帖忠拍子ノ說ヨリ出タルベシ、始二帖廿拍子ヲハツネノ延タル只拍子ニフキテ三帖メヲセメテ早クフクナリ、猶略シテ二帖廿拍子ヲ舞フ、其ヲ弥クサタシテ二帖メヲセミテ早ク吹テ中帖ノ曲ト號スル也、中ノ帖ヲ略スル曲ト云ベキヲ略ノ字ヲ略シテ中帖ノ曲ト云トロ傳スル也、此名ノ付ヤウヲ秘スル也、樂ハ手カハラズ舞ハ手カワルナリ、三帖メヲ早ク吹ト申モ只拍子ナリ、此事極シタル秘事ナリ、延タル只拍子ヲハヤク吹ケバヲセミニ同、コレ程ノコトハ人可知ナレドモ口傳ナキハ不知也
三帖ナガラ只拍子ニ雅明親王マイ給フト見タリ、其モ終帖ハ早カルベシ、只拍子トヲセミト別ニ心得タルハ無口傳人ノ申也、能々可秘之。
又云中帖ノ曲ト名ノ付タルハ三帖サナカラアル時ノ名ニハアラズ、二帖廿拍子ヲ舞時二帖メヲ略シテ一帖五帖ヲマフ、仍中ヲ略スルヲ云ト也、是ハ後人ノ案ナリ〔○以上〕

通典ニ曰、鳥歌万歲樂、武太后ノ所造ナリ、一說武后ノ時宮中ニ鳥ヲ養フ、ヨク人ノゴトクモノヲイフ、又常ニ万歲ト稱ス、仍樂ヲ作テモテ此舞ニカタドル、三人緋大袖並畫〔画ヵ〕鸜〔工〕ノ〔工〕谷冠（マヽ）

作鳥象今嶺南ニ有鳥似鸜鴿ニ養之久則能言モノイフ。同云、隋煬帝令大樂令ヲ白明達造ニ新聲一期ニ尤

歳樂藏鈎樂七夕樂ヲ一。又云、漢ノ武帝嵩山ニ登ル時ニ万歳ト呼コト三タビナリ、上ニトウニ

上ニモイワズ、下ニトウニ下ニモイワズ

荊州記ニ云ク、桂陽郡ニ万歳山アリ、山下ニ一ノ淀アリ、千秋水トイウ、其邊ノ村ヲ万歳

ノ村ト云

或記ニ云、用明天皇ノ御即位ノ時作之トイヘリ、是ハ聖德太子ノ御父ナリ、或ハ御作ト云々、

此御門ハ日本人王卅二代ノ王欽明天皇第四ノ御子敏達天皇乙巳九月五日即位隋高祖大定五

年ニアタレリ、在位二年四月九日崩御歳五十八。又云、私云隋煬帝御代ニハ鳳不出由申

傳、然者御作モ不審、堯帝黃帝御時出也、我朝ニ持統天皇御代ニ渡ニ白鳳ニ仍年號白鳳トス。

又云、此曲ハ賢王之御時鳳凰來テ囀音也、件鳥ノ音賢王万歳ト囀也、以件音爲此樂曲也

私云、太子御父用明御作不審被改之歟ト覺モノナリ

万につけて能々いかにもあるべきなり、無能は人の大なる辱なるべし、人たこひ和哥管絃

の方すぐれたれども才幹のおろそかに、風月のかけぬるはなをしあなづらはしくかろ〳〵

しうおぼゆ、この事ある抄にかやうに注之

皇麞　有甲　中曲　新樂

破九帖拍子各十　急拍子廿　可吹十一反、又七反、近代五反歟

此曲者黄麞谷名也　於件谷作此曲作者不見　古遊聲一帖并序侍ケレドモ絶タル間急ヲ延吹テ爲道行出舞也　羯鼓打様如道行古人號寄拍子　破九帖舞七帖マデハ一帖ヲ返々吹之、八帖有喚頭　九帖　皆替吹加拍子　狛高季説ニハ七帖ヨリ於世マセテ八九帖ヲバ殊ニ早吹之、今大神氏ニ略メ舞ハ一八帖ヲバ緩吹テ九帖ヲ火急ニ吹テ即打三度拍子也。一名海老葛　唐黄麞ト云谷ニテ作之

妓女教　説

一帖禮拜八帖天汝ヲ纒ニ頭ヘ、九帖於世吹即加拍子也、左並寄テ袖カツキ右並寄テ袖カツギ如此向四方舞、急三反如三臺急舞テ第三切ニ初楚取加拍子左右捻向テハ足ヲ跳上ツヽ舞也

持楚舞如蘇利古破、一帖舞人禮拜、二帖向東居、但是若南面之儀也、三帖其舞有手四帖、初拍子解錦額、五帖第三拍子以錦額帶腰、至第六結了六帖第二拍子自懷中出甲、七帖第十

拍子着甲、八帖四拍子結甲緒之、九帖有手

醉郷日月曰、景龍中西戎叛宰相王孝傑征之戰ニ於黄麞谷ニ死中宗念フ其忠故作也

私譜九帖拍子各十、第九帖加拍子三度拍子、畧定一八九帖。有時猶第九帖加之、一反ノ時末二加之。一反時第七帖用之、九帖ヨリ於世吹急、管絃時自二反頭加一拍子

褁頭樂　新樂　中曲　又作　裸頭樂

一名散手作物　答舞數手

三帖拍子各十二　初拍子五已下延八拍子、終帖加三度拍子、一反時末四加之、一說末二加之。又說第七拍子ヨリ加之、或說舞人南向時打三度拍子所謂中半ヨリ說ナリ、狛光時舞譜云々、四帖但今世ニ帖不受師說云々

此曲季德祐作之舞歟又云明帝所作云樂歟

同記曰、大国法蝕拂之時以錦羅絹綾等褁頭拂之、大唐ニ金御国ト云所アリ、一百歳ニ一度大蛾千万來テ害損人也、其時奏此曲、彼蛾皆悉死ト云々。或人語云、霓裳羽衣之曲雖然無其謂者歟、古ハ大法會行道用之。天皇御元服ノ後宴ノ日必奏此曲、舞出入田調子出品玄

入臨調子秘説ニ云、出ニ品立入ニ入調ヲ可用之、又云蛾コレハ蚊歟、火トリ虫ト注又云、明帝御製作分明、此帝ハ後漢二代之王ナリ、又ハ顯宗トモ申、漢高祖十代之孫、光武皇帝第四ノ子、母ヲハ陰皇后ト申、在位十八年八月壬子東宮前殿ニ崩ズ年四十八顯節陵ニ葬、永平十八年元年戊午ハ日本ノ垂仁天皇八十七年ニアタレリ、八年乙丑歳御夢ニ金人來ト御覽ジテ同十年丁卯摩騰法蘭トイウ二人ノ人漢土ニ來レリキ佛法コレヨリヲコレリ

慶雲樂　新樂　中曲　無舞、拍子十一反末二或四加之

唐書曰、慶雲樂曲大祠享皆用之

通典曰、貞觀中景雲見河水淸、張文收採ニ古ノ朱鴈天馬之義ヲ製ス景雲河淸歌、名曰讌樂奏之管絃爲諸樂之首　今元會第一奏者是　景雲舞八人花錦袍五色綾袴彩雲冠烏皮靴

新唐書曰、睿日景雲之舞

或記云、大国法食叓時奏此曲、於大唐望食有二鬼名食鬼云飲鬼、繫念人食惱人而聞此樂音曲彼鬼神去七十里ヲ云々、此樂本名　謂兩鬼樂　我朝慶雲年中渡テ改名　付慶雲樂　或說ニハ唐有此曲大祠享（唐京図ニヨル）皆用之　忠拍子アリ　ハシニ有トモ只拍子ノ所此段ニアル間重テ書之

諸ノ參向參音聲躰ノ祝事用加三度拍子

慶雲事世俗ニ紫雲たなびくなど人の申と侍、佛法ニハ一向なきよし教者被申侍、諸經ニ釋タル事なしこ早往生する人前ニたなびくよしこれも推量に悅の心歟

南中記云、紫雲之瑞膺堯を生る也、雲は向テ猶北斗ニ垂ル南風ニ雲瓏漢之上到堯母感氣扶レ袖ヲ雲受レ之ヲして下て入ニ堯母之懷ニ堯を妊なり（奥義抄ニ載之）此次ニ注付事憚多侍ども子孫外者こても不可出愚札なればかやうの事まで書之、先年予千首をよみて三条前内府家（于時侍從大納言殿と申實隆卿御事）御合點申入侍内御點榜を

紫の雲こそなひけ都より北野のあふち花さかりかも

うふやの哥にあまたよみ侍る也、如此事も又樂道にもあるべき間他事にて我道の故實あるべき事を可覺悟也

永隆樂　拍子十　新樂　（一反時末四加三度拍子）

是者左大臣信相作之、但左大臣信卿蒙勅原免之日作之、一說唐永隆作之、信作改給歟、忠拍子アリ加三拍子

甘州　新樂　小曲或中大曲　又云、作泔洲、又ハ名甘州樂或甘州塩亦名衍臺有詠近來不用之
答舞、仁和樂、又石川、又䴏醉樂　五帖拍子各十四初拍子四以下四延又早、終帖加一拍子
是ヲ當家ニ常用說トス、一說云ク、加三度拍子是ヲ奈良樣ト云、常不用秘說也、或人說云、
當曲林哥ニ對スル時加三ト拍子、本ハ七反其時六帖ヨリ加之、今世末二帖絕了、只五反
有、四帖ヨリ加之、此曲唐玄宗皇帝御作也　天寶後多以邊地名曲泔洲涼洲是也、又有胡旋舞　日ヵ元ノ玄　又而照千山ト云物作之云
依勅作之歟

五代史記梁本記曰、唐玄宗名衍嘗與大后大妃遊靑城山宮人衣服皆畫雲霞飄然望之、若仙衍
自作甘州曲述其仙狀上下山谷常自歌而使宮人皆和之。又云、甘州ハ國名也、彼國ニ海アリ
竹ヲ、ク生タリ　甘竹ト云　件竹ノ根コトニ毒蛇毒蚖虫多ミチテ切ウルコトナシ、毒虫ノタメ
ニ人ヲ、ク死ヌ〔〇「シテ」ニ「ヌ」ヵ〕、而奏此曲乘船來テ此竹ヲ切バ彼虫人ヲ不害、金翅鳥ノ音
ニ似ルニヘニ毒虫恐ヲナシテ害センノ心ナシ、仍切作〔不得〕也、舞出時　甲調子　入時重吹當
曲　則加拍子　此樂ニ有只拍子說極タル秘事也、空拍子說殊秘事也、卽十六拍子之後成樂拍子
羯鼓秘事　泉郎　打此曲也　大神氏ノ說ニハ無空拍子ヌ自第二返成樂拍子云々　光時此曲正清カ時ヨリ本法ノ程ヲ背テ早ク

吹成畢、但基政時元ハ猶本法ヲ存テ靜ニ吹之、正清不改早吹其興ナシト畢、又云、此曲延樂ニアラズ、早樂ニアラズ、其ホトスデニ中間ナリ、樂拍子トイヒ、只拍子トイヒ、其拍子同〔○〔イ〕間〕ハイニアリ、獨一躰ヲ守テ全ク比類ナシ 又カコ泉郎ト云、又泉郎ト注之可有習之

又云、此曲本ハ只拍子ナリ、而ヲ早ク吹テ樂拍子ト稱ス、

只拍子被用御遊例

白川院御時承曆三年堀河院御誕生七夜御遊用之

高倉院御時治承三年安德天皇御誕生七夜御遊用之

順德院御時建保六年先帝御誕生七夜之御遊用之

但非吉例者不可申沙汰能々可尋申

南宮譜云ク、三反之後ノ詠 博雅三位ノ譜云ク、三帖之後詠四帖之後詠其詞ニ曰ク但近來絕之

三帖後

燕路波山遠〔瀰迹〔イ〕ニヨル〕 胡關易水寒

茫々風襲(サツ)蚤〔イ〕ノ〔イ〕〔○仁智要録「藻」トアリ〕動(トウ) 澮々(クワイノヽ)陽候(ヤウコウ)閑(カン)

四帖後

殘月蘆江白　　老花芍(菊イ)岸(黃)舟(〇仁智舟)
竹(仁智ニ堤イ(仁)露イ仁)　　寒イ仁暄イ仁
行鷺晚　落冷　　桑落暮　勞關

一說

燕路潮山遠(八居造区ニヨル)　　胡關易水寒
浣
花々風蕩(〇藻歟)動　　繪々陽侯閑
殘月蘆江白　　老花菊岸舟
竹鷺暖露冷　　桑落寒■關(隨吹三曲)

又云、此曲舞終テ更ニ吹テ同曲ヲ入舞ナリ、此度三拍子以後上拍子也、但舞人ノ景氣ニ隨ベシ、舞人北向ニ手ヲ合テ落居テ一度ニ樂屋ヘ對トキ上拍子ナリ、又云、今案、醉鄉日月ニ云ク、樂之精莫過ダルハ玄宗朝然者玄宗作尤取信歟、又玄宗既ニ知音律又酷(ハナハダ)愛ニ法曲ヲ

五常樂　中曲(或中大曲)　新樂　童舞　男舞

序一帖 拍子十六、以樂二反以一帖 破六帖 拍子十六 急 拍子八

五返舞之 又五聖樂 名禮義樂

或譜云、大食調曲 答舞 登天樂

唐太宗朝貞觀末天觀初帝製五常樂曲畠 五常公作之、此曲平調入吏博雅三位說ト云々

仁義禮智信謂之五常之者人可常行也、五常卽配五音此曲能備五音之和之

詠詞 雖有詞多々說依不用近來畧之

端譜 一 賦 賀 払 二反

報 恩 者 欲 疑 上 詠 寬 寶 連 疑

師 賦 賀 鴻 仁 天 寬 五火常火樂火

此破ヲ樂拍子吹時初拍子ヨリカ忠拍子吹也 慶雲樂同前是時元說也

又樂拍子吹躰有二說 一說如大平樂破 一說大曲吹是常用說 又初四拍子ヲ延テ緩吹ニス一說ナリ

急 拍子八 第二反ノ頭ヨリ加三度拍子

此舞ハ如右樂次第舞入テ樂屋ノ前ニテ各乙テ入ベシ

又欲吹畢時干箇吹樣アリ道分秘事ト舞家傳之云々　一說序後詠云　或云序二反後舞人詠

嘆佛偈芳感報恩志欲申

詠詞多々當時不用之間畧之

白河院ノ御時醍醐ノ童舞御覽ノ有ケル中ニ五常樂ノ急樂殊ニ面白カリケレバ舞人皆入ミイヘドモ伶人不止樂音、シカル程被勅下云、行高一曲ヲ乙ヘシテ時行高大鼓ノ前ニ進出テ膝ヲ屈テ仰テ蒙テ進御前一曲ヲ仕タリケレバ叡慮ニ叶テ頗蒙御感云々、此行高ハ此急ノ初一返ハ不舞シテ忠踏押拍子ス

北邊左大臣夢說在此急是則箏ノ秘事ニテ侍舞出時吹調子入時者如右舞且舞止也

或云、詠内ニ可憐衆鳥舞又云舞尋三古曲對七佛雲天親五常

或云、博雅三位譜曰、但二帖詠三帖詠四帖詠七種淨土ノ耕直見國家モ今日ゾ榮ラン、同詠句頌(冈頭)二反句終　天冠五常樂又年號用當時

歎佛音芳感二反　或云、淨瑠璃之寶之城近カラン法之儀臨給ヘリ

古人云、此曲舞十六拍子ヲモテ舞一帖トス、故ニ樂二反ヲモテ舞一切トスル也、如此

例有之、又云此序ヤワラカニ吹ベシ、アラクフクベカラズト云々、又云、息ヲ入ズ吹之云々

又云、破六帖 拍子各十六 初拍子五已下八終帖ニ加三度拍子一反ノ時第十二拍子ヨリ加之

又云、此破ヲ樂拍子ニ吹時ハ初拍子ヨリ忠拍子コトク吹也、慶雲樂同即是時元說也

或記云ク、由利吹限當曲破不可稱他曲叓也破一反許也云々

又云、急自第二反頭加三度拍子、或說云ク、加拍子之後ハカコヲワケテ延タル四カコニ打ベシト云リ、但非常說ナリ 加拍子樣

基政云ク、破舞畢テヤガテ急吹出スベカラズ、舞人裝束ヲツクロイナドセバ其サホウハテヽ後吹出スベキ也、又云、吹出ハ只拍子ニ吹出スナリ、第二反ヨリ加拍子

富家ト申法性寺關白殿ノ父君ニテマシマス、宇治惡左府ハ法性寺殿ノ御舍弟也。

知足院殿仰云ク、此急ノ終說ト云ハ初モ一反奧モ一反ツヽ吹テ九テ二反吹ハ珎說ナリ、或云ク、此急ニ終度ノ樣ト云叓アリ、加常二反ヲ又今一反吹加ルナリ、吹樣ハ別ニアリ

コレヲシヤウヲ吹ト申也 囷富家ニ二反三反ノ說コレナリ可秘之唯受トモ云ヘシ

云々 囷此時太コ加樣奧ノ三返目ヨリ如之秘ナリ〳〵 有子細秘之 囷此說ハ琵琶ノ家ト云終ノ說ト云、終三反ノ說ト云ハ常也

[頭注] 口傳ニ云ク、三反ノ九ヲ延テ乙九ヲ早吹之初ノ十ノ拍子ト同唯受ナリ

(六條入道)基通ノ云ク、樂人友正二三十反ナリトイヘドモ毎度ニ其手ヲ替テ吹之云々。
(帥大納言)經信御說ニ云ク、琵琶ニ急ヲ別ニ初ハ序吹ニ別出テ次杲ヨリ樂拍子ニハ別レケル也、信綱(桂少納言)此說ヲ案ズルニ破ヲモ只拍子ニ吹出セバ急ヲモ只拍子ニ吹出歟、(或記云)時元笙ニ吹ケルハ小竹ヲ拾テハ大竹ニテ調ベテヤウ〳〵吹ケル目出カリケル

季通ノ申サレケルハ非管絃者ハ口惜叓也、堀川院ノ御時平調ニテ御遊アリシニモノヽ音ヨクシミテヤウヤク曉ニヲヨブニ五常樂急百反ニ及ヘバ草木モ舞ヌルモノヲアルベシトテアソハサレ侍シニ、五十反斗ニテ天アケヽレバ時元排テミルニ庭樹ノソヨグヲミテハヤ舞候ヌルハト申ケルヲ目出心バセカナト人々イヒテ感ジ思ケル、顯雅卿イマダ殿上人ニテ無能ニテ其座ニ候ダニカタハライタキニ、奏云ク、アレハ風ノフキ候ヘバウゴクニ侍リト申タリケル、滿座ワライタリ、

私ニ云、右ニ注コトハ上代ダニモ如此有之、末代讒代ニ生タリトモ毎稽古道ノ者万ニ渡リテ耻ガマシキ叓不可有盡期アワレ我モ人モ老若ニヨラズ物ヲバ學タキ者也

凡常曲ノ急百反ニハアヤウノシルシアルベキト覺タリ、サレバ廉承武ガ靈モ此曲百反ニテ

ヨバン所ヘハカナラズユキテキカントコソ申侍ケレ。又云、當曲ノ急秘說事嵯峨天皇崩御後勅ニ信ノ大臣ニ夢中傳賜秘說云々　稱北邊夢說是也、私云、此說イカナルヤウカト覺マシキ也

又云、當曲ト喜春樂ト入時舞人委ク皆舞之、余ノ曲ハ一者一人必留テ舞之也。

又云、禮儀公カ所作也

或云、秦始皇作之云々、但愚案女ノ作レル曲ニヤ、此ノ舞本躰童舞ナリ、女ノ樂ハ大畧童舞也、又云此急聖德太子尺八ニテ吹セ給フ、仍御作ト云々不審可尋之

抑平調ハ金音ナリ、此音ハ德義ニ主ル、而此調子ノ樂ノ中ニ殊五常樂ノ名ヲ得タル事此樂ノ義ノ一音ヲモテ本トシテ能ク五常ヲ調ルカ故也、五常トイハ仁義禮智信ナリ、土ノ君王ニ信德アレバ水ハ北闕ノ臣禮アルナリ、如此五常ヲ調ルガ故ニ上ハ義アリ下ニ禮アリ、王臣道合テ國ノ中ニ殃ナキ也、故ニ名テ五常樂ト云也、此故ニ樂ヲ人ニ敎始ニハ大略此急ヲ初學トスル也、曲少ケレ圧心衆曲ニ通ズルユヘニテ侍也、當家嫡々口傳此諸說ノ上アマタノ習吹様故實在之、奥義別紙ニ注胎金ノ兩部山王ノ二字習合事在之仁義禮智信ハ誰モ知コトナレ圧蚊虻ノ者ノ爲ニ此末ニ注之

仁者慈悲也則不殺生戒也　慈悲也ト申ハ心ニジヒアリテ万叓ニ付テ愍悲(アハレミカナシム)ナリ
義者和也　則不偸盗戒也　義ハ和トハ心ニヨシアリテ万叓ヲ和ケコワキ叓無ヲ申也
禮者順也　則不邪婬戒也　禮ハ順トハ万ニ敬アリテ何叓モ順ヲ申也
智者賢也　則不妄語戒也　智ハ賢トハ万ニ四度計ナキコト無内外ニ付テ賢ヲ申也
信者貞也　則不〔不ニヨリテ補〕飲酒戒也、信ハ貞トハヨロヅノ叓ヲウタカウ叓ナク、思定テソラゴト無ヲ貞トハ申也。此五常ヲ朝夕コヽロニカケテ思振舞者何ニツケテモ世ニハヲノヅカラ便トナルベシ、身体ワロキ者ヲハ人ノアワレム叓末ナキ者也、能々可見之

廻忽　拍子十二　又廻骨云　新樂

此曲貴養成(クイヤウセイ)所作之、昔大國ニ有ニ一人臣ニ号(ナヅケテ)曰貴養成、彼有父曰大忠連忽受病死去畢、經(ヘテ)ニ百ケ日ニ彼臣至昔〔不ニ吾〕下墓邊作ニ一ノ樂ヲ琴ニ彈之至七返之時彼死骨息生廻墓三匝(サウ)之失畢
仍名廻骨之件曲用葬禮云々其時用古樂

惟季ノ説ニハ忠樂共ニアリ　忠拍子時終不延 樂拍子時終可延　トシルシテキタリ、但今ノ世ニハ絃管ニ此忠拍子ハ不聞也　此流ニハアリ　樂ノ拍子ニモ當世ハ末ヲ不延而ハ大皷ハ返初ハ六鞨皷ニ

ナル也 口傳云、反付ロヲ六拍子打テ如林哥三度拍子打之
●知〔底智〔イ〕ニヨル〕足院殿御說ニハ終ヲ不延シテ吹出ノ干ノ穴ヲ延テ八カコ打說コソ日出說ナレ 又秘說ニテモアレトゾ仰ラレケル

陪臚破陣樂 別樣舞天王寺舞之古樂

破 用新羅陵王破 急 當曲吹 拍子十二

班頭德所作也 是天竺樂 而大國法淸舍日於陳ノ內奏此曲知死生、此樂七返之時有舍毛音、我陳卽勝怨陣卽破、若我陣无ハ此音自陣破怨陣則勝云 此舍毛音何叓哉可尋之、古目錄云、陪臚道行云 或人云、樂者波羅門僧正傳來給フ舞者上宮太子爲レメ敵守屋臣奏此曲之時 有舍毛音 仍自陣勝了其摸ホムトシテ此舞所造ツクル云但太子傳不見同太子丸器コトモナシ

先舞出時吹林邑亂聲于時左右舞人出テ作輪立定ヌレバ爾取吹新羅陵王破 有二說 拍子十二說有 奈良樣 拍子四者 天王寺 次又吹亂聲又爾取吹當曲 拍子十二 以樂二返爲一帖 謂之半帖吹說卽加拍子如還城樂 次又吹亂聲 作輪テ亂ミダレ合シテ走入ル也

天王寺公元曰吹亂聲此間舞人出隆而作輪、舞人立定止亂聲、取音次吹倍臚三反此拍子者如

拔頭今世如蘓莫者破始自公定一返後上拍子樂二返間舞一返也舞乍レ持レ梱拔劍舞、粗似泰平樂、次吹亂聲舞人昇降作輪如初、次又取音、次新羅陵王破四拍子一返後上拍子常儀作樂三返以此間當舞一返歟、舞禮用泰平樂破第二反末執桙之手也舞手六拍子許也、•組〔〇但ノ誤〕多少可有〔扃右不ニヨル〕舞人之心用同手還舞故也、舞人同寺〔〇等ノ誤〕之終作後案之手者樂人見舞手吹止之後案者大平樂終手也

次吹亂聲　此度者有昇淨不作輪之　入舞　今見倍臚昇降作輪之体疑是破陣樂貞麗獨貫左右各同体歟

〔按〕コレニ月代上ノ說アリ、初拍子ノ大コ五ニアテ、八拍子ニソウヲ打ベシ、又七ニアツル說アリ、コレヲバ次ニスベシ

唐招提寺四月八日倍臚（ヘロエ）會此曲舞　鑒眞（ガンジン）大和尚所傳也可尋

舞人僧　着甲冑〔扃不袖不ノ不ニヨル〕襠太刀　楯鉾（タテニホコヲスキモツ）貫持各小舞人一人相副タリ　笛ハ玉手氏（タマテノ）三鼓之達吹（タツフク）レ之ナリ

大鼓打寺僧　謂（イハユル）圓滿寺別當某流歟　自當ハ〔不堂ノ〕前下來樂屋袈裟威儀ヲ返テ打之隨レ太鼓吹笛也　住僧說云、每勺可頻ニ打上拍子有唱哥同志（トノシカトウ）可同是也

又八多羅(ヤクラ)拍子云推之招提寺倍呂(ヘロ)走(ハシル)ドウシカドウノ皷音也ト云

先吹亂聲 如天王寺 不レ吹二新羅陵王破一シテ直ニ吹倍臚 不似常倍臚

先自大皷打出セバ付二テ其音一ニ拔太刀舞七登舞云 是謂倍呂走 頗天王寺之舞相違彼寺住僧云、此舞者以此寺爲根元、彼寺ハ(臨

子(イ)ニヨル)舞之時先數剋吹此曲、其間舞人迴堂前數尅、其手差足踏只用同吏也、然後伺合(八(イ)令)舞此曲也、久流廻堂(臨當(イ)ニヨル)前爾道行歟

建仁三年十一月卅日東大寺之惣供養日唄上樂ニ林邑樂屋奏倍臚樂 用忠拍子 尤モ樂拍子ニテ

有度侍シカトモ笛吹不知樂拍子說歟、長慶ト申ケル物ハ一向用樂拍子ナリ、サレバ樂

拍子ノ說ノ世ニナキニハ侍ズ 慶雲樂躰樂也

私云、專源義家、義光合戰度コトニ試吹勝ヲ得給シト也。此舍毛音當家傳之一大吏也

軍吏秘之中第一也 字(ウツホノ) 同時可傳之

想夫戀 拍子十 又想夫憐 拍子十四可吹四返

有詠 新樂

元愼集春詞云即同向來彈畢曲着人不道又云氿聟奏此曲ヘシ、又有於世吹說 カコ如五常樂破

是院禪(ホンセンク)供奉(フ)ヵ說也 有只拍子 加三ト拍子 又云相附連トモアリ

扶南　拍子十四　又十二　新樂

大国法男女婬行之時奏此曲、漢土有ニ扶南云所ニ好色女多有之、有男子爲婬行ヽ彼所々

時奏此曲云、扶南淵名也

善相公意見文　如判事糺判獄云條也　依レ舊置ニ判事六人ニ皆擇ト明通ニ法律ニ者上、補ニ任之ニ使下ン之倶ニ

議也、科比ナ詳カニ定中條章上　各ミ憷ニ其意ニ然後ニ奏聞、如レ此則怨獄永絶、罪人自甘セン、不

レ待ニ持タ扶南ノ之鰐魚ニ、豈用ニ堯時ノ之獬　古賣反カケ　豸ニ　和反

或人云、獬豸宿捄仍獄云　宮繼譜云舞者二人以朝露爲衣亦皮鞋

古記云　唐有扶南樂舞者二人以朝露爲衣見上呉孫權嘉興七年十二月扶南王花旃遣使献樂

凡此曲有三說、一者　四ミ加一拍子、二者　初十拍子四ミ末二拍子八ミミ是十二拍子說也、三者初七拍子八ミミ初十拍子加一拍子末二拍子加三拍子

ヲ皆吹替タル樣ナリ、樂ハチヰサケレトモ此樂說ミ人シラヌ亨也　於十六拍子者不知之

惟季ノ新ヲカレタル異曲ノ内ナリ

勇勝　新樂

破　拍子十六

昔ハ舞ノ侍ケルニヤ道行アリト申タリ、雖然近來不聞之此破ハ秘支ニテ侍其上說々アリ宇治禪定殿下ノ仰ニ云ク此破ノ末ニ五常樂破ノ樣ニ於世吹ニスル說アリ。又末ノ六氣ヲ不延シテ吹說尤秘支トセリ、有忠拍子說加三度拍子 作者未勘出也、

當家ノ夢說ハ時元ミル夢ノ說別紙ニ注中御門家 宗有ノ 御譜ノ裏書ニ被注付時光夢ニ時元ニ傳テ參向ヤ出テ見ニ無相違アリシ感涙難押者歟、十三大鼓已後四メノ拍子ノ十ヲ吹替侍、委ハ別ニ可注之、於世吹所同其所ニ可注之、

急 拍子廿六 早物ナリ 加一拍子ペシ

春楊柳 拍子十二 新樂

此樂吹樣可有三說、一者於世吹 如甘州可吹之 是惟季說 加三ト拍子 一者早吹說 如皇麞急吹之 一者吹忠拍子說 名之 大倍臚加(國和)(イ)ニヨル)拍子樣 如倍臚之說

昔イヅレノ御時ニカ侍ケン無双ノ管絃者アツメテ樂合ト云支侍ケルニモ此忠拍子之說ヲモテ勝タリト申侍タリ、惣テ此樂ヲハヨク可秘ト申作者不未勘出之

夜半樂 拍子十六 新樂

唐玄宗擧兵夜半誅韋皇后製夜半樂（或書云有作者秘事也）惟季說ニハ如五常樂破吹之（有忠拍子說）加三度拍子

承和聖主御前ノ御遊セサセチハシマシケルニ上達部殿上人退出給タル時夜深更ニナリニタリ奏夜半樂ベシト儀定シテ退出音聲ニ奏シテ被出ケルニ時ノ音カ平調ニテ侍ケン殊面白カリケレバ陽明門マテ出モヤラズセラレタリケレバ主上メデサセ給テ入御モナクシテ御感アリケルトナン

又云、南池院行幸及深更有還御、此樂名号依應時奏此夜半樂、隨有レ興、仍王卿侍臣進（不退ニ作ル正カ）出之時猶吹此樂乘レ輿退出畢。或記云、別殿行幸夜更タルニ奏タリ

慶德　拍子十　新樂

此曲近眞云、又鷄德云、鷄有ル五德故作ル此曲云々、漢土南一國（名鷄頭國之）其國ヲ打取テ悅（コロトヒ）テ作此樂云々（鷄積云）此樂有二樣、一者堀川院元政（其獻）已下伶人等下給御說（當時用之、）二者ロノ音ヲ不吹スベテ手ヲ吹替（此古流）トモニ（四ミミ）加一拍子　白河院此樂ヲニクミ思食タリケル間其ノ代伶人不沙汰云（此樂大判官ハ傳サリケルニヤ、目錄ニモ不入、狛氏家コト也）

古娘子 拍子十四　又八　新樂

大國有一太子雖歳長身量纔其身長ニ尺也、生年八十一之時作之故名小老子、此樂有二説、

一者拍子十四 四ヽヽ常説 加一拍子、二者拍子八 八ヽヽ加 三ト拍子 是ハ秘説ニテ候 宮家説狛 氏嫡同之

老君子 拍子十六、又拍子十八、又拍子八　新樂

此曲大唐ニハ男子誕生之時奏此曲、我朝本院ノ六十御賀日退出音聲用之 但禪正入道内々 被語畢、此有禁 忌云々 而愚意ニ存處者即大國ニ男子誕生之時用此樂云々、何此朝ニシテ可有禁忌哉、此樂 々 有三説、一者四ヽヽ加一拍子、二者十八拍子説 二丁五火ユ五丁丁五丁丁是末 吹加也、世人不知可秘之　三者忠拍子説 手吹 替八 ヽヽ加三 ト拍子 是大旨曳物説也

王昭君 拍子十　又八　老君子ノ前可書

明君漢元帝造之、本朝絶畢、而南宮從尺八吹傳御云々、又云、我朝醍醐天皇作改御云々、

延喜廿年御作之後絃家有之管家絶了、中院大（ハ隔ナシ〔イ〕ニヨル）臣之時遷管云々

或説云 明君漢曲也、元帝時匈奴 單于入朝以侍詔王嬙配之　此樂ノ因緣ハ世ニ普人知之、王昭君古吏也、仍畧之、但シ少

〔案〕此樂ニ 記漢元帝時ニ夷狄ハ力ラ強シテ中國ハ力ラ弱シ、呼韓邪單于ガ來朝シテ時ニ漢ノ壻ニナ

ハ説々有之、一者拍子十四カコ早物一拍子打之院禪供奉小部正淸之説同二者拍子八古樂八カコ加三度拍子如万歳樂後吹一説円賢得業大神惟季之説同三者豐原時元ノ説正キ丘拍子樂ト云

ラント願タレバ宮女三千人ノ中、画ノアシキヲ画ニカイテマイラセヨト勅セラレテ、画カキノ毛延壽ト云シモノガ物ヲ宮女ノ方ヨリ多取テ、ワロキヲミヨク美人ニ画ク、明妃ハモトヨリ美人ナレバ、物ヲ不出、ヨテミメヲワルク画クホドニ單于ニトラセラル。琵琶ヲ馬上ニテヒクカ故也。又單于ノ方ニテ死テ埋テアル塚ノ上、草バカリガ青シ、單于ハエビス北方ナレバ寒〆雪多ケレバ草皆枯テ青ナシ、昭君ハ中國ノモノニテ其念中國ヲ不忘ホトニ草カレズシテ青シ、皓然詩曰、黄金不買漢家貌青塚空埋秦地魂トアリ、秦地トハ中國ヲ云、昭君ヲ題ニテ京極黄門定家卿御哥ニ

うつすこもくもりあらしさたのみこし鏡の影のまづつらき哉

このうつりにしるし候事は憚恐侍こも青塚ト云ことをさのみ人の不被詠古事間予前内府家よませられ侍無題の百首に昭君を

雪はなをむなしくうつむつかのまもかれぬ草葉の色ぞ残れる

御合點のみならず御感の御詞被法付て忝過分至可仰之

胡角一聲霜後夢　漢宮萬里月前膓

昭君若贈黄金賂　定是終身奉帝王
數行暗涙孤雲外　一點愁眉落月邊
　朗詠之中にもこれ面白詩にて侍歟
王昭君前
感恩多　拍子十六　新樂 太神笛無之
　會要曰、宰相季德祐所作也、古老云祝所新所ニ奏此曲、諸願成就云々
應和元年潤三月十一日藤花宴ニ退出音聲奏此曲、早八々加三ト拍子常ハ四々々加一拍子也、
此樂ハ無惟季之流而樂カラノ面白侍之時ニ尾張則成ニ令相傳也、仍日錄ニ入之、ウチ
　マカセテハ人不知之
林歌　渡右樂　拍子十一　管絃時自二反頭加三度拍子
　拾鉦皷　委ハ彼所ヲ可見
別裝束 紫袍付金鼠 此曲ヲ或譜云林鐘調ノ曲トシルセリ、サモアリヌベシ、狛笛ノ平調ニ吹
テ横笛下無調ニテ侍ナリ、下無調ヲバリンソウテウト由ナリ、此舞ヲ出サント思時先
吹亂聲舞出ヌレバ亂聲ヲトヾメテ爾取 律音 次常曲ヲ吹也、舞人向西拾足之時加三度拍子、

舞終ヌレバ樂止畢又重吹此曲入ナリ即如拍子出入大旨如左舞也　或記云、右樂ハ皆一拍子ニ上也、而上唐拍子之樂 謂三睽(不詳)六〇数訓抄睽トス)拍子也 有二、所謂林哥酣醉樂急是也、破者上狛拍子也

此樂ニ返吹ヤウアマタノ說侍ベシ、十二拍子ニ反說、十一拍子ニ反說、コレラハ皆引物ニ付テ横笛ニテ吹時ニモチヰルベシト申タレドモ狛笛反處ノ秘說ト申タレバ狛笛ニモ時ニマセノヽ吹ベキニヤ、當時伶人ノ中ニモ是テイニ吹候メリ、此曲西寺ノ老鼠ト云叓アリ、老鼠トハ呂催馬樂也

又云、此樂ノ調琴ノ下ニ可注之ナレトモ書之馬鳴菩薩ノ彈給箏也、頼吒和羅伎ト云此曲ヲ聞人皆以發心出家入道ス、仍国王件箏ヲ破ト云々 頼吒トハ梵語也、琴タル也トイヘリ、箏ノ名トハ一定難叓也　彼馬鳴ハ天竺ノ人三論宗ノ祖師也頼吒和羅伎ノ聲ニ唱テ云ク

私此叓琴ノ下ニ可書ナレモ林哥ノ下ニ載之可秘也

有爲緒法ハ　如幻如化　三界獄縛　無一可樂

王位高顯シテ　勢力自在ナレトモ　無常既至ヌレハ　誰カ得レ存スル者

如シ空中ノ雲ノ　須臾散滅スルカ　是身虚偽スルコト　猶シ如シ芭蕉ノ
爲怨爲賊　不可親近　如毒蛇箇ノ（箇イ）　誰當愛樂
此故諸佛　常ニ奇シ此身ナ（此中ニ具演無常苦空閙者ノ悟道ヲ）

困 或云、林者觀有爲諸法入實相禪林ニ故林ト云歌者獄生死無常轉眞如妙歌故可ト云

此聲歌ハ南都興福寺玄高淨觀坊之說也、賴尊注シキ山筆作也又云、此前詞林哥ノ詞也、此叓當家ニ秘一ナレトモ子孫ノ者後世ヲ心ニカケテ人ヲモス、メ、我モ來世ニハ佛ニ可成ト思ベシ、幸哉佛菩薩ノ莊嚴ニ被用叓ヲ家業トシテ一生ノ間音律ニ心テカケテ如形稽古嗜ス身トシテ只イタヅラニ佛法ヲウカワサルコト口惜次第也、高モ賤モ無常ノ道ニハ偽ナク所ヲ、カヌ習也、何曰何時カ余所ニ思シサカイニヲモムカント常ニナゲクベシ

止觀七云、無常ノ殺鬼ハ不擇豪賢ヲ危ク脆不堅カラ難可恃怙云何安然規望百歲四方ニ馳セ求テ貯積ミ聚メ斂ム々々トモ未タ足ラ溘然ノ長ク往所有ノ產貨徒ニ爲他有ト冥々ノ獨リ逝ク誰カ訪ハシ是非ニ若シ覺无常過於暴水猛風掣電ヨリ山海空市ニノ无ト逃避ル處、如是觀シ已心大ニ怖畏ノ眠ハ不ハ安ムセ

席ニ食ハ甘哺(アマシホウ)、如レ救フ頭燃、白狗烏兎日夜走競以求ニ出要一矣　大集經偈云妻子珍寶及王位、臨命終時不隨者、唯戒及施不放逸、今世後世爲伴侶ト云々

古今に　紀貫之

あすしらぬ我身と思へとくれぬまのけふは人こそかなしかりけれ

定家卿

世の中は市のかりやのたゝしはし殘人なき夕暮の空

順德院御製

きくたひにあはれとはかりいひすてゝいく世の人の夢をみるらん

慈鎭和尚

みな人のしりかほにしてしらぬ哉かならすしぬるならひ有とは

この類しるすにいとまあらず、たゞ末代は邪法のみ充滿して正法にあふ人まれなり、いかにも善知識をゑらひて諸佛はいかなる法を持て佛に成給ぞ、今この比の衆生はいつれの法をもつて可成佛と釋尊は定をかれたるそと尋明て可信敬申を、先祖よりなにの宗にて侍、今更可改哉なといひて時にあはぬ(?)を〔不〕教〔不〕ノ〔不〕世ヲ〔思〕ヲを信てわれのみならす人

をも地獄におこさんは不便の事也

偈頌

是ハ石清水修正ニ觀音經ノ〔國ヲイニヨル〕世尊偈ヲ頌スル音振ニ樂ヲ作合テ吹也。平調物加拍子之時打三度拍子也　延八拍子也　十二反有之其時末三反加之

雙調

樂書要錄曰。夫木陽氣盛則而茂榮内有仁恩其位東方其時主春其聲主角是故仁君好生而惡奪見人飢寒則心爲之悲𠕋之勞苦心爲之哀與人同憂樂常於宮夾鐘用皷和樂於東郊

禮記月令曰。孟春之月日在營室昏ニ參中ス旦ニ尾中ス　孟長也日月之行一歳十二會聖王因其會而分之以爲大數焉觀斗所ニ建ス命ス其四時此云孟春者日月會於諏訾而斗建寅之辰也凡記昏明中星者爲人君〔イニヨリ補〕南面而聽天下視時候以授民事　其日甲乙　乙之言軋也日之行春東從青道發生万物月爲之佐時万物皆解孚甲自抽軋而出因以爲日ノ名焉、乙不爲月名者君統臣功也　其帝大皞　其神ハ勾芒　此倉精之君木官之臣自古以來著德立ツル功者也大皞宓戲氏勾芒少皞氏之子曰重爲木官之　其蟲ハ鱗　象物孚甲將解鱗龍蛇之屬　其音ハ角　謂樂器之聲也三分羽益一以生角、々數六十四、屬木者以其清濁中民象也、春氣和則角聲調樂記曰角亂則憂其民怨凡聲尊卑取象五行數多者濁數少者淸大ケレトモ不過宮細ナレトモ不過羽　律ハ

中ニ太族　律候氣之管以銅爲之中猶應也、孟春氣至則大蔟之律應々謂吹灰也大蔟者林鍾之所生三分益一律長八寸九律空圍九分周語曰大蔟所以金贊ニ陽出滯ー

春庭樂　新樂或古樂　中曲　舞出入調子

四帖拍子各十終帖加三度拍子一反時末二加拍子。當曲号春庭花有舞時着別裝束、其時第三反鳥掻、第四反加掻三度拍子秘說也。只拍子時第六大鞁六鞨鞁也　一名春庭花又春庭子又夏風樂

此曲延曆御時遣唐使舞生久禮眞藏或貞ハ不眞ト茂タリ則給內敎房奏御前初大食調爲樂而承和御時有勅改成双調了仍春節會參音聲用之古樂懸ニ鼓故也　舞時者新樂一說古樂　又云此樂從五位下和爾部大田麿所作云其時拍子九謂之夏風樂

此舞中古絕ヨシ天下ニ其聞アリ、仍堀川院御時召光季有御尋處習傳此說之由申上、仍於御前有御覽、舞人光季、行高、光則、光時　其日相違アリ兩人於舞臺上ニ、右ヲカタヌキテ舞ケリ、入時ニ行高ハ如本袍着入了、光季等者カタヌキナカラ入畢、兩說御覽シテ頗有御感之後世人有舞之由始知之、

古記云　此舞裝束如古鳥蘇、冠着釵帶、舞姿如地久云々年號月日ナシトイヘトモ家々譜ニシルシヲク所也

舞人出（吹品玄）　入調（吹入時）

柳花苑　新樂　中曲　無舞拍子廿四、一反時末六加三度拍子早忠拍子物也

本者柳花怨云（而天暦内宴之日有儀定被改怨字苑字定畢云々）

昔ハ此曲ニ舞アリケレトモ絶テ久ナリテ侍トモ舞ノ有ケル時ノ様ハシルベキ亊ニテ侍バシルシ侍也。桓武天皇御時遣唐使（舞生久禮眞茂）所傳渡也。其時者一二三帖遅（ヲソク）吹　各無間拍子三切舞終後音取（笙笛許）急ニ吹（加同拍子、）次欲五帖之時暫（シハラク）有其間吹五帖（一切遅吹）次音取次詠（如前）次六七帖ヲ急ニ吹（則加拍子）本是者（大食調曲也。）而承和御時改テ被渡双調（早ハ拍子〔イアリ〕物也）彈物ニハ無樂拍子忠拍子計也。惟季之説ニハトモニ侍ナリ（時元ノ説ニハ樂拍子延ハ拍子吹云々）

堀河院ノ御時マデハトモニ侍ケルヲ天皇忠拍子ヲアヒセサセ給ケルニヤカテ樂拍子ヲ人ナラワズシテ知タル人スクナク侍ナリ。忠拍子ハヤスク候樂ノ拍子ハ所セク侍ナリ。加拍子時（打三ト拍子）惟季ノ秘説云々（第十三十四拍子間可吹六幅皷云々　出雲已講明暹物語同當家ニ以此説爲秘亊也）此樂ハ正説ヲハ世人委クシラズ侍ナリ可秘トナリ

渡物曲

鳥破急　　春鶯囀颯踏云序入破云破　　胡飲酒破

嘉殿破急　　武德樂急　　賀殿通用之

已上七曲御遊時斷所被渡置双調也、仍書續之、具見本調子。此樂目錄古中御門右大臣宗忠之家目錄也加地久急八曲注セリ

口傳云

吹渡物時者不息入徵音ニシナ〳〵ト手スクナニ可吹之是忠政朝臣并惟季之說也知足院入道殿下者双調渡物ニハ息ヲ入テソアソハシケル。私云徵音モ又息ヲ入テモ皆コノムベキニアラス大方定タル物也

鳥破　拍子八　打物口傳　如本調子

此樂ハ忠拍子吹也有喚頭ウチマカセテノ人如本調子ノ喚頭アリトハシラヌナリ。只ロヘカヘリ〳〵吹說モアレドモ其ハ習ナク吹說ナリ。宗忠大臣家ノ御說ニハ吹出モ六穴計ヲアソバシケル、ソレモメヅラシク候、知テ持ベシ如此狛ノ眞葛筆ニアリ　御遊之時者無打物尺拍子又

打物有所ニテ可加拍子時者古樂揚拍急拍子八子打之
昔ハ忠拍子ニ吹ケレ𪜈今ハ樂拍子ニ吹、コレニモ喚頭アルナリ、サレトモ万歳樂吹様ニウ
チカヘ〱可吹也。加拍子時三度拍子

古記云

堀河院御時於御前有御遊、双調云々、右大臣宗忠鳥破急渡テ聲哥被出仕、件鳥破渡物
時者、普通ハ者兩反吹時者初之吹出者從エ穴吹出、次度吹出ハ從六穴吹出也如喚頭也是
常事也、然而件宗忠從六穴吹出定聲哥被出仕其時堀川左大臣俊房歟被問云、被出仕如
何被問、宗忠答申云、是從本鳥破ノ双調ニ渡ス時ハ只毎度從六穴可吹出也、是宗忠家所習
傳也被申云々、其時左大臣年來度々承〻毎度ニ從六穴吹出躰ニ聲哥之聞給者所尋申也、
尤有興事也被申云々、

又云久安六年七月八日夜宗能大納言御物語所承傳也但宗輔大納言者御遊時毎ニ從上穴被吹
出、若此說未被傳歟、同流相違如何
仁平二年三月一院御賀御遊笛ヲ侍從大納言成通〔底道冈ニヨル〕卿被吹時自六穴被吹出吹

之云々
此於破急之喚頭者尤面白說也（當時者不秘之）
嘉殿破　拍子十
古目錄ニハ入ラレ侍ネドモ近來曳物ニ常ニアリゲニ侍也、コレモ忠拍子ニ吹ベシ。加拍子時三度拍子　私云當時ハ常ニ管ニモ用之
急　拍子二十
是モ忠拍子ノ說候ヘドモ近來御前之御遊ニモ樂拍子ヲ用ラレ侍也　加一拍子
春鶯囀颯踏　拍子十六　謂（イワユル）中序（チウジヨ）也
是樂拍子忠拍子トモニ曳物ニ用本調子ニハ拍子不加侍ネドモ或講躰ノ事ニ可加拍子、三度拍子ニ可上也（當家ニハ本調子ニ加ヲ秘トス忠拍子同秘之）
同入破　拍子十六　謂破也
是モ樂拍子忠拍子共ニ候ナリ加拍子叓六羯鞁ノ物ニハナキコトナレドモ古老ノ記云講談等ニ加之如林哥上三拍子也

其上堀川院ノ御時ニ六鞨鞁ノ物ニ拍子上タル叓ヤアルト諸道ヲ御尋アリシニ狛光季奏云中古無双ノ管絃者侍リ六字名号ニ作合テ謂六拍子也、其説加三度拍子此説ハ當家不用幸廻忽ノ反口六鞨鞁ツキ拍子ト云六カコナリ、即加拍子時三度拍子也、此説ヲ勝タリト有口傳叓也

陵王破　拍子十六

是モ舞ノ時ヨリモユルノ〵ト吹ベシ忠拍子侍ドモ今世ニハ常ニ不用、加拍子樣ハ奈良樣ヲ用ベシト申タリ、サモ侍ナム

北庭樂　拍子十四

コレハ樂拍子ニ吹ベシ加拍子打三拍子

胡飲酒破　序侍トモ常ニ不用序ハ七拍子、破ハ十四

是モ忠拍子アリ、サレドモ呂哥田中井戸ニ合タルユヘニ樂拍子ヲ用タルナメリ。但哥ニ合時ハ少除所ノアル也加拍子一拍子

酒胡子　拍子十四

是モ樂拍子ニ吹也、加拍子時打一拍子

武德樂急　拍子十二

此曲本調子ニテ吹ニハ少々吹替タルナリ、加拍子樣モ三拍子ト申、弥ク侍、忠拍子ニモ吹ドモ當時不用之

新羅陵王急　拍子十二

此曲ニモアマタノ說侍ドモ用十二拍子ノ說也、樂拍子ノ早吹物ナリ、加拍子時打一拍子也

廻坏樂　拍子八　但常不用之

此ハ忠拍子ニ吹ベシトアリ、曳物ニ有故ニ近代渡之加拍子時打三拍子

地久急　拍子十　渡右樂　早八拍子物

加一拍子　一說三ト拍子

一隨レテ風ニ强學二楊花ノ舞一ヲ　便チ向二檐間一ニ作二雨聲一ト

一春水船如二天上一坐ルカ　老年花ハ似二霧中看一ニ　杜甫

〔私〕此叓ハ右樂地久所ニ書之此所ニハ不可書之

一いつれの比の事にか大宮右大臣殿上人の時、南殿のさくらさかりなるころうへふしより
いまた裝束もあらためずして御階のもとにてひとり花をながめられけり。かすみわたれる
大内山の春曙のよにしらず心すみければ高欄によりかゝりて扇を拍子に打て櫻人の曲を數
反うたはれけるに多政方が陣直つとめて候けるが哥のこゑをきゝて花のもとにすゝみいで
ゝ地久破をつかうまつりたりけり、花田狩衣袴をぞきたりける。舞はてゝ入ける時櫻人を
あらためて蓑山をうたはれけるに政方又立歸て同急をまひける、いみじくやさしかりける
事也

一博雅卿は上古にすぐれたる管絃者也けり、むまれ侍りける時天に音樂のこゑきこえけり、
その比東山に聖心上人といふ人ありけり、天をきゝ微妙の音樂あり、笛二笙二等琵琶各一
鞁一きこえけり、世間の樂にも似ず不可思儀に目出かりければ上人あやしみて庵室を出て
樂のこゑに付て行ければ博雅のむまるゝ所にいたりにけり。むまれおはりて樂のこゑはと
ゞまりぬ。上人他人にかたる事なし、數日をへて又彼所へむかひてその生兒の母に此瑞想
を語となむ彼卿は子息二人ありけり、一人は信義笛の上手也、一人は信明琵琶の上手也け

りト也、信義をば双調の君こぞ号ける。其故は式部卿宮、時の管絃者伶人等を卒て河湯にあそび給けるに、明月の夜曉にのぞみて河霧ふかきうちに双調のしらべを吹て過船あり、その舟やう〳〵來たりちかづくをきゝて誠に神妙なりけり。我朝に比類なき笛なり、誰人ならむこ人々あやしう思ひあへるに、船は霧にこめられてみえず、うちかひのおこばかりきこえてすでに舟こ〳〵行ちがふ時親王たれにかこごひ給ければ信義こ名のりたりけるに宮感情にたへず双調の君なりけりこのたまはせける。それより天下皆双調の君こ号けるこぞ

困ワカムラサキ
一やよひのつもこりなればば京の花ざかりはみなすぎにけり、山のさくらはまださかりにていりもておはするまゝに霞のたゝずまひもおかしう見ゆればかゝる有さまもならひ給はず所せき御身にてめづらしうおぼされけり。心ちいさなやましきに、雨すこしうちそゝぎ山かぜひやゝかに吹たるに瀧のよごみもまさりてをこたかくきこゆ

同
一絃管變テ成ニ山鳥哢ロウトー　綺羅留テ作ニ野花開ヲ一

一あけゆく空はいこたかうかすみて山の鳥ごもそこはかこなくさえづりあひたり、名もし

らぬ草木のはなども色々にちりまじり、にしきをしけるごみゆるに、鹿のたゝずみありくもめづらしく見たまふ

いみじき花のかげにしばしもやすらはずたちかへり侍らむはあかぬわざかなとのたまふ。いはかくれの苔のうへになみゐてかはらけまいる。おちくるみつのさまなどなへあるたきのもとなり。頭中將ふところなりけるふえとりいでゝふきすましたり。辨の君あふぎはかなううちならして、とよらの寺のにしなるやとうたふ、人よりはとなるきみなるを、源氏の君いといたううちなやみていはによりゐたまへる、たぐひなくゆゝしき御ありさまにぞなにとにもめつるましかりける、なに事をかはきこえつくし給はむ、くらふの山にやどりとらまほしけれとあやにくなるみじかよにてあさましうなか〳〵なり

見てもまた逢夜まれなる夢のうちにやがてまぎるゝ我身ともがな。むせかへり給さまもさすがにいみじければ

世がたりに人やつたゑんたぐひなくうき身をさめぬゆめになしても。おほしみだれたるさまもとはりとかたじけなし

一雪後園林纔半樹　水邊籬落忽横枝　林和清
疎影横斜水清淺　暗香浮動月黄昏　同
戀こいふ事はむかしも今もわりなきみちなれはしもこしておよはぬ雲のうへにも思ひを
かけ、いやしき葎の戸ほそにも心のかよふ事あはれふかき事なるべし。むかし芹をつみ
し古事をわかなによめる哥
玉すだれ風ふきあぐるひまもがな其まゝにてもわかな摘べく
こ侍るもそのゆへあり
中御門の内大臣宗能公息宗家大納言こて神樂催馬樂うたひてやさしく神さひたる人お
はしき。北方後白河の法皇の女房右衛門佐こ申ける、むねつねの中將うみなこして後
かれ〳〵になりて遠さかり給けるに
逢とのたえは命も絕なむこ思ひしかこもあられける身を
こよみてやれりけれご返事はなくて車をつかはしてむかへこりて年比になるもはかな
し又德大寺のきみのおこゝうちまかせてはいひいでがたかりける女房のもこへ師子の
圉于時大納言實家ト申

かたをつくれりける茶碗のまくらをたてまつるこてうすやうの中をやりてこの哥をかきて入られたりける

いひつゝもなれたる君に床なれにかはかぬ夜半の枕なりこも

女房此まくらをたゝにはあらしこてこかくしてその哥をもこめいだされたりけるいみしく色ふかし、これら哥を使ひこして心のうちをあらはせる類也

團此吏千載集ニ入後ニ書入侍也

返事　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　よみ人しらす

なけきつゝかはさぬ夜半のつもるには枕もうこくならむものかは

惣而樂道の家にうまれて朝夕の振舞をよく心にかけて心躰いやしからず詞つき以下をたしなむべし、非常なれごも道のかたはらには時々心にかけてまなふべき事は詩哥也三の遊これなり。先祖も哥道をばこれをゆるす

南無妙法蓮華經

正四位下前筑後守豐䎃統秋（花押）

體源抄　二本（上）

或書云。柳花苑　有詠只拍子大曲吹秘說也

長秋卿笛譜云、七反三帖後詠次笙調子端四帖早連吹、後又詠五帖打三度拍子早連吹六七帖、一說一二帖序吹三帖早吹次詠後聊笙調子ノ端（○端カ）ヲ吹、又四帖早吹次有詠五帖早吹打三度拍子、六帖遲吹七帖早吹或此帖打三度拍子

南宮笛譜云、新撰龍吟同之

一二帖遲吹三帖急吹次有詠四帖急吹五帖遲吹六帖急吹次有詠七帖遲吹急ィ則加三度拍子又云樂拍子アリ惟季秘說云只拍子ハカコノ時第十三十四ノ拍子六カコノ叓在前仍畧之

貞保親王譜云件ノ舞延曆ノ遺唐ノ時舞。生久禮貞（不審）茂傳フル所ノ舞ナリ即內教坊ニ賜テ御前ニテ奏之、大食調曲ヲ双調ニ渡ス忠房朝臣改之云云。或云柳花苑ハ葬送ノタメニ作タリケル樂ナレトモイキカヘリケレバ此樂カヘリテ祝所ニモ用大國ニハ葬送ニハ必新ク樂ヲ造テ奏之此樂ノ音ハカナシミノ音ニハアラズト云棺ヲ開テミタリケレバ蘓（ヨミカヘリ）テ

アリケリトイヘリ。詠曰

後園桃李（荒イ）正芳菲　芳菲正是妾（〇一本妾失）（〇妾正カ）（委イ）愁時　昨夜（〇ヨ）来（〇不来ホ）（〇引イ）新州昭陽殿　更勿非情形ニ畫眉ー

玉（王イ）（〇七）關春色晩（〇晩カ）　金河路幾千　琴悲桂條上　竹怨柳花前

抑此曲蘇青仙人陶門柳薗詠柳花之時奏此樂ヲ蘇青公一子青龍仙作之大國樂也

或柳花塩樂

此曲ハ初メ（〇臨ハ〇ニヨル）ヨリ緩々ト吹テ漸ク早ク吹成テ終ハ急ニ吹ナリ又云此曲ハ女舞タリ故我朝内教坊ニ奏云云又云此曲樂拍子大曲吹ヲモテ正説トスル歟ヲセカコ也　故者其詞ヲ案スルニ皆吹結ハル、ナリヲセ鞨鞁ノ樂ハ必其詞ヲ吹結ナリ

笛吹
宗輔御説云、初度ノ吹出ハ六々ト二延吹ヘキ也。樂粧（スカタ）ニテアレハナリ、次ニ反付度ハ終ヲ延テ首ヲバ一延ニテ二延フクベカラザル也。二反吹テ次ニ移ニ又以一延也此曲人ミナ忠拍子ノ樂ト云也但古樂多ハ忠拍子ナリトイヘトモ同又樂拍子アリ新樂ハ樂拍子ヲモテ本躰トスカコヲ用ルユヘナリ此曲已ニ新樂ナリ而ニ何ソ忠拍子タルヤ　予古譜ヲ案ズルニ一帖（延吹）二帖（迅吹）云々、　蘇合ノ作結ヲモテ思ニ只拍子樂拍子倶ニ用之歟、其故ハ

蘇合三帖迅吹四帖延吹云々相傳云、三帖樂拍子ナリ、四帖忠拍子初十拍子忠拍子ニ吹ナリ、
コレヲモテコレヲイフニ此曲ノ延吹ハ只拍子ニアタル迅吹ハ樂拍子ニアタルナリ
或內典云。葬禮作樂禮成奏之　耆婆(ママ)大臣聞樂聲云ク樂聲初ハ悲聲タリ後ニ改テ歡聲タリ其人定蘇生歟早可返葬車者仍棺ヲ披テ見之果以蘇生云云
私云、如此說ハ明白ナレトモ親所ニテハ無用ナリ、若蘇生シタル人ノ室ニテハ其謂有歟能々可有思慮者也
和風樂　又名弄春樂舞絕畢　但光時記云　尾張濱主國王ノ御前ニシテ和風樂ヲ舞哥ヲ詠スルコトアリ庭ニ錦ヲシキ身ニ五色ノ玉ヲカザリテ舞之庭ニ玉コボレ落ト云々又云、深草ノ天皇ハ御心聰明ニヲハシマシテ文談クラキ所ナクヲハシマス、管絃ノ道ヲ好ミ給テ常ニ御遊ヲモテ業トス、又弓射方殊ニ勝レ給ヘリ、又醫術ヲ好ミ給フ、又佛法ヲ崇メテ僧ヲ歸依シテ年始ニハ一年懺悔ニ五佛名行給フ此叓始レリ而此天皇ノ御時ニヅ內外ノ道ヲ習傳シメム爲ニ人ヲ撰テ唐ヘ遣叓度々也衣服夏冬モワカザリケルヲ此御時夏冬ノ衣服ヲ リ出サセ給ケル、其中ニ管絃歌舞殊ニ好ミ給ケル、其道ノ人ヲバ懃ニ思食ケ

ル。爰ニ唐ノ舞人トシテ外從五位下尾張濱主ト云モノアリケリ、年來其道ニ付テ召仕ケル間年既ニ百十五歳ニ至、而間濱主内ニ參テ帝王ノ御前ニテ和風長壽樂トイフ舞ヲ舞フ、年老テ起居スルニタヘズ、シカレトモ手ヲカナデ足ヲ踏ニ若人ノゴトシ、此ヲ見ルニ帝王ヨリ始メ奉リテ皆感ジホメ申コトカギリナシ、濱主マイ畢テ和哥ヲ讀テ奏ス、春鶯囀ノ所ニアル哥ナリ、サテハ和風樂トハ春鶯囀異名歟仍注之

或記云。此曲春ノ曼陀羅會ノタメニ延曆寺僧淨藏ガ所作ナリ、此㕝不審也、淨藏ハ寛平三年辛亥歳ニ生セリ、時代多ヘダヽレリ、僻㕝ナリト覺タリ。濱主和風長壽樂ヲバ作レルナリ。舞師船木望直眞イ舞ヲ作ル換頭アリ秋ハ送秋樂ヲ奏ニ、此曲第一ノ秘說ナリ、送秋樂ハ淨藏所作也、天台山ノ舎利會ニ春奏之

　私云。彼舎利會ハ淸和天皇ノ御宇貞觀元年ニ始行之

一博雅三位月あかゝりける夜なをしにて朱雀門のまへにてあそびてよもすがら笛をふかれけるに、おなじさまなる人來て笛をふきけり、たれならむと思ふ程にその笛のねこの世にたぐひなくめでたくきこへければ、あやしくて近よりてみれば、いまだ見ぬ人成けり。我

もものいはず、かれもいふ事なし。かくのごとく月夜などに行あひふく事よごろになりぬ。かの人の笛のねことにめでたかりければ、心みにかれと「書も本ニヨル」とりかへてふきけるに、世になき程のふゑなり。その後なを月のころはゆきあひてふきけれど本笛を返しとらむともいはざりければやがてながくかへてやみにけり。三位うせて後　御門この笛をめして時の笛吹共にふかせられければ、そのこゑふきあらはす人なかりけり。そのゝち淨藏といふめでたき笛ふきありけり、めしてふかせられけるに、三位におとらざりければ、御門かむじ給て、この笛のぬし朱雀門の邊にてえたりけるとこそきけ、淨藏かの所にゆきてふけと仰られければ、月の夜かしこにゆきてこのふゑを吹ければ樓門の上にたかく大なるこゑにてなを一物哉とほめけるを、かくとそうしければ、はじめて鬼の笛としろしめしてけり。葉二となづけて天下第一の笛なり、その後傳て御堂入道殿の御物に成てけるを、宇治殿平等院をつくらせ給けるとき御經藏におさめられにけり。このふゑは葉二あり、一はすかく、一はあをし、あさとこに露をくといひつたへたれば、京極殿御らむじける時は赤葉おちて露をかざりけりと富家入道殿かたらせ給けるとぞ

一白樂天有こしの春煙霞のけふにひかれてあくがれいでたりけるに、花おもしろき家のありけるに、馬にのりながら入たりけるを、あるじの將軍こがめければ

遙見人家花便入　不論貴賤與親疎

こ詠じけるに重て又いふ事なかりけるものをかんずる風情この事に侍り

黄鐘調　或說黄風調云

樂書要錄曰夫火精陽炎於上按(〇畝ノ誤カ)然有尊卑之別貴賤之序、其位南方其時夏、聲中徵、故禮君在上制尊卑定貴賤別親疎殊內外、使家々有禮儀、樂當宮於蕤賓用絃和樂於南郊

禮記月令曰、孟夏月日(一本无)在畢昏翼中日婺女中(婺困) 孟夏者日月會於實沈而斗內之言炳也日之行夏南建巳之辰(建巳之辰困) 其日丙丁(其日丙丁住困) 從赤道長育萬物、月爲之佐時萬物皆炳然著見、而强大又因以爲日名焉、易曰齊乎巽相見乎離 其帝炎帝其神祝融 此者精之君火官之臣自古以來著德立功者也炎帝大庭氏也祝顓頊氏之子曰黎爲火官 其蟲羽 象物從風鼓(披困)葉飛鳥之屬 其音徵 三分宮去一以生徵、々五十四、火者以其徵淸吏之象也、和則徵聲調樂記曰徵亂則哀其事勤 律中中呂 孟夏

ノ氣至則中呂之律應、中呂者無射之所生三分益一、律之長ヶ六寸萬九千六百八十三分寸之万二千九百七十四、周語曰中呂宣中氣

喜春樂　中曲　古樂

序二帖拍子各十二　破七帖拍子各（四ニヨリ補フ）十四。又弄殿壽（喜）春樂壽心樂向ヒニ立舞

此曲作者或書云陳書興公作是大國人也（同異（宋））則漢土之立春ニ春宮太管ニ奏此曲云々而古老傳云、此曲ハ大安寺住僧安操法師作之舞樂間不明分可尋之

古記云。淸和天皇御時行教師八幡大菩薩ヲヲヒタテマツリテ男山石淸水宮へ奉遷間依夢想ノツケニ壽心樂ノ曲常ニハ序一帖破一二帖舞也。樂ハ以二反爲一帖拍子七故也　三帖肩袒切是ニ秘說アリ、ヒモヲトキテ肩ヲヌク間ニ有二說居テ肩袒ハ御前說立ナカラ肩袒ハ常說也　四帖大輪切十拍子　一說云從此帖加古樂揚拍子云々五帖渡切六拍子間加拍子爲本說　六帖渡返六拍子間　七帖加拍子不用　舞終居右膝突略定樣

云序一反破三帖舞第一帖四帖ヒモヲトキテ肩袒ヤガテ大輪ヲ作之五帖渡五拍子間則渡返五拍子間即加拍子舞終居猶畧時此渡切ヲハ不舞ナリ

私云。右ノ說々ハ舞家祕記ニテ注之打物セン時舞之故實可存謂也

舞出時用調子打羯鼓古記搔ニ鹿婁ニ打大鞁事如採桑老出打之破終帖加三度拍子入時吹重破即加拍子舞人ノ末ヨリ首ニ至マテ乙(カナテ)舞入也如右舞

春宮御元服ニ必有此曲序六拍子　破一切舞也、第八拍子ニカタヌキテ第九拍子ヨリ加拍子此舞人樂屋之內ヨリヒホヲサシテ序二帖破二帖舞テ第三切ニ始テカタヌク也一拍子間ナリ抑此破拍子ヲ加樣從第五帖加一拍子云々舊說云、常樂四返舞之此時第三反ノ第二拍子以後如陵王破加拍子舞人カタヌキテ大輪ヲ作時相當ナリ入時重吹當曲其時第二拍子已後加拍子管絃二反時第二反ノ初拍子以後加拍子舞人時猶初大鼓付之有只拍子如甘州只拍子半拍子ニ吹出也

桃李花　又赤白　中曲　新樂

有六帖拍子各八本是妓女舞也

是唐家ノ物歟貞保親王譜云伊勢ノ興房申云、モロコシ桃花盛ノ酒盛三月三日曲水宴奏此曲

云々序破ノ舞古絶了仍以央宮樂舞ヲ令通用之但四帖ノ舞ヲ六帖ニ分宛尤モ秘𦾔タリ舞家ニ口傳在之乎〔原乎イニヨル〕故則房ノ中サレシハ昔ノ桃李花ノ舞ノ手内前後走ル手アリケリ是ヲ三帖ニ舞ナリ人ノシラヌ様アリトゾ被申云々加拍子有又說六帖ヲ舞時ハ五帖從末四拍子三度拍子一帖之時不加拍子二帖之時末四拍子加之三帖舞時モ二帖末從四拍子加拍子三帖皆加之云々付舞故也此口傳者舞家ニ記之

此曲林鐘角赤白桃李〔原柳イニヨル〕花内教坊奏此曲依絶舞用央宮樂舞曲水宴奏此曲唐家之風俗每國三月三日奏此曲判〔〇刺ノ誤〕史司馬等放聲相和酣醉而還舞出入用調子

一、煙霞遠近應ニ同戶一　桃李淺深似ニ勸盃一

一、水成ニ巴字ニ初三日　源起ニ同年一後幾霜

一、礙レ石遲來心竊待　牽ニ流遄過手先遮

一、夜雨偸濕曾波之眼ニ新嬌　曉風緩吹不言之口先咲

清上樂 惟季相傳譜書上聖樂云々 童舞新樂

有四帖拍子卄

此曲ハ大戸清上最後ニ所作也自ニ感愛シテ以我名爲ニ樂名ト 或云欲還唐時作此曲上奏諸曲之中

殊善作有勅使以名其曲爲名云々

舞出入用調子、興福寺常樂會童舞奏之 近來僅五拍子許也末加拍子 大神氏舞人モテ爲舞師也

泛龍舟 拍子十八 童舞 新樂 〔○此注乙ノミニアリ〕明暹譜云、讃法華經樂博雅卿譜序 拍子十六 入破 拍子十八

此曲律書樂圖云隋煬帝所造也以當曲爲破 拍子十八 以散吟打毬樂爲急 拍子十二 十反可吹云云 今常樂會舞

之僅破急略五拍子許也 末加三度拍子 舞出入用黃鍾調々子、當曲者則水調曲ナリ尤モ雖可吹

昔多分童舞着甲又天冠

水調子依秘藏不吹之云々 其樣末落居 詠云

稽首無上諸善逝　妙法一乘無二曲　開示悟入佛知見

三乘三望法善士　供養香花及音聲　以此微妙殊勝舟

乘大牛車出三界　不入化城到寶所　願共衆生速成佛

私云、稽首トハ南無トモ歸命トモ云度我トモ云心也

近來此詠スルコトナケレトモ目出叉ニテ侍ハ法之則此詠ヲ吹之

私云如此事ヲ見テ彌ヨ後世ヲ可思隣更ニ末代ノ衆生他ノ法ヲ信コトアルベカラズ、法華經ニテ可成佛ト深ク可信、天台御尺ニ但信法性不信其諸ト侍ハモロ〳〵法ヲバ不信シテ法華經斗ヲ可信敬ト也（法性トハ法華題目ノコト也）

此樂名變表州ハ是泛龍舟ノ別讀也此古老ノ說云ハンヘウシュウヲ奏レハ南方ヨリ必ス、シキ風來テ暑コト失ス此曲漢土ニテハ有序二帖（拍子十六アリ）可尋之

散吟打毬樂　新樂　中曲　舞出入調子（拍子十二）

一反時末四加三度拍子以只拍子三十二相此時六反有之終帖加拍子（吟ハ今ト通用吟ヲ常用之）

卅二相樣

是ハ諸ノ修正修二月ノ行ニ佛ノ御相ヲホメタテマツル頌ヲ所々ニテソノ習替侍ナリ卅二相一反ニ散吟打毬樂三反合（是樂拍子終帖加三度拍子）叉樂六返ニ作合一說（用只拍子ニ）古樂楊拍子搔（カク）之末ニ鳥急渡吹テ如一廉端頭合（加三度拍子）此忠拍子之說之內ニ手ヲ作替テ調（廉詞汀ニヨル）合タル也。或記云、興福寺ノ東西ノ修二月ニハ泛龍舟ノ急ノ樣ヲ吹二所息次カハルナ

リ而一切ニ不合其頌ノ音ニ心得ヌコトナレ𪜈昔ヨリシナラハシタル𠔃ナレバ其樣ヲ吹侍
也八幡宮ノ別樣之樂拍子吹　妙音院ノ樣忠拍子共（〇井ノ誤）山移之（イ、イ菩提山本）

央宮樂　新樂　中曲　舞出入調子
有四帖拍子各十二
此曲イツレノ御時ニカ侍ケン春宮始テ立給ケルニ奉勅林眞倉作之不分明可尋　四三二帖ノ時皆終
帖加三度拍子　略定一返之時末二拍子加之出入調子口傳云此曲可吹高聲
舞家ニ云桃李花ノ舞絕タルニヨツテ此舞四十八拍子ヲ桃李花六帖四十八拍子同員タルニヨ
ツテワリ合也殊ニ可有習也ト云々又云口傳云舞人居タルガ立時加拍子者第十一拍子也　只拍子時終一拍子六鞨鞁也末二加之

感城樂　新樂　中曲　舞出入調子
有三帖拍子各十八、只拍子時第六大鞁六拍子也
此曲誰人ノ作タリト云𠔃不見可尋但シ童（トウ）親王對面之時此曲ヲ作習トイヘリシカラハ嵯峨ノイ
フ君子ノツクラセ給タルニヤ近來常ニ一二三帖舞中略終帖加拍子乃至一返、略定時末六拍
子加拍子近來八幡御放生會用一返之時末四拍子加之樂說

安城樂拍子十六　新樂　中曲　無舞

此曲中納言安世卿作之仍安世樂云又云唐多作安世　和漢ノ作者不詳尋ベシ。有忠拍子加三度拍子　一反ノ時末四加之

聖明樂拍子十六　新樂　中曲　無舞

此曲唐開元中大宗樂人馬順作之云々　本是大食調曲也。又云興福寺僧義操作之云トイヘリ。大食調ヨリ當調ヘ作歟又新作歟不詳可尋之、有忠拍子一反時末四加三度拍子

應天樂拍子二十　新樂　中曲　無舞

此舞尾張濱主作之、樂者大嘗會ニ大戸淸上作之云而或書云作桃李花時作ニ此樂云々又云此曲大平樂破ヲ渡吹云々、新樂御向時用此曲但シ舞絶畢　參音聲行道等ニ用之、有忠拍子加三度拍子一反ノ時末四或ハ八加之

重光樂拍子十六　新樂　中曲　無舞　水調曲

重光大臣作之云不分明可尋之　一反時末四加之有只拍子加三度拍子

河南浦拍子十六　新樂　中曲　有舞

此曲承和大嘗會尾張連濱主與作之進（底送イニヨル）之中傳タリ而或書云海濱人舞今此曲尤故アリ云々詠云

立此（東北皇困）星辰北天道　朱南日月賀會場

八嶋新器鎮万歳　白生无相屬大嘗　近來不用之（一本困）

抑此舞者興福寺常樂會第二日十六日法華會ハ忠筭（底イ弄イ、イニヨル）五師之時始テ爲ニ奉請尾張國熱田大明神被副行法會也其分經樂ノ次ニ一曲アリ中門ニ草褺居テ其祝（○祝ノ誤）ヲ置其上ニ敔ヲ置ク　其姿二様云々魚形虎形　于時役人面着進出テ此魚形ヲ取テ袖ク、ミ隨テ大鼓拍子舞先北方次東方次西方　則加三度拍子舞終テ魚置舞人居草褺尻懸此役人樂人中薦輩　魚作其時着テニ一舞咲面ニ物一人出謂之蓼摺　鷄婁ヲ懸レ頸以テニ大鼓ノ桴ヲ一是摺舞之寺役　此ノ間魚ノ尾并セホネヲ蓼摺得テ蓼ニヒタシテ心見由シテ骨ヲタテタルヨシヲシテムネヲウツ、　于時兩役人退入ヌレハ止樂了通憲之說云是更非舞㕝也祝（○柷ノ誤）敔謂之樂ノ終ヲ頭叩之鼓之表ニス多他調ニ云々是モ無左右㕝ナレトモ魚作舞躰此一㕝ニモカキラヌ㕝トミユ熱田明神御饗應ト申モマ、（イレ）敎訓抄

「コト」ニ作ル正カ」ニサル「モヤト覺え侍ル此事ヒラキカタシ
私云、此曲者釋迦如來御誕生ノ時御父王 師子頰王或云師子䫆王ト申 南天竺ノ國主也 一說散手之作ト也 鯉ヲ包丁ト云者ニ被切ニ十六刀也大鼓十六ニ合 有口傳之 鯉之切樣 三十三有之事 此內八嶋諧ト云有之詠ノ詞同之有故者歟

平蠻樂 拍子十八　新樂　中曲　無舞
管絃時自二反頭加三度拍子、一反時末九加之 〔○下圖ナシ(イ)アリ〕 當曲ハ武樂也文樂ニアラズ〔○以上〕
此曲本ハ平調ノ物ニテ有ケルテ何比又誰人ノ此調子渡シタリト云事不見
或云此曲平調哥終黃鐘調哥テ隨時吹之又云放生會古式有此樂者本有舞歟今無其跡

海青樂 拍子十　古樂　或新樂　中曲
管絃時自二反頭加三度拍子打鞨鼓
承和御時行幸神泉苑而樂人乘船奏樂此時ニ有勅云池ノ上三匝之間一匝之後於中嶋之程ニ作新樂可奏之者爰笛師 清上 篳篥師 尿麿 一匝ニ中作出曲奏南池院之新古不分明但始ハ船樂ニ作之タリケレバ古樂ニテゾ侍ケン又法用ノ時ハ常時新樂ニ用之加三度拍子

古老云〔辰麿作說ニハ加拍子古樂揺
拍子此說ハ不知人可秘之〕

拾翠樂　古樂　中曲　序破常無之急〔拍子十〕　水調曲

破ハ笛師淸上作之〔有忠拍子加
三度拍子〕急ハ監物頼吉作之四加之（○敎訓抄ニヨルニ「四カコ」ナリ）加一拍子

或管絃者云傾坏樂ノ急ヲ渡吹歟〔但不同拍子〕有時傳之古記云序可吹十二反以二反爲一帖并六帖無（○敎訓抄ニヨルニ「毎」ノ誤）反拍子七合拍子八十四破隨舞吹無定度數一反拍子十舞廻中則還入

承和大嘗會時豐樂殿ノ前ニ作テ海濱ヲ奏ス此曲ナ集メ砂石ヲ植ヘ樹木ヲ成シ山阜之形ナ敷キ漂布ナ散テ萍藻ヲ像ル海渚之體ヲ引キ船於其中上ニ（○敎訓抄ニヨルニ「中」ヲ正トス）似ニ擬飛帆之隨ヒ波載テ舞ノ童於其中ニ似ス海人之拾ヒ藻ヲ曲畢テ即撤ス復之又笛作淸上舞作尾張濱主

又云承和帝作之給催馬樂合序〔靑柳〕破〔伊勢海〕急〔竹川〕

私云箏篥ニ近年絕畢

西王樂　古樂　中曲　無舞　或新樂

序〔拍子七可二反〕

破〔拍子十〕　一反時末四加三度拍子只拍子常用之八拍子物初拍子付笙一說只拍子時古樂楊

加拍子有樂拍子說

蓮花樂　新樂　中曲　無舞 拍子十二　一反ノ時末四三度拍子加之又謂之赤白蓮花樂水調曲律樂ト也

此曲舞師尾張秋吉所作也興福寺ノ金堂蓮花會傳供此樂奏ス堀川院御時被尋諸家惟季流ノ外是ヲ不知由令奏聞畢

智足院ノ禪定殿下コトニ此樂ヲ目出カラセ給ケリ仍御忌日ニハ于今必此樂ヲシ侍ナリ、有只拍子 加三度拍子 一樣析懸敦掛樂〔〇續教訓抄折臂敦掛樂〕此樂ハ或云想夫憐ノ詞ヲ渡シタルカ目出也ト云々

或記云ク、興福寺東金堂蓮華會供花奏此樂有七言十二句偈僧唱此偈奏〔國今〕ニヨル。此樂云ミ又云、時元ハ當曲ヲ正清ニアヒテ荒序ニ替ト云々 但シ不審、桃李花五六帖ニ替タルヨシヲ注之、私云兩條當家ニ注タル物ナシ古ナレバ不注之歟。是程ナキコトヲサヘ注ニ不審也

或云。大安寺僧安操ガ所作ト云々興福寺僧義操作ト云々

鳥　急　拍子八

三十二相次必吹之故實ハ本調子ニ注之

或云、聖明樂異名勢明樂　又醉鄉日月云〔○孝云コレハ前曲ト別ナルナリ「或云」トカケルハ蓋誤寫ナラン〕

大常樂ト云　或又本胡樂ト云

有詠其詞云

由彼向陶門　眼晴〔○睛ノ誤〕皆與青　一帖

繁株春色好　泰階天下平　二帖

稽[一本秘令閑]琴皆賛士〔○續教訓抄コレ〕　武勇又[旂イ]文明[晴イ]　三帖

紅欄景氣烈　朱旆容輝明　四帖

賤膀千里響[音イ]　股肱〔○肱ノ誤ナラン〕四海聲　五帖

春調雨煩業　秋唱[昌イ]入從[佳イ]城　六帖

二漢退溟〔○鴻ノ誤〕德　綿々詠歌英　七帖

秘記云。大病身假〔不保〕時常可聞此音苦惱忽嶮[除イ閑][如本]性腹則[如本]〔不明〕了云々委旨可勘眞言書也

抑此曲太宗樂人馬順所作也辭卿日月云唐開元中太宗或太常樂人馬順作之明白也
私案　開元ハ玄宗皇帝ノ年號也、太宗ハ唐代第二代王貞觀廿年ノ在位也然ハ前開元中太宗ト云コトハ僻説ナリ。玄宗ハ太宗四代ノマコ也如此マヽアヽイカニモ勘テ可改也

通典ニ云ク隋ノ文帝開皇六年高昌天竺國名獻ス聖明樂曲ヲ帝令知音ノ者ヲ於ニ宿所ニ聽(メ)聞シ之歸而肆習ス

應天樂　此曲終句神妙優美者也　笙ニ又微妙ノ態アリ時秀日出ク吹ケルナリ。其詞ソサカケテカラヒシリヒカセテフキケルナリ。公里ニ傳ヘ侍ルトコロナリト云々　名應殿樂

保元三年正月廿二日內宴ノ日此曲ヲ舞、南宮譜云、此曲以舞人成文字云ミ此支可尋之　或云舞人文傳習ミ私案ニ文字ヲ成ハアヤマル歟、文ト書テアヤヲナストヨム後說可然歟　或云清上作テ吹於應天門鬼神感此曲故ニ號應天樂ト

安城樂　名房中樂　一名壽人
常樂會供花樂ニ用之同行道并中門樂ニ用、又云、此樂平調ニ渡テ越殿樂破ニスル也、
長秋卿笛譜以當曲　吹平調音ニ爲越殿樂破ト。或記云、舞出入用調子云ミ但近年舞絕畢、

愚案此樂ハ城ヲ安クノ樂ムトヨムベキ歟。付之云用ニ御祈禱ノ樂ニ

將門逆亂ノ時村上（春宮）聖代諸社御奉幣叓アリ。又當曲三反被報之被謝賀茂明神天皇朱雀御宇關白（貞信公）又此社始有行幸八幡同之

又堀川院ノ御時康和年中源義親謀叛ノ時准件例又被レ奏當曲（一本此曲也アリ）三反無程天下無爲云々此曲故依有子細也

通典ニ云ハク、周ニ有房中之樂歌フニ以后妃之德、秦始皇廿年房中ヲ改テ壽人ト云衣服五行ノ樂ニ同之、漢ニ房中祠樂アリ高帝ノ（一本姬アリ）唐山夫人ノ所作也 高帝姬ハ唐山ハ姓也 高祖ノ樂ハ楚ノ聲ナリ故ニ房中ノ樂ハ楚聲

孝惠ノ二年使下樂府ノ令夏侯寬ニ備ヘ其簫管ヲ上更レ名ヲ曰安世樂ト魏ノ文帝受レ禪ヲ改テ二安世樂ヲ爲ス正世樂ト後ニ改テ安世ヲ爲ス正始ト

漢書ニ云ク安世房中歌云、神來テ宴娛ニ、詩ニ云、三后在天、又云、神保遹歸注ニ云歸テ於天ニ也。蓋シ言神有來則宜ク迭迎フ明矣。以レ尸象レ神故儀禮有迎尸送尸又云林鐘羽用此曲

（海イ）淸靑樂　別名海山樂　海仙樂（南宮譜說同之）或海旋樂（〇一本又號淸和樂アリ）古ハ舞アリ、今ハ絶畢。又云、

此曲初拍子ハ鞨鼓六ニ宛ルナリ。而基政云ク不然如常ノ宛六ニハ越拍子也、今案之樂ハ以只拍子爲本躰、其只拍子如常是以稱之歟。古樂揆拍子此說尤可秘之、又物〔恐初〕拍子ニ用之、イワユル還城樂ノ如クナリ。又ハ拔頭ノ如ク打之賴義綿譜云打様如拔頭

抑此曲ハ博雅三位譜云此曲南池院ノ行幸ニ船樂ヲシテアソヒケル退出スルトキ始タル樂ヲ作奏シテ退出スベキ由宣下セラレタリ笛吹大戸清上コレヲ作テ加三度拍子或云淸和天皇ノ御宇ノ時御歳九歳船樂ニ用ト云々

私云、此御門ハ天安二年八月三日受禪御歳九才也

又云文武天皇御宇大寶元年從五位上家〔恐藤〕原塩〔塩は朝臣の二字を誤るか〕風文〔恐又〕作之於序者絶畢

私云。南池院ト申ハ四條ナハテノ北西宮殿ノ森ノ西四町ハカリナハテヨリ北ヘ一町余ノヲドニ嶋アリ、メグリハ池ナリ、但當時ハ東ノ方ニハ田ヲツクレリ西ノ方ハ猶池ニテ侍リ池南ニモ殿ノアト、ヲボシキ所アリ　ウルハシキ御所ニハ定池ノ北ニ南向ニコソハ侍リツラメ、ユ、シクヒロキ中嶋今ニミエ侍ルメリ當時ハ一向跡モ不見成ヲ

大内ノアト内野畠ニ始テ成ヲ見テ　爲家卿

いかにせん内野の芝生こしをへてあらぬつくりにせはくなる世を

あはれに面白被詠也。この比(次歟)ニ思ひ出侍る

正徹ノ哥ニ雲雀を

跡もなき夢のうち野ゝ夕ひばりさのみ雲井に何をこふらん

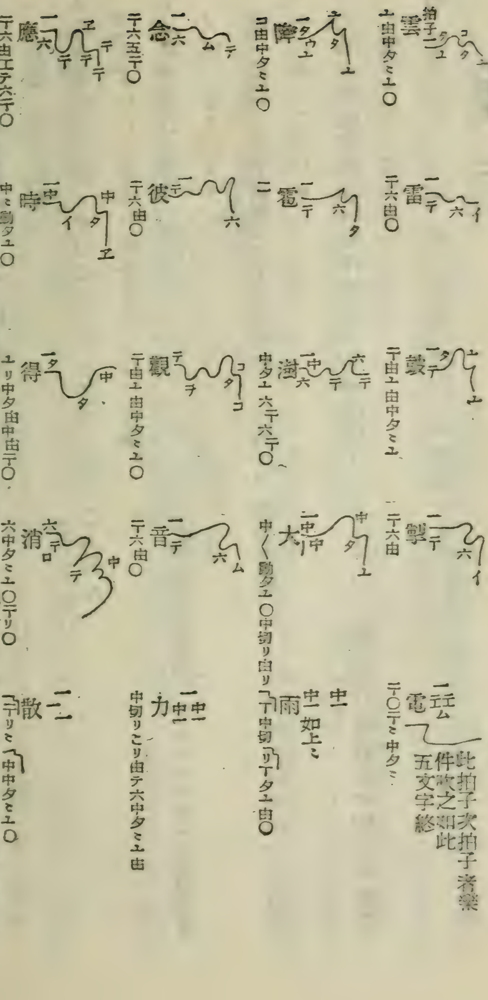
こよまれしも爲家の御哥をおもはれ侍歟

三十二相事或云〃水尾ノ御門御宇貞觀十一年二月三日興福寺別當輿（[不]ニヨリテ補）昭西金堂ノ修二月ヲ始メラル

後一條院ノ御宇萬壽二年東金堂修二月始之、西金堂始行ノトシヨリコノトシマテ百五十六年ニアタレリ

八幡宮別樣樂拍子ニ吹件修正ノ次ニ偈頌ト云コトアリ。觀音經ノ世尊偈ヲ頌スル音振ヲ樂作テ合テ吹也

偈頌　拍子四吹十二反　終三反加三度拍子不調所ニ可書ヲ此段別抄物ニ侍間後ニ注之



初五字樂許吹之降字ヨリ聲明ヲ付也樂十二反之間白雲雷皷掣電是故應頂禮乃至願以此功德皆共成佛道マデ誦之ヲナリ。世尊妙相具ヨリ雲雷ノ句上マデ〔匿アリ〔不ニヨル〕切音ニ誦メ誦シ止ハ即此樂ヲ吹出也云々

稽首八幡　此偈右樂合奏之吹三反第二加三度拍子双調物狛笛散花也（或云狛笛平調合吹也、黃鐘下无調也）

稽首八幡大菩薩　尓現神通度衆生
斷除十惡爲十善　覆護衆生能與樂
私云如此㕝ヲ見テアマヲク世ノ人又ハ子孫者サテハ觀音經ヲヨミテモ專當今衆生可成佛ト可思努〻アルベカラズ勿論三十三ニ身ヲ變テ利益セラレ侍コトハヨキナケレトモ前ニ如注火益ノ導師ニテマシ〳〵給ヘバ利物ノ義イカメシカルベシ其ハ像法千年間利益ナリ末法今ノ時ハ一人モ化道アルベカラズト佛ノ定マシマス上者如此㕝ニ信ヲナシテ正法時ニアヘル信ヲミダリニスベカラズ。南無妙法蓮華經ト唱テ私モ人モ佛ニ可成ト信ヲ可嗜一大㕝也
平蠻樂　或云。此樂平調ノ音終リ黃鍾調ノ音仍時ニ隨テ用之、或云元ハ黃鍾調曲也而雅三品ノ譜平調ニ入ト云々
抑此曲ハ平蠻國ノ所作也、大國ノ樂也。唐土ノ法元三日以餠與人之時ニ奏之、此樂又云南蠻戰ノ時於陣內ニ奏之。又云四夷不調時爲ニ社稷奏之。當曲ハ武樂也文樂ニアラズト云〻
長生樂　新樂　中曲　或云、古樂

序拍子六　三反可吹之ヲ　催馬樂青柳同音雅三品二反云〻

破拍子十　八拍子物可吹三反終帖加三度拍子。南竹譜ニ云、承和ノ御時清涼殿紅梅花賀ノ時此笛曲ヲ作、則帝王ノ御作、舞ハ則左大臣信朝臣所作ナリ、童男四十人麴塵ヲ着ス御前ニ舞但舞モ樂モ絕侍間目錄ニハ不入、又云、長秋卿笛譜云、以二反爲一帖催馬樂高砂同音有喚頭南宮譜尤之私云。絕タレ已子細如此

西王樂　古樂　中曲　序拍子七或六　南宮御說初拍子五已下ハ八拍子加三度拍子此破山城哥音振様也鷺山音也眞僞難決　長竹譜ニ云ク上件ノ花賀ノ時笛曲ヲ作。仁明天皇ノ御作也。序斗也葦垣ト同音ナリ。舞犬上是成ガ所作也。舞絕畢又云。承和聖主御製作以葦垣爲序以鷹山爲破云〻

弄殿樂　新樂　中曲又名玉殿樂又名大天樂

南宮譜御說也殿天字通用拍子十四延八拍子物　加三度拍子

提琴樂　新樂。呂(不只)拍子十二或十一　八拍子加三度拍子

皇帝〻〻三臺　新樂拍子十六延八拍子物

海青樂　異名清和樂　或云海青樂ト云々此曲ハ承和聖主ノ御作也

夏引樂　古　序　拍子廿三　催馬樂夏引音　破拍子十二延八拍子此曲笛承和帝王御作舞是

成作催馬樂青馬哥音也

承燕樂　古樂拍子十　有喚頭初拍子五以下ハ四反可吹此曲大戸清上作舞是成作之

天安樂拍子十　初拍子五已下八

催馬樂　序一帖拍子七

夏葉井拍子九、　初拍子五以下八五反吹ベシ

抑此曲承和帝主御作舞ハ犬上是成作之催馬樂葛城同音

英雄樂　破

此曲唐虞世南作古人於貴所必奏之

私云、王殿樂已下悉當時絕畢。西王樂サヘ打任テハ不知人予ミ目錄悉吹盡時斗吹習之

雖然及度々所作者也。偖ニ當家ニハ傳之

水調曲

蓮華樂　「號衍陸歎掛樂又號蓮花會樂」六(以上圖ナシ[イ]アリ)重而注之於此曲大神惟季ノ流ナリ。仍基政能傳之時元ハ不知、古譜ヲ披テ吹試由古記ニ見侍是亨不審吹絕タル謂無之。又云、入道源大相國雅實東大寺ニ參テ大佛供養ヲ致サセ給シ日此樂ヲ奏ス

重光樂　此曲大納言源朝臣重光之作也仍重光樂ト云。或云、重光大臣ト云々。此大臣ハ大ナル僻亨也

私云、此重光ハ醍醐天皇ノ御孫四品中務卿代明親王ノ一男權大納言正三位ナリ、長德四年七月　日薨歲七十六ト云々

或云。花山法皇御宇作之云々。是モ不審ナリ

拾翠樂　前ニ注カコトク海人ノ藻ヲ拾ニ似タリ。博雅譜ニ云序拍子七舞已絕了急拍子十永承大嘗會樂所預源賴能作山村吉光作舞云々京極大相國宗輔(圖ナシ[イ]アリ)御記云、昔承和始作此樂今承續其急雖時代異意趣惟同、韶能携竹音而多日比苳邕(圖色[イ]ニヨル)之德學龍吟而幾年賴馬融之詞新知能辨淸濁深知宮商者也。或譜云。監物賴吉作

仁明天皇　天長十年三月二日御即位(御歲廿四或ハ二月十六日云々)　十月十九日御禊、十一月大嘗會ナリ此時

作輟
後冷泉院　寛德二年四月八日御即位御歲廿一　永承元年十月廿五日御禊十一月十五日大嘗會
ナリ
九城樂新樂拍子十六　四帖アリ一二三四帖ヲ反吹之
承涼樂拍子十　已上名字ヲ注許也
一ある殿上人六月の廿日あまりの頃いさくらかりけるにやむとなき后の宮にまいりてめんたうにたゝずみけるに上より人のをこのあまたしければさりげなくひきかくれてのぞきけるに御つぼねのやり水に螢のおほくすだくをみてさきにたちたる女房ゆゝしのほたるや雪をあつめたらむ樣にこそみゆれとて過に次なる人ゆうなるこゑにて螢火亂飛とうちながめたるに又つゞきて夕殿螢火飛と口ずさむ、しりにたちたる人かくれぬものは夏虫のとはなやかにひとりこちたりけるとり〳〵にやさしく面白し此男なにといふ一ふしなからむかほいなくてねすなきをしいだしたりければさきなる女房物おそろしほたるもこゑの有けるよとてつや〳〵さはきたる氣色もなくてうちしめりたるそらおほめきの程もあまりに色ふか

くかなしくおほえけるにいまひとりなくむしよりもと思ひしにとこりなしたりけるこれ又思ひ入たるほと堪がたくおくゆかしききまなりす へてこの人ともとり〳〵にいとやさしくぞ有けるこの心はをともせてみさほにもゆる螢こそなくむしよりもあはれなりけれといふ心也この五人の女房は天暦の御時なしつほの五人の歌仙のうちに清原の元輔の女に清少納言といふもの也一人はそのころ源氏の物語つくれる紫式部ならひに赤染衛門伊勢大輔和泉式部馬内侍などきこゆる人〻也

一銀燭秋光冷畫屛、輕羅小扇(二扇ナシ(ノ)ニヨル)撲流螢、玉階夜色凉如水、臥看牽牛織女星　王建

一侵曉乘凉偶獨來、不因魚躍見萍開、捲荷忽被微風觸、瀉下清香露一盃　韓偓

一池冷水無三伏夏、松高風有一聲秋

一盛夏不消雪、終年無盡風、引秋生手裏、藏月入懷中 扇ノ詩也、白樂天

一但喜暑隨三伏去、不知秋送二毛來 同白

專順の發句ニ

しつかにて身は夏しらぬすみかかなと侍る

まことに暑氣の中には閑所尤有興、さはかしき心にては防がたきものなり。物而樂道者諸道にすぐれて心のかすかなる處にて、ものゝ調もよく覺ゆる也。わつかに十五名目にて數曲を分別する藝なれば、そう〳〵しき心にては難得道なるべし。前に注かごとく瞽(メクラ)は心のすみてしつか成ことをのづから得たるゆへに作樂業也。風情より心のみゆるものなれば、樂人は身躰あらけなくせず裝束已下可然身の分さいをはからふべし。文をス〔イ天〇尺ヵ〕につけ人よりは長短相違する事第一心のそこの見ゆるわさなり。立振舞もゆうに賤しか〔底なイニヨル〕らずさしよりにも高聲ならず、道のものこしらぬ人もさるかたに心にくう見なされ侍べし。後代はいかにかやうに申置ども、かやうの心づかひ者はありがたし。さりながらこれしきの事はたしなむに其さかひは如形も分別すへき也

催馬樂　夏引事其詞云

夏引のしらいとなゝはかりあり衣にをりてもきせんましめはなれよ

注云、夏引は夏子のいとなりなゝはかりは七兩なり、ましめはまことの妻なり

二段囲
かたくなにものいふをみなかなましあさきぬもわかめのこごくたもごよくきよくかたよく

こくひやすらにぬいきせめかも

注云、女をかたくなに物云を、男云

注云、をみなは女なり、かたは肩なり、やふれやすき所なり、こくひは大くひに對之云

青馬　春なり　注云、あをのまは青の馬なり、さをのまは、すこしあをき馬也

あをのまはなれはこりつなけさをのまはなれはこりつなけしのいさや〔不のアリ〕しのいさやのさせこかひこなるさいろんこまたはたろむこのさいきのわらはのさせこかひこなるさいろん

山城　夏ナリ　詞云　西王樂ノコハフリナリト畢

やましろのこまのわたりのうりつくりなよや、らいしなやさいしなや、うりつくり、うりつくりはれ、二段果　うりつくりわれをほしといふ、三段　いかにせん、なよやらいしなやさいしなや、いかにせんいかにせんはれ　いかにせんなりやしなましうりたつまてにやらいしなや、さいしなや、うりたつまよりたつまてに

注云、瓜ノナリタツマテトナリ

葛城　雑ナリ

かつらきの寺のまへなるやとよらのてらのにしなるや、江（二段国）のはいにしら玉しつくや、ましら玉しつくや、をしとんと、としとんと、（三段国）しかしてはくにぞさかえんやわいゑらそとみせんや、をしとんと、と〔不を〕しとんと、をしとんとをしとんと、注江の葉井は水ノ名ナリ、

白玉シツクハ波ノ玉ノやウニヒタシタルコトヲシツクト云古今ニ水ノ面ニシツク花ノ色同我家コソ富セント云心ナリ

葦垣　雑ナリ　西王樂ノ序タリ

あしかきまかききまかききかき分てゝふこすとおひこすとたれ

注云、テウコハ超ノ字ナリ、音ト訓トイヘリ、ヲイコハ〔〇スノ誤〕ハ負超ナリ。中シケラシモト云詞ナリ

二段　てふこすハたれかたれかこのことをおやにまうよこしけらしも

三段　こゝろけるこのいゑこのいゑのをとヨめおやにまうよこしけらしも

四段　あめつちの神もかみもしよう（證ナリ）したへわれはまうよこしまうさす

五段
すかのねのすかなすかなきこゝをわれはきくわれはきくかなスケなきなり、實モナキコト也
源氏ニトシヘニケル此家ノトハ祝言ノ詞ナレハ致仕ノヲト、ウタイカヘラレタルトニ
ヤ朗詠今樣ニモ如此有ナリ
應（〇鷹ノ誤）山　冬ナリ　西王樂ノ破タリ
二段
たか山にたかをたかをはちなちあけておくをなみあはれをくをなみはれ
をくをなみわかすわかするこきにあへるせなかもやあへるせなかも
注云、鷹山ハ名所ナリ、をなみハ女ナリ、せなハ夫ナリ
太食調　呂　平調同音
此調子ノ支前ニ委注之間略之
奏王破陣樂　有別樣裝束四人舞之向立舞
中曲唐書大曲　新樂唐古樂忠拍子
一名神功破陳樂、群書會要云、齋正（政）破陳樂、又曰七德舞美撥亂（〔不〕ニテ補）陳王業
有七帖拍子各廿擬七德意初一帖者拍子廿三加序吹三拍子定

武德中天下〔○子ノ誤〕始作奏王破陳樂曲以歌舞大宗之功業貞觀初大宗重製破陳樂圖詔魏徵虞世南等爲之歌詞因之名七德舞自龍朔已後詔郊廟〔○享ノ誤〕宴皆先奏之、

會要曰、貞觀元年正月三日宴群臣奏秦王破陳樂之曲太宗謂侍臣曰朕昔在藩邪〔○邸ノ誤〕屢有征伐世間遂有此歌云々

七〔○年正ノ二字テ脫セリ〕月七日上製破陳樂舞圖左圓右方先偏後伍魚麗鵝貫箕張翼舒交錯屈伸首尾廻牙以像戰陳之形起居郎呂才依圖敎樂工一百廿人被甲執戟而習之、凡舞三変爲四陳有來伴〔○往ノ誤〕疾徐擊刺之象以應歌節數日而就、其後命魏徵虞世南褚亮季〔○李ノ誤〕百藥改製歌詞更名七德之舞十五日奏之庭觀者上壽云、此舞皆有百戰百勝之容群臣咸稱百歲文集意龍朔已後用郊廟

一唐書禮樂志曰、唐之自制樂凡三大舞、一曰七德舞、七德舞者本名秦王破陳樂大宗爲秦王破劉武周軍相與〔圖與[イ]ニヨル〕作秦王破陳曲、及即位宴會必奏之、謂侍臣曰、雖發揚蹈厲異乎文容然功業由之被樂章示不忘本也、右僕射封德彝曰、陛下以聖武戡難陳樂象德、文容豈足道也、帝瞿然曰、朕雖以武功興終以文德綏海內、謂文容不如蹈厲斯過矣乃制舞

圖左圓右方先偏後伍交錯屈伸以象魚麗鵝（イ貫アリ）命呂才以圖敎樂工百二十八人、被銀甲執戟而舞凡三變毎變爲四陳象撃刺往來歌者曰秦王破陳樂後令魏徵虞員外散騎常侍褚亮員外散騎常侍虞世南、太子右庶子李百藥更制歌辭、名曰七德舞ト云々、初成觀者皆扼腕踊躍ス諸將上壽群臣稱万歲、蠻夷在庭者、請相率以舞、太常卿蕭瑀曰樂所以美盛德形容而有所未盡陛下破劉武周薛舉竇建德王世充願圖其形狀以識、帝曰方四海未定攻代以平禍亂制樂陳ニス其梗槩而已、若シ備ニ寫禽獲今將相嘗爲其臣者觀之有ㇾ所不忍我不爲也、自是元日冬至（○至テ脱ス）朝會慶賀與九功舞同ク奏舞人更以進賢冠虎文袴螣蛇帶烏皮鞋二人旌居前其後更號神功破陣樂

又曰武舞用神功破陣樂衣甲持戟執纛者被金甲

又曰爲國家者征伐得天下則先奏武舞神功破陣樂有ニ武事之象一

貞觀政要曰破陣樂爲舞詔魏徵虞世南褚亮百藥等爲之詞

通典曰、破陣樂大唐所造也、太宗爲秦王時征伐四方人間哥謡有秦王破陣樂曲及即位貞觀十七年製破陣樂舞圖太宗謂侍臣曰、朕昔在藩邸屢有征伐人間有此哥豈意今日登于雅樂然其發

楊踏厲雖異文容功業由之致今日施樂章不忘於本也

慈恩傳曰、或曰、王問玄奘曰師從胎那來弟子聞彼國有秦王破陣樂歌舞之曲未知秦王是何人復有何功德致此稱揚法師報曰玄奘本土見人懷聖賢之德能〔イ〕殊爲百姓除兇剪暴覆潤群生者則歌而詠之上備宗廟之樂下入閭里之謳秦王者即胎那國今之天子也未登皇極之前封爲秦王是時天地叛〔○版ノ誤〕濕蒼生令〔○無ノ誤〕主原野積人之完〔宍〕川谷流人之血妖星夜聚弥〔○沴即チ沴〕氣朝凝三河苦封豕之貪四海困長蛇之毒王以帝子親應天策之命奮〔區奪〔イ〕ニヨル〕威振旅撲剪鯨鯢杖鉞麾戈肅清海縣重安宇宙再耀三光六合懷恩〔一本恩〔朱〕〕故有茲詠〔○以下〔イ〕ニアリ〕王曰如此之人乃天所以遣爲物主也

一帖拍子廿三 加序吹三度拍子定其後至テ第七帖各拍子二十終帖加三度拍子一二三帖如常四帖執桙ヲ略定乃時ハ一帖ト四帖トヲ舞也此帖加拍子五帖拔劔六帖釼桙切云釼ヌキ桙ヲトル當曲ノ中ニ以此切殊ニ秘事トスルナリ。七帖三度居 從始加三度拍子此曲七反者則七德儀也

光季秘說曰自第五帖於世吹忠拍子吹之如還城樂破七帖物〔○揚ノ誤〕拍子打之如還城樂上拍子末三拍子序吹 仍准大曲謂古樂之〔區也〔イ〕ニヨル〕說一說云、七切皆自始用只拍子說是漢土之本說ナリ、加拍子様古樂楊拍子打ベシ

保延二年二月九日内裏舞御覽日依勅定（當曲忠拍子ノ説　異行本行ナリ(朱)）玉樹異説等舞　舞人光時　光近　樂人其政　時秋　自余ノ輩略了

抑玄弉三藏ノ西天ニ渡給タリシ時戒日大王宮ニ〔イニヨリテ補〕シテ問曰法師ハ漢土業美撥亂陣王曲ハシレリヤ如何、法師答ノタマワク僧徒ノ身其器ニアラズトイヘトモ乗空カラムヤ時ニ大王悦給テ法師ノ一曲ヲ見ト思トス、メ給ケレバ法師イキヲカヘシテ舞給ケリ（今只拍子古樂説ナリ、唐家始作説ハ以大曲爲本説謂之玄弉三藏傳ナリ）

承和帝ノ御時當曲ヲ殊依有御興此忠拍子ノ説ヲアマリ御秘藏アリケレバ伶人ニ仰テ樂拍子ヲ常ニハ用ベキヨシ被宣下了（其ヨリ此方樂拍子綴吹ニハ成タルナリ）

古記云。

寳勝寺供養之日此舞而左近將監下野近末令着裝束其後无此裝束師云〻古老云佛師着此裝束ョ様知レリ但魚袋付方頗有其相違可任舞人之説被仰下了

保延二年三月廿三日鳥羽ノ勝光明院供養日一者狛季貞(朱)　當曲ニ蒙テ勸賞退テ舞臺ノ中半へ歩登テウルハシク左右ノ手ニ桴ヲ取替テ舞踏シテ拜シテ樂屋ニ入畢是モ付此曲ニ唐家ノ振舞ヲキ、及タリケルニヤ、其時ハヒ、シクサモアラマホシク見ヘケリ、感ズル人モアリ、又サシ

モナクナント云モアリ、舞曲入ニ用大食調々子樂ノ調子コトクナラハ乞食調ゝ子ヲソ用ルベケレトモ件ノ調子ノナキユヘナリ。私云、右說舞家歎ナリ尤用之前ニ玄弉三藏西天ニ渡ト侍ニ思出侍西域ノ傳ニ注サレタルト人語シト覺ルマ、今注所是ハ何ノ傳ニモアレ殊勝ナル古叓ナレバ其詮ヲ取テ可見高祖大師日蓮御抄ニ在之遺龍ト申セシ能書ハ手跡ノ上手也シカハ是ヲ用フ雖然於佛經ニイカナル依怙アリシカトモ不書也　㝡後臨終ノ時子息烏龍ヲ召ノ云汝ヂ我家ニ生テ藝能ヲ續ク我孝養ニハ佛法ヲ不可信〔因ニテ補〕。殊ニ法華經ヲ書叓ナカレ我本師老子ハ天尊也天ニ二ノ日ナシ而ニ彼經云唯我一人ト說クキクワイ第一也若遺言ヲ違テ書程ナラハ忽ニ惡靈トナリテ命ヲ斷スベシト云テ舌八ニ破頭ヘ七ニサケテ五根ヨリ血ヲ吐テ死シテハンヌ、サレトモ其子ハ善惡ヲ辨ヘサレバ我父謗法ノ故ニ惡相現ノ阿鼻地獄ニ墮トモ不知遺言ニマカセテ佛經ヲ書叓ナシ况ヤ口ニ誦ル叓ヲ哉、如此過行程ニ時ノ王ヲ司馬師ト號シ奉シ御佛叓ノアリシニ書寫ノ經可シトテ有ル漢土第一ノ能書ヲ尋ラレシ處ニ烏龍ニ定メテハンヌ、召テ仰付ラル、ニ再三辭退申セシカハ不及力他ノ手跡ニテ一部經ヲカ、レタリ、帝王心ヨカラス倚烏龍ヲ召ノ仰云、汝ガ親ノ遺言トテ朕ガ經ヲ不書雖モ无ト其謂レ且ツ

免レスク之ク但題目斗可書ニク三度勅定アリ、烏龍猶ナ辭退申ス、大王龍顏不ス快ニ天地猶ヲ王ノ進退也、然ハ者汝ガ親ハ即チ我家人ニ非ズヤ、我ヲ以テ公叓ヲ輕タル叓アルヘカラス、題目計ヲ可書若不然者雖佛事ノ庭速汝頸ヲ斬ヘキ也トアリケレバ題目計リ書ケリ、所謂妙法蓮華經巻第一乃至巻第八等云〻其ノクレニ私宅ニ歸テ歎之、我レ遺言ヲ不違ヘ隨分孝養ノ者ナレトモ王勅无術故ニ佛教ヲ書テ不孝ノ者ト成リヌ天神モ地祇モ定テイカリ不孝ノ者ト思食スラント寢ネムル夜ノ夢ノ中ニ大光明出現アリ朝日カト思ヘバ天人庭上ニ立給ヘリ、又无量ノ眷屬アリ此天人ノ頂上ノ虚空ニ佛在マス六十四佛也、烏龍掌ヲ合テ問云、如何ナル天人哉、答云、我ハ是汝ガ父ノ遺龍也、佛法ヲ謗ゼシ故ニ舌八ニ破五根ヨリ血ヲ出シ頭七分ニ破レテ无間地獄ニ墮ヌ、彼ノ臨終ノ大苦ヲコソ堪忍スヘシトモヲホヘサリシニ无間ノ苦ハ猶百千萬億也、人間ニメ鈍力ヲ以テ爪ヲ破リノコキリヲ以テ頭ヲキラレ、スミノ火ノ上ヲ歩セ蕀アドロニコメラレナムトセシ人ノ苦此ノ苦ニ譬ヘムトスルニカスナラス、イカニシテカ我子ニ告ト思シカトモ臨終ノ時汝ヲイマシメテ佛經ヲ書叓ナカレト遺言セシ叓ノクヤシサ申ハカリナシ、後悔先ニ不立、我ハ(唇哉)(石)ニヨル(山)身ヲウラミ舌ヲセメシカトモカヒナカリシホドニ、昨日ノ朝ヨ

リ法華經ノ始ノ妙ノ一字无間地獄ノカナヘノ上ニ飛來テ變テ金色ノ釋迦トナル、此ノ佛三十二相ヲ具シ面皃滿月ノ如ク大音聲ヲ出テ假使遍法界斷善諸衆生一聞法華經決定成菩提ト唱フ、此文字ノ中ヨリ大雨降テ无間地獄ノ炎ヲケス閻魔王ハカフリヲカタフケテ敬ヒ獄率ハ杖ヲ提ケテ立チ一切ノ罪人ハヰカナル事ゾトアハテタリ、又法ノ一ノ一字來レリ如前ノ又蓮又華又經如此六十四字來テ六十四佛ト成ス无間地獄ニ佛六十四佛マシマス、日月ノ六十四天ニ出タルカ如シ、天ヨリ甘露ヲ降テ罪人ニ與フ、抑此等ノ大善ハイカナル事カハト罪人等佛ニ問ヒ奉リシカバ、六十四佛答云、我等ガ金色ノ身ハ栴檀寶山ヨリモ出現セズ、此ノ无間地獄ニアル遺龍ガ子ノ烏龍ガカケル法華經ノ八卷ノ題目八々六十四文字也、彼烏龍ガ手ハ遺龍ガ生ル處ノ身分也、書ケル文字ハ遺龍ガ書者也ト說給シカバ、无間地獄ノ罪人等我等ハ娑婆世界ニ有シニハ子モアリ婦モアリ眷屬モ有キ、イカニトフラハスヤラン、又トフラヘトモ善根ノ用ノヨハクシテ來スヤラントナケヽトモカヰナシ、或ハ一日二日一年二年半劫ニナリヌルニ、カヽル善知識ニ値テ助ラレヌルトテ我ラモ眷屬トナリテ忉利天ヘノボルカマツ汝ヲチカマントテ來レルナリト語リシカバ、夢ノ中ニウレシサ身ニアマリ、又

歸テ後亦イツノ世ニ見ント思シ親ノスガタヲ奉レ見、又佛ヲモ拜シ奉ル六十四佛ノ物語ニ云々、我等ニ別ノ先主汝等ガ檀那也、今日ヨリ汝ガ親ヲ守護スベシ、汝ヲコタルヿナカレ、一期ノ後ハ必ズ來テ都率內院ヘ入ル可シト約束アリシカバ、烏龍殊ニ畏レ誓云、今日ヨリ以後外典ノ文字不可書等云々彼世親并ノ小乘經不シト誦セ誓ヒ、日蓮彌陀念佛ヲ申サシト申ガ如シ、夢覺テ此由ヲ申ス、大王ノ勅宣ニ云、此ノ佛叓已成シメ此由ヲ願文ニ書テ奉レトアリシカハ勅宣ノ如シ、サテコソ漢土日本國ハ法華經ニハナラセ給ヒケレ此狀漢土ノ法華經ノ傳ニ候、コレ書寫ノ功德也、五種法師ノ中ニハ書寫ハ最下ノ功德ナリ、何況ヤ讀誦ナムト申スハ無量无邊ノ功德也大善也、今ノ施主十三年ノ間タ每朝ニ讀誦セラル自我偈ノ功德唯佛與佛乃能究盡ナルベシ、夫レ法華經ハ一代聖教ノ骨髓也、自我偈ハ廿八品ノ魂魄也、三世ノ諸佛ハ壽量品ヲ命トシ十方ノ菩薩モ自我偈ヲ眼目トス、自我偈ノ功德ハ私ニ不可申次下ノ分別功德品ニノセラレタリ

私云、右御抄ハ道ノ外ナル叓ナレトモ以叓次記之、貴卑ニモヨルベカラズ、後世ノ道ニハ佛ニ成業カ賞翫ナレハ如此叓ヲモツテ心付侍テ法華經ヲ持身ト成ベシ予ガ一

分ノ志ニテ奉加書之也

傾坏樂　中曲　新樂　舞出時調子入時重急吹

破二帖 拍子各〔イニテ補〕十六　急三帖 拍子各十六

此曲モ大唐ノ物也、醉郷日月ニ曰、此曲貞觀元年中ノ內宴ニ長孫无忌所作也、會要云、無爲傾盃樂 序二帖アリケレトモ絕畢 第二帖ヨリ加三度拍子 一帖時ハ不可加拍子爲本說歟、或說ニハ末六拍子二加拍子云ミ

左兵衛尉狛則季之說云、本ハ破三反ナリ、而第三帖絕畢、仍不加拍子其由狀頗無〔イニテ補〕其謂者歟 末絕舞樂有其數皆以加拍子前ニ注之 急三帖終帖加拍子

口傳云、三臺傾坏樂共ニ不加拍子樂也、而一日ニ兩曲舞時 三臺不加拍子 傾坏可加拍子 此說ハ端ノ帖ニ注之

入綾次第 如三臺也但當曲ニ走手ヲ舞ナリ、ソレハ破第二帖ノ中手ヲ軸出舞ナリ、秘吏カ中ノ秘事ナリ、狛舞家口傳也

散手破陣樂 有別樣裝束一人舞之 中曲　新樂

一名主皇破陳曲常ハ散手ト云フ、

或說云、釋迦誕生之時師子喔〔イ頻〕王此曲作舞

序二帖 拍子各二十　破七帖 拍子各二十

此曲誰人ノ作タルト云事勘出サレ、所ニ古老傳曰

澤川明神平新羅之軍排悦之餘向新羅國指麾而舞時人見此姿摸之（見船紬）今ノ寶冠散手是ナリ

或書云、此曲新造所多奏此曲地鎭儀故云々

元明天皇御宇和銅之比寶冠之面ハ　天降于今元興寺之寶藏有之以件本摸寫留山階寺（殊勝寶物）也而文治ニ件ノ寶藏令燒失了、仍件面幷ニ玉樹ノ別樣裝束悉令燒失了、其後又山階寺ノ面ヲ寫返テ元興寺ニハ留置タリ

序二帖（拍子二十）以初十二拍子爲半帖常ニハ一帖舞（自半帖執桙也）破七帖（拍子各二十）一二三帖（如常）四五六帖ニ執桙（謂之散手長桙殊爲秘曲也）七帖（加三度拍子）略定ノ時ハ一切ヲ舞ナリ、末六拍子（加拍子）件曲ハ嵯峨帝王殊善儛ワセ御タリケル長桙ノ秘事ナリ

左大臣（賴長）長桙ヲ舞給（光時弟子）面ヲバ着セテ舞給ケル宝冠ノ裝束シテ舞セ給ケルハケタカクヒミシク侍ケルカ龍甲メシタル時ハ咒師ニゾ似ケル（師長同令舞此曲給）

抑破陣ノ字見皇帝觧但着寶冠之時加此字云云

半子人從モイフ本儀六人常四人略ハ二人舞人下﨟也、又上舞出入有二樣 大法會ニハ用調子口傳云長

桙ヲ舞時者舞臺ノ中半行立有拜二拜也 其後作法ヲハシテ桙立手ヲバ舞也、是第一爲秘說

能〻可請師說也桙立吏舞人下﨟ノ役也

相撲時ハ用新樂亂聲至舞臺之中半左足摺テ後見時ニ番子ハ走ナリ、加此子細ヲ能々分別シテ

可舞云〻

此破ニ有作物裹頭樂也大治三年舞御覽用此說吹樣有別習

武將太平樂 有面 中曲 新樂

破二帖拍子二十 急拍子廿四 向立舞也、又稱武昌樂或號巾舞又謂項庄鴻門曲常太平樂云〻

會要ニ曰、立部伎八部ノ樂一ハ安樂後周平レテ齊ヲ所作也、周ノ代爲ニス之城舞トニニ太平樂 又謂ニ之五方師子ノ舞ト

北院御室御撰 絲管抄 同之

通典曰、亦謂ニ之五方師子舞ト師子摯テ獸ヲ出於西南夷ニ天竺ノ師子等國（不審）綴レ毛爲衣象ニ俛仰馴狎

之容ニ二人持テ繩拂ヲ爲ニス習弄フ之狀ヲ五方ノ師子各〻依ニル其方ノ色ニ百四十人歌テ太平樂ヲ舞抃以

從レ之ニ 服飾皆崑崙ノ象

貞保親王譜云、吹乱聲能出天安天皇御梨本移内裏之時左近衛府奉獻物常澄當經以釼攪舞之四十人被中合此三曲號府裝樂
或云公莫舞ハ郎巾舞也項莊持レ劍ヲ舞フ項伯以袖隔レ之使レ不レ得レ害スルコ高帝ヲ
又云嵆康被誅之日歎曰ク太平引曲絕漢書曰合歡之樂五音能調、或曰有ニ援レ釼舞之曲一若是仲樂歟
破二帖 拍子各廿 第二帖末六拍子 加三度拍子 略定一反舞時 猶末六拍子 加三度拍子 此破略様ハ狛光則ガ大治三年禪定院ノ大般若供養童舞ニ始作テ教タリシ説ナリ 此破謂太平樂樂者平調曲也、樂ニ有忠拍子
急拍子廿四 謂之合歡塩第五拍子ヨリ舞始テ樂返ミ程舞次有輪 謂之古伏輪 有二説 野田巡輪右廻 辻方逆輪左回 次有渡手 古伏渡云 次違肘二度ノ後拔大刀 則加拍子 一説云 古伏輪初 加拍子 次大輪一反 如常謂之大刀輪 此間有更居突手 次小輪一返 各桙ヲ一返廻テ立定也、爲秘事 次渡 如常 此間在秘手 謂之更居突手 頂莊鴻門曲 一者一人舞畢ミ〔○教訓抄「舞之」トス〕釼納時 右膝突居 一説向合 一説 上手南向 下手北向 此間奏小乱聲 有由緒 舞出入用道行號朝小子 拍子十二 入時加三度拍子
抑小六條内裏朝覲行幸狛光季依ニ勅定ニ入綾舞其舞様 此家ニアリ 年號可尋 古記以合歡塩入ミ

天治二年正月三日三條殿朝覲行幸日 着面 光則秘亙舞

私云、右注說ミ皆狛舞家說之次第也、大略打物數返之樣ナント奈良樣北京樣トテ少替侍ドモ口傳故實可然說々間（アイダ）當家用之仍注之者也 一名武將破陣樂

賀王恩　中曲　新樂

有三帖 拍子各十六　又感皇恩 古樂物云

此曲者嵯峨天皇御時大石峯良（イシミネヨシ）所作也 而漢土作者于今不勘〔國取因ニヨル〕出此朝ニテ作タルカ 昔ハ五切アリケレトモ二切ハ絶テ今三切ソ侍ル第三切 加三度拍子 光近ノ口傳云 第三帖ハ四方ヲ拜シテ居東南西北ナリ 皇恩ヲ賀ス心ト謂之

仍妙音院禪客〔〇閤ノ誤〕者 土佐國流罪之被召返給テ於御前御琵琶仕給ケルニ令彈當曲給云々其モ此心ナルヘシ

太上天皇御賀參音聲　奏此曲 用古樂懸舞人一說故也 舞出入用調子 古記云、有詠舞出入用道行以皇麞急爲道行云ミ此說更不習舞家可尋　略一切舞

時從第十一拍子 打三度拍子、一說末四加之樂說

打毬樂　中曲　新樂

有七帖 拍子各十一 別裝束舞 打木持印造 向立舞四人舞之

此曲黃帝所作也依兵勢作之 唐ニハ童舞

被レ行ニ小五月節會ニ時者競馬裝束シテ舞人四十人立テ木ノサキカヽマレルヲ持テ玉ヲ係件玉ハ一ノ上ノ下給云々件玉ニハ大甘子ヲ紙ニツヽミテナケクタシ給ナリ、舞終ヌレバ舞人懷中シテ罷入ナリ　是ハ宇治殿御物語也

古記云、件舞人八十人馬乘云々件節時大鞍ヲ百被（ヘイ）打アリ）立ケレバ武德殿ノ瓦ヒヾキテ地落云々件舞所ハ車ノトウノ熟ナル物ヲ立何事可尋

一二帖如常　以下玉搔其次第者三帖二烈　艮搔　四帖一列乾搔　五帖四列巽搔　六帖三烈　?押搔　七帖空搔乃切即加拍子

狛眞葛カ詞異

口傳云。父幷師匠ノ玉搔遣時ハ右膝突テ居テ玉留置也可爲秘事

次玉置樣者當曲相傳ノ者ニ末ノ舞人令置之　其習云下手ノウシロヲ廻テ次烈ノ前ニ置テ如本道返入ナリ

一説云玉ハ一列舞人懷中シテ第二帖ノ十拍子居テ取出テ我前ニ置テ搔皆搔了テ第四列第一列搔ヤルヲ七帖ノ空搔切第二ノ拍子ニ一列又二列搔ヤル第十拍子又二烈一列搔ヤル十一拍子ニ居テ懷中シテ入云々。

光季秘記云、玉搔切ハ三四五六帖ナリ、此帖之末第十拍子古樂揚拍子　第十一拍子打三度拍子　第七帖正

加三度拍子　此說者玉撥手合テ目出ナリ略定時ハ一二三七帖ヲ舞　一〔団二〕列艮 一列乾　二三帖玉撥
也、舞出入用調子抑入時ニ一者打木ヲ肩ニ懸テ入𪜈 一說舞臺上許也
次烈ニテセヌ𪜈也 而借一者ニテ常樂會光重肩懸入了於樂屋一者則近散〻? 不知子細由ニテ令放言了仍方大衆等𪜈ヲ出テ切合タリ

還城樂　中曲　別裝束舞　古樂

亂序一帖　囀三度　破二帖 拍子各十八

此曲者西國之人好テ蛇ヲ食トス其蛇ヲ求得テ悦姿不可說間摸其躰作此舞之仍見蛇樂云々 作者不見
不審無極也。可尋之

古記云。　何代被移此調子𪜈不見可尋之

此曲唐目錄入双調曲

又云。此舞本者蛇ヲ取テ舞而宇治殿ノ童舞ニヲシヘラレケル時ヲ巻テ輪ニツクリテソ持セ給タリケル又秋ノ舞ノ時ス、キ女郎花ヲ折合テ輪ニシテ舞ケレバ殿下ノ仰ニモ童舞ノ時ハカヤウナルベシ、實ノ蛇形ハウトマシキ也トゾ御定アリケリ、コレヨリ男舞ニモ紙輪ヲ今ニモチヰタル也、ウルワシク小蛇ノカイマキタルヲ作タル也、平等院樂束ニハ今

モ具タリ。大神晴遠ガ家ノ相傳ノ秘曲也。從天降タル面嫡々相傳今ニ其家ニアリ、又京舞人近元舞之八幡ニ助方舞之

系圖云。此晴遠逝去シテ經テ七日蘇生シテ語云、我閻魔〔閻淡魔〔イ〕ニヨル〕王ノ御前ニ跪ヒサマツク處ニ召問云、杼汝ハ定業有限但釋迦大師御報恩ヲ修スル、興福寺ノ常樂會ニ必有還城樂、秘曲然者件秘事ハコト〳〵ク傳授シテ參タルカ如何、于時時遠答申云、悲哉不知死期ヲ間今ニ手ヲツタヘズシテ參テ侍ヨシ申時ニ大王ヲドロカセ給テ人ヲ召テ勘替テ三ケ日ノイトマヲ給早閻浮ニ返テ件手ヲ傳ヘントテ蒙仰テイトマヲ給リツルトテサメ〴〵トナキテ嫡男是遠呼居テ二手ヲ傳授シテ事畢今ノカマツカヘリオシモトリ手ナリサテ三ケ年已後令逝去了、爰ニ晴遠ヨリ是光マテ嫡子一人ニ此曲ヲ傳來處ニ是光之時嫡子光茂二男是弘傳了、仍今ハ二流成タルナリ

仁平二年十一月ニ是光朝勘成了、大衆沙汰シテ住宅被破損了、同三年ノ常樂會依無還城樂十三日試樂日大衆一者光時ニ仰付云不可有是光之免除而後日還城樂者狛光久可舞也。件光久ハ白八幡助方之手正習傳タル由所申也、衆儀了然間是光十四日以長者宣被免除了仍光久不舞雖然光久相傳タルニヤ、件助方ハ久安元年之放生會舞タリ、非舞人歟、多好方ハ八田〔因幡〕

別當近元ト申者ニ習傳タルヨシ度々物語申キ、件近元ハ久安六年ノ放生會舞了、好方ハハレノ時ハ不舞之
先如陵王吹小乱聲大神笛吹様又吹林邑乱聲小部氏笛吹様大神氏ニモ放生會ニハ依爲林邑絡〔不給〕舞用林邑乱聲也
乱序隨舞吹之大旨如陵王出舞入舞臺〔不「ニ昇ル」アリ〕●之〔不之〕後蛇嵓樂人末ノ物之役也
囀三度
阿蛇具、蛇我茲、時迠〔不逹、教訓抄迹ニ作ル〕去果、制鐵果善、剡敵若剡、早禮薩波、落蛇樂、
顏●項〔庭頂〔不ニヨル〕漢曲、翫蛇樂
小乱聲如陵王次各爾取乞食調音
次破二切終帖加拍子常一帖舞半帖加拍子入時安摩笛如陵王此舞出入ノ躰如陵王而昔ヨリ近來マテ
此定侍ルカ是茂ガ時ヨリコマカニ躍(ヲトリ)出事ハ始也若ハ私事カ若ハ私今案歟、其氏可相尋(タツヌ)者也
此樂八幡宮御輿還御ニ吹之テ立御先御共申次第在(アリ)別紙此神慮如此樂被定事傳タル人無シ
當家第一ノ口傳云、久遠劫ヨリノ邪心ヲヒルカヘシテ本覺ノ城ニ還ルト云心ナリ。神

慮モサソ衆生ヲハ思食ケント思ニモ和光同塵ハ利物ノヲワリト殊ニ可貴此本覺ト云コト壽量品アラワレサセ給ワスハアルベカラズ、本因妙ト申事ヲ可ㇾ明此コト委他所可注、釋迦孝養ノ常樂會ノ爲ニ晴遠蕕生シテ子ニ二手傳侍事サテハ如此習ニテ當家眞說可秘藏之

放鷹樂　拍子十八　舩樂之時　古樂　新樂

樂談史云。弘仁三年八月一日樂生奏之即以ニ猿鳴調一子振餅合子此舞時飛翔於舞人以曲節爲御獵之時必雅樂寮案爲此歌舞　此曲野行幸送之舞姿牟子シテ左手ニ鷹ヲ居右ノ手ニ楚持タリ鷹ナフリノ躰歟、弘仁、天長、承和之野行幸送之。

古記云。野行幸奏此曲、而延喜廿年十月十八日臨時樂之時雅樂屬舩木氏有着鷹飼裝束新羅琴師舩良實者着犬飼裝束各奏舞曲出延喜御記件舞絕畢、仍無裝束中納言藤原卿無實名調進鷹飼裝束云々

或記云。白河院ノ御位ノ時野行幸ト云事セサセ給テ、嵯峨野ヘ幸シテ大井河ニ奏舩樂龍頭ニ大神惟季鷁首ニ放鷹樂吹タル伶人ナカリケル間井戸次官秋宗ト云管絃者ヲ召出テ令着襲

裝束ノセラレタリケル當座ノ面目身ニアマリタリト其日ノ、シリケル程ニ行幸ステニ成時ニ樂ヲス、ムル時ニヲク〔○臆〕病シテ笛ヲ河ニヲトシ入テ不吹シテアリケレハ武吉ト云伶人ハカバカシクシラザリケレトモ如形コトヲナシタリケル也、初ノ面目後ノヲコ淺猿カリケリ大判官惟季未傳此曲ヲ給事ヲ兼テ知テ淨明院得業圓憲アワレ此男ハ來ヌランモノヲトテ得業フシ給ハテ待給ケレハ夜半許ニ門ヲタ、クモノアリ、誰ナラント、ワレケレバ惟季トナノラレケレバ門開テ入ラレタリケルニ明日野行幸ニ放鷹樂ヲ可奏之由被仰下而未傳此曲爲令傳授馳下候之由申サレケレハ卽傳取テヨモスカラ上洛シテ行幸ニアワレタリ、惟季一夜ニ受師說目出カリケル秋宗日來ナラシテ事闕タル水火ノ器量ニテ侍ケル物カナ

同記曰。左舞人六人ヲエラバレケリ、光季、高季、則季、成兼、恒遠今一人其躰ナカリケレバ、行高カ童ニテ歲十四ナリケルヲ召出テ藏人所ニシテ俄ニ男ニナサセ給テ加タリケルナリ。舞人六人事不審也私云、無用ナレトモ行高名譽ノ初、其爲ニ栽〔○載〕之

同記云、此秋宗ハ笛工ノ無雙ノモノ也然ニ堀河院笛ヲ聞食斷ニ秋宗ヲ召タリケレトモ御門ノ御前ニテヲクシテ手ヲワナ、カシテ終ニエ吹ズシテ退出畢、

院此笛ヲ不聞食テ無本意ヲホシメサレテ女房ニ心ヲアワセサセ給テ、月夜女房ノ私ノツホネヘメシヨセテ笛ヲ吹セラレケレバ、女房バカリ聞給ゾトテハゞカル所ナク吹ケレバ世ニ目出タク仕ケレバ、御門聞食テ感ニタヘサセ給テ日比モ上手トハ聞食ツレドモ是程トハ思食サヽリツト被仰出タリケレバ御門ノ聞食ケルカトタチマチニヲクシテエンヨリサカサマニヲチケリ、御門ワラハセ御マシテアンラクエン（安樂塩(圧)）トゾ異名ニ付サセ給タリケル、カヽルヲク病ノモノニテ侍ケル

私云。此秋宗ハ笛ノ堪能ニテヲク病ノ異名付侍ハ辱ナラズ、當時ノ輩ハ一向ニ樂ヲモ不覺器量ニモナクシカモヲク病ニテ調子ノ頭一句ヲダニモスキ〳〵ト吹出叓ナクシテ御前ニ烈リ先祖マデノ恥トモ思フ氣色ノナキ者一家ニマヽアリ、アサマシキ時節也、ヲク病ハ心ノ病ナリ、眞ニ所作ノ時ハ名樂ナド用テ失錯アラシトタシナムベシ

天人樂 拍子十二　新樂

此樂和邇部大田麿所作也、東大寺ノ惣供養之日天童於樓上合行道奏之 加三度拍子 忠拍子

非(シキナリ) 良(ワタチナリ)

說アリ

輪鼓褌脫(リンコゴタツ)拍子廿三用只拍子 又廿二 又廿四 古樂 又新樂

此樂打マカセテハ拍子廿二トシレリ。件說ハユヽシクトコロセキニヨリテ當時廿三ニハノヘタル也。又廿四拍子ノ說アレトモモチヰズ加拍子樣ニ有三說、一者四拍子ノ古樂搔拍子大旨似拔頭鼓常說二者八拍子、古樂搔拍子付此說有秘說三者新樂一拍子是中ノ第一秘說云六拍子二所交說アリ昔催馬樂哥ニ安波戸(アハト)ト云哥ニ合ケリ、其哥振雖絕畢笛音曲留云々、口傳云、鞨鼓ヲ打忠拍子ハ大鼓ハ可加一拍子一ニ搔ハ可加古樂也是第一沽失(コシツ)云々樂ノ拍子アリ口傳云五常樂破ノ程ニスヘシ加三度拍子是レウチマカセテ人知ヌモノ也。惟季ハ忠拍子ノ樣ヲバ被用ザリケルトカヤ仍樂拍子ヲバ號奈良樣ト忠拍子ヲバ名ニ京樣ニタリ、作者未勘出之

蘓芳菲拍子九 又古樂 新樂

此曲五月節會舞ニ御輿之前ニ是從弘仁初テ競馬ノ行幸奏之、對右狛龍ニ小馬形乘蘓芳菲ノ身ハ師子ノ姿ナリ。頭如犬頭也。口細シテ面長中實(シノ)裝束如左乘尻ノ裝束也不帽子(ホウシ)〔○教訓抄木帽子〕踏懸(フカケ)糸(ケイ)

𩊱(カイ)在子二人裝束如犬在面帽子ハキモノハナシ此中實(ナカコ)樂所末物侲子者各從ヲ出乘尻ノ前參向奏當曲向御車也付御幸舞𣶒者先身ヲ振テ左ヲハクヒ(〇教訓抄「右ヲハクミ」アリ)次拜二度、膝ヲカ、メテハウ、御車先キ立ツナリ。御車御所寄畢後(ヨリヲハリテ)、又加先ハクヒテ還烈之時卽加拍子三度拍子

古記云。

此舞弘仁ヨリ初テ競馬行幸奏之、此ノ舞𣶒加師子、頭有一扁、頭色金色其身色詠子二人面形如出色白蒙紺帽子如犬岐之

又船樂ニモ奏之、其謂ニ古樂トシルシタル物アリ。コレハ古樂ニ用ル時口傳アリ、加拍子時ニ初拍子ヲハ除テ第二拍子ヨリ古樂揚拍子打之尤爲秘事仁安ノ日吉ノ競馬ノ御幸ノ舞ニハ建仁三年七社ノ競馬御幸蘊芳菲ノ作法コトノ外ニタカイタリ、然者古キヲ正說トスベシ、仍仁安振舞注置也

撥?頭

通典曰、撥(拔イ)頭ハ出西域故人爲猛獸所噬其子求獸殺之爲此舞以象也。踏搖娘生於隋末河內有人醜貌(ヒト)アリ而耽酒常自號郎中醉歸テ必毆其妻々美色善自哥乃哥爲怨苦之詞河朔演其曲

而被之管絃因其妻之容妻悲訴毎搖其身故號踏搖云近代優人頗改其制度非舊音北院御室所撰絲管抄ニ被載之

小曲　別裝束　古樂　又髮頭

破　拍子十五　搔拍子物

此曲天竺ノ樂也。波羅門〔何僧アリ〕傳來隨一也。舞作者非詳之。一說云、沙門佛哲傳之。置ク唐招提寺云々。唐后嫉妬良云云未詳出處　古老語云、モロコシノ后キ物ネタミヲシ給テ鬼トナレリケルヲ、以宣旨樓ニコメラレタリケルガ破出給テ舞給フ姿ヲ摸トシテ作此舞云々　而無作者無后御名、尤不審之

古記云

昔相撲節、有彈物琵琶數面箏數張有之歌男者在ニ左方哥女ニ在ニ右方大皷立立數十面、彼時拔頭ハ連舞也八人出舞之中古來擬節會者略也

先ツ以テ林邑亂聲ヲ舞出テ則チ以テ此亂聲ヲ舞ニ亂序ヲ置桴時　此亂聲各称取　大食調　次破吹ク自始搔皷者常說　行高乃家秘說云、初大皷三ヲハ四ニ打テ第四拍子ヨリ古樂乃四楊拍子ニ可加拍子。是ハ當曲秘叓、南向乃樣ヲ舞時打レ之ヲ。則房宿禰ノ申サレシハ、南ミ向樣ハ今入綾舞手也　左寄見右寄見退去

上是一次ニ桴ヲ採テ本ト末ヲ返ツ、大輪一返是二桴ヲ右面懸左右伏ヲ面懸如打替舞叓如胡飲酒破見
其後諸伏肩ヲ打テ尻走テモトリ越テ打テ居テ返サシヲス是三　是ハ近房將監ノ秘曲習サル叓カ、セラレ候内也是正說ニテ候ナリ

私云、右口傳眞葛教訓抄載之、仍書入之

承元四年十二月廿日　三井寺舞兒興福寺下向ノ時爲彼饗應男舞少々侍シ内ニ、定近此手ヲ舞キ。親父之說頗ル相違如何。又承久二年六月一日　閑院内裏ノ舞御覽侍シニ息男則定此手ヲ舞又以相違尤不審云々。　古記又載之

康和四年三月廿日　高陽院内裏臨時樂、狛行高此手舞。彼〔當被任ニヨル〕賞任左近將曹〔任監〕。　諸家記同之

安元二年三月三日後白川院御賀臨時樂、狛則近此手舞有賞任左近將監了祖父之例云々

上﨟此曲舞給、四位少將教長長承三年内裏ノ殿上人舞御覽令舞給狛季貞弟子

此外拔頭

狛季時流　同光久流此流大旨失之

八幡御放生會童樂終舞時兼上元末方舞不知誰人相傳

昔ハ四人舞𡋸モ侍ケルニヤサル日記候也今一人舞ニ定了

仙遊霞 拍子十 又拍子九 又仙人河云、又仙神歌云、新樂

此樂齋宮群行之時、勢多橋上ニテ樂人參向之時奏此曲早八拍子加三度拍子二返吹ノ樣云說アリ、今世ニハモチイズ、拍子十二ニナル也、此說モアシクモ侍ス、忠拍子說アリ、此曲ニハ有三說ナリ、作者未勘出之

庶人三臺 拍子十六又八 古樂 又新樂

此樂相撲節ニアラ、ムキト云𡋸ノアリケルニシケレトモ近來ハ舞絕畢、早物也、十六拍子之時ハ四拍子加一拍子早八云々八拍子之時ハ加三度拍子打マカセテハ四鞨鼓ヲ用ベシ、曳物ニ有忠拍子、

大旨間樂拍子詞可用八拍子

古記云、

舞出自樂屋時、其ノ長甚短、漸々進ニ臺上時、其長隨テ長シ、承明門懸㞐舞畢入時如本漸減云々、幼主之時被停止畢、子細者見一條院御記、作者不見之、其舞名阿良々木、女房躰云云

有詠、詠云

アラヽキノスヱニハナサクコトシハカリハカセナフカセソ安良ゝ木ハカフチハカリニキテチヌレハコヽロカウハシ

長慶子 拍子十六　新樂

此樂博雅三位造之、モロ〳〵ノ退出音聲并ニ音樂下高座等ニ用之。

口傳云、行幸之立樂加一拍子 退出音聲加延三度拍子 管絃時ハ加早〔四度アリ〕拍子 此兩說ヲバ人イタク不知、尤秘スベシ

古老語云、堀河院ノ春日行幸ニ、興福寺ノ不開門ニ伶人立樂ヲ奏ケルニ、加三度拍子タリケルヲ、寶輿ノ御內ニテ一拍子ニコソアクレト御扇ニテヲシヘサセ給タリケルコソ目出度カリケレ、末代マデ忝コソ侍ケレ 眞葛記載之仍此事書之

一、平調ハ金商也、西方音也、亡國音也、神樂者本者平調也、依爲亡國音後ニ成壹越調ニ云々又ケヒノ宮神樂ハ用盤渉調云々 私云、比國神社ノ神樂此社斗也、羽音ハ比音也其謂之

一、秦王ノ事重テ注之 續教訓抄載之仍書之

名大定太平樂爲向立舞四人舞之略時二人舞之唐家昔百余人舞之。
此裝束在所雖無用注之。
鳥羽殿寶藏四具　仁和寺四具　興福寺四具　鴨社二(?)具　左女牛四具　住吉社四具
法勝寺供養以前ハ此裝束ナシ、而伏見修理太夫俊綱朝臣可被巧無裝束時ハ着襲裝束舞ケル也
答舞　皇仁　又林哥　又崑崙
一、基政記云、富家殿中納言中將ノ時秦王ニ論アルコトヲ豐原時元ニ召問テ云ク、正淸說ト基政カ說ト誰人ヲ用ヘキソヤ、時元申云ク、基政說ハ即是季カ說也、因之彼基政說ヲ用畢。秦王一人左近將監狛光季六波羅別當長慶莅孝博三(〇藤王ノ誤)兩人祀侯樂屋琵琶橘大君大皷
古老樂人不吹笙可仕聲歌由被仰下云〻
一、或記云ク、禪定殿下仰云ク、光季ハ無術舞人也、先年八講ニ獨秦王舞タリシ、目出カリシ叓ナリ
一、基政所見左近將監狛光季寬治七年五月於花山院一人儛之

一、舞出時吹品立入時吹上調子大方ハ乞食調ヲ用ヘキトコロニ彼調子絕タルニヨリ近來ハ大食調ヲ用ナリ、出入作法大略散手ノコトシ、但此舞ハ樂屋ノ內ヨリ桙ヲツキテ出ルナリ舞家ノ說云、此舞ハ武舞ニトリテモソノスガタ已ニ甲冑劍戈ヲ帶セリ、然レハイカニモアラ〳〵ヅヨ〳〵ト舞ベキ也、ヨワ〳〵ナメ〳〵トハ舞ヘカラス、名字ニシタカイ景氣ニヨリテ其振舞ヲ存知スヘキ叓此一曲ニカキルヘカラサルニヤ。私云　此習舞ニカキルヘカラス樂人猶此旨ヲ能々分別シテ打物モスヘキナリ。樂ハ舞ノ心也、打物ハハヤシナリ、一同ニ不得其意ハ難調不相應者佛神ノ感應アルヘカラス、舞ハ又樂ノスカタナリ、身口意ノ三業ヲモテ讚嘆申習ナリ

一、又云、童舞ニ此裝束ヲシテ太平樂ヲ舞叓アリ、近年男舞ニモ毎度者（○有因ニヨル）此義在之。古記云、放（○弘ノ誤）安九年三月廿日醍醐寺櫻會（座主當院御息宮）而間御幸アリ（朝葛）予舞師タルトコロニ俄ニ此裝束シテ太平樂アルヘキ議定アル間舊例ヲ倖蓋南北舞人彼寺ニモ存知セラレス、只ヒムツラニテハ都テ舞ルヘカラザル間、予私案ヲメクラシテ此姿ヲナスハサカタバカリヲトリテ俄ノコトニヨリテサイシヲ用意セサルアイタ、竹ノクイヲツクリテ糸本

結ノ内ニサシテ其ヲタヨリニテ角マキニマキテ其上ニ糸本結ノワナヲマキテ、其上ニフサノカタヲマキテ、フサノスソヲトカヒノホトニサケテノ、ワナリ（コシリカナモ）フサハナヲ下ヘサカレリ、自餘ノ装束ハ如常ノ見物ノ諸人俄亨ニユ、シク案立シタリトテ傍輩ヲ始テ感ジ申サル、マコトニ如此アルヘカリケレト各サタシアヘリキ、先記ヲシラスヒムツラニテマワセハ、棒トイヒ鋲トイヒ、イツレモマヒニクカリヌベシ、末ノ世ノタメニシルシヲクモノナリ

一、貞觀政要ニ云、慶善（〔亿喜〕）樂ヲモテ文舞トシ破陣樂ヲモテ武舞トス、立部伎ニ八部ノ樂アリ、其第三ヲ破陣樂トス會要ニ出タリ。

坐部伎ニ六アリ第一讌樂、長文成所作ノ内又別四部アリ、其第三破陣樂ト云ヽ又惣第六

破陣樂　立宗ノ所作ト云ヽ

一、七德者

左傳ニ云ク、夫レ武ハ暴ヲ禁シ兵ヲ散メ（戢ノ誤）大ヲ保功ヲ定ノ民ヲ安クシ衆ヲ和ケ財ニ豐ナルモノナリ、言武力ニ七德アリ、唐ノ太宗皇帝隋代ノ暴逆誅シテ天下ノ泰平ヲ致ス、故ニ其武力ノ功ヲ歌舞ス

注ニ云々、秦王破陣樂者唐ノ史記ヲ案ズルニ太宗未ダ帝位ニノボラザリシ時秦王ニ封セラル隋代ノ殘逆ヲ破テ天下ヲ定メ其功業ヲ歌フ故ニ秦王破陣樂ト云トイヘリ

一破陣樂ノ辭ニ曰、律ヲ受テ元首ヲタヽス相將叛臣ヲ誅討ス、咸ク破陣樂ヲ歌テ共ニ太平ノ人ヲ賞ス

一白氏古今ノ善惡ヲ記ス歌舞ノ樂章ニ造ル其中ニ恣〔イ姿〕惡ノ者ヲ以交〔○災カ〕ヲ招クコト今聞人ニ誡シメ行善ノ者ヲ以テ榮ヲ發事今聞人ヲ勸ムトイヘリ

一文集ノ注ニ云々、隋ノ大原ノ留守李淵ト云人アリ、天下ノ暴逆ヲ誅シテ皇帝ノ位ニツク、年号ヲ建テ武德元年戊刁日本推古天皇廿六年ニアタルトス、是ヲ唐ノ高祖神堯皇帝ト名ク、在位九年其長子或第二世民ト云アリ、又同ク帝位ニ登テ年号ヲ貞觀元年丁亥日本推古天皇三十五年ニアタルトス、則是ヲ唐ノ太宗文武大聖皇帝トス、在位廿三年御歳五十ニテ崩ス

一或云々。此曲ハ南天竺迦羅陁國ノ陶良延ガ破スル烏冑憐武ノ陣宮ヲ數千兵軍ノ形ト云々但此亊不審、當曲ハ唐ノ太宗ノ御作子細ナシ、又天竺戒日大王此曲ノ亊ヲ玄奘ニタヅネ申サセ給カタ〳〵ヲボツカナキ記ナリ、タトヘバ兇軍ヲ破ルスカタナレハ、彼ノアリサマヲウツ

シツクラレンハサモヤトヲホヘ、アマサヘ作者ハ大興班作之ト云々彼倍臚ノ曲モ北天竺ノ曲ナリ、軍陣ノ作法トミヘタレバカヤウノ古事ヲ尋テ今又ウツサレタルニコソ、大方兵ノ法ニ八ノ陣アリ

方　圓　衡　輪　鳫　行　アリ

諸葛亮(リヤウ)八陣ノ圖ヲツクルトイヘリ

天子ハ六軍アリ、諸侯ハ三軍アリ。万二千五百人ヲ一軍トストイヘリ。蛟(カ)龍ヲ旂(ハタ)トス熊虎ヲ旗(ハタ)トス、鳥隼(トリハヤブサ)ヲ旟トス、旟ヨ平聲

或傳云、玄奘三藏武德五年壬午都城ヲ出テ受戒年廿一、或八廿貞觀三年己卯中秋八月ニ西天ヘ渡歲廿六、天竺摩竭陁國那爛陁寺戒賢論師ニアヒテ法文正教ヲ傳ヘ給フ

或記云々、戒日大王ト申御門三藏ヲ召テ仰ラル、ヤウ傳ヘ聞ク大唐ニ秦王破陣樂トイフ舞曲アムナリ、御前ニテ舞ヘキヨシ仰下サレケレハ、三藏立テ舞給ヒケリ。其ハ一向古樂ナリトイヘリ。貞觀十九年乙巳正月廿五日三藏カヘリ給フ、往還ノ間十七年ミル所ノ國々一百三十國トイヘリ。高祖卽位十五年二月四日三藏卒年六十三ト見タリ

但上件ノ記等ニ三藏當曲ヲ舞給フヨシヲノセタリトイヘドモ西域傳、慈恩傳、エンノ行者記等イツレニモ此事ミヘズ、然ハ先賢達若ハ古人ノ語ヲ信ジ若ハ僻記ノ說ヲ見テカキノセタルトヲホヘ侍レトモ諸記ニ見ニマカセテ載之、正說トハ思ヘカラズ

私記

三伏の夏もはやすぎ一とせを待し二星の契も又遠わたりに立へだてつゝ漸闌の秋風身にしみて萩のうへの露もこころせきまでをきまよひ、かへのみきりのきり／＼す處々になきいてゝ、あはれもよほす心ひとかたならぬに、老のねぶりいよ／＼夜をのこすおりふし多年の知己來て閑談し侍る次に、うき世のさだめなきならひ、今更の樣におぼゆ。昨日見し人はけふむなしき數にいり、けふくれば又あすはいかならむ朋友にもはなれ我も人にあはれまれ侍らんかしなと申あへるに、この世のあたなるさかひは、いまにはしめぬ事也。これにつけても適うけかたき人身をうけて、この時むなしくつとむる事もなく、また三途の火坑にかへらむは口惜次第也、幸に佛五百塵點劫のさきより番々世々に御利益ありしに取ても正像末の三時をたてゝ正像二千年の間よりも末法いまの時の衆生をふかくあはれませ給て、衆生の機にしたがひて種々に法をとき給といへども、たゞ壽量品(シユリヤウホン)を說て本末有善の惡

人に始而南無妙法蓮華經こ唱させて次生に佛に可成この御志深重にて下種益の導師をさためさせ給、今の日蓮大菩薩地涌四菩薩の后身こして世に出させ給、この正法にあひたてまつるとなをさりの機緣純熱(熟ノ誤)にはあらす、然に當時法花宗こいひて念佛をこなへす、社參佛詣を留てすがた作法は法花宗ににたり、さていふ事をきけは本迹を混合し天台過時の法門にひこしくして未得謂證なる人數をしらず、あさましきわさなり。いかにも〳〵後世の事は我慢偏執をやめて能〻正意を可聞、不然者傍(○謗ノ誤)法の人に等かるべしこ語尤のとはり也 道のとにあらざるに如此注事無用と後者の仁可思愚意ニハ隨分教訓也

飲酒樂 拍子十二 一說十 古樂

此樂長者殿下ノ御春日參詣之時鹿薗院進饅(マン)飩之時奏ス此曲 加三度拍子 ウチマカセテハ酣醉樂ヲ渡吹也、例ニヨリテ此樂ヲハ用ヒラル、也、近來ハ十拍子返〻吹之、奥十拍子ヲバ 半帖云、又二帖云 又此曲 入乞食調性調曲云 或公卿被仰ニハ、此調ニテハ飲酒樂(ヲンシユ)云、一越調ニテハ飲酒(イシユ)樂トヨム、文字ハ一ナレドモ調子ニヨリテカワルナリ、

此樂作者未勘出之

私云、此樂モ當時不用之、雖然有譜仍少〻アリヤウヲ注者也、絶タルハセメテ故實斗ナレトモ知之テ可用勿論當時吹物叓者不及指南歟

盤涉調

樂書要錄曰、夫水脩理歸下進退不解日夜不レ已、其位北方其時主冬其聲中レ羽、故智君在上昭然猶見化道之原得失之幾樂當宮於黄鐘用管和樂於北郊野也

禮記月令曰、孟冬之月、日在尾昏危中ス旦七星中ス孟冬者日月會於析木之律、而斗建亥ノ辰也其日壬癸壬之言任也、癸之言揆也、日之行冬、北黒一道閉藏萬物、月爲之佐時萬物懷任於下、揆然萌牙、又同以爲日名焉其ノ帝顓頊其ノ神ハ玄冥此黒精之君水官之臣自古以來著德立功者也顓頊高陽氏也玄冥少皥氏之子曰脩曰熙爲水官其蟲介介甲也象ル物閉藏地中龜鼈之屬其音羽三分商去一以生羽、〻數四十八、屬水者以爲最清物之象也、

冬氣和則、羽聲調

樂記曰、羽亂則危其財匱、律中應鐘孟冬氣至則應鐘之律應〻鐘者姑洗之所レ生、三分去一、律長四寸二十七分寸之二十、周語曰應鐘均利〻器用俾〻應復

秘說云、世尊盤涉調私記注之

蘓合香　有甲　大曲　新樂（イアリ又蘓甲　甲別之　諸肩袒）

序四帖　一二三四五帖　破三帖　一二三帖　急五帖但初一返非舞手　此説ハ皆舞家注之當家ニ用名目ヲ人ノ前ニテモ可沙汰之

此曲ハ陳後主所作歟　一名古唐急　或書ニ曰、中迎（○印ノ誤カ）度ノ樂ナリ、而中天竺ヨリ出タルカ、抑阿育大王病ニワツライ給タリケルニ、蘓合香ト云草ヲ藥ニ得不給ハ存命カタカルベシト申ケレバ、一國ノ大臣ニテモトメケレトモ大方モアリカタキ草ナレバ求エズ、經ニ一七日一此草ヲ得タリ、卽病ヤミ給ニケレバ悦給テ作給云々僊ハ育偈（ママ）云ケル人此草ヲ甲トシテ起座舞ケルニ、一殿ノ内匂カウバシカリケリ、此以二草名一爲樂名、又云、蘓合香出蘓合國諸香草煎タル汁ノ名也、此朝ヘ渡人柏原天皇御時和邇部嶋繼ト見タリ

序五帖内一二帖拍子各廿　今世ニハ一帖十二拍子二帖トハ渡間之道ニテ忘了、而猶有光申云、件曲者慥ニ祖父行光明暹已講習傳了、相傳笛譜明白也云々但此曲舞家ニ不傳、又諸家ニモ不同尤不審也

初二拍子序吹物第三拍子ニ樂拍子成初拍子ノ輙コ有二説、一説五、一説七、第二十二　第三十八

又十六第四十八又十六第五廿四又廿六第六十二第七十六第八十六第九十六第十二十又十八終序舞天留也無拍子奥八拍子殘故云々

抑知足院禪定殿下光近ニ被仰下云、此終大鼓一可加打、光近申云、十二拍子樂十三拍子ニ成候ハン事イカヽ候ヘカラント申上之處、舞止習也、其習頗可多ト御定了仍此家ノ今ハ秘事トスベシ云々　近眞記、承久二年水無瀨殿之舞御覽日以狛近眞相傳、但馬守源家長打此說畢、其日急ハ樂三返ニ終切ニ加一拍子タリキ、此序ヲ略舞樣有二說常初五拍子乃至七拍子舞也、其說時打留大鼓不打之、一說ニ壹ノ大鼓ヲサケテ打之、

二帖舞樂トモニ不傳可尋

三帖拍子廿六又云廿二初拍子二カツコ第二三四カツコ第四五八カツコ第六七カツコ第七八四カツコ第九十八カツコ第十一七カツコ第十二ヨリ十五ニイタルマテ八カツコ第十六四カツコ第十七八各二カツコ已

上三拍子謂之籠拍子　第十九ヨリ廿一ニイタルマデ八カツコ第廿二四カツコ第廿三四各二カツコ已

上三拍子謂之籠拍子第廿五八カツコ末一拍子序ニスル也、一說第廿六八カツコ　返吹時可用之

此終有一說如一帖之終序吹ケ打、大鼓一、終不打

則房宿禰說曰、管絃了時返吹說アリ頗有興說也。第十八拍子ニ返也無何度云ヿ可依興返度不打籠拍子或人云、口ヘ返吹云、此說近眞不習云〻（當家ニモ不用之）

又或管絃者說云、此帖ヨリ唐急ヘ連吹說有ト云、是等ハ本說ニハアラズ、イタレル先達ノ當座ノ興ニシタリケルヿ也。然而今ハ秘說ト申トカヤ

四帖（拍子廿六　又云廿二）一說云（拍子　廿七）初拍子（二鞨鞁又云三　カツコ爲秘說）第二三（四カツコ）第四五六（八カツコ）第七八（四カツコ）第九ノ拍子ヨリ十五拍子ニ至マテ（八カツコ）第十六（四カツコ）第十七八（各二カツコ）已上三拍子（謂之約拍子）第十九拍子ヨリ廿一ニイタルマテ（八カツコ）第廿二（四カツコ）第廿三四（各二カツコ）已上三拍子（謂之約拍子）第廿五（八カツコ）末一拍子序（ニス）廿七說時ハ序吹首大鞁一打加之

古老說云、此籠拍子ハ兩帖並時ハ三帖ニハ止テ可打四帖ト申サレハサヨウニヨリ〳〵打侍トモ舞家ニハサハ不習ヿニテ侍ハ可打兩帖也

私云、右籠拍子兩帖ニ四帖ニ可打說當家ニモ不用說也、然トモ人打之ヿ有ヘシ、サル說モ有コト、可思失錯ニテ三帖ニ不打トモ眞覺悟ニテ不打トモ思外トハ不可思也　一帖ニ打ト申故人ノ心モ籠拍子ヲ賞翫シタルヿ也、無下ニ無謂トハ不可沙汰說也

又云、三四兩帖竹ヲ二ニワリタル樣ニ聊モ不替有說第九拍子ニ舞ノ手也尻走第十拍子居ル右膝突如玉樹終於
此說者光季之流之外他舞人不可知之說也樂一內ニ新古之拍子難有說ナリ
五帖拍子廿三又說廿二初拍子三カッコ第二三四カッコ第四五六八カッコ第九拍子ヨリ十九ニイタルマデ八
カッコ末四拍子序ニス又序吹ノ有大鼓三說一說第二大鼓止一說序吹之成處下四帖ノ廿七說時此說
ヲバ可用颯踏アリケレト延暦ノ遣唐使舞生和邇部嶋繼歸朝之時忘之云々
古老說云、依絕颯踏今者用入破也有口傳入破三帖拍子各二十延タル四楇鞁物ナリ、此舞一返乃至
二返略舞時第三帖末四拍子ヲ入打替テ舞終也如此樣常人不知能々可秘之則急速〔遲速〔イ〕ニヨル〕舞也唐急五帖拍子各廿初一
返者謂之空立（ソラタチ）无詐（サ）拍子有之歟、不舞踏猶許也舞家所習者拍子廿一初拍子三カッコ第二三四四カッコ第五二カッコ謂之
間拍子第六七八九四カッコ第十二カッコ謂之間拍子第十一二三四四カッコ第十五〔イニテ補〕六二
カッコ謂之間拍子第十七八九廿四カッコ第廿一二カッコ謂之推（ツツ）〔○推ヵ〕拍子又間拍子同事也自喚頭加
一拍子者常說從第二返之始加拍子者爲家秘說也終帖加拍子可爲秘說歟、舞終一拍子序舞、
又間拍子處加拍子依吉〔不吉歟 訓抄ハ吉〕酒任說云、序吹樣中六〔〇丁〕リ六リリ一說云、中六〇丁六
〇丁中火中リ、古老說云、昔ハ此急末ヲバ延サリケリ、中古ヨリ付舞家說延之、忠拍子之時ハ

不可延（破急ニ忠拍子ヨリ樂許也）舞此説ニナシ舞出入ニ破ヲ喚頭ヨリ吹出テ道行トス（中半返但小部氏説ニハ可返吹喚頭）
貞保親王説ニテ返入之時加三拍子（非常説）其説ニハ七鞨鼓ニ約所二所加三帖也、
抑此四帖ニ有忠拍子説舞樂共ニ秘㕝（加）中ノ秘説也、初十拍子（忠拍子吹爲古樂物）此内第十打約拍子（謂之古學）
揚拍子カッコ秘説在之以下十六拍子（樂拍子吹爲新樂物）此舞手頗替第四拍子ニ前走、
長治元年八月一日堀川天皇御幸御八講被行ケル次日弘宣殿ニテ舞御覽アリケルニ四帖ノ忠拍子説光季ガ仕タルニ勅定ヲ承テ左大弁基綱朝臣以古唐急入音聲トシテ入綾ヲ可仕ト仰ス、光季奉勅燕姫周郎出ユキノタモトヲマハセリ。
天皇頗御感アリテ重被勅下云、御前外此説更不可仕（自喚頭吹出テ次度ハ如吹出吹爲習也、一説第二返様謂ハ此様ニハ吹出一返喚頭一返吹也爲秘説是急第三返時可吹）
承久二年九月十九日水無瀬殿舞御覽日任長治之例光眞奉勅入綾ノ曲舞之（青陽曲謂之似青海波舞也）大納言從二位兼中宮權大夫源時中横笛譜之裏書云、寛和二年十月十三日太上天皇大井河ノ邊ニ御遊覽アリケルニ、古唐妙音樂ノ急ヲ奏ケル樣々數返ニヲヨツテ殊樂水音ニ應テ面白カリケレハ、攝政守ニ綸言ノ趣ニ時中朝臣ニ被仰付ケルニ、紅葉ヲヽリテ揷ニサシテ船舳ニ立出

テ飜廻雪之襟翔燕趣周節曲舞姿好茂躬高トイフモ時中ノ一曲ニハスキシ仍仰翫賞八座烈シ
畢。昔ハ上﨟ノ中ニモ如此目出人ノ御ケルナリ

古善徳ニ此曲ニ者

進物所布勢忠雄　大宰大貳源行有朝臣

秘説曰、唐急ハ早八撥鼓物也仍加三度拍子云々

此四帖ノ只拍子ニ疫病消除ノ説ト云事在之、何ノ所ヲサシテ謂ニヤ口傳在之哉、唯一反ヲ
吹ハヲノツカラ其所ニアタルベシト云

或云、（弘詞案）白梅ヲ瓶ノ門出軍陣ナンドニ用、又消諸毒ト云一核ノ内ニ所アリト云コレヲ知スハ
アルベカラズト思、所詮一ヲ丸ナガラ食ハクイアタルヘシト云、同ハ所ヲキ、度ト云尤也、
此疫病消除ノ句ノ事可似之、不知者一返可吹當家ニハ傳之、荒序已後ノ口傳也、
御堂關白大井川ニ逍遙シ給時、作文管絃和歌船アリ、公任卿ハ和歌ノ船ニ被乗侍ラトナン、
遲參アリケレバイヅレノ舟ヲヨスベキト尋侍ニ、イツレノ舟成トモトアリ、詩哥管絃ノ達者
也、後代ニハアリカタシ、殊勝ナリ、而ニ和哥ノ舟ヲヨセ侍ニ、被乗侍テノ哥ニ　朝まだき

嵐の山のさむければもみぢのにしききぬ人ぞなき　拾遺の秋部に入侍勝事也、此心を
　思ひを三の河やわたらんと云句に
おそくる大井のさこの舟おそひ　専順句なり、かやうの㕝までしられ侍事と思ひ侍る載
之樂道の者もこのやうに万にわたりて物を覺て上より御不審事何事をも能々申上度子細也
又黄河一清トいふ㕝を匡房よまれし哥
　大井河千代に一たびすむ水のけふのみゆきにあひにけるかな
先年名所の百首を五十番にわけて御判を三條前内府家（于時侍從大納言）へ申入侍に勝字被付之
　よしのかは千代に一たびすむはあれど濁時なき御代を知哉
一、蘸合トマリ盤渉タルベキニ壹越ニテ留㕝不審ノ由各尋給ニ當今御稽古之時口傳申上之
後少々予弟子達ヘモ申、景通景範已下知音之㕝當時奉公御用ニ立之間傳之、大方秘㕝第
一トモ云ベシ、前ニ如注此草難得間彼御惱ノ時被載付時ノ樂タルニヨテソウノ樂ヲ水音
ニテ留ヲ壹越ニテ作、其謂ハ木草ヲウヘ付ニハ水土ニテナラデハ不叶侍間根サシト、ム
ル所土ノ聲也、尤也樂ノ才學ナカラン人ニ不可授

一、序ノヲク七拍子ノ大鞁一打落失錯アルベシ、其時打入所アリ失ニアラスシテ說ニ成コレハ當家秘說中ニ秘叓也少之コレモ口傳セシ仁在之（景範也。）乙乙下下乙〇工工（下丁乞●コレ打入所也）乙乙下下乙

一、急ニ三度拍子加之說秘叓也、其時間拍子ノ所ノ大皷有口傳之廻忽ノツキ拍子長慶子ヲ（本ノツホ）三度拍子ニ加之如ナルベシ、又ソウヲ一拍子ニ加テ間拍子ノ所ハカリニ如此打說アリ、（一二乞下下）ソウヲ三度拍子ニ加說ヨリモ秘ヘシ、其謂ハ三度拍子ニ加時ハウタテハ不叶ナルベシ、下（スミ）大コヲアテ、序吹圏一拍子ノ時如此ハ說也、早八拍子物ト云時ハ三度拍子ノ說ニナリカタシ、延四拍子ノ時三度拍子ニ加ヲ說トスル也、間拍子ノ所ハカリニ打說ハ早八拍子ノ時モ延四拍子ノ時モワタリテ說タルベキ謂也、如此重々ニ心得ヲナスコト當家嫡家ニ付タル說斗也

一、三帖ノ七拍子ノ鞨皷四拍子ノ所已下口傳在之於鞨皷者取拘テ不習ハ難傳間不注之

一、三帖ヨリ急ニウツル叓　三帖數反ノコト有口傳之、急ノ只拍子譜ニ注之（圏又奧序吹說アリ）

一、破ノ二返ノ說　急三返ノ說急入時之分別皆ゝ在譜、雖然不授師說者似タルコトニテ可侍深重ノ口傳在之、若燕合聞調合ノ時樂所望スル人アルベシ、其時ハ急ヲ用之口傳在之、四帖ハ不吹トモ心ニ可誦懇望アラバ可吹之

一、鴨長明作無明抄ト云一札アリ、是まことに哥道に妙なる故實どもを書載たるものと覺侍るにとりて人を難ずる事の侍る愚意には心ゆかず、其も難をかうぶるべき程の人ならはさもありなむかし、俊頼、俊成、清輔この三人は上古をはぢぬ人にてまし〳〵侍は無用也、いかなる人にもいさゝかの僻事は有べきなり、一期の名譽に少のとがはのがるゝものなり、則哥にも平人のうたにはとがめて難になる文字も、てにをはもくるしからぬにて、名哥になりて集に入侍有也、如此申う〔団ニテ補〕へは又予長明を難ににて同さまなれども後葉のため也、爰に此抄にきとくなる事をしるし侍る、

抑樂の中に蘓合といふ曲あり、是を舞には五の帖まで帖々をきれ〴〵にまひおわりて後破をまふ、やがてつゞけて急をまふへきに、急のはしめ一反をはまことにまふ事なし、かたのごとく拍子はかりにあしをふみあはせてよりやすみつゝ二反のはしめより、うるはしくはまふ也。このけすくひはたがはね半臂の句の心なり、哥と樂と道ことなれどめでたき事はをのづからかよへるなるべし。かよはしてしらざらむ人は何とかは思わかむ、哥のごとく兩方を心みて思ためには、ことに興有事也されば蘓合をば半臂の句あるまひといひ、哥のさ

まを藾合のすがたこもいひてんかしこ侍る、これは舞樂の家のものもあさはかなる一說うけさるはかりのものは知がたし古人中人までは如此ものをひろく何事にも心を付て覺侍ればかやうに取合侍れ、上古にもさたせぬ事のしかも理に叶事のしらるゝ事有也。此舞の作法前に注、唐急五帖初一返は謂二之空立一こ侍ること也、不可說也、この事見侍て、あまりに感にたへ侍に人を難ずる事のこが又かくれたり、かやうならばわろき事をばあらためて後學末生のためを思ひて、人の失をもくるしからぬやうには少々可書歟、其はその身に取ての事也、只世に名をえたる人の事を、よろづに其の藝のすぐれたらむにさしゆるすべきなりこおほゆ、有文にも大節身に有時は小過ありこいへごも凶こせずこいへるがごし歌の半臂の句事遍昭哥に

たらちねはかゝれこてしも烏羽玉の我くろかみをなでずやありけん

右かゝれとてしもといひて、むば玉とうちのべたるところをいふと有尤義也

南無妙法蓮華經

豐原朝臣統秋　華押

萬秋樂　有甲　近代不用　准大曲　新樂

序一帖 拍子二十六　破六帖 拍子各十八

此曲ハ佛世界曲也、序破各別ノ曲ニ侍トカヤ。其様マチ〳〵ニ侍ル、先自百濟國ノ波羅門僧正所ニ傳來ノ也。爰左大臣源信ウタカイヲナシテフシ給ヘル夜ノ夢ニ、天ニ音アリテ云、汝ウタガフ事ナカレ、此序ハ五妙音樂ナリ。夢サメテ彌掌ヲ合テ貴給ケリト申傳タリ。

一、或記ニ曰、昔肥前國ニ肥沽崎ト云所ハ日本ノ西南ノ月浦ノ東北ナリ、異ナル樹奇キ岳アリ、其所ニ神マシマス、西ハ海ノ渚ナリ、其所ノ古老物語云、自昔此所ハ觀音地藏ノ來給砌也、于時叡効、勝行ト云二人僧聞此事ヲ鹽ヲ斷、穀ヲ斷、火ノ煙ヲワスレテ共行シテ二大菩薩ヲヲガミタテマツル事ヲ祈念シ申ニ、一七日ムナシク過、又猶心ヲ一ニシテナク〳〵申ケレハ、第八日ト云晨朝ニイタリテ、小船ニ乘タル人前ノ海ヲワタル。音樂ヲ調タリ。其音今ノ金商万秋ノ曲ナリ。又文ノ誦ヲ聞ハ其詞云、

每日晨朝入諸定　入諸地獄令離苦　无佛世界度衆生　今世後世能引導

此四句ノ文ナリ、二人僧ナミタヲナカシテ合掌禮拜ス。ハルカニ西ヲサシテ音樂雲ノ上ニ聞ト申傳テ侍ハコトサラニウタカフベカラス

破ハ日藏上人唐渡ノ時唱哥ニテ渡シ給ヘリト申處ニ、寬忠和尚都率內院ヘ參詣之時、菩薩聖衆ノ曲ヲ聞給テウツシ給ヘリト申傳タリ　コノ和尙ハ常兜率ヘ通給ケリ、而波羅門［区］ニテ補僧正ト此和尙ハ師弟ナリ、序破有ニ其謂ー

序一帖 有三半帖　初半帖 拍子十　中半帖 拍子八　後半帖 拍子八 又說十　舞家ニ習所ハ初半帖後半帖合十八拍子 常ニハ舞ナリ中半帖ヲハ舞ヲ秘、後半帖ヲバ樂ニ秘ナリ。此ノ躰ニハ人不知。太鼓ニ有三、打樣。第一 常說 第二サク說 第三廿八拍子說

承元元年最勝四天王院御供養ニ此曲ノアリシニ、則房宿禰予ニ當曲ヲ申合セラレシ內ニ請光將曹六人ノ舞人ノ內ナリ、仍人數ニ立ト思ニ中半帖ノ秘說ヲハトトメテ後半帖ヲ片答舞ハム思ヨシ候テ其樣ヲ用ラレタリキ

狛光季說曰

此序ノ後半帖ニ十拍子ノ說アリトシルセリ。舞ニハ終ニ手ヲ舞ソヘテ終一拍子居タリ。

樂ニハ太鼓ヲ今ニ打加タリト見タリ

嘉祿元年八月廿四日夜夢相云、古老來テ曰、此序ニ太鼓打加ハ僻事ナリ、內院ノ曲トテ習タリシトテ吹ヲ聞バ

上无黄鐘　盤渉双　　　　双上无壹越　下无　平

丁夕中　圂工乙由一圂リタユ中一圂タユ工乙圂リ下六五リ五乙工乙圂リ由干火下圂五火下乙下圂リ夕五リ由乙圂夕火下乙几圂五干六由圂一中

リユ火一圂リ中。（朱）

かく吹たるこそめてたけれと云テサメ〳〵トナク。予モタツトサニナク。モロモニナク

ト見テサメ畢

光季詞云

これはおかしきことにては侍とも、昔モ夢說なむと申て世にもちゐられて候め（露タ〔不〕ニヨル）り。今もさなるべき事ならねども、人によることにて侍ハ、わがみ此道ニいたらぬうへ世の末の物わらひになるへし。されどもたゞわがながれを傳人々ばかりめでたかりける事かなとあひせらるへきなり。仍其ノ吹樣をば譜にかきて侍也、努々披露有べからず

知足院禪定殿下仰云、皇帝團亂旋ハ以ニ小部氏笛一爲レ本ベシ、ケタカタク仕ユヘニ蘇合万秋

樂ハ大神氏笛爲レ本ヤさしく仕ユヘナリ。小部ノ万秋樂ハ其ノ吹樣(マヽ)ト万秋樂にあらざればきゝたくもなし、其上おくまでハしらぬ曲なり。

又被仰云、當曲ハ實ノ佛世界ノ曲ナリ、シカラバ舞人モ樂人モ心をスマシテ天上世界ノ曲ヲ思ヤリテ舞ベシ、アラミミシキハ心得ヌコトナリ。

入道右府說曰、於此曲者彌勒佛出世シ給ワン時、導師ノ登樂ニテアルベシ、タシカニ其ノイワレヲ見出タリ云々

笠置寺ニ恒例ノ八講ニ有ニ舞樂一故辻判官則近参詣ノ時ハ必万秋樂ヲマワレケルハカヤウノコトヲシンセラレタリケルニヤ、閉眼ノ時モ臨終正念ニシテ念佛數百返唱給へり、タノモシク目出ク覺侍ル。私云、末代ハ此義アルベカラズ、則近サテハ過去ニ法花經ヲ持仁歟、三百年已後ハ本末有●〔イ〕ニテ補〕●善ノ惡人ナルベシ、末法ニ入レル故ナリ、ヨモ釋迦如來勘チガヘサセ給ハジナレバ末代ハ音樂舞道ニテモ彌陀念佛ニテハ〔圏モ〔イ〕ニヨル〕佛ニハ成マジキ也ト可思。

狛光季ノ申サレケルハ此舞ノ序破共ニ終居ハ付屬ノ袈裟ヲ給ハルヨシト申傳タリ、今世ニハ序ニハ不居。

權大納言藤原隆房ノ最勝四天王院供養日此居所ヲ且給テ付屬袈裟給ル手御覽候ヘトテ涙ヲ

ナガサレテ侍ケルモコトワリト覺テ目出コソ

破六帖拍子各十八 一二三四五六帖皆連テスル物也、但五帖ノ中半ヨリ於世吹有三説 一説第九ロタ由リ。タ火エ五。タ由五とリ。干六。丁六。拍子、一説第八第九拍子、一説第 一拍子早吹ナリ第一帖常由利吹物 一返舞時者半帖末八拍子加三度拍子第二由利吹 舞二返時ハ末十拍子可加拍子又一二四帖ヲ大治二年常樂會舞時ハ四帖ノ始ニ加二拍子光時説若又四帖頭ヨリ於世吹之説ナラバ第十一拍子ヨリ加拍子有先記故ナリ第三帖由利吹 第二帖終ヲ六氣延テ三帖ノ始ヲ約ツヽム者爲二秘説一

教訓抄又云 此帖ニ初太鼓十七鞨鼓ニ打説アリ、嫡家ノ秘説ナリ 舞ハ一寄シテ舞也。

狛光近之自筆ノ舞譜ニ有二此説一爰笛吹様カワルベシ雖傳舞之不習于笛之仍可尋樂家與

第四帖由利吹、但彌勒佛之説云、此帖ノ始ヨリ大曲吹ニ成ナリ。

又云、五帖ニテ終ル説之時ハ八拍子ノ口ノ穴ヨリ於世吹成ナリ。

此兩説ハ舞樂トモニ常曲ノ中ノ秘事アリ。嫡家ノ外伶人不知此説ナリ輙不可授他人者等秘説殊此口穴ヨリ於世吹云々

第五帖由利吹、但四帖ヨリ大曲吹ニ成時ハ此帖ノ第一第五拍子兩所ニ打三度拍子謂之万秋樂鷲拍子、其後不

可加拍子爲一說、宗輔
大政大臣御說ナリ。
保延元年內裏舞御覽用ニ此說ヲ、

當曲ニ雖レ有ニ多說等一此〔ハ〕〔イニテ補〕ノ流ニ殊ニ此說ヲ穩スルナリ

第六帖 大曲吹者 抑此帖ニ有八箇條說 樂拍子六 只拍子三 但舞曲五ケ說相傳之
光時秘譜第十一拍子・十四拍子兩所三度拍
子殊可謂秘事、但可付六帖四拍子說也

一說 五帖之半帖ヨリ於世吹ニ成テ六帖ノ初大鼓八ヲ六鞨
鼓ニテ第九拍子ヨリ加三度拍子、常說舞說同之

一說 五帖之第九拍子ヨリ於世吹ニ成テ六帖ノ初ヨリ七拍子ヲ六カコ
ニテ第九拍子ヨリ三度拍子打謂之聲哥万秋樂、日藏上人傳之

一說 五帖之第八拍子ロ穴ヨリ於世吹ニ成テ六帖ノ初ヨリ六拍子ハ六カコ第七
拍子四カコ第八八鞨鼓卽打三度拍子末一拍子序ニス、謂之金商万秋樂
辻家ニハ以此說第一爲秘說　序吹說
惟季說中リ　夕〇丁中リ　〇有賢說
中リ夕〇丁中〇丁中火〇中リ〇

一說 五帖之第八第九之間夕穴(ヒクノ)ヨリ大曲吹ニ成シテ第十一拍子ヨリ殊早成テ六帖之初二拍子六鞨鼓第二四
カコ第四五六カコ第六延八鞨鼓第七八六カコ　第九拍子ヨリ加拍子末二拍子序ス謂ニ之慈尊万秋樂一博雅說

一說 并信大臣夢說

四帖之始ヨリ大曲吹ニ成シテ五帖ノ第十一拍子第十四拍子ニ打三度拍子 第六帖之始ヨリ殊早成シテ始ニ拍子六鞨鼓第三四揭(マヽ)鼓第四五六鞨鼓(マヽ)第六八鞨鼓第七四鞨(カツコ)鼓第八八鞨鼓即加拍子末二拍子ヲ序ニス。干リ●六〇丁中リ〇丁中夕由リ〇丁中丁中火〇中リ〇又說夕由中〇五干六丁中〇中リ夕〇丁中リ〇此說号弥勒佛之說日藏上人傳謂之慈尊來迎樂又二四八說トモ云

一說 五帖之第十一拍子ヨリ於世吹ニ成シテ六帖ノ始ヨリト(通)ヲシタル早八鞨鼓ニテ第十一拍子打三度拍子舞樂共如 青海波ニ寄舞此說ハ大神惟季ノ家ノ秘說ナリ謂之御前說謂之大和万秋樂、會要云尊勝寺供養在此說不分明舞人光季 行高 光則 光時 笛惟季許ナリ。彈物ニハ無說。

已上六ケ說舞樂無相違、但於當曲有種々異說古人語曰、此曲ノ一ノ難ナルベシ。 都六帖以三說可爲正說者也、六鞨鼓一說八鞨鼓一說二四八一說

一說 忠拍子說

第二帖終氣ヲ二氣止 六カコ 五帖ノ始ヲ不延六鞨鼓十一拍子ヨリ於世吹テ六帖ノ初一拍子八鞨コ第二三四五 六カコ 第六 カコ 第七 六カコ 第八已下 八カコ 第十一拍子ヨリ加拍子謂ニ之元歌万秋樂ニ南宮說并惟季說同之

一說六帖始六拍子（問六カコ第七四カコ第八八カコ第九拍子ヨリ加拍子　箏說同之）

抑自第一帖始至六帖終ユル〳〵トスル說ハ等琵琶（本說ニテ侍云々）予（眞葛也）ハ此說不習（如万歲樂云々）但故帥大納言家ヨリ下給畢。

保延三年三月四日宇治ノ小松殿ニシテ知足院殿ノ御箏常曲ヲアハセヲワシマサン料ニ伶人メシアツメラレテ皇帝已下ノ秘曲ヲ仕シ時、元政訴申上云、小部清正此曲ヲ不傳々ニ可被聞食申處ニ被仰下云、故堀河院ノ御時父正清ニ御尋ノアリシニ正不知申上畢、其上元永二年之比宗俊大納言家ニ正清（府生時）召居給テ万秋樂一具六帖ハ忠拍子ニツカマツルベシト仰ラレシ時不及力候不習傳由樣申畢、其上ハ誰人ニ習傳侍リト御尋アリシニ無申旨シテ被留畢。同四年春頃大殿下ヘ參テ清延可下預之由切々ニ申入ケレドモ不下給テ被仰出テ云行則ガ許ニ行向テ秘曲ニ吹替ヨシヲ承テ行則住宅ニ來テ御定ノ趣ヲ語ル、仍荒序ノ笛ニ吹替テ悅上洛畢（日記タシカナリ）其後元政モユルシテ侍ナリ。此曲ノ說々ハ惟季ノ正流ヲ得タリ、其上堀川院并宗俊家舜家無相違樣ヲシタヽメヲワシマシテ光季ニ下給畢、仍兩人ノ任記錄注之、

又參向參音聲奏此曲（懸鷄婁時ハ新樂也　懸一皷時ハ古樂也）返吹事第二帖ヘ幾カヘリモ返吹ヲ口傳トス、ヲクヲ秘ス

ル故也

堀河左大臣ハ臨終ノ時慈尊來迎樂耳ニ聞テ都率ニ往生給ヘリ　實忠和尚ハ唱哥万秋樂室ニ聞テ聖衆ノ來迎ヲ得給ヘリ、爭此曲ヲシラン輩上生内院ノ臨ウタカイ侍ベキヤ　近眞（スミ）予臨終ノ時必可奏此曲念佛ノ中ニモ自令聲歌ト云　私云、當時衆生此義不可有也、如前載音樂ヲ非（アラス）レ輕時尅ニヨルト云

萬秋樂異名

大和万秋樂、金商〻〻〻、慈尊〻〻〻、慈尊來迎樂、曼荼（マンタ）〻〻〻、絃哥〻〻〻、元老〻〻〻、唱哥万秋樂、神仙〻〻〻、仙哥〻〻〻、見佛聞法樂、慈尊不（〔石〕武○敎訓抄モ一不レトセリ）德樂、菩提樹下樂、慈尊樂、出世成道樂、

已上十五名前ニ所レ載說已下近眞敎訓抄ニ載之旨ナリ

私ニ云、當家ニハ廿五異名在之、但其内御前說ト号テ勝タル說シカモ箏琵琶被用合タルヲ見計テ可申沙汰異ナル說トテ山寺ナントミ作出タル說笛ニモ絃ニモ合ガタキ說ナンドハ無詮ト覺ユ、サレドモ說々中ナレバ深ク秘テ可傳之

知足院ノ禪定殿下ノ御說云、龍花三會ノ曲、出世成道ノ說謂之彌勒佛說也　序三半帖初會宛　破吹一二

三帖〔中會宛〕急吹四五六帖〔後會宛〕如此ワカチテ内院ニハ奏ナルベシ。又九品ノ淨土ニワカチタランモ目出カリナントゾ被仰ケル。是ニツキテ私ノ（冝葛）說ヲ一愚案仕侍ナリ

序一帖半〔拍子廿六〕太鼓夕（ゴク）說ヲ所用之、破一二帖連テ第二帖第九拍子〔加三度拍子〕一段ニテ止ベシ。又三四帖連テ四帖ノ始ヨリ於世吹ニシテ〔(不)以下アリ〕第十一拍子ヨリ打三度拍子一段ニテ止ベシ、又五六帖ヲ連テ五帖ノ始ヨリ於世吹ニシテ〔(一)以上〕第十一第十四ニ打三度拍子、六帖ヨリハ殊ニ早成テトヲリタル六鞨鼓ニテ、第八拍子ヨリ加三度拍子、末一拍子ヲ序吹ニシテヲワルベシ一段

是ハ私ノ地藏講ニ一度供養シマホシクテカクワリテ侍ナリ、是モ自由ノ案立ニモ不侍粗古（有說）說〔(不)記〕ニモ侍ル歟。又輔〔〇教訓抄ノママ〕入道家〔定輔〕御講ニハ桃李花ヲ二帖ヅヽ三段ニワラレテ侍キ、雖無其說管絃ニ長ゼル人ノセサセ給シ事ナレバ伶人等目出說トコソホメ侍シカ

狛光近　保元妓女ニ舞ヲ授說

序一帖〔拍子廿六〕序ノ終ニ居タリ。破二帖〔拍子各十八一二帖ナリ〕第九拍子〔加三拍子〕終居タリ。急二帖〔拍子各十八五六帖ナリ〕第六帖第三拍子〔前走〕第七拍子〔居走〕第八拍子ヨリ加三度拍子終居タリ〔(國)ナク(不)アリ〇案 急二帖拍子各十八五〕

云〻後人ノ記入カ)
六帖也、第六帖第二拍子前走第七拍子戻走第八拍子ヨリ加ト三拍子

是等モ少納言入道(通憲)弥勒講ニ表スル龍花三會ノ説トアリ、此説モワラレタリケルト見ヘタリ。

然者今ノ説雖ミ爲ニ自由ノ説 アトアル叓ニテ侍ナリ

私云、説々ノ譜ハ別紙ニ載之、口傳之後ニ可見之

問當曲於世吹叓樂拍子只拍子無替事可同樣哉 答樂拍子之時於世吹モ樂拍子ナルベシ、又只拍子ノ時ハ於世吹モ只拍子ナルベシト云々、鞨鼓事隨樂早可打成也無別事云々

此曲於世吹ニナル時笙ヲ置可依万秋樂之説歟但最勝四天王院供養時(承元元年歟) 召道之長者有舞樂之評定之時件五帖於世吹之所宗賢之所存与利秋之所存聊相替(宗賢之説於世吹今二拍子ハヤキ歟) 仍利秋笙ヲ置暫止也。其後大法會之時已三ケ度此式也

先年之比仁和寺舎利會之時笛吹四人(式賢、有光、景基、政氏) 于時參向舎利御迎之樂万秋樂破也、政氏通(トヲリ)三帖吹之間殘兩輩三止笛之間政氏違ニテ氣色ヲ爲ニ恐ミ(不怖)云ミ 不存故實之時如此事不可勝計也。

又云 當破ノ第三太鼓已前ニ乞由一乞由一(朱點)此句有口傳也。又目安之

二帖三帖四帖五帖等ノ始一拍子打三度拍子号鶯拍子此時普通ノ鶯拍子不打尤爲秘說又風聞、舍衞國ノ妙聲者佛御前依下奏ニ妓樂一功德上除可墮二惡之道苦患預辟支佛記別是以自幼少之當初ニ非無隨分之發心而歸依ノ佛法ニ仰薰修年久求佛果一（〇孝云コノ通リ恐クハ漢字脫セシナラン）淨土ニ深ク猒生死一欲至菩提道矣。

或古老說云。於學今万秋樂之輩不可墮三惡道ニ云〻、就此說弥有馮上生內院云々、於破者所傳來自百濟國也云々

私云、此樂ノ因緣やごとなき妙音の樂也ニ其謂者都率內院に弥勒佛住し給て三會の曉をまたせ給間、菩薩聖衆金商万秋樂を奏し給ごとなり、波羅門僧正實忠和尚直に參詣して傳來られ侍旨慥ニ侍歟。天上世界を思ひやりて可吹よし故人申置侍事實也。私又記之旨在之、此曲を傳吹者ハ三惡道に不墮して此內院にうまれて三會曉成道のみきりにあひたてまつるべきよし申傳たる事侍るなれども、しかも注〔不說〕れたる經なし、縱ありとも法花經になくば眞實に不可信、法花經を如說受持讀誦せば都率天にも可生よし普賢品にこそ侍れ。かやうの事能々分別あるべき也。無用ここに人はおもはれ侍らんなれども以事次經文に被載所を書付侍

普賢菩薩勸發品に

若有人受持讀誦其義趣是人命終爲千佛授手令不恐怖不墮惡趣即往兜率天上彌勒菩薩所ト、侍ハ末代ハ殊ニ法華經ヲ持人ならでは次生に內院ニモ往佛になるべき道あるべからず。又三會曉を待こ申間の久ことを注之、須弥山の上に四王天（須彌山ノ中腹ニ在之）其上ニ忉利天（已上地ナリ）地居天ト云なり、其上に夜摩天其上に（是ヨリ虚空）都率天あり、此天に內院あり外院あり、內院には弥勒住給外院には凡夫ノ諸天居ル也、壽命ハ人間の四百年を一日一夜として四千歳を保也、彌勒三年住給間を此世界につもれば五十六億七千万歳となり。此劫數の後を三會曉成道のみぎりこいふべし、それにあひたてまつるべきことたのみをかけむよりも、幸法花經を如說持て淨行菩薩の后弟日蓮大士の御手にかゝりたてまつりて、一念の信を相續し、一期生の間他經の一偈をもまじへず、謗法の振舞をせず、本化の御僧（ソウ）を敬信申ば、臨終のときかならず〳〵四菩薩并日蓮大菩薩にあひたてまつり、六根淸淨の果報を得べし、ここの次（ツイ）なければ一切の事しられがたきものなれば、この次にあらあら載之、當世の人後世をかなしみかまむなうして佛法を分別せむこ思はゞこれを信たてまつりて拜見すべし

拜見寺手洗獻ヲスヘシ〔朱〕

一日蓮大士御筆跡也　持法華問答抄ト申御書也

抑希受人身適聞ニ佛法ニ然ニ人有ニ高下ニ法有ニ淺深ニ云ヘリ、何ノ法ヲ修行メカ速成レ佛ニ事候べき。願欲聞其道ヲ 答云、家々ニ尊勝有ツ國々ニ有高貴ハ皆其ノ君ヲ尊ミ其親ヲ仰ト雖トモ豈國王ニマサルべキヤ。爰知大小權實家々ノ諍ナレドモ一代聖教ノ中ニハ法華獨リ勝タリ、此頓證菩提之指南直至道場ノ車輪也。疑云、人師ハ經論ヲ得レ意釋ヲ作ル者也。然則宗々ノ人師面々各々ニ教門ヲシツラヒ釋ヲ作リ義ヲ立テ、證得菩提ヲ志ス、何ゾ可空哉、然ニ法花獨リ勝ト云ハヾ心狭コソ候ハメ。答云、法花獨イミジト申カ、心狭ク候ハヾ釋尊程心狭キ人ハ世ニ候ハジ。如何悞〔〇誤ヲ正トス〕甚シキヤ。且一經一流ノ釋ヲ引テ其迷ヲ覺サム、无量義經云、種々說法々々以方便力四十餘年未顯眞實々々此文ヲ聞テ大莊嚴等ノ八万人井一同ニ過无量无邊不可思議阿僧祇劫終不得成无上菩提ト領解シ給ヘリ　此文ノ心ハ華嚴阿含方等般若等四十餘年ノ經ニツキテイカニ念佛ヲ申禪宗ヲ持チ佛道ヲ願トモ、无量无邊不可思議阿僧祇劫ヲバ過トモ无上菩提ヲ不レ得成ト云ヘリ。加之方便品ニハ世尊法久後要當說眞實ト說、又无二无三此經計リ實也ト云、又二ノ卷云、唯我一人能爲救護ト敎、但樂受持大乘經典乃至不受餘經一偈

ト說給ヘリ。文ノ心ハ唯我一人ノミ能爲ニ救護コトヲ、但法華經ヲ受持スルヿヲ樂テ余經ノ一偈ヲモ不受見タリ。又云、若人不信毀謗此經則斷一切世間佛種。其人命終入阿鼻獄ト說ケリ。此文ノ心ハ若人此經ヲ不信セ此經ニ背ハ則一切世間ノ佛種ヲイリウシナヘル物也。其人命終ラハ无間獄ニ可入說給ヘリ。此等ノ文ヲ受テ天台ハ將非魔作佛ノコトハ正クコノ文ニ依レリト判シ給ヘリ。但人師釋計ヲ憑テ不ハ依佛說何佛法ト云名ヲ可キ著、言語道斷ノ次第也。依之智證大師ハ經ニ无大小ノ理ニ无偏圓ニ依ハ一切人ノ佛說无用也ト釋シ給ヘリ。天台ハ若深有所以後與修多羅合者錄而用之无文无義可信受判給ヘリ。又云 无文證者悉是邪謂トモ云ヘリ。云何可心得哉 問云、人師ノ釋ハサモ候ベシ、 爾前ノ諸經ニ此經第一トモ說諸經ノ王トモ演タリ。若然バ佛說ナリトモ不可用候歟如何。答云、設此經第一トモ諸經ノ王トモ申候ヘ皆是權教也、其言ニ不可依佛ハ了義經ニ依、不了義經ニ不ト依說妙樂大師ハ縱ヒ有ト經云トモ諸經之王ト不云已今當說最爲第一ト云ト兼但對帶其義可知釋シ給ヘリ 此釋ノ心ハ縱經有テ諸經ノ王トハ雖トモ先ニ說ツル經ニモ後ニ說カムスル經ニモ此經ハマサレリト不ハ云方便ノ經ト知ト云釋也。サレバ爾前ノ經ノ習ヒトノ今說ク經ヨリ後ニ又經ヲ說ベキ由ヲイハザル也。但法花經計コソ最後ノ極

說ルガ故ニ已今當ノ中ニ此ノ經獨リ勝タリトハ說テ候ヘ。サレバ釋ハ唯至法華說前教意顯今教意ト申テ如來ノ本意モ教化儀式モ定マリヌト見候ヘ。依之天台ハ如來出世四十餘年未顯眞實、法花始顯眞實ト云々、此文意ハ如來世出世サセ給テ四十餘年ガ間ハ眞實ノ法ヲ不顯、法華經ニ始テ佛ニ成實ノ道ヲ顯シ給ヘリト釋シ給ヘリ

問云、已今當ノ中ニ法花經勝タリト云事サモ候ベシ、但有人ノ云、四十餘年未顯眞實ト云ハ法花經ニテ成佛ニ聲聞ノ爲也、爾前ノ得益ノ者ノ爲ニハ不可言未顯眞實ト云義候テバ如何心得候ベキヤ。答云、法花經ハ二乘ノ爲也、菩薩ノ爲ニ非ザレバ未顯眞實ト云事二乘ニ可トハレ限ル、德一大師ノ義歟。是ハ法相宗ノ人也。此事ヲ傳教大師破給ニ現在ノ麁食者偽章數卷ヲ作テ謗レ法謗レ人何ゾ不ンヤレ墮ニ地獄ニ〔文〕說シテアリ破シテノ誤給シカバ德一其言ニ被責舌八ニサケテ失給キ、未顯眞實ト云ハ二乘ノ爲也ト云ハ尤理ヲ得タリ。其故如來布教之元旨自元二乘ノ爲也一代化儀三周ノ善巧併二乘正意トシ給ヘリ。サレバ華嚴ニハ地獄ノ衆生ハ成トモレ佛ニ二乘ハ不可成佛スト方等ニハ高峯ニ蓮ノ不生樣ニ二乘ハ佛ノ種ヲイリタリト云レ般若ニハ五逆罪ノ者ハ可成佛スナレ𪜈二乘ハ不可叶被捨、カヽル淺猿キ捨者成レ佛以テ如來ノ本意トシ法華ノ規摸トス、

依之天台ハ花嚴大品不能治之唯有法華能令无學還生善根得成佛道所以稱妙闡提有心猶可作佛二乘滅智心不可生法花能治復稱爲妙ト此文ノ心委不及申ニ實知ス花嚴方等大品等ノ法藥モ二乘重病ヲバ不レ差又三惡道ノ罪人ヲモ菩薩ト云前ノ經ニユルセドモ二乘ヲバユルサズ、依之妙樂大師余趣會實諸經或有二乘全无故合并對於二乘從難而說ト釋シ給ヘリ。加之二乘作佛ハ一切衆生ノ成佛ヲ顯スト天台判給ヘリ。修羅ガ大海ヲ渡ヲバ此難シトセン、嬰兒ノ力士ヲ投ム何ソ輙スシトセン。然則佛性ノ種有者ヲバ可シト成佛ニ爾前ニモ說トモ未種ヲイリタル者ハ佛ニナラスカカル重病ヲ輙ク差スハ獨法華良藥也。唯須汝欲成佛ニ慢ノハタホコヲタヲシ瞋ノ杖ヲ捨、偏ニ一乘ニ歸スベシ、名聞名利ハ今生ノ餝リ我慢偏執ハ後生ノホダシナリ、嗚呼可恥々々可恐々々。問云、以レ一察レ万事ナレバアラ〳〵法花ノ謂ヲ聞クニ耳目始テ明也。但法花經ヲバ如何心得テカ候ハ速ニ菩提ノ岸ニ可著耶。傳聞ク一念三千ノ大虛ニハ恵日隱ル、亙ナリ、一心三觀ノ廣池ニハ智水濁事ナキ人コソ其修行ニ堪タル機ニテハ候ナレ。然ニ南都ノ修學ニ臂ヲクタス事无リシカバ瑜伽唯識ニモ暗シ、北嶺ノ學文ニ眼ヲサラサヾリシカバ止觀玄義ニモ迷ヘリ。天台法相ノ兩宗ハ龕ヲ蒙リテ向壁ニ如シ。サレバ法花之機ニハ既ニ漏テ候ニコソ、如何

ガシ候ベキ。答云、利智精進ニシテ觀法修行スルノミ法花ノ機ット云テ无智ノ人ヲ妨タグルハ當世ノ學匠ノ所行也、此返テ愚癡也、邪見ノ至リカ。一切衆生皆成佛道ノ教ナレバ上根ハ觀念觀法可然下機ハ唯ダ信心許也　サレバ經ニハ淨心信敬不生疑惑者不墮地獄餓鬼畜生々十方佛前ト説レタリ　イカニモ信ノ次ノ生ニ佛前ニ可期也。譬ハ高岸ノ下ニ人有テ不ㇾ能ㇾ登ㇾ岸ニ又岸ノ上ニ人有テ繩ヲ下ノ此繩ニ取付ハ我岸ノ上ニ引上セムト云ムニ引ク人ノ力ヲ疑ヒ繩ノヨハカラム事ヲアヤブミテ手ヲ收テ是ヲ不取如シ、爭カ岸ノ上ニ登事ヲ可ㇾ得ヤ、若其ノ語ニ隨テ手ヲ延テ此ヲ取ンニハ可ㇾ得ㇾ上事ヲ唯我一人能爲救護ノ佛ノ力ヲ疑ヒ以信得入ノ法華經ノ教ノ繩ヲアヤブミテ決定无有疑ノ妙法ヲ不ㇾ奉ㇾ唱ㇾ力ラ不及菩提ノ岸ニ登ㇾ事難シ。不信ノ者ハ墮罪〔○在ノ誤〕泥梨ノ根元也。サレバ經ニハ生疑不信者即當墮惡道ト説レタリ。難受人身ヲ受難値妙法ニ値テ爭カ空ク可ㇾ過ヲ同ク信ヲ取ルナラバ又大小權實有ル中ニ諸佛出世ノ本懐衆生成佛ノ直道ノ一乘ヲコソ信ズベケレ。所持ノ御經諸經ニ勝タレバ能持ノ人又諸人ニ勝タリ。爰以經云、能持是經者於一切衆生中亦爲第一ト説給ヘリ。大聖金言无疑然ニ人此理ヲモ不ㇾ知名聞ヲ求ルハ狐疑ノ根偏執ヲ至スハ墮罪地獄ノ基也。唯願ハ經ヲ持テ名ヲ十方ノ佛陀

ノ願海ニ流シ譽ヲ三世ノ諸佛ノ大悲ノ天ニ可施、然ニ奉持法華經 人ハ以ニ天龍八部諸大井ヲ爲眷屬ト者也 加之 身ノ肉團ニ果滿ノ佛眼ヲ備ヘ有爲ノ凡膚ニ无爲聖衣ヲ着スレバ三途ニ无恐ニ八難ニ无憚七方便ノ山峰ニ登テ九界ノ雲ヲ掃ヒ无垢地ノ薗ニ花開テ法性ノ空ニ月明ナラム、是人於佛道決定无有疑ノ文馮有リ唯我一人ノ説无疑一念信解功德五波羅密ノ行ニ越タリ、五十展轉ノ隨喜ハ八十年ノ布施ニ勝タリ、頓證菩提ノ教ハ遙ニ郡(ママ)典ニ秀テ顯本遠壽ノ説ハ永ク諸乘ニ絶タリ。以此ニ八歳ノ龍女ハ自大海ニ來テ經力ヲ刹那ニ示本化上行ハ自大地涌出ノ佛壽ヲ久遠ニ顯ス。言語道斷ノ經王、心行所滅ノ妙法也 然ニ人此經ヲイルガセニメ余經ニ等メハ謗法ノ至リ大罪ノ至極也。譬ヲ取ニ无物佛ノ神通ニテモ何(イカ)此ヲ説キ盡シ給ハム。菩薩ノ智力ニテモ爭此ヲ可量ル、サレバ譬喩品云、若説其罪窮劫不盡云々、文ノ心ハ法華經ヲ一度謗スル人罪ヲバ劫ヲ窮ムトモ説盡難ト見タリ、然間三世ノ諸佛ノ化道ニモ漏恒沙ノ如來ノ法門ニ被捨ナン、暗ヨリ暗ニ入テ阿鼻大城ノ苦患爭脱ム誰心有ン人長劫ノ悲ヲ恐レザランヤ。爰以經云、見有讀誦書持經者輕賤憎嫉而懷結恨其人命終入阿鼻獄云々文心ハ法花經讀セン者ヲ見テ輕賤憎嫉ノ恨 結ハム。其人命終テ阿鼻大城ニ入ト云リ。大聖金言誰カ是ヲ不ラン恐

哉、正直捨權明文豈此ヲ可レ疑乎 然ニ人皆經文ニ背キ世挙ク法ニ迷ヘリ。汝何ゾ悪友ノ教ニ隨ヤ、サレバ邪師ノ法ヲ信受スル者ヲ名テ毒ヲ飲者ト天台釋給ヘリ、汝能ク可愼云々ツラ〳〵世間ヲ見ニ法ヲバ貴ト申セトモ其人ヲバ万人是ヲ悪ム、汝能法ノ源ニ迷ヘリ、如何ニト云ニ一切ノ草木ハ地ヨリ出生セリ、是以思ニ一切ノ佛法モ又人ニヨリテ弘マル、依之天台ハ佛ノ世ニモ尚ヲ人ヲ以テ顯法ヲ末代イヅクンゾ法ハ貴トケレ圧人ハ賤シト云ヤトコソ釋シ御坐候ヘ。サレバ所持法タニ第一ナラバ持ツ人隨テ第一ナルベシ。然則其人ヲ訾ハ其法ヲ背也 其親ヲ賤ハ即チ其子ヲ賤爰ニ知ヌ當世ノ人ハ言ト與意ト都テ不合ニ孝經ヲ以テ母ヲ打ガ如シ豈ニ冥ノ照覽耻カシカラザラン哉。地獄ノ苦ニ可恐々々可愼々々上根ニ望メテモ卑下スベカラズ、下根ヲ不レ捨本懷也、下根ニ望メテモ憍慢ナラザレ、上根モ漏ル事有リ、不至心故ニ凡ノ其里床敷ケレドモ道タエ、緣无ニハ通心モ疎ニ其人ノ戀ケレドモ憑テ契ラヌニハ待思モナヲザリナル様ニ彼月卿雲客ニ勝タル靈山淨土ノ易キレ往未往我卽是父ノ柔軟ノ御躰ヲ可キニモ見未レ奉見誠ニ袂ヲクタシ胸ヲ動ス歎キナラザラン哉 暮レ行ク空ノ雲ノ色ロ在明方ノ月ノ光リマデモ心ヲ催ス思也。事ニ觸レ折ニ付テモ後世ヲ心ニ懸テ花之春雪ノ朝ニモ是ヲ思ヘ 風騒キ村雲

迷ノ夕部ニモ忘ル、隙ナカレ出ル息ハ入息ヲ待タズ、何ナル折節有テカ毎自作是念ノ悲願ヲ忘レ、何ナル月日在テカ无一不成佛ノ御經ヲ不レ持チ、昨日ガ今日ニ成リ去年ガ今年ト成ル事モ是レ期スル所ノ余命程ナキニアラズ哉　惣テ過ニシ方ヲ數ヘテ年ヲ積ヲバ雖レ知ト今行末ニ於テハ一日片時モ誰カ命ノ數ニ入ベキ　臨終既ニ今ニ有乍知我慢偏執名聞利養ニ著ノ妙法ヲ唱不奉事ハ忘〔㊟悉〔イ〕ニヨル〕ノ程モ無下ニ无レ敢サコソハ皆成佛道ノ御法ト乍云此人爭カ佛道ニ物憂カラザルベキ、色无人ノ袂ニハスソロニ月ノ宿ル事カハ、又命既ニ一念ニ不レ過ギ佛モ一念隨喜ト說レタリ。若此レ二念三念ヲ期スト云ハ平等大會ノ本誓頓教一乘皆成佛道ノ法トハ不可云、流布ノ時ハ末世法滅ニ及ビ機ヲ五逆謗法ヲモ接タリ、故ニ頓證菩提ノ心ニテキテラレテ虛僞執著ノ邪見ニ身ヲ任スル事ナカレ。生涯幾ナラス思ヘバ一夜ノ假ノ宿ヲ忘レテ幾ノ名利ヲカ得ム。又得タリトモ是夢ノ中ノサカヘ珍シカラヌ樂シミナリ。只先世ノ業因ニ任セテ足ヌトスベシ　世間ノ無常ヲ悟ラン事ハ眼ニ遮ギリ耳ニ滿テリ、雲トヤ成リ雨トヤ成ケン、昔ノ人ハ只名ヲノミ聞ク、露トヤ消ヘ烟トヤ登ケン、今ノ友モ又見ヘス我モイツマデカ三笠ノ雲ト思フベキ。春ノ花ノ風ニ隨モ秋ノ紅葉ノ時雨ニ染マル是皆ナガラヘス代ノタメシ

ナレバ、法華經ニハ世皆不牢固如水沫泡焰ト勸メ玉ヘリ。以何令衆生得入无上道ノ御心ノ底ニ順縁逆縁ノ御言既ニ本懷ナレバ持ツ者モ又本意ニ叶ヒ々々々ヘバ是佛ノ恩ヲ報ズル也。悲母深重ノ經文心安ケレバ唯我一人御苦モ且ハ息給フラン。釋迦一佛悦ビ給フノミニアラズ、諸佛出世ノ本懷ナレバ十方三世ノ諸佛モ喜ビ給フベシ、我卽勸喜諸佛亦然ト說給ヘバ佛悦ビ給フノミニ非ズ、神モ卽勸喜シ給ナルベシ。傳敎大師是ヲ講ジ給シカバ、八幡大菩薩紫ノ袈裟ヲ布施シ空也上人是ヲヨミ給シカバ松尾大明神寒風ヲ防グ、サレバ七難卽滅七福卽生ト祈ランニモ此御經第一也。現世安穩ト見タレバ他國侵逼難自界叛難ノ御祈ニモ此妙典ニ過タルハナシ。令百由旬內无諸衰患ト說タレバナリ。然ニ當世ノ御祈禱ハ逆也。先代流布ノ權敎也、未ダ末代流布ノ最上眞實ノ秘法ニハ非也。譬ハ去年ノ曆ヲ用ヒ烏ヲ鵜仕ハンガ如シ。是偏ニ權敎ノ邪師ヲ貴テ實敎ノ明師ニ値ハセ給ハザル故也。惜哉文武卞和ガアラ玉何クニカ收ケン、宇禮敷哉、釋迦出世ノ髻中ノ明珠今度我身ニ得タル事ヲ、十方ノ諸佛ヲ證誠トシテイルカセナラス、サコソハ一切世間多怨難信ト乍レ知爭カ一分ノ疑心ヲノコシテ決定无有疑ノ佛ニナラサランヤ。過去遠々ノ苦ハ徒ニノミ〔〇「コソ受ケコレ」ヲ脫ス〕シカトモナトカ且ク不

變常住ノ妙因ヲ殖ザランヤ。未來永々ノ樂ハ且々心ヲ養トモシイテ强ニ雷光朝露ノ名利ヲバムサボルベカラズ、三界无安猶如火宅ハ妙來ノ敎ヘ所謂諸法如幻如化ハ菩薩詞也。寂光ノ都ナラズ何クモ皆苦ナルベシ 本覺ノ栖ヲ離レテ何叓カ樂ミナルヘキ。願クハ現世安穩後世善處ノ妙法ヲ持タンノミコソ只今生ノ名聞後生ノ哢引ナルベキ。須ク心ヲ一ニシテ南無妙法蓮華經ト我モ唱ヘ、他モ勸メンノミゾ人界ノ可思出ナル。南无妙法蓮花經々々々々々々々

持法華問答抄　　日蓮　在御判

一同御筆跡秋元抄ト申初斗奉寫末代後世ヲネガワン子孫ノ爲也、私ノ義ニアラザル也。

此旨ヲ能々拜見シテ可取信

筒御器一具三十幷盞六十付送リ給ハリ候畢ヌ。御器ト申ハウツハ物トヨミ候。大地クボケレバ水タマル、青天淸ケレバ月スメリ、月出ヌレバ水キヨシ、雨フレバ草木サカヘタリ。器ハ大地ノ凹カ如シ、水タマルハ池ニ水ノ入カ如シ、月影ヲウカフルハ法華經ノ我等ガ身ニ入セ給カ如シ、器ニ四ノ失アリ。一ニハ覆ト申テウツフケル也、又ハクツカヘス、又ハ蓋ヲヲホフ也。二ニ漏ト申テ水ノモル也。三ハ汙ト申テケガレタル也、水淨ケレドモ糞ノ入器物ノ水ヲハ用

事ナシ。四ハ雜ナリ、飯ニ土テンドヲマシヱヌレバ人クフ事ナシ、器物ハ我等ガ身心ヲ表、我等ガ心ハウツハ物ノ如シ、口モ器物耳モウツハ物ナリ。法花經ト申智惠ノ法水ヲ我等カ心ニ入ヌレバ或ハウチカヘシ或ハキカシト左右ノ手ヲ二ノ耳ニ覆ヒ、或ハ口ニ唱ヘジトハキ出ス、譬ハ器物ノ覆スカ如シ、或ハスコシ信スル樣ナレトモ又惡緣ニアヒテ信心薄クナリ、或ハ打捨或ハ信スル日アレドモ捨ル月有リ、此ハ水ノ漏カ如シ、或ハ法華經ヲ行スル人ノ一度南無妙法蓮華經一度ハ南无阿彌陀佛ナンド申ハ飯ニ砂ヲマシウルカ如シ。法華經ノ文ニ大乘經典ヲウケ持タン事ヲ欣テ乃至餘經ノ一偈ヲ不受ト申文此也、世間ノ學生ハ法華經ニ余ノ行雜テモ苦シカラスト思ヘリ、日蓮モ角コソ思ヒ候ヘドモ、經文ハ不レ爾、譬ハ后ノ大王ノ種子ヲ妊ルカ又民トトツケハ王種ト民種ト雜テ天ノ加護ト氏神ノ守護ニ被捨、其國破ル、緣ト成ル。父二人出來バ王ニ非ズ民ニ非ズ人非人也。法花經ノ大事ト申ハ是也。種熟脫之法門法華經ノ肝心也、三世十方ノ佛ハ必ズ妙法蓮華經ノ五字ヲ種トシテ佛ニ成給ヘリ。全ク南无阿彌陀佛ハ種ナラズ、全眞言五戒等ハ種ナラス、能々此事ヲ習ヒ信スベキ也　是ハ雜也、此ノ覆漏汙雜之四ノ失ヲ離レテ候器ヲ完器ト申テ全器也、塹ツ、ミモラサレハ水失事ナシ。信心ノ

心全ケレバ平等大惠之智水乾ク事ナシ。今此筒ノ御器ハカタク候上ヘ漆淨ク候ヘバ法華經ノ御信心ノ堅固ナル事ヲ顯シ給歟。毗沙門天王ハ佛ニ四鉢ヲ進テ四天第一ノ福人ト云ハレ給、淨德夫人ハ雲雷音佛ニ八万四千ノ鉢ヲ供養シ進テ妙音菩薩ト成給フ今法華經ニ御器ヲ進セテ爭佛ニナラセ給ハザルベキ。

私ニ云、此等ノ御詞ヲ拜見シテ信心ノ水キヨカラハ、我等カ佛性ノ月ヲヤトサンハ只心カラナルベシ。コレニツケテモ先樂道ノ家ニ生テ嫡家相承ノ旨タ、シクアラバ身ハフせウナリトモ道ヲシヤウシヲホシメサバ公武ノ御師範ニモ參道ノ外ナル法理ヲモ申上ンコトヤスカルベシ　佛法ヲ修行スルニ至テノ上ラウト至テ下賤ノ者ハ難叶キモノナリト中ハアリ尤ナリ上﨟ニハ諸ノ事寮ニ申入ガタキモノナリ　下ザマナル者ハ又イフコトヲ一向ニキ、分カタシ。中程ナル人ノ少文字ノ方モ無下ナラス、イサ、カ物ノアワレヲモ知分ケ無理ナルコトナキカ、ヨキ友ニ近テ經旨ヲモヨク聞分タランヲ法ノ器トモ云ベシ。幸帝王ノ御師範ノ家ニ生テ正直ノ經旨ヲ道ノ次ニ申上ンハ尤忠節ナルベシ。今生一端ノ奉公ハタレモ忠アレドモ未來永々ノ善事ヲ進メ申ヘキトハ思臣下ヲハセジ、

コノイサメハ眞實木ニ工ツテ皷チナラシタル古ノ忠臣ヨリモ勝ベシ。思出侍間載之。

宗祇ノ付句に

いはざるもここによるべき中なれやト云ニ

つかへは君に道をいさめよとこ侍殊勝也

一大二條殿後福光恩院(マヽ)ト号タテマツル 御作さ夜のねざめといふ一札のもの侍るに、人はよろづの物に數寄侍て鳥獸茶香などご翫侍る、此殿はもろこしのふみにすかせ給となり。又いかにもしてよき人をすきいたして政をもたすけ、うへの御うしろみにもなる程の人をしたてゝまいらせたく思召侍れとも、つゐにしかるべき人世にいできさせ給はぬ事をなげき給て、所詮左右の大臣のいさめよりも十ノ指のさすところ、十のゆびのさす所よりも、諸人の見る處とだにも思食侍は、可然〔原「ハ」アリ〔イナシ〕〕事なるべしと侍る。これらぞ金言なるべきと思給。あまりに殊勝のまゝ載之。

一萬秋樂因緣故實口傳舞樂共大略勘之載所也。廿五異名已下說々者別紙ニ在之、惣而譜者歷々ノ先祖筆跡在之重而注之者中々失共可出來仍略之、若奧ニ白紙殘者少々可識之、右書所諸

事無用ト思ハン人者予ガ非本意、然者此文不可有披見併爲子孫斗也。

秋風樂中曲 新樂

有三帖拍子各十六

此曲弘仁行幸南地院之時常世ノ乙魚依動作此曲舞作歟 樂者大戸清上制ㇾ作之大石峯良說 而在唐譜如何、 或人說云、自唐傳來也、誰人哉。 其時无嚔頭乎、 件常世ノ乙魚作嚔頭云ゝ不耻唐家詞云ゝ就中至第三帖嚔頭無双云ゝ 漢武帝之時代ヨリ出來歟由注之、秋風辭文選ニアリ、樂詞是ナリ、穴賢々々可秘之、困十一巻上ニ載之

昔ハ五切アリケレトモ四五帖ハ絕テ今ハ三切ゾ侍ル、終帖加拍子 畧定一返時如賀王恩十一拍子ヨ〔イニテ補〕リ加拍子、又末四拍子加拍子樂說 舞出入用調子。

抑此樂ニ及數返之時吹樣有口傳 以二帖嚔頭爲四帖以三帖嚔頭爲五帖此說ハ可秘物々々殊三帖嚔頭可秘也

後白河院日吉御幸之時伶人ノ中ニ此嚔頭ノ次第御タヅネアリケルニ時ニノゾミテ各申旨モナカリケルニ、狛則近コソ委ハ申サレタリケレ。〔底ル〔イ〕ニヨル〕頗有御感云々

已上故實等悉狛近眞教訓抄ニ所載之

輪臺　新樂　中曲拍子十六　管絃時連吹靑海波

不加拍子 當時別之時末四加之三度拍子也、モロハチナルヘシ

舞作法先笙調子次篳篥音取調子如常此間左右舞人瀧口隨身等整テ後笛音取延吹常曲此間作大輪終テ後ニ絃管同音早輪臺ヲ吹出テ二反此間ニ墻代人數座ヲ起テ立墻代、次詠、次音取、次又詠、次聲歌末拍子取反尾次吹渡只拍子　次樂屋ニ請取テ早輪臺一反同時吹出　次墻代次第如先次又樂屋ニ請取テ樂一反則靑海波ニ連吹四反或三反　次墻代作法如輪臺、次又樂屋ニ請取テ樂一反加輪臺同時吹出　次墻代次第如先、次又請取テ樂三反終帖加三度拍子靑海波ハ中ヲカタハチナルベシ略定一反時第二拍子ヨリ加拍子、次以延輪臺舞入自第三三拍子加三度拍子一說自第二拍子加之一說不加拍子

一敎訓抄ニ載之說々　有甲　中曲　新樂

序四返拍子各十六、謂輪臺　破七返拍子各十二、謂靑海波

大唐樂云々作者洒醇作之云ツマヒラカナラズ可尋

古老傳云、輪臺ハ國ノ名ナリ、其國ノ人蒼海波ノ衣著シテ舞タリシニヘニヤカテ付其國之

名ヲ云々

一青海波ハ龍宮樂也、昔天竺ニ彼舞儀青海ノ浪ノ上ニウカム、浪下ニ樂音アリ、羅路波羅門聞レ之、傳ニ之ヲ漢ノ帝都見レ之ヲ傳舞曲ニ云々

一此曲昔ハ者平調樂也 而承和大皇御時此朝ノ依勅被レ遷ニ盤渉調曲ニ舞者大納言良峯安世卿作、樂者和邇部大田麿作 并乙魚清上等也 詠者小野篁所作也。 有二説 壇代四十人之内 序四人破左右舞人闕白左右大將御隨人瀧口北面各取反尾、但序破舞人不取之

一輪臺青海波近代法者

先笙篳篥吹ニ調子左右舞人隨人瀧口ト、ノヒテ後笛吹レ爾取テ輪臺ヲユル〳〵ト吹、是ヲ道行吹云々于時青海波舞下手作レテ大輪ヲ逆廻ニ左違ニ時ヨリ始ナリ、次左右舞人交立序四人之外ノ舞人ハ皆反尾取 右膝突 右手ニテ取テフトコロニ入テ違打也。次青海波上手違時打也。次闕白左右大將御隨身立 各弓立テ反尾ハ取ナリ 禁中ニテハ瀧口立 弓置 反尾取次第 如先 大輪ヲワリタレハ左右立分一面又造小輪 御前向 以中爲上 光近目錄序四人諸肩脫 此間序四人甲著破二人袍甲太刀著 樂屋內ニテ著常儀也 常樂會ニ任本儀著ニ壇代ノ內ニ次早輪臺二返舞了、次詠 次鳳陵(不龍)筋音取 舞人打替 次又詠次聲歌 末拍子打反尾 次吹渡 樂末

忠拍子吹樂屋請取テ樂一反舞了後壇代次第如先　又樂一返中半ヨリ序舞人、下﨟從第五拍子四拍子間如此從第八拍子平立四拍子舞登レバ上﨟ハ舞下ル、樂ノ末ニ破ノ舞人二人儲テ青海波吹成時ニ出替テ樂四返之間舞也、其後壇代次第如序　次又樂一返舞了後壇代次第如先　次樂三返舞終帖加三度拍子　近來ハ第七帖許ヲ舞也自第二拍子加三度拍子仁舞人終拍子居右膝突平ヨリ近來不舞五六帖也　即延吹輪臺于時立テ破ノ上手ヲ前トシテ輪作巡輪　一說云從第三拍子打三度拍子ヲ立次第八如先各二反尾置入也

一抑相撲節ニハ殿上ヨリ賜ニ下ニ藏人青色、袍ヲ爲青海波之袍ニ、殊有別習大輪之後舞臺ノ後砌左右各造ツクル二一小輪ヲ左方一輪右方一輪爲此兩輪之內青海波著從袍、但上手ノ一者有右方輪內下手ノ二者有左方輪內各著裝束已後破ニテ兩輪ニ以中爲上而向御前也　惣相撲ノ節之外不可作小輪也、雖然便宜之時可依御定、就中造小輪樣爲ニ極秘事ト有ニ說　能々可受口傳也。

一壇代立樣抑打反尾有二說、一說曰聲哥之末一拍子打之、一說曰、聲哥并樂間如忠拍子可打之ナ爲以說也

笛　　　　比巴　是ハ音取次第立様近來用之

篳篥　　　陵

一說　笙　在墻代圖一說　賀

・琵琶　　　鳳・　此外聲哥人立加事アリ

詠　以詠爲上　　詠

一古今条々相違

一、古ハ舞人卌人之内序二人破二人墻代卅六人

今ハ序四人破二人樂人四人墻代卅人各取反尾右膝突居取聲哥末拍子一

二、古ハ墻代三匝後一所作輪

今ハ一匝後兩所作輪

三、古ハ舞行立（ユキ）畢（ヲワリスレハ）墻代樂止

今ハ不止連吹之

四、古ハ輪臺後度詠了後兩所作輪改着靑海波裝束此間樂屋吹輪臺度數無定

今ハ初度ニ作輪序破舞人同改著裝束无再輪之儀　仍輪臺反（言文石ニヨル）吹四返而已

五、古ハ輪臺舞人入時不置程即吹青海波立定時吹止

今ハ不吹止

六、古ハ青海波初度詠以前樂二返、詠後又樂二返、後度詠後樂三返　合七帖、

今ハ初度詠以前樂四返、詠後樂一返、後度詠後樂三返、合八返之內舞七帖、一說終一帖加拍子

七、古ハ舞畢退入時更吹青海波

今ハ緩吹輪臺一說加三度拍子号道行吹

已上七ヶ條遠勘長秋之笛譜近見當時之樂礼所辨記古今兩說也。夫禮樂之道沿革隨時取捨之間竊俟後賢耳

○詠（○野田說

千里万里禮拜（朱下同）　爾取　我此西盤國信三郎

奉勅安置鴻臚　尙侍金魚

聲歌　太良利知良利々良大　利良利
五夕由中中　上中夕　五中　丁丁六打反尾

又説

燕子山裏食喰　子ノ字无モアリ(朱)　共酌保机美酒

莫賀鹽聲平　廻　禰取　相抱聚踏輪臺

詠哥　小野篁所造已上輪臺説

又

(朱)桂阿殿迎初(墨)歳　社阿盧義早〔(朱)呆○孝云教訓抄「早阿トアリ果字ノ誤」〕阿　果歟(朱)

來々乙來々乙　禰取　貞觀年

聲歌　六丁中中中
ヒ知ヒ夜利ヒ乙太打反尾

又説

折(墨)阿花樹梅下　(墨)蝶阿燕

來々己來々己　禰取　書梁遏

聲哥如先　已上青海波詠　篁(朱)
所作　長秋説
千ヒ丁六千ヒ六中六五夕由五五夕(由)

一説　辻説

千。里万。里。禮拜　　我是西番國信三郎　　聲哥　五夕由中ヽ中ヽ夕エ五　中丁丅丁六

奉勅安置鴻　爾取　常賜金魚

燕山裏食散　　共酌蒲桃美酒　　声哥如先

莫嘉塩聲平廻　爾取　相抱聚踏輪臺

挂ヤ殿挂乘殿　　挂ヤ天桂天　　聲哥　六丁○中夕中

來々　音取　來々

相火盧美々　　朝果年梅吹　　聲歌　一説○丅中〇六五夕由　丅ヽ丅六○丅ヽ

長果年　音取　果長果長美々　　五●五ヽ夕由＼長〔イ秋アリ〇孝云秋字ノ九ガ□カラム〕説　同

一、二帖ノ始ノ左違時ヲ行高稱ニ右違ト而テ去康和四年三月廿日鳥羽殿御賀殿上ノ舞ニ付ニ光時カ申狀ニ左違時ニ可舞由被ニ宣下ニ了（而今又右違舞也）

一、七帖ノ末東西ニテ違ヲ打テ北向テ諸手ヲ肩ニ懸下(カケヲロス)コト昔多政方ノ説両ニ並寄テ弃(スツ)、狛光高此定舞ゥ

一、詠二人勤仕(トンシ)例　正治二年三月三日平等院一切經會日近衛殿下之有御出輪臺詠一者光重　青海波二者則房壇代之役二人勤仕雖爲新儀ト則房訴詔〔○孝云訟ノツモリナラン〕ツヨキニヨリテ一者光重トゞメラレ了　當座ノ面目ヲウシナヒ、後代ノ家ノキズ上下耳目ヲ驚ス。

一、古ハ青海波ヲハ舞トモ詠ヲハセス只光季ノ嫡家流許也。行高、光則、季貞ガ一者ノ時ハルカノ末ノ者ニテ光時ガセシナリ。則近之時ヨリ其家ニハ始テスル也。

一、一人青海波舞例　保安四年正月六日八幡宮修正光時一人舞シナリ。輪臺童二人舞也

一、二代御記云、康保三年十月七日此日次殿上侍臣奏樂、長秋欲奏此音樂而依洪水之災停止近日無殊事仍重召樂人左近中將博雅朝臣以下相率著河竹架邊奏延喜樂之間ヨリ時々小雨仍於仁壽殿階下舞　次奏輪臺序修理大夫源朝臣通光　青海波濟時、爲光、　着麴塵闕腋袍帯劔左衛門督藤原朝臣〔イナシ〕賴忠朝臣重光朝臣已下廿餘人爲垣代朱紫交舞視聽催感

一、有文ニ土佐大將ながされ給ける日惟成ヲクリニマイリタリケルニ蒼海波秘曲ヲシヘ給トテ、＼ヲシヘヲクコトヲ形見ニシノバナン身ハアヲ海ノ波ニナガレヌ。と侍る、アワレフカキコトナリ

私云、此舞之子細審注之、雖然亘代ノ樣作輪鉾取反尾事悉口傳在之、狛氏嫡家豐後守流已下尋之、更於因緣者不知之、仍當家一人傳之深可秘之段尤也。一決之後可傳之

或人ノ謂シ作者ハ不知侍 不尋之

右のかたにぞ千鳥なくなると云句に

困續草庵集ニ入頓阿付句也

こまほこのさほの河原の秋霧にと侍る

これ面白付樣也これ程の事さへ人不知侍歟　但舞道をしらざる人は尤也　先年宗祇閑談之次に尋られ侍る間連哥の道はしらねども愚存旨申侍は正義ニ叶よし被申侍、其子細は狛鉾は右の舞也、然者右の方にぞと侍るに、狛鉾のさほとつゝけつれば前句を釋たるにや、これは青海波を付たる句なるべし、其裝束に千鳥をぬひものにしたる也。左の舞なればかやうに付たる也、秋霧にてしたてたる句なるべし。さほの河原の川霧に友まどはせる千鳥鳴なりと云哥にて、この秋きりゆへに左になくべき千鳥が右になきたると被付也。舞番青海波ニハ常ニ敷手といふ舞番。然は狛鉾ニハ如何付侍るぞといふべきなれども左右を付たる心也　末代かやうの事分別ありかたき間いさゝか

注付也。道の才覺にも成まじけれども筆の便宜なるべし又云、此番狛桙ニ番例多之。爾付やう可然也。狛番專後ニ可注之

鳥向樂 拍子十八 古樂或新樂中曲 無舞一反ノ時自半帖加三度拍子只拍子時第十第十八兩所

六羯鼓也。

此曲弘仁御時南池院行幸舩樂ニ作之、鷁首ニ向故名鳥向（本樂アリ）ト 舩樂作故爲古樂 于今參向行道ノ樂ニ用之。此時新樂 有忠拍子別之習アリ。或人ノ說云以白柱爲急云

宗明樂 拍子十 新樂中曲無舞一反ノ時末二加三度拍子

昔ハ舞侍ケリ、序幷絕畢。但於舞者ハ有當時則助說。有記ニナリ、誰人哉无不審也。又云、雅樂屬爲清ト申ケル樂人之說（醫記本ニヨル）云、此樂拍子十四也、更ニ喉頭ニハアラズト申ケルチ、大判官カヘラン時ハイカヤウナルヘキソトナンゼラレケレバ、中ノフルコトナクテ、口ヘコソハトツフヤキケルハ、口ヘ反付ノ\吹ベシト習テ侍ケルニヤ、今世ニハ用ズ 有忠拍子 加拍子時打三度拍子。 御願供養ノ時 送導師咒願奏此曲

採桑老 中曲 別裝束 古樂

拍子十二、一反ノ時末四加三度拍子、只拍子時打羯鼓 有四帖 拍子十二

唐作操桑子其躰老人携杖著紫淺福微々行身躰如不堪余古樂秘說云々指竹挿有二說一者タチサマニサス二者ヨコサマニ細係サス左頭

多賚忠ウタレタリシ時此曲絕了〔〇原割註今イニヨル〕以勅定召天王寺舞人奏公員、近方所被習寫也、其後天承元年朝覲行幸始近方舞蒙勸賞卽任右近將監右舞一二者相並近衛將監初例也

承曆之頃　中宮大原野行啓ノ試樂ニ飛香舍ニテアリケルニ狛光季大平樂大輪之間太刀ヲ脇ハサム、多政資採桑老詠之時、藤ニ係リテ詠タル當日ノ與モ甚シ後代ノ勝事ト申傳タリ。如此振舞人ニシタカウヘキ事ナリ

舞出時用調子ヲ播磨要ニ如安麿人係出豐原氏樂人係ハ例也、〔〇下イニヨリテ補〕其氏樂人ナケレバ〔〇以上〕他氏樂人ニモ係ナリ

舞人出テ舞臺上ヌレバ係物返入也　其後有拜拜後止調子

次樂二返

次詠三十情方盛〔〇原歲刃ニヨル〕、四十氣力微、五十至衰老、六十行步宜、七十杖頂樂、八十座魏々、九十得重病、百歲死無疑

一說三十性方靜、四十氣力癡、五十始衰老、六十行步倚、七十鬢毛白、八十座魏々、殘九十百ヲバ不詠イマウユヘト云

次爾取如青海波、但樂屋取之如此メ又樂一返、又詠爾取又樂一返加三度拍子　此拍子上樣古人語云、此樂古樂ナリ、須ハ可打古樂揚拍子トイヘ

ニ舞姿頗老体ナリ、仍加三度拍子也、以是爲習　入時吹調子　鹿婁如先、一説不搔之　一説云、舞人出ザル程ハ鹿婁不搔、大コヲモ不打、此説不可然歟可宛六三九三也　一説云、〔医〕或記云、

探桒老々鹿婁ハ知舞人者可打一鼓也。舞人取ニ鳩杖、忠互腰乃須万尓（ママ）（〔教訓抄「ヲシテ腰ノスマニ」トアリ〕）一拍子、拜シテ頭ヲ突レ地ニ一大鼓舞踏間各打之其儀如前

此舞出間打大鼓三　先大鼓前ニテ腰ノス時一打、次舞臺上時懸物ヲ放時一打、次舞臺ノ中半ニ行立テ杖ヲ取直シテ拜ヲ始時一打、或管絃者説云、偈打上テ出樂屋時一打云、然者四鼓出間打歟、此入時ニハ不打（〔イ〕太アリ、鼓云々

加拍子様　一説終帖從第二拍子打三度拍子、一説第四帖從第三拍子加拍子、古老語云、從第五拍子加三度拍子尤秘事也ト云、狛家ニ用之歟、當家可順之

抑此舞作法、昔ニハ今ノ様皆カワリテ侍ル、信定（シンヂヤウ）シガタク侍　先出入間一皷ニ鹿婁（ロウロウ）ヲ搔（カキ）テ令打大鼓事未出舞人之間數剋（スコク）ナリ。近來ハ舞人好方　笛宗賢　鹿婁包助　太鼓則成　ニテ雖見數（〔鹿鼓〔イ〕ニヨル〕ケ度、一度モ不用ニ異説ニ、而嘉祿元年八幡御放生會上卿堀川源大納言通具仰曰、去承暦四年御放生會上卿堀川右府採桒老多正助　陵王荒序狛光季　舞可任其例由依被仰下採桒老冬好氏　笛大神式賢　大鼓季清　舞出間用大鼓三打説了、是新儀、次爾取者夕五リ于六由中工中　宗賢吹説如此、今式賢吹ハ天王寺ノ説歟、五于六夕火五リヨ夕五于六由中リ六五火中、是又以舞人聲歌爲爾取説也、雖レ有已上説々父宗賢一度モ不用此説、何今用此説哉、不可然トカク（ママ）（〔教訓抄

「タ」ニ作ル正カ」フキ申物多侍キ、於荒序依笛論止了

多好氏者、此曲ハ家ノ相傳曲也。然而師傳ヲキラ〳〵シク受ザリケルニヤ、承久元年ノ仁和寺舍利會ニ好氏可舞由被仰付タリシニ、無二子細一不及力候ト申タリシカハ、サラハ久行ニ舞セントハ如何ト被仰下間、好方〔教訓抄「氏」ニ作ル〕一家三人引具退出了、仍久行舞神妙ニ仕タル由ノヽシリキ、賜纒頭錦衣一重

此久行之採桑老モ、先祖ニ有相傳トモ不聞、而近久相傳之由申、不審ナキニアラサル處ニ、眞實ニハ天王寺舞人薗四郎公貫ト云モノニ退走秃ニ舞替タルヨシ其聞アリ實不如何可尋 好氏採桑老ハ重代ノ曲ナレバ不審スベカラザル處ニ、蜜々ニ忠秋ガ沙汰トシテ、天王寺採桑老舞某語ヒ寄テ今近秋ガ童形ノ時習傳テ、近秋ガ手ヨリ好氏ハ寫渡云々 兩家相傳如此云々 實不可尋、是皆世間沙汰

承久二年五月廿九日閑院内裏舞御覽、好氏始舞 安倍季清係

同八月十九日水無瀨殿舞御覽日、久行始舞 豐原公久係

其日入時ニ樂屋ノ本ノ櫻ノ木ニ係タリ 昔政資ガ藤壺ノ事ヲマテハムトシタリケルカ、神妙ニハミヘスシテ、カタハライタキコトナリケルト時人申キ。政資ハ藤ニ係テ詠ヲシタリ

シコソ目出タカリシカ。今入時樂屋ニ入ラムトスルニ係タリケルハ無其由モ云々

私云、如此事昔未練ノ輩ト云トモ今代ノ人ニハマサルベシ。上代サヘカヤウニ身ノ分サイヨリモフルマイタケタルハ見苦ワサナルベシ。マシテ當時伶人等ハ定メタル目錄ノ面如形吹ワタスコトサヘナクシテ右ノ樂ヲ渡ヲキタル譜ヲミテ吹催馬ナントカタハシツヽリフイテシマンシテミトクイセウナル人多シ、カタハライタキコトナリ、サシアタリタル小樂風情ヲサヘ程拍子ミダリニ吹ナスホドノ者努々アルマジキ事ナルベシ

今ハ胡飲酒採桑老二流ニナリニタリ、　無念ノ事カナト世ニ申ケル。此舞ニ鼻カム手アリト云天王寺ニハ舞侍ヨシ其聞アリ、此方ヘハ渡不渡不詳可尋

私云、近例ハ多久時父ニ早ハナレテ當曲不傳、然ニ永享ノ度舞御覽ニ此曲アルヘキヨシ被仰出之間依カ希代久時被仰出天王寺舞人ニ任先例傳之二帖舞之于時ニ十五歲ト云々。其後慈照院殿御代花御所被造侍ニ舞御障子被書之仍當曲ノ秘手可面白ヲ相斗可申沙汰由故治秋被仰出之間幸ナル哉此二帖不傳之無念之由常久時歎申之間、予別而知音之㕝アルニヨテ亡父取申末二帖相殘侍此時祿物ヲ被仰付相傳サレラレ(マヽ)ハ可忝由申上侍處ニ尤神妙ニ申

上間則被仰付御馬御太刀被出不日ニ久時頂戴シテ天王寺ニ下向、スミヤカニ殘二帖傳之、公私珎重、道ノ冥加不可過之、其子久泰タシカニ父ニ傳由依之于今殘侍㕝實也

件御障子ニ採桒老四帖之內手盡ノ懸御目其手內有御點土佐將監書之予モ拜見セシナリ。

惣ノ圖者天龍寺法丈障子、伏見大光明寺障子被(イ傳アリ)寫之予度々治秋召具又ハ篤代罷向奉行シ侍シコト也

絲管抄(案)
通典曰、因三州曲而作ニ採老ニ三州哥者諸商客數由ニ巴陵三江口ニ往還因共作ニ此哥ー

蘓莫者　古樂　中曲　有舞　天王寺舞也

序二帖拍子各六、太鼓打樣自始太鼓壷打如如荒序打之

破四帖拍子各十二、終帖加搔三度拍子一反時末六或四加之早只拍子同樂拍子此時不吹

喚頭ノ返付當家大神此說ヲ用也、可秘 諸在別紙

教訓抄說(案)
此舞者昔江(エン)(イ役)ノ行者、大峯ヲトヲリ給ケルニ、笛吹給ケルヲ山神メデ給テ舞ケルヲ、行者ニ見ツケラレテ舌ヲクヒ出タルト申傳タリ　件出現峯ヲバ蘓草者ノタケト名ケテ今ニ在云、而聖德太子河內ノ龜瀨ヲ通給ケルニ、馬上ニシテ尺八ヲアソハシケルニメテ、山神舞タル

由、近代法隆寺ノ繪殿(エトノ)說侍、御持(コチ)ノ預(アツカリ)中侍、仍不審無極處、或僧云、蘓莫者ノ㝎ハ六波羅蜜經ニ

具ニ說タリ。佛世界曲ナリ。非ニ此朝ノ㝎ニト正(マサシク)申キ。以レ是案之樂ガ天竺ノ樂ニテ侍ヲ化人タチ

ノアソハシタリケルト覺候也。舞ハ山神ノ曲更ニウ タカウマシキナリ

序二帖、太皷如荒序打之、一說如樂詞打之、破忠拍子用之、終帖加拍子 如還城樂破 舞出入用古樂

亂聲也。亂聲吹止各爾取 盤渉調音〔〇以下イニヨリテ補〕次序二反、次破三反、終帖加拍子、次同亂

聲ニテ入〔〇以上〕入時重破吹 加拍子 一說也

或書云、本有ニ急一大秦(ヲホハフ)〔〇孝云ヲホハタノ訓誤レリ〕公貞時令秘藏間絕了。古老云、此破ヲ六カコニ 十六拍子延吹、昔爲急云 抑此

破ニ有樂拍子之說大神惟季之流外、他伶人不知之也。

永保三年十月一日法勝寺九重塔〔イ御アリ〇教訓抄「御塔供養」ニ作ル〕供養法用樂ニ惟季始吹之、其習

云 不吹嗅頭 有返吹處 笙時元 自余伶人 不吹之

保延二年十月十九日法金剛院御塔供養 錫杖上樂、基政吹之

承安三年　日蓮花王院御塔供養日當座ニテ樂可仕之由被仰下、宗賢失東西テ散々吹了

建保元年三月廿六日法勝寺又九重御塔供養ニ任永保例此樂式文ニアリ、笛吹 宗賢、式賢 二人、此

樂拍子之說ヲ分明ニモ存知セサリケルニヤ、父宗賢ハ申旨モナカリシニ、式賢ガ樂拍子ト云ハ早吹ヲコソイヘトテ、忠拍子ニ於世カケテ吹、父ハ不吹シテアリ、子一人シテ吹テキ、ナラハスハヲトナクテ侍ヘキニ、父ヲサシヲキテ說ヲ作亨世末ノワウワク色マサリタル亨也。上﨟ノ御中ニモ此樂ノ吹樣コソ先例ニ相違シタレト聞トカメサセ給人ノヲワシマサ〔原、アリ〕〔校ニヨル〕ヌコト返々モ口惜也　後ニ予樂拍子之說ハ惟季說ハカクハ侍ス、由利吹ニテ侍物ヲト申シ、カバ、其說ハ蒙ニ御定一吹事ナリト陳申ス、中々ニ無ニ其謂ニ之由時人之沙汰之都不習傳事露顯畢

此ノ破十六拍子ニ延六拍子說ニハ樂詞ハイトカワラス、大鼓ツホハカリ替ア〔原ナ〕リ、樂拍子ノ由利吹說ハ詞ヲ延テ吹侍ナリ。此兩說者今世ニハ予流ノ外人更不知之歟。

竹林樂　古樂小曲無舞拍子十敎訓抄云〔原〕　自二反頭一加三度拍子可打羯鼓早八拍子延四拍子兩說有之、共加三度拍子拾鉦鼓　口傳云、雖爲古樂管絃之時打一鼓亨不同〔原〕合然者可用羯鼓　古老物語云、大國ノ葬送ニハ奏此曲云々、仍吉亨不可用之、雖レ然不レ謂レ吉不レ用レ之

白柱拍子九　又十　又八　新樂　小曲　无舞　拍子九ナ常用之自二反ノ頭加三度拍子拾鉦鼓

教曰困
謂之德貫子有三說一者拍子九早八拍子加三度拍子、是兒女子京樣云二者拍子十拍子同前、又云十一拍子是云
奈良樣大判官ハ是ヲ秘說トセリ。三者忠拍子說頗拍子八可用コレハイツレノ拍子ニモアルベシ、又ロノ音
ヲ吹樣アリ、メヅラシキ說ナレバサモノ〳〵シカラン時ニ吹ベシ博雅三位說可爲古樂物云

大本字
越殿樂　拍子十六　新樂　中曲無舞　拍子十二自二反頭加一拍子拾鉦皷

尋明抄云困
律書樂〔龍宴アリ亻ニヨル〕菡云、宴〔亻ニヨリテ補〕樂之林鐘州又林羽越殿　此破ハ黃鍾調ノ安城樂ヲ渡シ
テ平調ノ物トスト云リ、有忠拍子加三度拍子　急可吹十三返惟季ノ時マデハ平調ノ物トセリ
シテ法勝寺金泥一切經供養之日錫杖衆下樂始用之、盤涉調ニ小樂ナキユヘニ然附音盤涉調
ノ物トセリ。于今汝用下樂ニ用之加三度拍子
教〔〕困
口傳云、此急ヲシテ欲成平調時ハヲハリノ平調音ヲバ一反ニテ止ナリ。等說ナリ。困教訓抄事
書ト尋明抄ト大畧同之抜書上〔亻畢〕。

康保三年侍臣奏樂退出音聲奏此急拍子六、八鞨皷加三度拍子

劍氣褌脫　古樂〔亻拍子十五二度十四拍子一云散樂又儴樂アリ〕中曲無舞　拍子十六唐拍子物也

自第二三拍子加一拍子、鞨鼓一鞁不打之、以鉦鼓爲拍子、唐拍子ニテ無時打鞨鼓新〔イ〕樂

私云鬪ヲ帶タルヲ、キ褌ヲヌキタル心叶ナヘリ、又祕說云、鬼ヲシタカヘタル褌（フトウシ）（ハタハカマ）事有、鬼ハタツナヲカキタルニテ辱ヲカクス、其ヲヌカセタル体ソ極秘ナリ

アリ〕古〔イ樂アリ〕兼打樣ル事有口傳之下無調ニテトム〔〇〔イ〕頭註ニ一褌脫拍子号脫（スキ）拍子十六拍子ナリ、此時唐拍子ニ打コト難知最說々多可考ニアリ。孝云。後人ノ記入カ〕

花上ニ曝レ褌（サラスコンヲ）〔傍訓返点朱書〕　圏　殺風景之一也

教訓抄云、拍子十五又十六、無鞨鼓唐拍子拍脫拍子云、此樂相撲之節猿樂用之、拍子火急物也則拍子上。〔教訓抄「五」ニ作ル〕其時ニモロノ〵ノ猿樂出テ、ヲモヒノ〵ノワサヲス、呪師モアリ　又說拍子十六此說ニハヲトス所ナシ、タヽ口ヘ返シ吹之、十五時ハ初一拍子ヲハヲトシテ吹ナリ、早物ナリ。此曲ハ大支樂也　カクスベシ。

圏口傳ニ云、褌ハコントラ云ヲヨミツケニケンキコタツトヨム。又物語アリ、有口傳。禿（トク）鼻褌（ツフス）ト云古事アリ。

（墨）犢鼻褌ナリ。

（墨）（朱）禿ヘフルクナル心アリ

千秋樂　拍子八又十六拍子　新樂小曲無舞

自二反頭加拍子三度拍子　拾鉦鼓

此曲後三條院ノ康治三年大嘗會ニ風俗所預王臣物賴吉奏勅作、而入道左大臣殿ノ此調子ニ

小樂スクナシトテ吹トヾメ給云々、此樂有二說、一者早八拍子鞨鼓打三ト拍子二者早四拍子打加一拍子 又古樂揚拍子上ト古老申サレ候キ。古樂說ハゲニトモ不覺侍用船樂說與本說八鞨鼓

古記云、千秋樂近代之人監物所作云云而濱雄入目錄云々是三品譜云、本朝ノ所作之、非玄城樂、此事未ヲトシ(ママ)〔○教訓抄「ス」アリ〕ヘズ、唐樂ノ目錄ヲ見テ落居スベシ、私云、早四拍子ノ時ハ第二ニ可付之、然ハ此樂ノ時八拍子ノ時初大鼓ニ付トノミ思テ當座ニテ廢亡有ベカラズ、樂度ニ可守大鼓ト也

遊字女 拍子十 新樂小曲 無舞 加三度拍子

拾鉦〔拾鞨〕鼓喚頭不知他人之

教訓抄云〔略〕

此樂大神氏ニハ不吹サレバ此家ニモ不侍シテ則成ニ習傳ナリ狛近眞コトナリ〔略〕 早八鞨鼓加三ト拍子 反度ハ喚頭一反吹出テ一反吹也、曳物ノ說ニハ喚頭ヲ二反吹云。教訓抄云、豐原氏ノ說ニハ於喚頭者時元之時絕畢ト注之不審于今傳習タリ。舞ノ故實ニヲイテ彼ガ說ヲ可用之、樂道事者以當家ノ記爲本有忠拍子說末延之

或書云、隋煬帝並子作之、遊兒女改遊字〔教訓抄「宮」ニ作ル〕也。

長元樂拍子十六　新樂　目錄無之

此曲長元大嘗會時、從三位源朝臣濟政作之、或博雅三位作之、世人千秋樂ノ急ト申ハ僻事ナリ。謂長元樂也。播磨三位説云、可云德菓子（トクカシ）也　コレハ書入ヘクモ候ハズ　世ニモ人用ズ侍物ニテ侍トモ任六条入道之説傳テ則成之畢。管絃ノ時シテモアソブベシ　早物四拍子モノトアリ

私云〔刁ニテ補〕、右事書無用ナレドモ千秋樂モ入道左大臣殿吹トヾメサセ給ニヨテ今殘ナリ。長元樂モ同之。但古譜ニハ侍シカト覺侍、常ニハ吹傳ス侍也

朱雀院の行幸ハ神無月の十日あまりなり。世のつねならずおもしろかるべきたびのことなりければ、御かた〴〵ものみ給ぬことをくちおしがり給、うへもふぢつぼの見たまはざらむをあかずおぼさるれば、しがくを御前にてせさせ給ふ。源氏中將青海波をぞまひたまひける。かたてには大殿の藤の中將、かたちよそ〔刁ほアリ〕ひ人にことなるをたちならびては、なを花のかたはらの三山木なり。入かたの日かげさやかにさしたるに、がくの聲まさり、もの、おもしろきほどに、おなじまひのあしぶみ〔刁下五字アリ〕おもしろく、よに見えぬさまなり。詠なごしたまへるはそ〔刁こ〕これや佛の御加陵頻迦のこゑならむときこゆ。面白あはれなるにみか

ご涙をのごひ給ふ。かむだちめみこたちみななき給ぬ。詠はてゝそでうちなをしたまへるに、まちこりたるがくのにぎはゝしきに、かほのいろあひまさりて、つねよりもひかると見え給ふ、春宮の女御かくめでたきにつけても、たゞならずおぼして、神などそらにめでつべきかたちかな、うたてゆゝしとのたまふを、わかき女房などと心うしとみゝとゞめけり。藤つぼは、おほけなき心のなからましかばましてめでたくみえましとおぼすに、ゆめの心ちなむしたまひける。〔下イアリ〕宮はやがて御とのゐなりけり。けふのしがくはせいかいはにことみなつきぬないかゞ見給ひつるときこえ給へば、あいのふ御いらへきこへにくゝて、殊に侍るとばかりきこえ給。かたてもけしうはあらずこそみえつれ。まひのさまてづかひなん家のこはことなる。この世になをえたるまひのおのこどもゝ、げにいとかしこけれど、ここしうなまめいたるすぢをえなんみせぬ。心みの日かくつくしつれば、もみぢのかげやさうぐしくと思へどみせたてまつらんの心にて、よういせさせつるなどきこえ給。〔〇以上〕つこめて中将のきみ、いかに〔医ゝイニヨル〕御らんじけむ。世にしらぬみだれ心ちながらこそ

もの思ふにたちまふべくもあらぬ身の袖うちふりし心しりきや

あなかしこゝある御返めもあやなりし御さまゝ、かたちに見たまひしのばれずやありけむ

唐人のそでふるりとは遠けれどたちゐるにつけてあはれとはみき（る歟）

〔亙下アリ〕六かたにはとあるを、かぎりなうめづらしう、かやうのかたさへたど〳〵しからず、人のみかどまでおもほしやれる御きさきことばかねてもとほゝゑまれて、ぢきやうの様にひろげてみゐ給へり。きやうかうにはみこだちなどよにのこる人なくつかうまつり給へり。春宮もおはします。〔〇以上〕れいのがくの舟どもこぎめぐりて、もろこしこまとつくしたる舞どもくさおほかり。樂のこゑつゞみのをとよをひゞかす。一日の源氏の御ゆふかげゆゝしうおぼされてみど經など所々にせさせ給ふ〔亙下アリ〕をことはりとあはれがりきこゆるに、とうぐうの女御はあながちなりとにくみきこへ給ふ。〔〇以上〕墻代など殿上人地下も心となりと世。〔亙ニテ補〕人におもはれたるいうそくのかぎりとゝのへさせ給へり。〔亙下アリ〕さいしやうふたり、さゑもんのかみ、ゑもんのかみ、ひだり右のがくの事をおこなふ。まひの師どもなど世になべてならぬをとりつゝ、おの〳〵こもりゐてなんならひける。〔〇以上〕木だかき紅葉のかげに四十人のかいしろ、いひしらず吹たてたる物のねどもにあひたる松風　ま

こゝのみ山おろしきこえて吹まよひ、色々ちりかふ木のはの中より青海波のかゝやきいでたるさまいとおそろしきまでみゆ。かざしの紅葉いたうちりすぎてかほのにほひにけをされたる心ちすれば、おまへなるきくをおりて左大將さしかへ給。日くれかゝる程にけしきばかりうちしぐれて、空のけしきさへ見しりかほなるに、さまいみじきすがたに菊のいろ〳〵うつろひえならぬをかざして、けふはまたなきてをつくしたるいりあひの程そゞろさむく、この世のこともおぼえず、もの見しるまじきしも人などの、木のもと岩がくれ、山の木の葉にうづもれたるさへ、すこしもの心しるは涙ゆ〻〔〇源氏ニおとしけりトス〕しけり。承香殿の御はらの四の御子まだわらはにて秋風樂まひ給へるなむ、さしつぎのみものなりける。これらに面白さのつきにければことごとにめもうつらず

南無妙法蓮華經

豐原朝臣統秋花押

體源鈔　三本（本）

壹越調 呂　中央　土　黃　信　宮　君

絲管抄被〔底名[イ]ニヨル〕載之[朱]

樂書要錄曰。土者爲四方中〔底車[イ]ニヨル〕、位有中央其聲中宮四方不土不レ寧木不レ土不レ生、火不レ土不レ榮、水不レ土不レ淸、金不レ土不レ成、八音不レ土不レ調、味不レ甘不レ和、色不レ黃不レ正、樂當宮於林鐘、用磬和樂於中郊

皇帝破陣樂　新樂　大曲　舞出時遊聲

入時〔[イ]上アリ〕調子

遊聲　無拍子　羯鼓如序打之返付兩說有之打マカセテハロヘ返譜有別紙之

序一帖拍子三十　破六帖拍子各二十

此曲ハ大唐ニ玄宗皇帝ト申ス御門ノ、國ヲタイラケ給テ即位ノ時、令作給タリト申傳タリ

此朝ヘ誰人ノ渡タリト云事タシカナラズ可尋。

或書云。秦始皇作此曲云可尋。

又云。口傳云。初半帖十六拍子舞時モ廿拍子ノ時モ卅

栗田道麿渡破陣曲云。（然者道麿渡歟。）

教訓抄ニ云。遊聲一帖（無拍子）舞ノ出笛トス。返吹處有二説。口ヘ返ス常也。抑和爾部大田麿ガ傳ニ云。舞人立定時ニ打ニ太鼓一拍子ヲ（有口傳）尤爲秘事（當家ニモ秘傳也）

序一帖（有三半帖）初半帖（拍子十六）中半帖（拍子四）後半帖（拍子十）

此家ニ習所ハ如此、而從五位下尾張ノ連濱主（ハマヌシ）傳云、コノ舞ノ序ハジメハ（四十拍子ナリ。）シカルヲ遣唐ノ時儛生還ニ本國ニ時忘ニ末八拍子ヲタリシニヨッテ承和御時諸葛中納言奉テ勅ニ序一帖（拍子三十）以十六拍子爲ニ半帖ニト定畢。此序ニ小部氏大神氏相違ノ所アリ。第二ノ大鼓拍子ノ内譜ヲハナレテヲトシテ吹ナリ（十〇（〇小ノ誤[イ]戸）部ノヲ千句（應句[イ]ニヨル）ト是ヲ云）舞ニハサシテタカウ事ハナケレドモ故實ノ侍ナリ。又初半帖（十六拍子）舞時モ乃至（廿拍子）舞時モ卅拍子終ノ手、二拍子舞テトヾマルナリ。コレハユヽシキ秘事ニテ侍ナリ、打マカセテノ舞人ハシラヌコト也。ヨク〳〵穏スベシ

私云。此説末代人不審スベキコト也。假令樂ニモ毎々此義也。幾拍子ノベテ小イキニテモト、マレ延ル息ノキワマデ吹テ留ナリ。此コト何ナル心ソト覺侍間亡父ニ尋

拍子ノ末ノ手ヲ二拍子舞フト云。然ハ二拍子マワデトヾマルト云義不用之歟。

案但シ央宮樂ナンドハトマリ五延テトマルニ三メニ拍子アタル間ツネノ樂ヨリ一拍子吹コシテトマルヘシ、不然者大鼓ノシトネ拍子ウタレヌナリ。

右ノトヽマリノ事ハ實義也。舞ノ事ハ不知、樂コトニイクツモノヘテ小息ニテフケ延ル所マテフキテトヾマルベシ。常ニ人知タルコトナレトモ人不

侍時、只樂ヲ吹ユウナルベシ。此心諸道ニアルコトナリ可尋ヨシ申サレシ。但シ舞コトニハセヌナリ。皇帝序ニ如此習傳侍、舞家ニ深習口傳アルベシ。大方ノ旨ヲ先アラハシテ不審ヲ晴事也。

破六帖 拍子各二十、或云入破 切々ニ吹之 一二三四帖樂吹五六帖序吹連吹之

第一帖大旨(タイシ)六鞨鼓ノ物ナリ。其内第九拍子八カコ第十一拍子八カコ末三拍子序舞光季、惟季ノ秘事トテ注タル内、八鞨鼓二所二籠拍子アリ、如蘓合三帖。

第二帖トヲリタル六鞨鼓ノ物ナリ。末三拍子ヲ序舞ナリ、但此帖秘説トテ注サル。光時秘譜云。第十七拍子鞨鼓曰(〔イ〕四)中六。ユ由リ五。〒六引。五〒ヽ引。〒由五。ユ由夕。ユ連五。〒丁由。ユ連〒。第十三七カコ第十五七カコニアツベシ。但不用之。

第三帖初拍子有二説五カコ七カコ已上タイシ六鞨鼓ノ物ナリ。但第十拍子五カコ第十二拍子五カコ末四拍子ヲ序ニ舞ナリ。

審スル時答ヘキナリ。吹ノコスハ樂ノユウナリト早。

此帖ハイヅレノ帖ト云トモ秘事中秘事ナリ。序吹五拍子ノ說アレトモ常不用之
第四帖トヲリタル六鞨鼓物ナリ。末四拍子ヲ序舞ナリ。秘說曰、第十三拍子四鞨鼓 十四拍子八鞨鼓 第十五拍子四鞨鼓 コレハ第一ノ秘說ニテ侍ナリ。努々不可〔(イ)ニテ補〕披露。

教訓抄載之圏

中、六。、工由五。、丅リ六。、五丅。、丁由。、丅。、五夕。、工連五丅丁。、工連丅。、 兩說拍子如此也

圏四帖ノ六拍子ニテトヲリタルコト如此ハ注シ侍トモ今ハトヲリタル六拍子ニ打ナリ然ハ四鞨コ又八鞨コヲ交テ打秘說ヲ常ニ可打カト覺也。

教訓抄云圏

抑以前四帖ヲ皆トヲリタル六鞨鼓ノ說アリト大神氏ノ笛吹ハ申セドモ、コレハ一定ノヒガ說ト覺侍ナリ。惟季モサル說アリトモシルサレズ。舞ノ家ニモナラハヌ事ナリ。ワレシリ侍ラネドモ他家ノ目出コトハサモトヲホヘコソシ侍ニ、此說ニヲキテハ實說ヲナラハヌ輩ノヲシ吹ニシタリケルヤラント推侍處ニ、或右舞人申侍シハ、八幡ニ侍ケル小輔寺主ト云僧ノ說トゾウケ給リシ。是等躰ノ說ハ中々ニアシキナリ。

五六帖トモニ序ニ舞二切ヲツヾケテ舞ナリ。但大田丸說ニハ兩帖ノ間シバラク祿〔〇程ノ誤ナラン〕ヲヲクヘシ。當時不用之五六帖ノアヒダノ〔(イ)ニテ補〕事ハ万秋樂ナンドノヲセ吹ニ成所ノ間タルベシ。

抑此五帖昔ハ樂吹ニテ侍ケリ。或譜ニ織錦聲打トシルセリ。イツゴロヨリ序ニハナリタリ

ト云事ミユル物ナシ。尤不審ナリ。可尋

舞人ノ入時ニ上調子ヲ吹。備中守源政長ト云ケル人ノ説ニハ、出入トモニ遊聲ヲ吹ケル今世ニ不用之

昔此曲善舞者、

中務大輔清原瀧雄、造酒正高階黒雄、命婦石川色子（訓本）

抑應徳ノ春比　白河院ヘ舞人光季、笛吹惟季ヲ別ノ所ニメシスヘテ權中納言藤原宗俊ヲ勅使トシテ當曲ノ秘事ヲ御尋アリケルニ、兩人ノ申狀イサヽカモタガウ事ナカリケレバ、御感シキリニアリテ、二道ノ高名コノ事ニアリ。此異説ハ非ニ勅定ニ不可有披露之由奉テ勅ニ各令退出畢。

教訓抄載之囷

次大神元賢ト申笛吹侍キ。承安元年四月十八日二條院舞御覽ノアリケルニ、今日皇帝御覽アルヘキ由仰下タリケルニ、件ノ元賢皇帝吹ニテ只一人候ケルカ、チカラヲヨバズ候。ハカ〱シク毋不覺候由申上ケルヲ、笙笛吹豊原時秋ソバヲツキテ、イカニワ公ハ口惜事ヲバ申スゾ。時秋ガ笙ニ付テ吹ベキ由返々申ケレトモ、不及力トテ目モミアゲズシテ侍ケレ

バ、舞人樂人等我家ノ皇帝ハ今日ニウセスルヨシ申ノ、シリケレトモ閉口シテゾアリケル。上ニモ口惜事ニ思食ナガラ玉樹ニカヘラレ畢。公私面目ヲ失タリ。家ノナカキ、スト中侍ケル。
サテ同年ノ春比辻判官則近家ニ來テナクナク昔ノ契ヲ申ケレバ、惟季ノ譜ヲ取出テ兩三度合テコソ手ヲツカヲテ悅テカヘリケルト被書置テ侍ナリ。其後ソ常樂會ニモクタリケル。カヤウノ事ヲ見テ人ハ心ツクヘキナリ。
建久九年ノ冬比仁和寺ノ舍利會ニ皇帝アリ。御室ノ御愛弟金剛ト申童ニ笛合テキコシメスヘキユヘナリ。序十六拍子破六帖普通說宗賢カ弟子舞人ハ一者光重ナリ。其時二者ニテ則房カ侍シカ樂屋ニテ、誰人ノ今日皇帝ヲハ舞モ吹モスヘク候ソト孝道琵琶利秋笙侍ケルニ向云ク、殿原比巴(イニテ歟)彈モ笙吹セ給ヘ、則房カ流ヲ舞ヘシトノ、シリ侍ケレトモ、一者光重笛一者宗賢一切ニモノ申サテコソ侍ケレ。二條院ノ舞御覽時、父元賢フカスシテヤミニシ事ヲトカメハイワント存タルナリ。一道ハカヤウニサラスベキナリ。サリナガラコトナクトケラレ侍、三帖ハ光重シラザルコトヲアラワサム料ニ初三拍子ハ則房已下舞人舞ズ(イ

ニテ補〕シテ見ニ正躰ナキコトニテソ侍ケル。

續教訓抄云。　皇帝破陣樂　破陣ノ字常不用之、亦名武德太平樂又名安樂太平樂。答舞新鳥蘇有後參又号蘇利古　先吹調子吹出笙之後篳篥付之横笛不吹之次遊聲横笛取音吹出也。即調子止笙篳〔医了イニヨル〕篥付之舞人各立定後止之

或記云。舞人出時吹之反數無之以舞人之行立爲定和爾部大田丸傳ノ外ニ或記云、舞人出畢テ落居時、太コ一打之反吹所多說アリ。打任テハ口ヘ反ルナリ。

知足院禪定殿下仰云ク、此曲ハ序ト五帖トヲ習也。此序ノ結ニハ延ツ、吹ニ在也。就中半帖ノ雙調音ニ成果性念ナク吹ハ何爲早其神ヲ吹アラハスベキ也。

又序ニ丁六丁六ト兩度吹ヲ後ノ丁六ヲ早ク吹也。狛光季云ク、此曲ハ序ノ目出キナリ。戸部ノ正淸等ハ序ヲ不可思議ニ吹タルソ、サラ〳〵ト結テハ引延ルコトヲ心モ不及吹シナリ。

破六帖ハ別事ナシ、只セク〳〵ト木ヲ折置樣ニ吹ナリ

舞譜ニ云ク、太刀拔手此帖ニアリト云々。　但此帖ノ舞ノ手太刀ヌクベキ所ナシ。タヽハキナガラ舞ン事者無子細、　散手靑海波貴德等ノ舞太刀ヲハキテスカス。就中皇帝ハ武舞ナ

り。太刀ヲハカン事尤シカルベシ。且ハ唐舞ノ繪本ニハ帶劒ニテ舞ナリ。五帖ノ事、古說云ク。樂吹ヲ用猶吹連又舞ハ第二帖ノ如シ。惟季家說云々、此時ハ羯鼓織錦聲打ヘシ、舞モ樂吹說トテ侍リ、常五帖ニアラズ、手モカワレリ。能々秘藏スベシ。凡此事何比ヨリ序ニ成タリト云コト未勘得、不審不少可尋。

六帖ハ五帖ヨリハ今少早ク吹。六帖ニナル所少シ吹延テ分別セサスルナリ。余ノ帖々ニナル所ハ二穴計ホドヲヲクナリト云々。侍從大納言成通云、皇帝入破ノ程ハ春鶯囀ノ颯踏ノホト許ニ可吹之

抑此曲者唐太宗皇帝ノ御製作也。此太宗皇帝ハ唐代第二代ノ王神堯皇帝ノ第二ノ子ナリ、謚文廟諱世氏御母大穆皇后竇氏在位二十三年含風殿ニ崩御年五十二 貞觀元年丁亥日本推古天皇卅五年ニアタレル歟。

或記（イ說）ニ云ク。唐ノ玄宗皇帝ノ御製云々

玄宗皇帝ノ即位ハ唐ノ大極元年壬子歲也 改テ延和トイウ。又改テ先天トイウ。日本和銅五年ニアタル。此帝ハ唐代六代ノ王、睿宗第三ノ子ナリ、諱隆基、御母昭成皇后ト申ヽ竇氏

也。在位四十四年開元廿九年天寶十四年ナリ。此ノ歳ノ十一月安祿山カタメニ蜀山ニウツサレタマフ。肅宗元年至德元年丙申歳太上皇トス。同御宇八年寶應元年壬寅神龍殿ニシテ崩御歳七十八泰陵ニ葬ス。日本淡路廢帝六年ニアタレリ。

抑此曲名ヲヨフトキ破陣樂ノ三字ヲクワヘス、以下准之。又破陣樂ノ字武舞ニ通稱スル歟。凡大國ノ習、亂ヲヽサメ王業ヲ陣スル時、歌舞ノ曲ヲ作ス。帝位ニ登テ始テ奏之。此舞則其隨一ナリ。唐ノ玄宗皇帝即位ノトキ作之云々而禮記樂記ナト（○等ノ書）乃心ヲ案スルニ、武舞ハ必ス戟ヲトルヘシ。當曲ハ戟ヲトラザルニ破陣樂ト稱スル如何。但舞譜ニ云ク、破ノ四帖太刀拔手アリト云々。

隨テ又唐ノ舞ノ縮樣ニハ帶劍ニテ舞之云々。然レハ武舞ノ条ハ子細アルヘカラザル事歟。但此太刀拔手何比ヨリ舞失ニカ當世ノ舞ノ手サルヘシトモ不覺。又タシカニミヘタルモノナシ。然而縮本トイヒ舞譜ト共ニシルシノスル上ハ破陣樂ノ字其謂ナキニアラサル歟。

此曲ハ諸葛中納言唐ヨリ傳來ト云々。一說ニ云ク、栗田道麿破陣ノ曲ヲ渡スト云々。但彼道丸ガ遣唐ハ文武天皇ノ御宇大寶元年辛丑正月ナリ。彼時ノ唐帝ハ女帝則天皇后也。在位

十四年ニアタレリ。太宗御製ノ儀ナラバ尤符合スヘシ。玄宗御作ノ儀ナラハ時代相違ノ事ナリ。＼玄宗皇帝即位元年（壬子）ハ日本元明天皇和銅五年ニアタレリ。道丸ガ遣唐ノトシヨリ玄宗即位ノ歳マデ十二年ヲフル歟。然レハ玄宗ノ御作ニテハ僻説ト云ベシ。

大方只破陣樂トヨハル、ハ秦王ノ事ナリ。然ラハ道丸ハ秦王ヲワタセリケルニヤ。

堀川院ノ踏哥ノトキ御風ノ氣アシ〳〵テ出御ナシ、御簾ノ内ニテ御笛ヲ吹シメ御ス、皇帝ヲ舞セラル。御前ノ殿上人一兩付笛ス、貴キ叓也。

凢常曲一具アル叓ハ先例希ナルモノ也。應保元年三月十六日九条殿（兼實）舞御覧當曲アリ、序卅拍子破六帖ナリ、舞人五人、眞葛朝葛則氏繁眞定繼樂入堂上皇后宮大夫公藤土御門大納言通親四條二位房名（已上三人）笙地下近秋政秋重秋、篳篥季茂季俊守保、此守保ハ先祖ヨリシラズトイヘトモ光葛ユルス間吹之。笛堂上花山院大納言（兼雅）同三位中將（家長）（仲賢ノ弟子）（已上二人）地下景貞仲賢景好鞨皷（景秋）大皷（重賢）琵琶春宮大夫師繼（孝時弟子）爰ニ序大コ卅一打之、又破五帖ノ大コ廿一打之、是失錯ナリ。

元亨三年正月十六日女踏哥節會之次當曲一具アリ、爲御覧被略第三獻第二獻ニ在節會等早

ク終テ申下許〔囮刻〕ニ在之。左舞人六人季眞朝葛光業康眞朝業眞茂樂人笙三人兼秋宗秋龍秋篳篥直保（但大コ仁無之　依御定打之）茂政尙保笛四人景光景資景朝景茂（依召參）カコ正コ在之。（不注之、仍不載之）

私云。此曲作事唐太宗作云〻。玄宗皇帝ト云、イツレト定カタシ。サレトモ如此事ハヨノ道ニモ侍事也。蟬丸者延喜ノ御子ト云人モアリ、一向サモナキ叓ト云人モアリ。但アラカイ問答スルコト無用ナリ。其人ノ身ニ名譽アリテ諸道ノ中ニアルイハ堪能ノ名ヲ得、又ハ毎度高名スル事アレバヲノヅカラ其主ニ歸コトアルベシ。玄宗ハアナカチニ樂ヲコノミ曲ヲ作ラレ侍事詩ニモ作侍ハ御作トモ云ツヘシ。蜀ニテ雨霖鈴ト云曲ヲ作リ給トアリ。至二月宮一テ霓裳羽衣ノ曲ヲ傳聞テウツサル先生ニテモ尺八笛ヲ吹給ト云事明白也。然者製作之事サノミ不可疑歟。先生ニテ笛ヲスカレタル古叓無用ナレトモ載之。

編年通論開元廿六年沙門法秀ト云者夢ラク、星僧勸メテ置二袈裟五百領一、施二サシム回向寺ノ僧ニ一既覺歎、異乞丐ノ造レ之、然モ偏ク訪二所謂回向寺ト云者一ヲ咸無レ得ルコト焉。一日道逢二一僧ニ一逆〔囮迎〕而問テ日託レ置二シ袈裟一今成ルヤ未シヤ秀日成リヌ矣、僧ノ日吾導レテ汝ヲ入二回向寺ニ一、汝可二齎テ

レ粮ヲ齎燧ノ從レ吾ニ以往ク、秀曰諾、翌日隨テレ之入ニ終南山ニ行コト二日至ニ深絶ノ處ニ所ノ見唯雲物鬱
蓊トノ嵓洞崎嶇ナリ、進テ過ニ〔因過〕石壇ニ共止マル其ノ上ニ僧命レ秀ニ鑽キラシムレ燧ヲ出レ火炷レ秀ヲ望テ層霄ヲ拜ス
レ之、忽雲開見レハ崖半ヲ有朱門高ク聳刹幡飛楊秀忻然與之攀躋ノ而上、漸聞ケハ午梵清圓ノ鐘磬
交作コモゴモヲル、須臾望見レハ其寺ニ有レ額曰ニ回向トニ其僧即趨テ而入ル、命ニ閽者ニ授ニ秀ニ館ヲ因テ具レ儀ヲ謁ス
上方ノ老宿ニ云々　明日秀出ニ袈裟ヲ遍寺施レ之、老宿謝シ畢テ携レ秀ヲ入ル一空房ニ呼ニ侍者ヲ取ニシメ尺
八ヲ俄頃ニ侍者持シテ玉簫ヲ至ル、老宿曰此レ唐ノ天子ノ舊居ノ之室也、向サキニ在テ此好コノムニ聲樂ヲ故降クダテ爲ニ人
主ト久シク當ニ復歸ル秀止ツ再宿ノ不得留ニ老宿授ニ與ス玉簫并ニ袈裟ヲ、囑ノ曰、持ノ歸テ獻セヨ唐ノ天子ニ
即遣ニ僧ヲ送テ秀ヲ出寺ヲ行コト未レ遠回望スレハ而雲霧四ニ合ス、秀慨歎ノ而還ル、詣レ闕表シテ上レ所レ寄、
帝覽之ヲ因テ取ニ玉簫ヲ調弄スレハ宛如ニ夙ツトニ御スルカ焉云々

團亂旋　新樂　大曲　舞出入時調子有甲

序一帖 拍子十六ホウシヨ　中序二帖 拍子各十六　入破二帖 拍子各十六　颯踏二帖 拍子各十六　急聲七帖 拍子各十

六

此曲モ唐國ノ舞ニテ侍リ、作者未ダ勘出サ、或笛譜曰大戸眞繩マナハ作之。而古人語云、眞繩ハ此

朝人ナリ、此曲ハ唐舞ナリ。或書云后帝團亂旋以之推之ヲ皇帝ハ玄宗造ナリ、當曲ハ后宮造（ヤサイノミヤ）ニヤ。此朝ヘ渡事モ皇帝ト一度ニ渡タルナリ。不審ナキニアラズ、可尋之。諸肩袒舞如皇帝男子云々亦名團蘭傳答舞古鳥蘇有後參如皇帝段序一帖ミナ序吹舞ナリ。中序二帖、樂吹物（八鞨鼓）末五拍子ハ序舞。常ニハ序一帖中序一帖舞常呼二三帖

中序第二帖ハ當曲ノ秘帖ナリ、初拍子常鞨鼓六ニアツ、秘說ニハ九拍子アツ。一帖九拍子アツ一說已下十拍子八カコ末五拍子序舞。狛光時自筆舞說（不謂）云末四拍子可序舞

續教訓抄云（思）

一序一帖鞨鼓壇短聲序吹舞之、又云序切々吹之、口傳云ク、微音ニ吹出ト云々。同二帖秘說云以此帖號中序。

中序名ノ事（云）

初拍子十又云九自第二拍子至第十一拍子八カコ末五拍子序吹舞之。秘說云、第十第十一鞨鼓十ニ充之

知足院（思）

一禪定殿下仰云、、序二帖初拍子カコ　三帖初拍子カコ九也是ソ清延ガ說也。而基政ヲ召テ問シメ御テ云ク、此曲ニカコ十及ヒ九ノ果アリヤ。基政申云ク、不候（不存）之由申ケリト云々」

狛光時云、團亂旋ハ靜ニ可吹也、就中序程可靜也ト云々。

又云、序二帖反吹度其拍子本坪(ツボ)ニアタラサル句アリ。堀河院ノ御時改テ本坪ニ可充之由勅定アリトイヘトモ基政申云、春揚柳如クハ喚頭ニ至リテ本乖ク拍子アリ准之ニ證據ナキニアラズト云々。因茲不敎改也云々。

同三帖以此帖可云中序二帖、但此中序事常人不呼之只云序三帖也。

初拍子(中序名事(朱)六)又九秘之自第二拍子至第十一拍子八カコ　末五拍子序吹ニ舞之。秘説云。第十第十一拍子十ニ充之。舞ハ三寄〔底奇〕(ニヨル)シテ舞之以〔底次〕(ニヨル)之口傳トスルナリ。(前ニ有此事抄物全説間重書之歟)狛光時秘説云々。末四拍子序吹ニ舞之用此説時ハ第十第十一第十二カコ十ニ充之テ大皷ヲ可打之也云々。又秘説九自第二拍子七カコニテ十一拍子アリ。末四拍子序吹ニ舞之。

(朱)五夕由丁中　五夕由中　五夕由　五丁(朱)中ミ夕由中丁(朱)六丁中丁(朱)ミリ中夕五ァ夕ユ由丁(朱)六由中丁由丁(朱)五(朱)

六リ丁押(朱)由中丁ユ(朱)中(朱)夕丁ヒラク由夕ミリ　〔○按云右の◦は朱左は墨中央の○は墨◉は朱〕

已上二帖ニ付

凡七カコノ說ニヲイテハ笛ノ吹樣モカハル。又大鼓ノ壺モカワル。舞ハ一寄シテ舞也。此說普通ナラス、余人シラザル歟。吉々秘スベキナリ。或云。初拍子六カコノ時ハ第十五大コ略之　又云。以此帖爲秘事云々。

入破二帖 拍子各十六 鞨鼓織錦聲

或云。只破。又云。六帖。又云四反初拍子五自第二拍子至第九拍子六カコ　末七拍子序吹ニ舞之切々舞之

狛光時云。入破ハ序吹畢テ更ニ返吹ニ有口傳、基政ハ知之、淸延ハ不委云々。　或云、初二反序吹アリ又二反吹テ奥ヘ入所ヘ急聲反付也。有序吹二說

颯踏二帖 拍子各十六 鞨鼓阿禮聲或云四反

序吹ニ舞之、一二帖連吹モ連舞モ〔イニテ雅、〕樂ニ說々アリ。

一樣初二拍子一反　次五拍子一反　後四拍子一反　一樣初四拍子二〔イ一〕反次二拍子二反後八拍子一反但常說ニハ初四拍子二反後八拍子一反ナリ　狛光時云ク。打颯踏之拍子如春鶯囀、鳥聲之義間分テ打之也。又云、此曲ハ習颯踏也。甚深事在之也。

秘記云。亂句ニ吹テ舞之、舞樂共ニカワレリ。光季惟(コレ)季ガ秘說ナリ。

狛行高說ニ云ク。亂句ノ說ヲ吹ン時、舞人モ立ワタリテ舞コソ習アリテメテタケレト云々。

今此亂句ノ說ト申ハ舞モ樂ノ詞ノコトク中ヲハシニ舞ナリ。尤口傳ヲウクヘキナリ。落句ノ皇帝ト云モ句ヲチチトセル〔以ニテ補〕ユヘニナツケ、亂句ノ團亂旋モ句ノ亂レタルユヘニ名ヅケタル也 謂略之

急聲七帖 拍子各十六 カコ織錦聲〔以ニテ補〕

初拍子 五 第二拍子ヨリ第九拍子マテ六カコ末七拍子序吹ニ舞之。二三四五六七帖拍子皆一帖ニ同之、仍不注之、切々ニ吹之。

左舞人困 光季秘說ニ云。四帖アテハ切々ニ舞之。五帖ヨリ七帖マデハ春鶯囀ノ鳥聲ヨリ急聲ニウツルカコトク、序ヨリ急ニナリ、急ヨリ序ニナル也。私云困 所謂連吹テ連舞コレラモテ本說トス。

但シ颯踏亂句ノ說ヲ用之時可用之云々

侍從大納言成通云、時元團亂旋ハ納言宗輔ニ習ナリ。納言ハ堀河院ヨリ被給ナリ。彼納言時元ヨリ多ク樂曲ヲ傳、其志ヲ報センタメニ此曲ヲ傳ト云々。

私右說不審、堀河院ノ御師範ハ時元参然者宗輔ヨリ傳事如何。

舞出時先吹調子品玄笙篳篥横笛次第ニ吹之、次ニ舞人出樂屋昇舞臺立定後調子止入時吹調子上調子次舞人降舞臺入樂屋無入舞。或說云、出時一越調々子品玄入調上調子吹連入時上調子ト云々。

昔善僖此曲者以林ノ直倉大戸ノ眞縄等說爲正說。

一抑此曲ハ唐ノ玄宗皇帝ノ后宮ノ御製作トイヘリ。但后宮ノ字ヲ畧テ推スルニ則天皇后ノ御作歟。此皇后ハ尙書士彠ガ女、名ヲハ工部ト申。ヨク管絃ノ道ヲシレリ。年十四ノ時唐ノ太宗選デ才人トス。後ニ后トシ給ヘリ。太宗在位廿三年ニテ崩ス。其子高宗即チ位ニツキ給フ。感業寺ニ幸シテ皇后ヲ見給テ、祝テ宮ニ召入テ又后トシ給ヘリ。高宗ノタメニハ繼母ナリ。此高宗在位卅四年ニテ崩ス。其後此皇后位ニツキ給フ。元年甲申ノ歳ハ日本天武天皇十三年ニアタレリ。在位廿一年ナリ。后帝トイフ名ヲハツキテハ尤シカルベキ歟。若シカラバ玄宗ノ作ニツカバ案皇帝ヨリハサキノ樂ナリ。當曲モ皇帝同時ニ渡リタル也ト注ス。私云案然者兩說ヲ可用歟。或笛譜ニ云ク。大戸眞縄作之ト。

云々。但此説ニヲイテハ一定ヒガゴトナリ。唐舞ノ條子細ナキモノ也。若舞ノ手ナドヲ少々ツクリカヘタル歟。且唐朝ヨリ傳來ノ舞樂其手ヲヤワラクル事、此一曲ニカキラス、其證多者也。

仁平元年三月廿二日少納言入道（通憲）極樂會ヲコナハレケル日、當曲ノ秘事ヲツクサレケルニ、序二切颯踏亂句ノ説急聲ノ連句等ハ侍リケル也。

承久二年ノ常樂會ニ當曲ノ時切々如常ノヨシ笛音頭（景賢）ニ申含テ出テ序一帖中序一帖舞ヲハリテ入破ヲ吹カンスラント思處ニ、此序三帖吹出タリ。舞人光眞已下十人烈立タル一人モコレヲカククコセス、仍アキレテ立タリ。近眞判官（教訓抄作者ノ名人ナリ朝葛ダメニハ祖父ナリ）一人コレハ三帖ナリ（中序二帖トモ云）舞人ヲ心ミムレウナリト申テ、二帖ノ片答ヲ舞ナリト申テ、舞始テ候シ時コソ各付テ舞ハレテ候シカト載之。（名譽也）此會ニ一度モナキ功ナレバ、各アキレタランモ尤コトハリニ侍、ユヽシキ大事也。其後景賢ヤウ〳〵ニ陳申キ。マタク舞人ヲ心見タテマツランノ儀ニアラズ、タヾ水無瀨殿ノ舞御覽ニ當曲アルベシトキコヘ侍シ間、隨分ニテ手ナラシ侍シユヘニ思ワタリテ吹侍ナリ。以外ノ失錯ナルヨシ人コトニノヘ申ケル。コレテイノ事ニ人ノ才覺ハミユ

ルモノナリ。續教訓抄ニ云　サレバイカニモ舞人ハ樂ヲヲホユヘシトハカヤウノレウナリ。吹ハフクト思ヒ、舞ヘハマウト思ハカリハ無下ノコトイヤシキワザナリ。舞ノ拍子ヲモ樂ノチカイメヲモ委ク存知シテ、此道ヲハスヘキ事也ト侍。返々樂人專此覺悟アルヘキ事也。金言ナリ、可仰之。

久安三年ノ冬ノ比、法金剛院ノ一切經會ニ新院御幸アリテ、ヤウ〳〵舞ドモ御覽ノ內當曲ノアリケルニ、豐原光元ガ笙ヲ吹ケレバ、新院ノ御定ニ云ク、抑汝カ家ニハ兩曲ハフカザルヨシ知食トコロ、今仕ルハ誰人ニ習テ仕ル。光元申テ云ク。明暹ニ習テ仕ナリト陳申ケレバ、重仰ニ云。其相傳甚タ其謂ナシ、仕ヘカラストテトドメラレマイラセ畢。其後宗輔太政大臣家ヨリ御笛ヨリ下給ル間、時秋モユルシテ吹セケルナリ。其後ハ子テコマテ吹ケル。今ハ其末ナシ

光時云〻、皇帝團亂旋一日ニ舞事ハ昔ヨリナシ。サレハ山階寺ノ常樂會兩曲アリト云トモ兩日ニ一ツツ（笛吹閑）舞ナリ。

侍從大納言成通云。基政ガ申シハ、團亂旋ノ序ヲバ能々秘藏セシムベキナリ。目出モノナ

リ。始五穴ヨリシテ盤渉調ノ音相交リタル手指殊勝ノ曲ナリト云々

按察大納言宗俊（笛吹〔朱〕）ハ皇帝團亂旋ハ面白モヲモヘテハフカズト申サレケレハ、爪ハシキヲシテ時ノ伶人等參セサリケリ。但コレヲ案ルニ、皇帝ノ手サシ團亂旋ノ詞ツカヒ、イツレノ樂ニモマサリタル上ハ、爭カ面白カラテハアルヘキナレドモセメテ秘藏ノアマリカクト覺タリト故人申也。

抑於皇帝團亂旋之笛者小部氏ハ淸近カ後絕畢。大神氏ハ基賢カ時ニ失畢。宗賢以後以外ニ繁昌ストイヘトモ樣々ニカマヘ出タル子細アリ。後白川院御時妙音院被仰合ケルニ、宗賢尋常笛仕男候ハ可免給之由計令申上給云々。孝道朝臣說ナリ。辻家ニハ惟季ヨリ光繼マデ眞葛七代相傳〔イ「ノ」テリ〕曲ナリ。

私云。團亂旋作事古記ニモ未コトキレス、雖然アマタノ記ニ玄宗皇帝ヲ製作シ、楊妃〔國姬〔イ〕ニヨル〕團乱旋ヲ作スト注ス。サノミ紀〔〇紀カ〕明スヘキニ又無詮、名ヲ得タル人ノ造作於末代不可不審事前ニモ大方申旨也。然者貴妃ノ作ニツイテ其ノ身躰別ニ不及注、道ノ外事ナレドモ專世ニ人翫モノナレハ常可見哉、仍書之。猶儒者ニ問尋可知之。

長恨歌　　白居易

漢皇重色思傾國、御宇多年求不得、楊家有女初長成、
養在深閨人未識。天生麗質難自棄、一朝選在君王側、
回頭一笑百媚生、六宮粉黛無顏色、春寒賜浴華清池、
溫泉水滑洗凝脂、侍兒扶起嬌無力、始是新承恩澤時、
雲鬢花顏金步搖、芙蓉帳暖度春宵、春宵苦短日高起、
從此君王不早朝、承歡侍宴無閒暇、春從春遊夜專夜、
後宮佳麗三千人、三千寵愛在一身、金屋粧成嬌侍夜、
玉樓宴罷醉和春、姊妹弟兄皆列土、可憐光彩生門戶、
遂令天下父母心、不重生男重生女、驪宮高處入青雲、
僊樂風飄處處聞、緩歌慢舞凝絲竹、盡日君王看不足、
漁陽鼙鼓動地來、驚破霓裳羽衣曲、九重城闕煙塵生、
千乘萬騎西南行、翠華搖搖行復止、西出都門百餘里。

六軍不レ發無ニ奈何一、　宛轉蛾眉馬前死、　花鈿委レ地無ニ人收一、
翠翹金雀玉搔頭、　君王掩レ面救不得、　回レ首血淚相和流、
黃埃散漫風蕭索、　雲棧縈紆登ニ劍閣一、　峨嵋山下少ニ人行一、
旌旗無光日色薄、　蜀江水碧蜀山靑、　聖主朝朝暮暮情、
行宮見レ月傷レ心色、　夜雨聞レ鈴腸斷聲、　天旋地轉回ニ龍馭一、
到此躊躇「〇ヨノ誤」不レ能レ去、　馬嵬坡下泥土中、　不見玉顏空死處、
君臣相顧盡沾レ衣、　東望ニ都門一信馬歸、　歸來池苑皆依レ舊、
太液芙蓉未央柳、　芙蓉如面柳如眉、　對此如何不ニ淚垂一、
春風桃李花開夜、　秋雨梧桐葉落時、　西宮南苑多ニ秋艸一、
宮葉滿堦紅不レ掃、　梨園弟子白髮新、　椒房阿監靑娥老、
夕殿螢飛思悄然、　孤燈挑盡未レ成レ眠、　遲々鐘皷初長夜、
耿々星河欲レ曙天、　鴛鴦瓦冷霜華重、　翡翠衾寒誰與共、
悠々生死別經年、　魂魄不ニ曾來入レ夢、　臨卭道士鴻都客、

能以精神致魂魄、
爲感君王展轉思、
遂教方士殷勤覓、
排風馭氣奔如電、
升天入地求之徧、
上窮碧落下黄泉、
兩處茫茫皆不見、
忽聞海上有仙山、
山在虛無縹緲間、
樓殿玲瓏五雲起、
其中綽約多仙子、
中有一人字玉眞、
雪膚花貌參差是、
金闕西廂叩玉扃、
轉教小玉報雙成、
聞道漢家天子使、
九華帳裏夢魂驚、
攬衣推枕起徘徊、
珠箔銀屏邐迤開、
雲鬢半偏新睡覺、
花冠不整下堂來、
風吹仙袂飄颻擧、
猶似霓裳羽衣舞、
玉容寂寞涙闌干、
梨花一枝春帶雨、
含情凝睇謝君王、
一別音容兩渺茫、
昭陽殿裏恩愛絶、
蓬萊宮中日月長、
回頭下望人寰處、
不見長安見塵霧、
唯將舊物表深情、
鈿合金釵寄將去、
釵留一股合一扇、
釵擘黄金合分鈿、
但令心似金鈿堅、
天上（屋下不）ニヨル、人間會相見、臨別殷勤重寄詞、
詞中有誓兩心知、

七月七日長生殿、　夜半無人私語時、　在天願作比翼鳥、
在地願爲連理枝、　天長地久有時盡、　此恨緜緜無絕期、
いまにはじめざるとながら、うき世の有さまをみるに、いよ／＼この比は人の心も予がおぼえたるにもかはりはてて三十年このかた、猶としどしにさてもあさましき世の躰等かなと、驚かれ侍る事のみ、大やけわたくしにつけて侍事たれをゝ見あながちに一人の御とがとも不見、たゞ時節のくだれるにこそとのみおぼえ侍るにも、取分みちゝ〔○「ろたと」トアリ〕の中に殊更すたれゆき侍るは樂道なるべし。大方はゞかり入たる申事なれども、哥道なども今はさだかに口傳の殘りたりともおぼえ侍事の世になきやうに見え候へども、なか／＼かたる中結句ハ遠國などに傳置一說もありげにきこえ候めれば、應仁のみだれに京都にありわびたる仁、みな田舍のすまるにのみ成しゆへ也。殊更連哥など數寄侍る人のきゝ置侍事、おくふかき說ども殘べきかと思給事まゝ人の語侍し也。樂道の事はかた山でらの法事に入事にて少々傳侍りし事、これもむかしはいかめしくあなぐり習侍れば、万秋樂などは說々げにもと覺事の侍也。今世は無正躰侍ればたのます住吉天王寺の伶人、是又一向にう

への御用にもたつべき器量ならず、又非道の人もとはあまた音律にもたづさはり、樂どもにも數寄などして翫あそばれ侍し事あれば、又をのづから人にしやうせられてたしなむ事もありしなり。いまはなにともしらぬものにてなくともともかけぬものぞなどいふかずに入てあらぬすぢにのみ人おもひ侍る一人のなげきにあらず、世のするになりぬる事の第一とすべし、しかれば道に生たるものもこれを口惜事に思ひ、よし人はともいへ、希代の家にうまれたる事のふしやうとも思ひ、かやうの中絶の時節一人なりとも親師匠の口傳たしかならば、道のひかりにもなりて、上の御事かげぬやうになど思ふ族一人もなし。有時は道理哉とも覺ゆ。當時もて遊笛尺八已下の藝能をだにも物くさき人はすかずして春日のくらしがたきにも、いたづらに霞とともに山野に立いでゝ、家路もしらず、遊覽を專にし、秋の夜明がたきにも、枕をそばだつる事をもせず、たま〳〵目さめぬれども學文に心ざしはなくて、そゞろなる小哥、あやしの乱拍子のうたひもの、双紙取いだし、隣家にいかなる人の聞事もやさもいはず、ねぢすぢりうたひ高聲に物がたりなどして、明がたになればそのとゝもなくぬる程に、日たけて約束したる事の有にも相違し、つくり病をして人にうろ

んものにおもはれ、われももう(マヽ)きさしてかたみにいはずして又あしにまかせ東西へあゆみゆきて、その日も又くれぬ。言語道斷の事上口惜次第也。たゞとてもうき世の奉公、人間のましろひは思ひ切たるわざなれば、前劫のしからしむる事とせめて思とりて今生又このまゝむなしくせば、來世一定地獄のすもりなるべし。われ一人ならず一人佛になれば上無量下無量の親類悉佛道にちかづき、ふしぎの緣にもあひて佛に成事と思ひとりて、いそぎ佛法にちかづき法華經持たてまつる身と成べし。盛なるものはかならず衰、生あるものは則死する習、今更申べきにあらざれども、切々にこのとはりを案じて驚おそれ侍は佛法の御恩もかろからず、萬事にあはれみも又いでき侍べしとなり。圏コレハ子孫ノ者ノ爲ニ申置也、努々他人ノ上ノコトニハアラス、憚入タル申事也

君恩如水向テ東流得テモ寵憂ィ移ナ失寵愁と侍ればよろづにつけて世は程なき事と思べし

人生識字憂患乃始とはべれば老後には無用の筆のすさみなれどもこゝの次に書付也。

本能寺日與上人の御付句に

ふけては殘ることもし火も見すと云に

あたら夜をいたづらにのみ人のねて御自語と畢

この次に書つけ侍事ははゞかりなれども

永正六
正月朔日佳例之十首に尺教を

法のためうけがたき身をあたら夜の月と花との色にそむらん

三條前内府家御合點のあひだ叉さのみ卑下すべきにもあらず、予が本意の哥也。

羅陵王　一名蘭陵王

絲管抄[案]

通典曰、蘭陵王大面出於北齊蘭陵王長恭才武而貌美、常着假面以對敵、常撃周師金墉城下勇冠三軍齊人壯之爲此舞以效其指麾撃刺之容謂之

蘭陵王入陣曲

私云、此曲者殊舞家ノ說ニ付テ家々口傳相承故實加之、取分當家ニ此曲能傳之、當時殊ニ他家ニハ明白ナラザルゲニ候。無念ノ次第也。大方舞者狛氏嫡家中古名人近眞說ヲ爲正說、而ニ近年斷絕之由風聞ナリ。然者彌當家イサヽカモ不相違相承事、冥加之至也。殊ニ當曲ハ治國ノ樂ナルニ、亡國ノ音相交、是ヲ吹ノソキテ治國ノ曲トスベキ習深重也。

唯受一人也。可仰ミ樂ノ故實舞說々記畢。教訓抄ニ悉載之。正說ノ間アリノマヽ書之。大事之口傳在之、聊爾ニ外見アルヘカラズ。以此旨可披見ト也。

別裝束舞　通大曲　古樂　乱序一帖　囀二度　嗔序一帖　荒序八帖 拍子八　入破二帖 拍子各十六

面有二様　一者 武部様黒眉 八方荒序之時用之　一者 長恭假面様小面云、光季家相傳寶物也

此曲ノ由來ハ通典ト申文ニ由タルハ 前ニ記說ナリ 大面北齊ニ蘭陵王 長恭 ト申ケル人、國ヲシヅメンガ爲ニ軍出給ニ、件王ナラビナク才智武勇ニシテ形ウツクシクヲハシヽマシケレハ、軍ヲハセスシテ偏將軍ヲ見タテマツラントノミシケレハ、其様ヲ心得給テ、假面ヲ着シテ後ニゾ周ノ師ヲ金墉城下ニウツ、サテ世コゾリテ勇三軍ニカフラシメテ此舞ヲ作 指麾擊刺(〇刺ノ誤)ノカタチコレヲ習コレヲモテアソブニ、天下泰平ニシテ國土ユタカナリ。仍蘭陵王入陣曲ト云。此朝傳來様 未勘出。尾張ノ連濱主流ヲ正說トスル也。

蓮道譜云。此曲沙門佛哲傳渡 唐招提寺留置也

又云。脂那國ニ一人王アリ、トナリノ國ノ王ト天子ヲアラソヒケル間ニ彼王崩畢。其子即

位シテ猶アラソヒヤマサリケレバ、太子王ノ陵ニ向給テナケキ申給ケレバ、忽墓内ニ聲アリテ雷電召ニ子王ニ云、汝ナケク事ナカレトテ、則現ニ此形ニ赴ニ戰陣ニ（龍顏美髯髯不異）日ステニクレニ及テ戰ヤ　レスベシ、爰父王飛神魂日搔、仍蒼天午時成了。サテ合戰如思國ヲウチトリテケリ。サテ世コゾリテコレヲ歌舞ス。名沒日還午樂（雖無本文所古者傳也）

亂聲一帖此内有各別名（日搔返手、蜻蛉返手、甬走手、桴鞢手、大膝卷、小膝卷）囀三度（昔七度アリケレトモ今世ニハ用ス）三度囀手舞事狛光時之流外他舞人不知之。其詞（卽向四方舞之、殊八方荒序時用之、濱主傳也）

一說云、吾罸胡人。古見如來。我國守護。翻日爲樂

一說云、我等胡人。許還城樂。初度石於踏テ泥ノ如、第二度光則說當時用之。

一說云、阿力胡兒。吐ニ氣ニ如電（〔石雷〕）初度我採頂電　踏石如泥（光近說）

嗔序此內在秘手。鬚取手　跬廻　各荒序舞時用之

秘口傳云　舞家習傳

代々ノ御賀若君ノ陵王マワセ給ニ秘事ヲシヘマヒラスル手ノ中ニ此ヒケトル手ヲハカナラ

スチシヘマイラス。其ヲ御ヒンツラヲナテサセマイラスルヤウニチシヘマヒラスル也。此等ハ努々人知ヌ事也。能々カクスヘシ。今世ニハ小乱序トナツケテ只少舞ハヨノツネノ様ナリ 粗嗔序ハ絶タル由世人云ヘシ。嗔序ノ舞手不知常人故ナリ

古記曰。

左馬ノ屬大友成道ト云ケル舞人究竟陵王舞也。時ノ人生陵王トナン申ケル 大友信正弟子ナリ 件舞人 成道 關東ヘ下向ノ時、常陸國鹿嶋宮ニシテ陵王ヲ舞ケル、其國ノ書生ナリケル翁、此舞ヲ見テ申ケル様、ヲキナ陵王ヲ見事コレ始ナリ、但物語ニシツタヘテ侍ハ、陵王ハ一躍ニ千里ヲカケリ、石ヲ踏ハ泥ノ如シ、吐氣ハ雷ノ如ナリ。小龍ヲヒタイノシワニタヽミト、メナントスル物ニテコソ侍ルナルニ、今ノ陵王ハ蜻蛉返、鬚取手コトノ外ニ又ミユルモノカナ、生陵王トコソ申ナルニ事ノホカニモ侍物カナトテアサワライテ立タリケル。サテ成道舞畢テ樂屋ニ入ヲヨヒムケテ、ヤ、此ノヒケ取所ヲバ諸手ニテナテ、終ヲアラクハナチ給ベシ。當時舞給ヲミレハウケ給ニモタカイテヲカシキナリ。翁カカヤウニ申ヲハヲコカマシク思給トモ聞タモチ給ヘト云テサリニケリ。成道アサマシク思テ云、ミモシラヌ

翁ノカヽル遠國ニテカヤウニ申ハタヽニハアラシ、御神ノ變化シテ敎給ニコソトテチシヘノマヽニマイケレバ、日出ク侍ケルトカヤ。年號月日タシカナラ子ドモ本說也。古記ノ裏書ノ中ニ註之ナリ

口傳云。

大膝卷ヲ乱序ノ內ニハ不舞シテ此嗔序之內ニ舞ハ一ノ習ナリ。而建保五年ノ常樂會ニ其樣ヲ近眞舞テ侍シヲ、或舞人ノワライ侍ケルコソ中々ニソコアラヲハレテヲカシク侍レ。此說嫡家相傳之說タリ、仍不知及條尤コトワリナリ。敎訓抄載之畢

次䄙取、「荒序近代絕畢、古譜ニハ明白ニ載之。ナゲカシキコトナリ

先荅笙、次ニ篳篥次ニ横笛各沙陁調ノ音取ナリ

荒序

有八帖拍子八此鼓如乱聲打之、有二說一四八說、八方八返說一四八說曰ハ北方二返東方二返西方二返南方二返舞テ樂ノ終ニ北向テ終ナリ。コレハ當時舞ト笛トタカフ所ナクテ日出合侍也。仍此說ヲ常舞也

八方八返樣曰ハキワメタル大事秘事ニテ候ベシ。北方ヨリ一帖舞始テ乾二帖西三帖坤四帖南五帖巽六帖東七帖艮八帖北向テ八帖ノ舞ノ末ハ居テ終ナリ右膝突舞ノ手モ大旨カワリタリ。長キ短キコトノ外ナリ。笛吹ニ對シテ能々合ベシ。

私曰。先當曲練習之後ハ毎朝可吹之精進可用行水又所作事被仰付者前七日堅精進ヲシ、氏神妙音天先祖尊靈ニ大願ヲ立可仰守護器者家ノ名物可用簀新立替青石ヲ可用之細糸ニテ簀ノ本末ヲイフベシ、蠟ナドモ風ノヒカザルヲ可擇至所作ノ事ハ別紙ニ載之。俄ニ只上樣御所望ナリトモ水ヲアヒテ可吹之大方者前日ヨリ被仰下其用意アルベシ、諸曲ニハ不可順〔不准〕事也。口傳相承故實不可說也云々 兼秋夢說別紙載之

白川院御宇
承暦四年八月十五日八幡宮放生會
　荒序舞 狛光季　笙笛未出勘之

堀川院御宇
寛治五年正月十八日賭弓 或說云、相撲節會
舞 成兼 但荒序吹時雌〔不〕未出不知荒序故也 笛 惟季正淸之間未勘之。但荒序四切吹之 此比ヨリ以後記之別紙在之、當家所作始。

崇德院御宇困

天治元年正月廿九日又十八內裏賭弓荒序

舞光時　依院宣始舞、笙時秋　笛清延、

八方破ニ返納曾利留舞　兩人所作始

同二年正月十八日賭弓荒序

舞光時八方破ニ反笙時秋笛清延大鼓助貞〔鹿眞〔イ〕ニヨル〕正鼓時秀一鼓基政此時ヨリ十三度時秋所作歟。其ヨリ此方之所作事〔イ者アリ〕有別紙之、量秋二度幸秋二度正說所作此兩代四度計ナルベシ、唯受一人ノ說ニアラスハ治國ノ曲ニアルヘカラス。仍此旨ヲ能々聞召テ鹿苑院殿樣御奧書御自筆被染量秋ニ給之爲末代載之

御奧書〔朱〕

羅陵王荒序

右大曲者豐原嫡々相承之深奧也、而故信秋不殘說々口傳悉所傳授也。時又任申置之旨秘說等返授量秋者也。且爲公私之佳例且叶時元之芳躅歟。縱雖年老上首之輩所作事對量秋之子孫不可有異論者也。

明德三年八月廿一日　　從一位　御判

將軍家進上信秋奧書

右曲者嫡々相承之深秘也、然間御傳受聊雖爲早速云御數寄云御堪能更無比類之上、信秋所勞危急之間不殘說々口傳所奉授內大臣家也。於御諫習者中置英秋訖、將又孫子量秋年少之間未授當曲且爲公私之佳例之上者被返下御說可備當道之眉目者也。

永德元年八月廿七日　從四位下行雅樂頭豐原朝臣信秋判

小松院（ハ〔イ〕殿アリ）御震筆御奥書故治秋給下

羅龍王荒序 載別譜

右曲者當管之最秘斯道之淵底也。依有懇望之謂所授賜豐原重秋（治秋改〔朱〕）也。永賡一流之踵須奏萬歲之聲矣。

正長元年十一月十六日　御判

同兩入調御奥書

平調幷大食調入調 各載別譜

右兩入調者此道之奥秘更無他說者也。說々秘傳無殘所授賜豐原重秋（改名〔朱〕）也。

正長二年三月十一日　御判

已上當家面目道之冥加之間載之

教訓抄ニ載之図
長承二年三月六日ノ賭弓ノ勝負ノ舞ニ此說可有御覽由藏人頭奉行ニテ仰下サレタリケルニ、笛吹清延ヲ枇杷殿ニ舞人光時ニ召向テ申狀吹樣ヲ聞食ケリ。少々事者清延存セヌ事侍ケレトモ光時カ任教訓吹了。

口傳云。

八帖ノ終ハ居タリ、舞人入破ヲ吹出テ初ノ大鼓拍子立第一之爲秘說此樣清延シラス、光時カ教訓之內也。惣異樣曲也。黑眉面ヲ着時舞出間有曲ナリ

大鼓在異說拍子ノ中ノ上拍子ト可謂之。或笛吹說云、以左桴太鼓ノ打革面ヲサユ(○教訓抄「ス」)ル八秘說也

一上﨟授進荒序例

保延元年依ニ勅定一狛光則奉レ教二于爲通侍從一二四八說 同二年三月十一日殿上ノ賭弓令舞給着裝束 笛吹忠基中將 大鼓光時

仁平元年八条中納言雅長三河守ノ時光近ヲ語寄給テ習寫荒序曲給略宗說以二返八返舞樣ナリ 不可傳授于他人由ノ被出起請文爰光重自彼卿傳給由申テ舞頗ル無其謂事也。但件起請文ヲ不可取出之由光重申書狀ヲ光眞給、仍賭弓一度常樂會一度舞

一上臈ノ以御笛地下輩ノ舞例
保延二年三月七日仁和寺御室ニシテ荒序御覽日舞人時光 笛吹羅中將忠基 大鼓御室ノ坊官僧不知實名
承久二年八月日水無瀬殿舞御覽日有荒序舞人近眞 笛吹右衛門督親兼 大鼓但馬守家長 笙忠秋
一無笛笙許以舞例亂序嗔序破ニハ有笛
保延二年正月廿三日ニ始テ光近ガ荒序御覽侍シ時、荒序笛吹候ハザリシ間、時秋笙許ニテ舞、大鼓光時
一仁安二年ノ常樂會ニ陵王落蹲ノ面修理タル始ハ左右一者舞ヘキ由定ラレテ、陵王小面光近 落蹲緑靑色 忠時有荒序、笙時秋、大鼓利秋
一年号月日不知之、近衛大殿下狛光助之荒序御覽アリケルニ、笙利秋 太鼓忠秋 利秋轠取ケル時舞荒序散々違亂云々
一無吹物太鼓許ニテ舞例亂序破等有笛荒序許也
保延元年依宿願於宇治離宮社荒序舞〔(イ)「候」アリ。教訓抄ニ「舞」アリ〕人光則 太鼓則助
一同三年十一月十八日熊野別當法印長範 秋津堂供養後宴十九日 光時荒序舞、太鼓光近 近方採

桒老舞

古記曰。

寛治五〔教訓抄ニ元ニ〕年相撲節（或賭弓）成兼陵王舞（荒序吹時膝突居不知件舞故也）笛四切吹畢（笛吹正清荒序譜故也）件成兼ハ無雙舞人ニテアリケレハ、中々ニヒミシクミユル物カナト上下人ホメ申ケルトナン。昔ハ人ノ心正直ニテ、シラサル事ヲハイカニモセサリケリ。今様ノ人ハヨモサルコト侍ラシ

入破二帖（拍子各十六）

第二帖自頭加拍子（略定一返時自半帖加拍子、猶略定半帖舞事アリ、末四拍子加拍子ナリ）抑加拍子様有二説　一者（京様當世用定）二者（奈良様ツマケ桴ヲ今一拍子サケテ打之、尤秘説云々）

舞出時吹ニ新楽亂聲ハ但常ニ用小亂聲也。又競馬相撲之勝負ノ舞ノ時者頗長吹也。

競馬　結番ノ走上時始テ吹出乱聲ヲ御前ニ参入ノ時吹止テ吹乱序返數無定者歟

相撲　最結手出テ大刀ヲ円座ニ置時始テ吹乱聲テ方屋ニ返入時吹止テ吹乱序也

賭弓　結番ノ左方ノ射手ノ矢放時ニ發乱聲射畢ヌレバ吹止テ吹乱序也

已上三ケ説爲秘事、今様ノ伶人シリテモ侍ス。

此舞ノ出時蹔(ヒキ)〔〇教訓抄ニモカクアリ〔イ趣〕〕走(ハシノ)ト云事ニ有三説、一者太鼓前、二者舞臺五尺置テ走説、三者舞臺上八方荒序時者踵廻手舞

入時昔ハ沙陁調々子用ヒケル、而高野姫(ヒメ)殊ニ此曲ヲ好ヲワシマシケレバ、常ニ御前ニテ舞セテ御覽アリケルニ、天平勝寶ノ比尾張濱主ガ仕ケル時殊目出ク侍ケルニ、勅定ニ云、此舞殊ニ目出クヲホシメス。但入時頗其興ヲウシナウ、早ク止ニ調子ニ以ニ案摩急吹ニ爲ニ入曲ト即一曲ヲ乙(カナツ)ベシ、奉宣旨濱主忠節ヲツクシタリケレバ叡慮ニ叶タリケレハ、永止調子可用案摩之由重テ被勅下畢。

一長保三年辛丑十月九日丙午東三条院ノ四十ノ御賀セサセヲワシマシケルニ、宇治殿ノ若君ニテ陵王アソハシケルニ入綾手(イリアヤノ)ヲシヘマイラセタリケル。サテ御師狛光高其ノ勸賞ニ左方ノ奉行始テ給タリ。

其以前ハ多氏ノ一者ニテ兩方ヲ奉行シケルトカヤ。納蘓利ハ賴宗イロ君九歳ニテマワセ給、多氏失面目了。

其ヨリ此方御賀ノ陵王ミナ若君アソバス。仁平ニハ家成卿若君、御師匠光時困安元ニハ宗家卿若君御師匠光近困
皆入綾ノ手ヲシヘマイラスルハ例也。當家之秘事在此入綾之手也。

一承久元年ノ常樂會ノ後朝ニ、別當僧正雅緣一家公卿下向アリ。大納言通具、定通中納言通具不審〔イ通方〕已上直衣中將具實渭元可被准賀ニ由定メラル。左萬秋樂序一帖半破二二五六帖舞人三人光眞、定近、則定太鼓近眞可打太鼓仁躰依無不立舞右地久四人好氏、久行、好繼、忠茂破ニ肩袒手アリ好氏居、久行不居肩袒下﨟二人不肩袒陵王光繼ガ童ニテ伊王生年十三ニテ舞、當座ノ公卿ノ御計ニテ入綾手ヲ舞ベシト付仰之無地下之例由ヲ雖ニトモ申返ト猶依被ニ責仰領掌由舞終テ入時ニ召御前具實中將大床上ニシテ單衣ノ袖ヲトキテ給紅肩ニ係テ還リ入之時、樂屋ノ前ニテ入綾舞之御賀大床上也貴賤ノ見物ノ大衆頗ル興ニ入畢ト、ユヽシキ秘事ニテ侍ナリ。予ハナレテハシル人ナシ能々可秘藏困近眞ノ詞ナリ

古記云。問此曲已古樂也。舞出時何ゾ用ニ新樂亂聲ニ乎答、亂序同音故ナリ。具依ニ爲ニ双調曲ニ也

舊譜

作龍王此舞合戰之間鬪死亡埋墓郎等樂尊來訪之時更生又鬪云々見或抄物可指南。

又云

魯陽公與韓搆難戰酣日暮援戈而揮之日爲之反三舍許愼曰按〔敎訓抄「日醉」ニ作ル〕和合之時已廿八宿爲一會（一本仝〔朱〕）

又云

新樂亂声并陵王乱聲者双調曲也、荒序并入破者沙陁調曲也、是三宮御說

又云

爾取者是沙陁調爾取也、長短有二說、今者用短說也。舊譜云嗔序之後聊吹調子之端仍記之

其詞云

工火夕火工火五火夕火五火工〒連五工。五工。工リ由。中火。中夕火中火夕。夕中火口火〒リ五。口リ。口リ

又云

陵王破二反吉舞事秘說也。舞人ノ大事ニスル事ナリ。光季家ノ外ハ正說舞事ナシ。荒序舞時大膝卷小膝卷蜻蛉返鬚取手ヲバ舞ナリ。入時按摩ノロクロヲカク早物治乘丸說云〻

博雅譜入時吹按摩吹ニク六（穴〔才〕）孔ー是師說中曲

是等ハ古說ト申ストイヘトモ有興事トモニテ侍ナリ。能々覺テ人ノトワセ給ワンニモ評申ベシ。

又云

山階寺常樂會小供之樂用之。惟季ハ忠拍子ニ吹侍也。今ハ樂拍子吹。尾張氏說。

一嘗曲勝事

康平六年ノ比備中守政長神拜ニ下向シケルニ舞人則高（節助）、政助、相具テ吉備津宮ニシテ舞ドモセサセケルニ、狛則高入陣ノ曲ヲ舞ケルニ、彼宮ノ神殿俄ニ振リトヾメキテ此曲ヲ御感ノ氣ナリ。末代ノ勝事ナリト上下人々耳目ヲドロカス。氏人國民等掌合舞曲ノ目出キ事ホメケルトナン。

久壽二年十一月中旬之比、京極大相國宗輔〔殿上人ノ時歟〕内裏ヨリ子尅許ニ退出アリケルニ、中御門ヲ東ヘ御車ヲヤラセテヲワシマシケルニ、月コトニサエノホリテ御心モスミテ面白ク思食ケレバ、御笛ニ陵王ヲアソハシテ、ユル〳〵トヤラセテヲワシケル、中御門東洞院角ニ社アリ。其社ヨリ物出來テ車ノ前ニ舞ケリ。アヤシク思食ナガラ御笛ヲアソハシケレバ、（精靈ノ三尺）早ク生陵

バカリナル〔朱〕
王ノ舞ナリケリ。不思儀ナリトヲボシナガラ東ヘ御車ヲヤルニ、冨小路ニイタリテ南ノツラナル小社ヘ入給ニケリ。牛飼モ御共ノモノ一切ニ見サリケリ。末代ニモカヽル勝事コソアリシカト御物語ノ侍シト、後白河院ノ主典代大夫屬（盛基）申ケルナリ。サテ其後ハ彼ノ大臣ハ中御門ヲハ車ニノリテハトヲラセ給ハサリケルトカヤ。

建保六年正月卅日ノ夜、母堂夢ニ見様（光近嫡女近眞慈母尼靑蓮也）故父（光近）浄衣裝束ニテヨニ心ヲヨゲニテ來云、我家ハウセスヘシトミユル所ニ此近眞カ道ヲツカントイトナムコソ返々モウレシケレ、ソレニトリテ陵王ノ荒序ノ五帖ニ二手ヒガゴトヲ舞ナリトテ、左右ノ手ヲ左肩ヘ振懸（フリカケ）右肩ヘフリ係（カケ）、如此三度シテ東ヨリ西ヘ廻向ナリ。此定ニコソスレト仰ラルト見程ニ夢サメス。次朝予ヲヨヒテ夢ニミツル様ヲマヲハル。老躰ノ女人ノ身ニセラルヘキ事ト更ニ不見ハ〔匠〕覺〔イ〕ニヨルヽ、アワレニ忝ク覺侍バ、今ハ其様ヲ舞侍ハ樂ニモ目出合テ侍ナリ。世ノ末ニモカヽル目出事ノ候也。シカラハコレヲ狛太子ガ夢說ト名テ侍也。

一兼秋記（号十三帖）

元亨三年三月ヨリ毎日ニ妙音天ヘ樂幷妙音講式法樂ス。其故ヤラン、同五月廿六日夜女人

ノ夢ニミル様、大童ノヨニウツクシキカ大口ハカリニテ兼秋ヲ召テ杉原一枚ニ物ヲ書タルヲ直手渡ニ給云々。則兼秋給テ拜ス。ヨソノ人是見テ不審ス。大童ノ仰云、是ハ荒序ノ奥書ソト被仰、又人申云、荒序奥書ヲハ兼秋コソ他人ニハタヒ候ヘト申。又仰云、兼秋ハ我相傳ヲ以他人ニハヲシウルソ、我コソ曲ノヌシヨヨナウヱイ我ハ琵琶ヲモヒクソ云々。

又同年六月廿一日巳日　曉令精進テ荒序、皇帝、團亂旋、萬秋樂一具蘓合四帖忠拍子已下法樂ス、此間るヲフリヲス、虚空ニ御聲アリ云、荒序第六切ノ息ツキヲシヘサセ給、モト吹音ハ亡國ノ音アリ、仍イノリ又御前ノ所作ニイマウヘシ。タヤスクモ世ニ是ヲ不知秘スベシ。於今者可令嫡家相承云々。又ヤガテヲシツ、ケテ太食調入調秘説ト云所ヲ吹ベシ。タヽノ所ヲバ不可吹普通ノ品玄ヲ秘ハ入調ノ手マシリタリ云々ユメサメ了。仍譜ニ註ス十三帖ニアリ、此文ニハ不載之

此所作シテ吹之時又先度ユメミル女人ミル之様四五許ナル小童ヒムツラニ山鳩色ノ装束シタル兼秋カ笙ニアワセテ舞給云ミ。此等實目出クカタシケナシ。彌可致奉公忠節此所作子々孫々マテモ不絶法樂スベシ。

嘉暦元年十一月廿日　　正六位上行右近衛将監豊原朝臣兼秋判

去應仁亂ニ知行北稲八間庄ニ各居住、予十九歳（應仁二歴）六月十二日夜夢ク、先庄ノ向ニ上津狛ト云テカセ山ノツヾキニ小山アリ、其フモトニ辨才天マシマス。縁起ニ云、其里ノ人夢ニ見ヘ給テ、コレヨリ奥ニ大石アリ、此石ノ中ニ我コモレリ、此石ヲワリテ取出テ社ヲ造テ可仰トミテ語之、不思儀ノコト、思ヒ、ツケノコトクニ山ニ入テ見ルニ如夢ナル石アリ。ヤスク打ワリカタキナレトモ、ソトユスレハ二ニ破タリ。中ヲミルニウツクシキ辨才天ノミクシマシマス。サテ皆信ヲ生テ社ヲツクリアカムナリ。此社トヲホシクテ貴賤群集ス、何事ニヤト夢心ニ尋侍ハ、コレハ人ノ願ニテ舞樂アリト云、幸ナルカナト思テ立寄見之ニ、父治秋襲裝束ヲ着別座ト覺テ疊一帖ヲシキテ座ス。アタリニ笛モナク打物モナシ。不審ノ所ニステニ笙ヲカマヘタルヲ取ナヲシ、音取ヲ聞バ陵王ノ音取ナリ。サテ荒序ヲ吹出サントスルニ、御殿（ノ前）ノ御戸アケリ。其内ヨリ五歳バカリナル童子出サセ給テ、御前ノ砂ニ立給テ吹出ヲ御待アルケシキミヘサセ給處ニ吹之則舞給、八切終テ又破ヲ吹則又マサセ給終テ御殿ニ入給其マヽ御戸アケリ。百味御供ヲ調コレヲマヒラセ侍ヲ拜スト見テ夢サメヌ。

アマリニ不思儀ノ事ナレバ早旦ニ語之、言語道斷也。所詮舞ノ次第可尋トテ南都へ人ヲツカハシテ、舞嫡家狛豊葛ヲヨヒ侍ニ則上洛相對シテ夢ノ次第語之。無不審八方荒序ナリトテ催感涙不思儀由被申侍、サテ樂ノ程拍子ノ事幷所作之躰大方語侍聊モ口傳ニ不替侍トテ北稻八間庄ニ嚴嶋トテ社アリ、其神前ニメ人ヲ遠ノケテ亡父吹ベキ由被申侍間、予夢ノ如吹之、言語道斷次第奇特ノ由被申テ云、サテハ我レ此所作ツイニトケヌ遺恨ナキ由一生存之處ニ、夢中ニモアレ神前ニテ所作シ侍事本望也。何樣ニモ他生ヲ隔テ、モ又所作スル身ニモ生センヤナド被申侍氣色、眞實執心深ケニ見へ侍シ、アワレ淺カラス哉

又私云。如此ノ事ヲ見テ、サテハキトクナルトテ辨才天ナド信事努々法華行者アルマジキ也。イカ程モキトクナル事アルベシ。法華經ノ六難九易ヲ見ルヘシ。至道者アワレフカキコトナレバ載之。今生一端ノ事ナレトモ、先祖ヨリ傳來曲ニテ天下治世ノ曲ナレハ、能々受口傳テ亡國ノ音ヲ吹ノソキテ萬歳ノ音ヲ可奏トナリ。（案此段カタハラ痛ク、且ハ自語ニ似タリ。欄外見也）

一正和五年二月十六日常樂會陵王荒序在之舞朝葛（二四八說破一帖左方一者老タイニヨテ也）笙兼秋（笙三臈歳三十）笛景光（笛一者）太皷秀賢、納曾利久氏（右方一、忠有右方二）朝葛一、横皮三、景光一、兼秋一、納曾利一ツ、給之（呂余賜之）亡

父祖三代之令興中絶跡之条可謂過分者哉。此時南都衆徒之中ヨリ感嘆ノ狀ヲ送侍次ニ

年をへてうきふししげき笛竹の三代にあひてぞ春風はふく

きこえ釼さきだつ人もうれしやと苔の下までひゞく笛の音

返事

かくばかり三代を待けむ笛竹のうきふしありと何思ひけむ

絶はてぬむかしの跡をとはるゝやこけの下にもうれしからん

彌増當道之秀逸者也 十三帖ニ載之

予先年於竹園槐哥御月次アリ、御人數ニ被加召有時寄日述懐と云題ヲ給テ

いつかさて入日をかへす時にあひてのこす思ひの雲をはらはむ

とつかまつり侍者、日カキカヘス手ヲよむ也

予ガ事者未練ト云若輩ト云、望事ナキニハアラネト併亡父朝臣執心アリシコトヲ思テ、セメテ予成トモ如形所作 于時侍從大納言 ヲセンニハ、亡父ノ舊思ヲモトフラフニ成ナントノ心中ナリ。

又千首哥ヨミテ三條前内府家ヘ御點申入侍ニ御點同題ニテ

今も世にまねかばさこそこばかりに雲のま袖の入日をぞみる

同サマナレトモ載之、更ニ非自讃、樂道ノ者哥ヲヨマデモ又無下ナルベシ。然者かやうの事ゑも見テ心付侍事もやこなり。

一面桴事 教訓抄ニ云困

寛徳ノ比、狛光高ガ家ニ相傳之陵王面アリ名之小面小龍ヒタヒニタチノボル依ニ不慮ノ事ニ光高ガ私宅ヲサカサル、間ニ此面失畢。身ノナゲキニ〔不〕ナシ〔ヽ〕ストイヘドモカイナクシテ數日ヲヘテ後ニ、興福寺ノ中門之内ニ此面ヲ懸タリ。誰人ノ所爲ト云コトヲ不知、一寺ノ沙汰トシテ納置庫倉畢。然光高寺家ノ政所ニ子細ヲ申上テ返給畢。然間夢想ノツゲニヨリテ我家ノ末申ノ角ノ小社ノ下ニウツミテケリ。今東御門前社也。東門院彼私宅也其後光季ガ時ニ爲不審ニ堀テ見ケレバ、面ハサヲイナクテアリケリ、サレドモ神物ト見ケレバ手カクルニモアタワズノ埋テケリ。件小面ヲ寫テ光季ガモチタリケルヲ、光時ガ時ニ仁和寺御室ヘ進上畢。今ニ彼寳藏ニアリ

武部様府黒左近司在之又熊野新宮又東大寺在之殊勝面也賀茂社ノ面ハ天ヨリ降タリト云

住吉社ノ面ハ淡路ニテアミニ曳タリ龍宮ノ面云々、彼社古老傳之

一桴事

濱主カ傳曰、陵王ノ桴ハ蘭陵ノ王入陣ノ時鞭ノ姿也、而渡ニテ我朝之後天平勝寳之比高野天皇ノ御時以ニ勅定ニ被改ニ當曲之古記ニ五箇ノ新制之内也。一者桴ヲ被ニ約一尺二寸ニ二者不可着ニ羅ノ半臂ヲ、三者止七度囀略定用二度北方一度南方一度用之、已上常說、詠詞准之、東西方一度、已上秘說可詠詞 四者古ハ吹先古樂乱聲今ハ用新樂乱聲亂序事爲雙調曲新樂亂聲又此調子物ナリ。仍依爲同音可用新樂亂聲云々 雖ニ女帝ニ御ニ如此舞樂之生御ケルナリ。五者古ハ入舞入時吹沙陁調々子今ハ用按摩急吹是又爲其興也、入綾可舞新也

建保五年壬申正月十二日庚申寅時、範顯肥後寺主夢狀ニ云。春日御社ニ參詣シテ舞殿ノ前ノ藤木本ニ候テ、御殿ノ方ヲ見上テ拜禮仕候處ニ、樓門ノ下ニ十七八許御ス若君ノ、以外ニ御勢大ニ御立テ御ト見マイラセ候程ニ、玉垣ノ西ノハナノホトヨリ、東帶ナル殿藤木ノ本ニアユミヨリ給テ、範顯ニ被仰云ク、近眞ニ陵王ヲ可仕由仰セタマヘハ、家ニ傳ヘ候桴ノ候ハネハ、エツカマツリ候ハシト申ナリ。陵王ノ桴作テ近眞ニタウテ御前ニテ陵王可仕之由可付仰ナリ。被仰候畏承候ヌ、但シ近眞ニ範顯陵王可仕由雖付仰候承引仕候ハシト覺候ト申候ヘハ、

東帯ノ殿上被仰云、其条ハ若難堪申サバ可有別御沙汰之由被仰候ホドニ、棲ニ立セ御ス若君被仰云、蒙仰スイソキマカリ出ヨト被仰候御音ノ御出ニ響テ以外ニ高キコヘ候、此仰ノ上ハ不及子細慶賀門ヲ出候トヲボヘ候シカハ驚候ス、仍不經程ノ所進光近之桴本摸有ニ禪定院ノ御所ニ即令中出任本摸桴ヲ遣テ入錦袋相具不摸幷夢狀ヲ（記ノ在アリ）近眞ニ給了、其後令相傳テ近眞令舞之

建保五年二月十六日夜如夢想之狀以ニ造與桴ヲ相語樂人等ニ春日ノ御社へ參詣シテ玉垣ノ前ニシテ舞了。舞人近眞 乱序 音曲（不悉）。囀秘事 荒序八帖 破二帖 樂人笛景基 笙忠秋 太鼓景賢 各賜祿物各綿衣一領、近眞之沙汰也 一鼓包助 鉦鼓利清

件ノ桴幷相傳ノ面加修理之後猶近眞令相傳事了。然者相傳荒序之曲嫡々輩可令相傳此桴者也。

一　乱聲事 此并ニハ不可書トイヘトモ奥ニ可聞壹越調ノユヘアレバ尤此次ニ載之也

新樂乱聲　有二說 長說者當世用之、短說者古說也

用新樂ノ樂屋之 仍吹新樂 或抄云、此乱聲從仙宮出ナリ。然者由來目出侍リ 爾取有二說小部

氏說曰夕由六リ太神氏說夕六リ予家ノ說エ六リ〔近眞案〕秘說云、此亂聲者双調曲ナリ、仍爾取用エ六穴也 寅ノ一點ニ奏神分乱聲者新樂乱聲一返許也

寅ノ一點ハ爲ニ當日時尅ノ始ト凢ッ神明神道御遊行幷奏祝被必可用寅時云々

抑祭神祇先靈之時發乱聲驚神靈者、撥天地陳王業爲古例、但神不禀非礼、仍五音七音之外不聞夷狄之音、故以正華音奏乱聲致天下和平爲神分

五音者　宮商角徵羽是也

七音者　宮商角徵羽文武是也

此五音七音之外猶ヲ有ッ五音聲合テ名ニ十二調子ニ云々

禮記樂記云

宮爲君故宮乱則荒其君驕

商爲臣故商乱則陂其臣壞

角爲民故角則憂〔原哀〔イ〕ニヨル〕其民怨〔原憂〔イ〕ニヨル〕

徵爲事故徵乱則哀〔原憂〔イ〕ニヨル〕其事勤〔原動〔イ〕ニヨル〕

羽爲物故羽乱則危其財匱

五者〔宮音者〔不〕ニヨル〕不乱則〔宮天下和平アリ〔不〕ニヨル〕無帖〔宮幣敗〔不〕ニヨル〕漉之音矣

初夜後夜乱聲事

諸大法會試樂云　三節亂聲ヲシテ卽陵王落蹲ヲスルナリ事終始也不可謂神分亂聲歟

古記云

凡欲ニ樂ヲ發ラコサント之時者先乱聲ヲ返々吉々可爲也、其故者一越調ハ土也。土不固者衆物不正禮ハ理也治也理衆聲也。治衆聲也。是土御門大納言說云々

又云

諸樂横笛師等不解和笛不得任用之何事可尋

集會乱聲者

諸ノ神事佛事ニ爲事調最前奏新樂乱聲一返也

入御乱聲者

朝覲行幸之時奏ニス之ヲ入御奏大納言役也　奏畢還給時ニ樂屋之方以笏令搔給ノ時奏左右乱聲同

音左新樂右高麗

貞應元年正月廿日高陽院朝覲行幸入御奏九條大納言殿良平前々相違セリ。入中門スチカヘニ橋隱ノ間ヲスギテ打出ノ間ニ向テ奏給常也。是ハ中門ヨリ直西ヘ渡リ給テ橋隱ノ間ニ向テ奏給是一又催ニ乱聲ニ笏モ不搔是ニ雖然行幸ハヤカテナリシカハ樂屋ニテシテ奏乱聲了ノ御家ノ習歟、又御失錯歟而寬喜四年正月十二日持明院殿行幸ニ源大納言通方又同之但シ先々度々ノ奏ニ之由各申シキ

ハ相違尤モ不審也可尋之

仁和寺舍利會御室入御之時奏左右亂聲　天台舍利會座主ノ入御同　興福寺常樂會正權別當出御奏新樂許以下ノ處々ノ首官長吏ノ出仕之時奏亂聲常例也新樂許也

御神ヲ奉下若シ奉遷ニ他ノ社ニ時奏新樂亂聲度數無定　コレミナ祝ノ事ナリ。サレハ音聲ノ中ニハ乱聲スクレタリ。管絃ノ中ニ笛スクレタリ。打物ノ中ニハ太鼓スグレタリト古抄ニアリ。其故ニ笛鼓許ナレトモケタカクニキハカニ(マヽ)、又面白キ所モアルナリ古老物語　以此乱聲出舞　散手

相撲時　陵王　還城樂

古樂ノ乱聲

此乱聲或人說曰。自胡國出タル物ナリ。仍古樂乱聲謂之云々此說ハ不詳事也。古樂ノ樂屋ニ祢取故ニ名古樂乱聲タ、ヤワラケ所習ハ新樂云ハ𪔂鼓打云ヘシ。古樂ト云一鼓搔云ベシ。四部乃至三部如此ノ分明ニワカチタレトモ未落居可尋此乱聲有二說手略吹樣一說喚頭ニ手ヲ吹加說一說祢取樣タ六リ。一說ロタヽ六リヽ一說是ハ林邑之時ノ祢取ニスベシ。

以此乱聲出舞　胡飲酒　蘓莫者

抑天下大旱魃之時、於春日御社奉祈雨下事自中古始其時奏此乱聲吹胡飲酒破其故ヲ不知若催馬樂ノ音ニ付タル故カ又青海波蘓志摩舞コレハ其ユヘ侍ナリ。青海波ハ龍宮ノ樂也。又水ノ音タト申人モ侍可尋也リ。蘓志摩ハ蓑笠ヲ著テ舞ヘハ其姿雨ヲコウナルベシ。サレハ昔ヨリ今ニシルシナキ事ナシ。

古樂新樂者

礼記樂記ニ云ク、魏文侯問ニフ於子夏ニ曰ク、吾端冕シテ而聽ニ古樂ヲ(冈則アリ)唯恐ル臥ンコトヲ聽ニ鄭衛之音ヲ則不レ知レ倦敢テ問フ古樂ノ之如キハ彼レカ何ソ也新樂ノ之如キハ此レ何ソ也古樂先王正樂也子夏對曰、今

夫古樂ハ進ムナニ旅シ退スニ旅ス和正ニシテ以廣シ。弦（國紘イニヨル）匏笙簧會ニ守ルニ拊（國搟イニヨル）鼓アリ始奏スル

以レ文復レ乱スルニ以レ武治レ乱以レ相ヲ訊レ疾以レ雅君子於レ是語ニ於是道レ古脩レ身及ニシ（國國アリイ）

家ニ平ニ均天下ヲ此レ古樂ノ之發也今夫新樂ハ進ニモ俯シ退ニモ俯ス姦聲ニ以テ濫ス溺レテ而不レ止及ニ

優侏儒ニ獶雜ス子女ニ不レ知ニ父子ヲ樂終ヲハリ不レ可ニ以語ニ不レ可ニ以道フレ古ヘヲ此レ新樂ノ之發也今君之

所ハ問者樂也所レ好者音也云々 不限兩部亂聲六調子之樂同事也

林邑乱聲

林邑ハ天竺ノ名ナリ。此乱聲古樂乱聲ト同詞ナレトモ四部樂屋ニ片（イ形）取時ニ呼ニ林邑ト也。

津介勝道成之說云、用此乱聲自ニ口穴ニ不ニ吹出ニ 初後如此可吹中度ハ口穴ヨリ吹出也 其詞云。

丅中丅火。夕中丅丅。夕丅中夕。五中夕ユ由リ、口中夕。如此吹ナリ。今世不用之 祢取ノ様ハサキニ申ツコ

レラヲ分別シテ習ヲヨク物ヲ習トハ申ナリ 私當家ニハ無用事ナレドモ抄物ニ載之間書之

以此乱聲出舞、蘇莫者、迦樓賓、拔頭、倍臚コレミナ婆羅門僧正自天竺渡給タリ。林邑ハ天

竺ノ國ノ名ト申タリ。委ハ內傳ニソ侍ラン。可尋之

高麗乱聲

此乱聲ハ定テ高麗國ヨリ渡テゾ侍ラン。其次第不見可尋此乱聲ヲ吹時ニ祢取ヲセス、三度ナカラ自始吹出常說也中度自喚頭夕穴吹出說尤爲秘說

以此乱聲出舞　胡蝶　林歌　新蘇莫　貴德　納曾利

古記云

新古乱聲者法會時左右乱聲ヲ一度吹テ舞人鉾振時名也。狛乱聲同吹之此狀不得心可尋

又云

新樂乱聲者　雙調曲　仍祢取　上六

古樂乱聲者　沙陁調曲　仍祢取　ロ夕由六

高麗乱聲者　壹越性調曲　是ニハ不音取

欲發大樂之時先發乱聲古三度今一度用之、今八幡放生會表此儀歟

同音奏時　新樂宮音高麗商音ナレドモ左右相應シテ目出キナリ

此三乱聲ノ大鼓ノ打樣皆カワルベシ。先初拍子大鼓壺アリ。新樂ハヲホノサニユル〳〵ト桴ヲアツ。

又打改所五々二十六夕由リ古樂ハ今スコシハヤメテ諸拍ニ句拍ヲアツベシ。打アラタムル事反立夕穴トイヘリ

高麗ハキワメテ細々ニ拍ヲアテ、美音ニ打ベシ。打改事換頭ヨリト申タレトモ中半ヨリ打改ベシ。

近眞詞教訓抄ニ載所也〔困〕

是等ハヤスキヤウニ侍ドモ人ノ知ヌ事ニテ侍ナリ。光季、惟季ノ書ヲカレタル狀ヲヒカヘテ、古老ノ物上手トモニ相尋テ、不審ヲヒラキテカキテ侍トモ、猶モイカナル習モアリ說々モ侍ラン。此道ノソコハ昔ヨリキワメヌ事ニテ侍ハ、マシテカヤウノモノ、シレランコト僻事モ多ク、落タル事ノミソ候ラメトモ、人ノ料ニ書ヲク事ニ侍ス。予カ子孫ノ末ニモ不審ヲヒラケトナリ。予ガ子々孫々ノ才學〔不覺〕コレニスクベカラス耳。

私曰

一五音ノ內イツレモ其用カケタルコトアルマシ、五音ハナレテ形ナシ、形アレハ音色アリ。五音ニ各ノ五音アレバ廿五ノ音ナリ。其ハ枝調子ト云コトアリ。變徵、變宮、嬰〔醫郢[イ]ニヨル〕羽、嬰〔醫郢[イ]ニヨル〕商所々ニ注之。悉ノ音ノ中ニ尤勝タルハ宮ノ音壹越中央ナリ。次ニ商ノ音平調西ナリ則此二音君臣ナリ。君臣相ヨッテ天下ノ政事ヲ行ト云モ自然ノ音調レハヲノ

ツカラ君臣ノ道ミタレス、然者万民樂ムナリ。平和ナラネバ是ヲ乱世トス、先二音ノ内ニ宮ノ位正ノ侍ハ商ノ位應之ナリ。中央ニ越テ四方ヲカヌ、常住不滅ノ位ニテ其德平等ナリ。仍佛法ニモ中道實相トイヘリ。天地ノ恩アサカラス、其モ併中ヲモテ人ニアテ、德ヲホトコス心中道也、實相ナリ。呂ナレトモ中央タルニヨツテ律ヲモ具タル事、天地ノ德ヲ君ヒトリニツナヘサセ給カ如シ。商ハ此事ヲウケテ余ノ音ヲアツカイテ五音トナス、又大用ナリ。君ノ勅ヲウケテ臣ノ政ヲナシテ天下ヲヲサムル心ナリ。仍本曲ニ定之。

此曲ノ事大同年中ニ樂師渡侍時ニ是ヲウツシト、メラレテ昭宣公御所持アリ、其ヨリ傳之各天下ニ用之。去建武之一乱ニ悉失畢。仍尊氏將軍家御代ニ則被仰遣テ遣唐使歸朝之時、磬ヲ平調ニ鑄テ渡之龍秋給之、曲ノ竹ニウツシテ于今又傳之。磬者御物トシテ御倉ニ被納之也。

春鶯囀　新樂　大曲　舞出時遊聲

入時調子

遊聲　無拍子羯鼓如序返付二說アリ

序拍子十六　颯踏二帖拍子各十六八拍子物

入破四帖拍子各十六六拍子物　鳥聲拍子十六、序吹連吹急聲　急聲詞同入破二反聊早吹。仍不書之　困遊声羯コ阿礼ヲ打ナリ

颯踏ニ喚頭アリ、或說此帖中序云舞ニ甲アリ。

會要曰、天長寶壽春鶯囀。新撰龍吟抄曰、天長寶壽樂、或譜曰、天壽樂、或曰、天長寶樂

答舞退走禿。

先吹調子吹出笙之後篳篥付之横笛不吹之、次吹遊聲調子ノ中間横笛取音之後吹出之即調子止笙篳篥ヲ遊聲ニ付之、舞人樂屋ヲ出テ舞臺ニ昇テ各立定後遊聲止之

或云、舞出時吹之度數無定以舞人之行立ヲ爲定如皇帝之說舞人立定時太鼓一拍子打之、但近代常不用之。此說即口傳云ク、皇帝、春鶯囀同日ニアレバ何ニテモ一曲ニ可打之、同ハ皇帝ニ可打歟云々。

抑遊聲本自無拍子而白河院時御前ニシテ臨時ニ樂アリ、笙、時忠、時元。笛、基政。此日光季依勅定太鼓ヲ打先遊聲アリ舞ナシトイエドモ一兩反ヲ奏ス、而笛吹舞アルニ擬シテ則數反吹之、畢ル時太鼓一打之、序ヲ吹ントスル間勅問アリ、此遊聲ノ太鼓誰人ノ說乎、皇

帝遊聲ニコソ大田丸說一拍子アレト云々　時ニ光季申云ク、今奉レ勅ヲ太皷ノ桴ヲ取、面目ニアラズヤ、事更大曲ニ當レリ、仍皇帝ニ擬シテ大田丸之說ヲ召越トコロ也ト云々上皇此言ニヲイテ頗御感アリ、是則此太皷ノ始ナリ。或說ニハ時元ト云々、或說云、堀川院御時勅定ヲモテ打セラレタリケルナリ。此說打節ニヨルベシ、拾遺納言云、遊聲ハ一反ノ後ハ本ノ反付ニ不反一凡一凡下乙ト也。又云遊聲ハ延テ可吹也。遊聲ヲモテ序ニ吹續度ハ遊聲ヨリ迅ク吹也。

序一帖拍子十六有半帖各八拍子或二反　綿譜云、二反今世一反云々、此序嫡狛光季方ト末流狛行高方トノ舞樣大ニ相違セリ。狛光時云ク、序初ニ兩說アリ、テ丁テ丁丁(朱)リ　以此說爲上大神基政等同用之。テ丁テ丁丁中々夕々リ　此說ハ下ナリ　綴コ阿禮短聲困

古人云、團乱旋ト春鶯囀トハ同科ノ樂ナリ、全ク勝負ナシ、春鶯囀ノ相異ル事ハ樂ノ終ニ序吹ナキ許ナリト云々

颯踏拍子各十六　或云雜踏謂之中序有半帖各八拍子又有喚頭二拍子　或云有返付所云々

初拍子七已下八早　以颯踏用序一トキハ喚頭ヲバ二帖ト云也切々ニ吹之　鼻皷沙聲困

猶光季云、颯踏ハ序ノ二帖也。鳥聲ハ颯踏ナリ、春鸎囀ノ名ニヨテ鳥聲ヲ置ベシ、因茲颯踏ヲ改テ爲鳥聲序二帖ヲ改テ爲颯踏也。而堀川院ヨリ此事ヲ知食ナリ。御遊ノ次ニ颯踏ハ序二帖ナト時元ニ問シメ御シケリ。時元ガ癖(クセ)トシテ人ノ物仰ラルヽニ先左右ナクサニ候ト申ケリ。其後返事ハ申ケルナリ、此時モサヤウニ御返事ヲ申タリケレバ、サレバコソ時元ハ知ニケリ、尙目出者カナト感ジ寵シメ御ケリト云々。

續教訓抄云困
古口傳云、颯踏半帖奥初頭突(ハシメツカタ・ク)息吹之此吹樣大曲吹ニアラズ、在大曲法息ヲ突ス息ヲ停滯セスサラ〳〵ト吹渡之者ハ大曲ノ法ヲ背ト云々而古人云、春鸎囀ハ大曲ニ成ントスル最前ノ番聊ノ曲ナリ。仍相交成居之詞云々而堀川院ハ皇帝入破ノ如ク吹シメ御シケリ。基政奏此曲切音ニ可吹之由惟季所令申也。皇帝、團乱旋ニ似ズト云ミ其故ハ大曲ニ烈トイヘ𪜈未成定云々此事叡慮ニ叶ヒ殊ニ御感アリト云々如此被仰下ト思食ツル事ナリト云ミ侍從大納言成通云、颯踏惟季カ流ハ落居タル大曲吹ニアラス、八拍子物ノ寄タルヤウニ吹ナリ。左監門宗輔ハ皇帝一帖ノ如ク如法ノ大曲吹ニ吹ルヽナリ。然而堀川院惟季ガ說ニ付シメ御シ畢如此ノ大曲吹ヲバ次說タルヨシ勅定被下ケリト云々。

又云。颯踏入破ハ大根尾ノ如ク早ク成ナリ。颯踏ノ終入破ノ初ハ同程ナリ、颯踏ヲ受取テ吹繼故ナリ。凡樂ノ法物ヲ切續ク如ク俄ニハヤク成事ハ第一不可ナリ。ムラコ糸ノ匂ノコトク漸々ニ早ナリ。帖々尙以此況ヤ吹繼ニヲイテヲヤ。

狛光眞云。謂之採頭帖〔宮狀乙ニヨル〕ト初二句ヲ除テ五拍子ニ當ト存ナリ。最初二十六穴ヲ除ト云々加之鳥破第二反賀殿破等喚頭トハイワス採頭ト云ナリ。

時元云。颯踏ト云ハ序ヲ云ナリ。中序云、颯踏ハ序吹ノ別名ナリ。博定ノ說同之、仍略之。古老說云〃。此颯踏ヲ中序ト名クト云々。此說其謂アルベシ。仍兩說ヲ存ズベキ也。但口傳云、此說ヲ用ル時ハ二切ヲ別々ニ舞ヲ習トスルナリ。光季說ニ云ク、講演等ノ時ハ三度拍子ヲ加ベシ。又云、以二帖爲秘事

入破四帖 拍子各十六 有半帖 各八拍子　〔朱〕鶉皷織綿聲

初拍子五 已下六 常ニハ二帖ヲ舞、仍一三帖ヲ舞之。惣ハ一二帖ト舞ヘシトイヘトモ二帖ノ躰大旨一帖ニ ニタルユヘニ一三帖ヲ舞ナリ。三帖アル時モ二帖ヲハノソキテ一三四ト舞也。即度々ノ御賀ニハ皆三帖アリ、其時皆二帖ヲノソカレ畢。一帖ニ相似タル故歟 樂ニ此口傳無之

口傳云、入破ヲ早シツレバ急聲ノアマリニ早ク成テアシキナリ。

狛光時云ク。入破ハ破ノ音殊ニ深入ノ心ナリ。當時有入破曲世以爲不詳。〔底祥〔イ〕ニヨル〕ト委見本文云々又云入破ハ如法ノ大曲吹ナリト云々

中院雅定云五下六下乙九近來ノ笙工如此果吹下云々

又云、入破ハ颯踏ノ程ト等同ニ吹ヘシト時元云シナリト侍トモ委口傳ニハ颯踏ヨリハ早吹ヘシトナリ。急聲又猶可吹寄也。

狛光時云、入破急聲ハ同程ニ可吹也。早ケレハ舞モ物サワカシクテ舞惡キナリト云々

狛光季云ク、講演等ノ時可加三度拍子彼打様廻忽ノ末ノ六カコニ突拍子ヲスルコトクニ打ヘシト云々。

鳥聲二帖　拍子各十六　〔朱〕鞨鼓阿禮聲

序吹ニ舞之ヲ連吹テ連舞也。又云。序ノ如ク吹之。但火急ナリ。近來一反ヲ舞、則急聲ヲ吹連テ連舞也。口傳云。終拍子ノ後一拍子ハカリ程ヲ、キテ吹ヘシ。一說云。二穴ハカリヲヘタテ、急聲吹。一說云。暫程アルヘシトイヘリ。又云ク。息ヲ止テ吹連ト云々。

狛光時云ク。鳥聲ヨリ急聲ニ移ル間口傳アリ。本法一拍子ノ程ヲ、キ次ニ入破ヲ吹出ヘキナリ。而笙聲ヲ止テ笛吹出サントスル間自然ニ遲ニナリ者ニ〔イ〕クナル者ナレバ〕、笙其心ヲエテ鳥聲畢バ後〔イ緩〕引ナクテ早ク可止也。程ナク入破ヲ吹シメンタメ也ト云々。又云。鳥聲ヨリ急聲ニ移ル間ハ基政ガ流ハ吹止テ一拍子ノ程ヲ置テ急聲ヲ吹出ナリ。笙、篳篥其心ヲエテ戾引ナク迅ク吹止ベキ也。笛迅トイエトモ笙ノ戾引アレハ其中間自然ニ遲ニナリ。正清ガ流ハ不絶音則吹續也。此時ハ笙、篳篥吹止ヘカラズ。狛光時云。此中間ハカコ一拍子ヲ舞人歩テ舞始也ト云々。又云。鳥聲ヲ思ニ無絶音吹續クノ儀首尾一曲歟。次鳥聲爲序吹、次急聲爲樂吹。又其中間カコ一拍子ヲ置テ其空〔慶宮イ〕ニヨル〕拍子ヲ加ル定急聲ノ拍子ハ常カコ拍子六也。又云、鳥聲ノ大皷ハ同間日〔イ間〕ニ打ナリ。因茲笛ニハ詞多ヲモ拾ヒ詞少ヲモ延テ同程ニ吹ヘシ。是舞ノ肘(カイナ)打ニ叶ナリ。詞ノ任ニ多少ニ拍子ヲ打ハ舞惡ト云々。

急聲二帖　拍子各十六　〔朱〕輟ヿ織錦聲

一帖初拍子五已下六鳥聲ヨリ連吹テ連舞尤師說ヲ受ヘシ。常ニハ一帖ヲ舞ナリ。入破ト急

聲ト同樂タリトイヘトモ入破ノトキハ緩ク吹テ緩ク舞之。急聲ノ時ハ急ニ吹テ急聲之ト云々。

狛光季云ク。急聲ハ急音樂ハ入破ト同トイヘトモ心ハ同ジカラストイヘリ。是則緩急ノ差別ナリ。又云、皇帝破ノ五六帖ノコトク間ヲスコシ延ヘシトイヘリ。

二帖　初拍子五已下六但自第十五拍子末ヲ序吹ノ舞トス。是則承和ノ御時尾張濱主御前ニシテ舞之。其相傳ヲ受テ狛光季殊ニ秘說タルヨシ注所也。

末拍子序吹舞時ハ手ニ秘說アリ

古老傳云。文字ノコトク入破ヲハ延テ緩ク舞急聲ヲハ早メテ急ニ舞中リ夕干六終一拍子序ニ舞ナリ。同樂ナレトモカヤウニワカチシルヲモテ習アルトハ云ナリ。

永治二年三月三日平等院一切經會ナリ。此日太上法皇ノ御幸アリ、願主禪定殿下舞人光時ヲ召テ仰下サレテ云ク、年齡已ニ高シ、後會何レ時ヲカ期ヘキ。然ハ今日ノ舞ニヲイテハ丁寧ヲ存ベキナリト云々。光時申云、舞ノ躰ハ善惡ヲ申ニアタワズ、思ニモヨリ候マシケレハ舞ノ切ヲ不殺シテ可奏ト申畢。樂屋ニ歸テ行則ニ對テ云ク。今日舞其切ヲ畧スヘカラ

サルヨシ申上了。今春鶯囀急聲二反アリ、行高不舞之、行則同前歟。然ハ行則舞ニ立ヘカラサル歟、將又第二切ヲ畧ベキ歟。于時則助云ク、急聲二反ノ有無尙異論ナリ。舞切ヲ畧ヘカラザルヨシ申上了。今日不奏之者異論ノ證ニ引レン歟。必可被奏也ト云々。爰ニ行則舞ニ立ヘカラサルヨシ申トイヘトモ依御定立舞第二切ニ至テ舞臺ノ上ニ居畢云々。

猶光時記云ク。去永久三年二月十一日白河殿朝覲行幸ノ日春鶯囀アリ。舞人行高左一者急聲一帖ノヨシ笛吹正清ニ約束シテ樂屋ヨリ出了而急聲ニ至テ正清第二反ヲ吹加キサミ行高庭ニ居テ舞ヲ奏スルニアタワス。爰ニ光則、光時等ハ違乱ナクコレヲ舞、上下ノ諸人耳目ヲ驚ス。行高誠ニ常座ノ面目ヲウシナフ、其恨ヲナクサメカタクシテ樂屋ニ入テ後、正清太コ打能元等ヲ擲發セシメテ云ク、此急聲ニヲイテハ二反一反ノ相論未詳仍一反ノヨシ其約束ヲカフリナカラ自由ノ違約尤不審（屋當不審）也。且其意趣何事哉。正清答申云、樂興アル時ハ約諸ヲ背テ吹加之ヲ承落不易ノ例ナリ。就中光季存生之時此急聲ニヲイテハ二反ノヨシ慥ニ其習ヲ存ス、全ク樂人ノ新儀不審ニアラズ而其證據貴賤皆シロシメス所也。爰ニ光則難申テ云ク。故光季ニヲイテハ苟モ舞曲重代ノ指南トシテ廻雪相傳ノ家風ヲテナフ所

ノ傳受祖跡才藝殊ニ群ニ抜タリ。此道ニ私ナシ、就中正流末流兩家相承此急聲一曲ニカキラス雲泥懸隔ノ由緒アリ。又彼氏ノ淺深同日ノ論ニ不及、凡此道ノ習嫡ト庶トノ勝劣、又相異ナリ。而一旦ノ耻辱ヲノカレンタメニ第二反猶疑說ニヲヨフ条、已ニ万代ノ嘲哢ヲマネク、其身ノ瑕瑾トイフヘキ歟。時ニ行高閉口。凡相論ノ間上下諸人コレヲキク、仍當家ノタメ子孫ノ爲シルシヲクトコロ如此ナリ。狛朝葛說〔朱〕

其後永治二年三月四日平等院一切經會ノ日急聲二帖アリ、末一拍子序吹ニ舞之、而ニ永久ノ例ヲモテ二臈行則舞スシテ庭ニ居シ畢。

文永四年八月十六日左女牛若宮放生會ニ御賀上卿花山院大納言師繼、光葛ヲ召テ急聲二帖ノヨシ仰ラル、間則二反アリ、末一拍子序吹舞、光葛ガ一門ミナ舞之。康朝ハ行高ノ末流ニヨリテ永久永治ノ例ニ任テ舞臺ニ居了。

昔善僊此曲者左大臣源信朝臣及巨勢式人(コセノノリヒト)等仍承和御時勅信朝臣ニ以此曲ヲ成康親王ニ傳習シメテ御笛ニ合テ清凉殿御前ニシテ舞々、コレヲミルモノ感泣セズト云コトナシ

抑此曲ハ唐太宗皇帝御製作ナリ。一說云、合管靑ト云人造之、而皇帝同時ニ渡之ト云々

此曲モロコシノ舞ナリ、作者未勘出處。或書曰、合管青云人造之、大國ノ法ニテ春宮ノ立給日ハ春宮殿大樂官ニ此曲ヲ奏ハ必鶯ト云鳥來アツマリテ百囀ヲス。コノ朝ニモサルタメシ侍ル。興福寺僧圓憲得業ト申ケル人ハ、僧ノ身ナリケレトモ、管絃ノ道無雙ナリケレバ天下ニユルサレタリケリ。春朝ニハ住房淨明院ノマカキノ竹ニ向テ此曲ヲ吹給ケレバ鶯來テアツマル。笛ノ音ニ同ヤウニ囀侍リケル。マシテ唐國ノ事ハサコソハ侍ケメト面白ク侍リ。

古記曰。　黄鐘宮時號一越調春鶯囀出會要此曲　古記云　名天長寶壽樂者此樂有颯踏豊原時元曰、颯踏者謂序也。　中序云、颯踏者序吹別名ナリ　件曲有二帖　一帖絶畢　又入破者破音殊深入之心也。唐時有入破曲世以爲不詳委見本文、急聲者急ノ音雖同樂其意者不同、終帖一拍子序ニ舞事承和御時尾張濱主舞畢以其相傳光季之家ニ習他家ニハ不知此說云々。

仁明天皇御宇承和十二年正月八日龍尾道（シノヒタ）ニシテ尾張濱主生年百十五歲時長壽樂ヲ舞タリケルヲ目出タメシニ中傳テ侍、二首和歌詠

なゝこしのみよにまは〔〇教訓抄「ワ」「トス」〕へる百あまり十のおきなのまひたてりつる

おきなこてわびしはおらむ草も木もさかゆるこしにいて丶まひてむ

天皇頗御感ありて同九日又清涼殿にめして舞せられけるに又一首和哥奏。

春とにも丶色鳥のさへづりてとしは千代こまひぞかなづる

彌御感ありて天長寶壽樂ト始テ名付之、いまの春鶯囀これなり。

凡ソ道ニ長ゼル人ノ曲ニハ鳥獸草木マデ皆ナヒケルスガタアリ。唐ニ夔(クヰ)ト云シ人簫ヲフキテ數曲ヲツクル丶、楊柳落梅ノ曲アリ。此内落梅ノ曲ヲ吹ケルニハ鶯來テ梅ノ花チルカト飛サラス弄玉簫ヲ吹シニハ鳳凰飛來テコレヲキク。楚人瓠巴琴ヲヒキシニハソラトフ鳥モ下リ鱏魚モ出テキキケリ。黃帝ノ后素女湘浦ニテ琴ヲ引ニワニフカハリホコクチラナド云フ摩竭ノ大魚ヲ始トシテ音ニメテ、集リ、楚ノ莊王ハ琴ヲ引ニ白雪ノ曲ヲ調ケレバ、夏天ニ雪フリケル。鶯ハ黃帝ノ愛シ給シ鳥ナル故ニ彼鳥ハ黃帝ノ袖ノウツリカラウツスユヘニ梅ニハムツルナリ。故ニ黃鳥トモイウ

鷄既鳴忠臣待ニ旦(アシタ)ニ鶯未ニ出ニ遺賢在谷

誰家碧樹鶯啼而羅幕(ハク)猶垂(タレタル)

咽ニ霧ニ山鶯啼猶少穿砂蘆笋葉纔分
鶯聲誘引來ニ花下ニ草色拘留坐ニ水邊
西樓月落花間曲中殿燈殘竹裏音

花の宴[裏]

きさらぎの廿日あまり南殿の櫻宴せさせ給、后春宮の御つぼね左右にしてまうのぼりたまふ。弘徽殿の女御中宮のかくておはするをおりふしごとにやすからずおぼせど、ものみにはえすぐしたまはでまいり給。日いとよくはれて空のけしき鳥のこゑも心ちよげなるにやう〳〵入日になる程春のうぐひすさえづるといふ舞いと面白くみゆるに、源氏の御もみぢの賀のおりおぼしいでられて春宮かざしたまはせてせちにせめ給はするにのがれがたくてたちてのどかに袖かへすところをひとをれけしきばかりまひたまへるににるべきものなくみゆ。

おとめ子[裏]

日やう〳〵くたりて樂のふねどもこぎまひて調子どもそうする程の山かぜひゞ〔閙らイニヨル〕きおもしろくふきあはせたるに春鶯囀まふほど、むかしの花宴のことおぼしいでゝ院の御かざ又さはかりのこと見てむやとのたまはするにつけてそのよの事あはれにおぼしつゞけら

る。舞はつる程におこゝ院に御かはらけまいりたまふ
うくひすのさへつるこゑはむかしにてむつれし花のかけぞかはれる
院のうへ
九重をかすみへだつるすみかにも春とつけくる鶯のこゑ
胡蝶困
春のうへの御心さしに佛に花たてまつらせ給鳥蝶にさうそきわけたるわらはへは八人かた
ちなどことにとゝのへさせ給てみなみの御まへの山きはよりこきいてゝおまへにいつる程
かせふきてかめのさくらすこしうちちりまかふいとうらゝかにはれてかすみのまよりたち
いてたるはいとあはれになまめきてみゆ。中將の君してきこえ給まふ。
花そののこてふをさへや下草に秋まつ虫はうとくみゆらん
宮かのもみぢの御かへりなりけりとほをゑみて御らんず。鶯のうらゝかなるねに鳥のこゑ
はなやかにきゝわたされて池の鳥もそこはかとなくさえづりわたす
南無妙法蓮華經
豐原朝臣統秋判

體源鈔　三本（下）

糸管抄云案

醉鄕日月曰大百歲老壽注曰改爲天長樂開元中寧王進普樂工康摩勒等五人造之

玉樹後庭花　有甲　近來不用之　中曲新樂

有八帖拍子各十二　一二三帖如常舞出入調子拍子各十二、但初反十四序吹二拍子加之、終帖加三度拍子畧定時四帖又二帖有之共終帖加拍子、一反時末四加拍子、當曲号三女序秘說有之注別紙、但此說不可好用、有亡國之音故也。

私云、舞者帖々皆替ナリ、仍口傳モ深重ナリ。樂者大畧八帖同之依樂少替叓モアリ。蘓合以下之帖々替叓者又別ノコトナリ。於打物ハ殊更舞家ヲウカヾイテ可覺悟ナリ。仍教訓抄ニ載所サナカラ書之、無用ノ說アレ共道ヲヒロク可心得用意載之、分別シテ可見之。

仍舞一二三帖如常四帖ヨリ替ト申ハ下手端渡切六帖本立所渡還切平立舞也以並立爲平立初者以中爲上四帖以後以端爲上從六帖亦以中爲上欲渡之時如此以中爲上也

又金釵兩臂垂謂之　一名玉樹曲子

一名陣宮怨見許渾詩　又名壹越波羅門是八大曲也

糸管抄云〔同〕

通典曰。陳後主（名叔宝字元秀、高宗嫡長子也）嗣位淫荒於酒視朝之外多在宴筵尤重聲樂遣宮女習北方簫鼓謂之代北酒酣則奏之又於清樂造黄鸝留及玉樹後庭花男女唱和其音甚哀

同出〔同〕

新唐書曰。太宗謂侍臣曰、古者聖人沿情以作樂國之興衰未必由此、御史大夫杜淹曰、陳將亡也有玉樹後庭花、齊將亡也有伴侶曲、聞者悲泣所謂亡國之音哀以思、以是觀之亦樂之所起、帝曰夫聲之所感各因人之哀樂將亡之政其民苦故聞以悲、今玉樹伴侶之曰尙存爲公奏之知必不悲、尙書右〔國左丞〕魏徵進曰孔子稱樂云樂云鐘鼓云乎哉樂在人和不在音也、十一年張文收復請重正餘樂、帝不許曰、朕聞人和則樂和、隋末喪亂雖改音律、而樂不和百姓若安樂金石自諧矣。

會要曰。高祖受禪軍國多務未遑改創樂府尙用隋氏舊文至武德九年正月十日始命大常少卿祖孝孫考正雅樂貞觀二年六月十日樂成奏之。太宗謂侍臣曰、禮樂之作蓋聖人緣物設教以爲撙理之興替豈此之由、御史大夫杜淹對曰、前代興亡實

由二於樂一陳之將亡也爲玉樹後庭花一、齊之將亡也爲伴侶ノ曲一、行路聞テ之莫不悲泣、所謂亡國之音也、以是觀之蓋樂之由也、太宗曰不然、夫音聲能感人自然之道也、故歡者之聞之則悅、憂者聞之則悲、々悅之情在リ於人ノ心ニ非レ由ニ樂也。時亡ナント之政其民必苦、然苦心所感ル故聞而則悲耳、豈樂聲ノ哀怨能使悅フ者ヲ悲乎。今玉樹後庭花伴侶之曲其聲具ニ存ス、朕當ニ爲レ公奏レ之和公必不シ悲マ矣。尚書右丞魏徵進曰、古人ノ稱ラク禮曰ゝゝイフコト玉帛ヲシモ云ヘキ乎哉、樂云ゝゝト鐘鼓云乎哉、樂者ハ在人和不由音調上然之

一帖拍子十四初ニ序吹二拍子如此定樂ニ成テ後至八帖拍子十二終帖拍子卅三度　界定ノ時ハ一八帖舞也又云從第七遍打三ト拍子終帖打三ト拍子

貞保親王譜云、但須從六遍終加一拍子而可打也從七返正打三ト拍子

抑此曲ニ別習アリ、謂之金釵兩臂垂玉樹与兩臂垂陳後王所作也。大江匡房說也

通典云、玉樹後庭花堂々黃鸝留金釵兩臂垂並陳後主ノ所作、恒ニ与宮女學士及朝臣相和爲詩太樂令何胥採テ其ノ尤モ輕艷ナル者ヲ以テ爲ニ此ノ曲一

一二三帖如常玉樹四帖上手下手涉リ渡東西ニ切ナリ、カレコレ渡立ニ左右ノ端ヲ上ル、舞　手カ

ワルベシ。五帖コレハ四帖ノ片答ヲ舞也。涉還本所又以中上トシテ後三拍子有兩說第七拍子ヨリ聊カ早成テ末早ク可吹也 六帖謂之霓裳帖 舞ト樂ト別曲ト申ト〔一云教訓抄「申ス」〕〔「不」也〕。 樂ハ昔ノ玉樹後庭花、舞ハ天上月宮曲也所謂霓裳羽衣曲是ナリ 別習アリ。其說曰、初拍子以後早ク舞テ常ニ左右袖ヲモチテ覆面請金玉爲ニ拍子其間四拍子以中爲上 第五拍子ヨリ一二妓舞爲テ先如虹舞登又如ニ霓下一其間四拍子猶以中爲終 又兩方皆登リ渡テ其間三拍子以左右端爲上 各准ニ雁行ニ隨上至ル第十二拍子ニ時退走相互向合待ニ拍子ニ爲ニ終ト七帖謂之羽衣曲帖ト 初拍子以後殊ニ早ク舞如青海波 其姿如青陽和風ノ輕獵慍燃而蛸常遮面以ニ金釵之響一爲拍子 左右各班組交左右袂懸肩以靡爲拍子 爰ニ一二妓舞從外童廻兩方作二小輪入中央之宮各舞登其輪如虹霓 第十一拍子ヲ時以中爲上 第十二拍子時右膝突居爲拍子 以後序吹ナル。八帖初拍子以前猶序吹 第二拍子ヨリ殊緩ク吹テ則加三度拍子十一拍子以後末一拍子爲序吹ト謂之玉樹三女序

承和遣唐使舞生學件舞歸朝之間此樂悉忘タリケレハ又ツカハシテ此朝ニハ習トトメタルナリ。

治曆二年正月廿六日宇治殿召ニ光季一舞樂間ノ事御尋アリケル内、霓裳羽衣曲ハ今ノ玉樹ノ

中ニ、別ノ舞ノ手アルヨシタシカニ光高勘申上タリキ、汝ハシレリヤ如何、此仰ニツキテ、
ソコヲハラヒテ申上處ニ、シキリニ御感ニアヅカリテ罷（マカリ）出畢云々。
文集第三卷ニ云、法曲〻〻舞ニ霓裳ニ改（ママ）〔イ本政ニヨルベシ〕和世理音洋〔〔薦詳イ〕ニヨル〕々、開元人之
〔イ〕ニヨリテ補〕樂且康〻〻 南宮笛譜序ニハ至如霓裳羽衣曲、連珠火鳳等ハ有舞無聲樂〻〻
或書曰。霓裳羽衣之曲者一越調ノ曲ナリ。本名ヲハ一越波羅門ト云ケリ。玄宗皇帝ノ代、
天寶年中ニ霓裳羽衣改タリ
此樂ノ内亡國之音アリ。古老申サレシハ、平調音成所云ナリ、然經信卿ノ說ニハイツレノ
樂トワカズ、樂ノアワレナルヲバ亡國ノ音ト云、樂ノ面白ヲバ國ヲ治ル音ト云ベシ。
〔孝云「細着」ハ「纏着」ノ音通ナラン〕
光季曰。玉樹裝束者在元興寺之寶藏勅使左大弁匡房シテ實撿時、唐櫃銘玉樹兩臂垂裝束二具、寶藏燒失之時、件裝束寶冠面燒失畢。中古ハ諸肩袒ノ細着ニテ舞ケル、今世ハ其様ニモセス凢如常舞
貞觀政要ノ第七ニ云ク。貞觀十七年ニ大常少卿祖考孫サダムル所ノ新樂ヲ奏ス、大宗ノ云
ク、世ノ亂ノ現ル叓必樂ノ聲ニヨルヤ、御史大夫杜淹答テ申リ、世ノ興ル亡ル叓樂ニヨル
叓アリ、陳ノ世亡ナントシテ玉樹後庭花ノ曲ヲ奏ス。齊ノ世又亡ナントシテ伴侶ノ曲ヲナ
ス。行路ノ人此ヲ聞テ悲泣セストニ云叓ナシ。所謂亡國ノ聲ナルヘシ。太宗ノ云ク、聲ヨク

人ヲ感セシム、悦ブ叓アルモノハ聞テ其心彌々悦、愁ウル事アルモノハ此ヲ聞テ其心イヨ〳〵カナシ。只一人ノ心感ヲナスナリ。何ゾ説フモノ、樂ノ聲ヲ聞テ悲フ心ヲ興シ、又悲ブモノ、樂ノ聲ヲ聞テ、説ブ心ヲコサンヤ。陳ノ世ノ亡ナントシテ人ノ心悲フトキ、玉樹ノ曲其聲悲シ、亡國ノ音ハ樂曲ノナストコロニアラス、只愁フル人ノ心ノ感ニアリ。今朕タトヒ玉樹伴侶ノ曲ヲ奏セシムトモ、卿コレヲ聞トイフトモ其心カナシフヘカラズ、ヲサマレル世又ミタルヘカラス。魏徴ス、ムテ申ク、古人ノ云ク、禮ト云礼ト云何ゾ只玉帛ヲシモイハム、玉帛人ノト、ノフルニヨテ禮ノヨソホヒニ叶ヘリ、樂トイヒ樂ト云、何ゾ只鐘皷ヲシモイワン。鐘皷ヲ人ノ和スルニヨテ曲ヲナス。太宗ノ曰ク、魏徴カコトハマコトニシカナリ。新唐書ニ云ク、太宗侍臣ニ謂テ云ク、古者ノ聖人情ニシタガフ以テ樂ヲ作スハ國ノ興衰未タ必シモ此ニヨラス、御史大夫杜淹曰ク、陳ノ將敗困時ニ亡ナントスルトキニ、玉樹後庭花アリ、齊ノ將ニ亡ヒトナントスル時ニ伴侶ノ曲アリ、聞ク者悲ミ泣ク、所謂亡國ノ音ニハ衰以テ思ヘリ、以是コレヲミルニ又樂ノ所起、帝ノ曰、夫聲ノ感ズルトコロ各人ノ哀樂ニヨル、將亡シトトスル政其民苦ム、故聞以テ悲ム。今玉樹伴侶ノ曲尚存公ガタメニ奏之知

シ必カナシマザラン

抑此金釵兩臂垂ニヲイテハ各別ノ曲ト見及トイヘトモ、堀河院ノ御位ノ時粗此由緒テ聞食シ及テ寛治二年ノ春ノ比光季ヲ召テ御尋アル刻奏之申テ云ク、彼裝束ニヲイテハ先年ノ比ワツカニ元興寺ノ寶藏ニ玉樹裝束ノ唐櫃トイフ銘候シ由粗承及トイエドモ未其眞偽ヲシラズ候旨陳申上ニヨテ元興寺ヘ勅使左大弁大江匡房ヲ下サル、寶藏ヲ開テ實撿セラル、トコロニ、唐櫃ノ銘文ニ云、玉樹金釵兩臂垂ノ裝束二具納之ヨシカキノセラル、處ナリ。仍銘文ニ任テ件ノ裝束ノ躰ヲ披見セラル、トコロニ、愚眼ノ及トコロニアラス、偏青黄赤白黒ノ玉ヲ貫キ五色ノ匂ヲ莊レリ。金天冠ヲ懸タリ。大畧天女裝束ニニタリ。而モ其色ニ普通ノ儀ニアラズ、件目錄ヲモテ是ヲ勘ヘラル。綠羅衣（コレヲ碧衣ト云。）補襠（一本補裏）（コレヲ金雀玉トイフ）青裳（コレヲ翠翹ト云）同腰帶八筋（兩方三重ノ文アリ）羅袴（上下長短色之見定所ナシ）金玉繫（コレヲ金吐差ト云、頸ニ懸ル瓔珞ナリ）赤前垂（裳前）（コレヲ覆玉貫）（天冠ニニタリ、付金鈕之懸匂（○勾ノ誤）玉幷金鈴也）肩覆（八葉ノ座ニニタリ。末ヲミヲヨバズ）風（○鳳ノ誤ナラン）㲉（久利皮ニニタリ革ニテ造之）

已上二具裝束併ヲ損ス　而モ不具仍其正躰未詳但、勅使勘申ニ隨テ粗要ヲトテ注置トコロ如此。

抑光季年來ノ不審ヲ披ガ爲勅使左大弁匡房之許ニ行向テ名府ヲ捧テ玉樹金釵兩臂垂通名ノ子細尋申サシムル處ニ答申サレテ云ク、玉樹ト兩臂垂ト共ニ陳ノ後主所造ナリ、而モ一曲タリ未其因緣ヲ不知トイヘトモ彼作者別人ニアラス、而兩臂垂曲未ダコレヲ見聞ス、但唐櫃ノ銘文尤詳ナリ、予カ不審同以開之、然者今ニヲイテハ玉樹金釵兩臂垂トイフヘキ歟。就中舞ノ說ニヲイテ別相傳アルヨシ今聞之、仍此銘文ニ付トイヘトモ誰カ非據トイハムヤ、加之仍彼唐櫃ヲ相具テ上洛アルヘシトイヘリ。

兼又匡房尋申サレテ云、霓裳羽衣曲何舞ソヤ、此舞本朝ヘ渉ヤイカン。承和ノ御時遣唐使舞生件舞樂ヲ學テ歸朝ノ間其樂悉ク忘ト云

貞保親王ノ橫笛ノ譜ノ序ニ云ク。霓裳羽衣連殊火鳳等ノ如ニ至テハ舞態アリテ聲樂ナシ、或ハ聲樂アリテ舞態ナシトイヘリ、此狀ニツイテ舞ノ有無イカン。爰ニ光季答ヘ申テ云ク。今習傳ルトコロノ玉樹ハ舞ト樂ト各別ノ曲タリ、樂ニヲイテハ昔ノ玉樹ナリ、舞ニ至テハ六七帖ヲモテ霓裳羽衣曲トス。此說治曆二年正月廿六日宇治殿光季ヲ召テ舞樂ノ間叓御尋アル日仰出サレテ云ク、霓裳羽衣曲ニヲイテハ今玉樹ノ狀中ニ別舞ノ手アルヨシ先年ノ比

樋ニ光高勘中上了。此説光季知ヤ否ヤ今仰ニツイテ相傳スルトコロ秘曲等ノ子細底ヲ挪テ談ジ申サシムル處ナリ。而今幸ニ賢才ノ訓説ヲ蒙ル、闇夜ニ燈ヲエテ夜光ノ玉ヲ研ク、爰ニ匡房彌感歎シテ云ク、汝一道ノ奉公ニタヅサハリテ忝ク七代ノ賢主ニ仕フ、齡八旬ニ及テ譽ハアレト謗ハナシ。而古哢ヲ聞テ今誡ヲ見、寔ニ天ノ与ル道ナリ

文集ニ云ク、法曲ハ法度ノ樂曲ナリ列聖ノ華聲ヲ正スコトヲホメタリトハ唐ノ太宗破陳樂ノ曲ヲ製リ高宗大定樂ノ曲ヲ製リ、玄宗霓裳羽衣ノ曲ヲツクル、故ニ列聖トイフ舞霓裳ハ白匡輸ガ唐ノ蒙求ノ注ニ云ク、葉法善昔玄宗ト或八月十五夜月宮ニ至テ天ノ樂ヲ聆テ自ラ音律ヲ曉テ其曲ヲ點記ス、歸テ其音ヲ傳ヘ遂ニ霓裳ノ曲ヲ爲ル

私云、法善ハ隋ノ煬帝大業十二年丙子ニ生テ唐ノ玄宗開元八年庚申ニ死ス歳百五歳

玄宗与羅公遠

或書ニ云ク、唐玄宗ノ御門年來月ヲ愛スル御志フカクテ夜々ムナシクスコシ侍コト年來ニ成ヌ。或道士此事ヲ感メ御門ニ申ヤウ、君月ヲ愛シ給事年久シ、月ノ內ヲミセ奉ント思ト奏シケレハ、御門ヨロコヒ給フ、道士八月十五日ノ午時バカリニ庭ニ立テカツラノ枝ヲトリテ月ニムカヒテナケタリケレバ、シロカネノキザハシワタリテ月ノ宮ニツ、キニケリ。

此時道士サキニ立テヒキ奉ルノボル事イクホトナラスシテ月ノ內ニ至リ給ヒヌ、是一ノ世界ナリ。玉ノ宮殿玉ノ樓閣カスヲシラズ、舞臺ノ上ニ十二人ノ妓女舞、各シロキコロモヲキタリ、樂ノコヘ舞ノスカタノトカニスメリ。玉ヲウコカスカンサシ、雪ヲメクラス袖、ミナヒカリカヽヤクカコトシ。二階ノ宮殿アリ、板ゴトニ玉ヲミカキテ目モアテラレヌ玉ノスタレヲマキテヒトリノアルシコレヲミ給フ、物ノ音舞ノスカタ、年來ノアリサマニテ心モヲヨヒ給ハズ、ヲノヽエモクチヌベシトヲホサレケレトモ、道士トクカヘリ給ヘ、ヲソクハアシカルヘシトイサメタテマツリケレバ、ナコリヲシナカラ舞ヲタニミハテスシテ返リ給ニケリ。御門此曲ヲ心ニシメテ世ニトヽメ給ヘリ、盤涉調ノ音ナリ、霓裳羽衣トイフ、則コレ也。中程バカリヲ見給ヒケルニヨリテ、ハシメヲハリモ無キ樂トイヘリ。文集五十八ニ云ク、子普ガ祠ノ前ニ山月明ナリ、人聞ハ往々夜笙ヲ吹鸞吟鳳凰昌聽ニハクナシ多ハ霓裳散序ノ聲ニニタリトイヘリ。

抑此曲樂ニヲイテハ陳後主ノ所造ナリ。陳後主ハ宣帝ノ嫡長子或ハ陳ノ高宗嫡長子諱ハ叔寶字ハ元秀、隋高祖大定三年辛巳ヲモテ陳後主ノ至德元年トス、日本敏達天皇即位十二年

ニアタル在位七年大定九年己酉歳マデナリ、即此年ニアタテ隋ノ煬帝ノタメニホロボサレヌ。又曰僞儔國王仁壽四年ニ薨歳五十二謚曰、煬、隋高廿四年ニアタル、日本推古十二年ニアタルナリ。或朗詠ノ注ニ云ク、霓裳トハ舞ノ曲ノ名也、又云樂ノ曲名也。千載佳句詩ニ云ク、長ク醉テ金陵前殿酒、偏ニ聞玉樹後庭花ヲ

拾遺佳句詩云ク、宮園生草國無主、玉樹後庭誰爲殘（短鷄冠也ワイ短也）

或書ニ云、陳禎明（後主年號）末長安兒子歌テ曰ク玉樹ミミミ聞不久

或書ニ云ク、霓裳羽衣ノ曲ハ開元（唐士年號也）ヨリ起テ天寶ニ（唐士年號也）盛ナルトイヘリ　唐棠求ニ云ク、（霓裳轉ス風袖輕シ）

或云、霓裳羽衣トハ舞ノ袖ノ霓ノヤウナレハナリ。王子晉仙ヲエテ後候氏山ニ返來テ笙ヲ吹シニ、此霓裳羽衣ノ曲ヲナン吹ケル。

或書ニ云ク。霓裳羽衣一越調依會要文入此調或目錄入平調ニ云々付之或云ク、霓ミミミト云、今ノ陪臚ナリ云ミ仍其故ヲ問ニ答云ク、或云ニ波羅門部樂ニ載之其繩加伎樂井中律曲霓裳羽衣ト記ナリミミ此事私云ク、蘇信波羅門樂部類アラバ未我朝ニワタラサル曲ニ

テモヤアルラン、慥ニ倍臚ヲ差文ナケレバ證據トシガタシ。又云。三体詩㊃商女不レ知亡國ノ恨、隔レ江ヲ猶唱ニ後庭花ヲトイヘリ。亡國ノ音有〆一定也。

最涼洲　古樂　中曲　無舞　拍子廿一返時末四加三度拍子　名功〔(底)切[イ]ニヨル〕成慶善樂

名涼洲　名九功舞

此樂息長貞秀勝道久作云々此曲ヲバ大判官基政宿禰ニハイカ、ヲモワレ侍ケン傳ヘラレスメ行高ニ傳申サレタリケル。サテ殊ニシアイシテ朝暮ニ心カケテウチ吹ケルト申傳ケリ。帝王內宴ト云〆セサセ給ケル參音聲ニ此樂奏ベキ式タリ。其時伶人正近雅樂允モシラザリケル時ニイカカアルヘキニ沙汰ノアリケルニ延近ガ弟子ニ王太コソ天下無双ノ物ナレトテ召出サレテ伶人ニ烈シテ吹タリケル誠ニ吉物ニナリヌレバ召出シテカヤウニグセラレケル也。後ニハ樂所預ニナサレテ侍ケルトカヤ、土御門大納言家ニ時元行高參會シタリケルニ、最涼洲ノ沙汰アリケルニ習ヘル由行高ノ申サレケレハ吹セテ聞食ケレハ時元カ笙笛モ相違ナカリケレハ目出〳〵ト御感アリケリ、元委日記アリ、末代ニハシラヌ者モナクシリテ侍メリ。サリナカラモ能々秘ヘシ基政ノ方ニハ始少シ吹替云〻忠拍子アリ教訓抄戢之㊃

絲管抄云（圖）
通典曰。西涼者起ニリ苻氏末呂先蒙孫據有涼州ニ變龜茲ノ聲ニ爲號ス爲奏漢伎ニ魏太武平ニ河西ヲ得
之謂ニ之西涼樂ト
又慶善樂獨用西涼樂
文曰爲ニ國家者指（ハ）指ハ揖ノ誤カ讓シテ得ニ天下則先奏ニス文舞功成慶善樂ニ有支之象
高祖實錄曰、高祖嘗シ疾愈引今上及貴臣十數人於大安宮ニ置酒奏ニス功成慶善舞於庭ニ
唐書礼樂志曰、九功舞本名功成慶善樂又文舞謂之九功　謂六府三支也、言水火金木土穀謂之六府　正シ德利シ用厚スル生
謂之三支尙書曰六府三支之功有ニ次序皆可歌樂乃德政之致也
一名西涼樂　一名功成慶善樂　一名九功ニ一九功樂
尙書ニ云ク、六府トハ三支　功有次序皆可歌樂乃ニ德政之致ナリ
或譜云、唐大畧元年自西涼所作獻也。
此樂內宴ノ參音聲ニ用之。或云早春內宴參入音聲奏此內宴ト云支ハ嵯峨天皇ノ御宇弘仁四年正月廿二日始被行之淳和天皇天長八年九年正月ニ在之仁明天皇承和二年三年四年五年六年七年正月ニ在之、同十二年十三年嘉祥元年同在之淸和天皇貞觀三年正月在之村上天皇天曆元

年正月廿三日在之

又云ク、大暦元年有涼洲曲本西涼ノ所献ル其声本レ宮調有大遍小遍貞元ノ初メ樂工康崑崙ハ寓其声於琵琶ニ奏ニ於王宸殿ニ曰フ號ニ王宸宮調ト又天寶ノ樂曲皆以邊地ヲ名ク若キ涼州伊州甘州ノ之類ノナリ。

唐書礼樂志ニ云ク、唐ノ之自制ニル樂ナ凡三大舞一曰九功舞ト九功舞者名功成慶善樂ト太宗生ニ於慶善宮ニ貞觀六年幸ス之宴從臣ニ賞賜スル閭里ニ同シ漢沛宛章觀甚賦テ詩ヲ起居郎呂才被之管絃ニ名曰ク功成慶善樂ト以童兒六十四人冠ノ進德冠ヲ紫袴褶長哀漆髻屣西舞フ號ス九功舞ト進踏ウ安徐以テ象ル文德ニ麟德二年ニ詔ク郊廟空宴ニ奏ヘ文ノ舞ヲ用ユ功成慶善ヲ曳屣ヲ執テ佛(〇拂)ヲ服ニ袴褶ヲ童子冠如故

內宴ハ前一条院御時行レテ後久ク絶タリケルヲ後一条院ノ御時長元七年正月廿二日行レケルニサキノ度ノ內宴ニアヒタル人ハ老タル上達部二三人バカリ也。其外ノ人ハアワヌ事ナレバ關白殿頼通日記ヲ尋テ行シメ給テ前々ヨリモ微妙サヲ增シ万ノ叓露ヲロカナルコトナク行シメ給ケリ。其日ニ成テ仁壽殿ノ南ノ庇ニ微妙キ簾ヲカケラレタリ。母屋ノ簾ハヲロ

〔孝云「譤」オモシロクなり〕

シテ庇ノ簾ヲハ上ラレタリ。然テ其庇ニ南向ニ御倚子ヲ立テラレタリ、臺ノ東ノ渡殿ニ北ヲ上ニシテ向ヒ座ルニ上達部ノ大盤ヲ立ラレタリ。其後ニ床子ヲ立タリ。東ノ庭ニ木工寮舞臺ヲ結タリ。花德門ノ内ノ片庇ニ樂人ノ座ヲ敷タリ、綾綺殿ノ西ノ庇ニ簾ヲカケタリ。卷上テ母屋ノ簾ヲハ下シテ其ニ副テ女樂人ハ並居タリ、既ニ時ニ成ヌレバ天皇赤色腋開ノ表ノ御衣ニ櫻ノ御下襲ヲタテマツリテ日ノ御沓ヲタテマツリテ御倚子ニ著セシメ給ヌ。關白殿ハ同赤色ノ表ノ御衣ニ打櫻ノ御下襲ヲタテマツリテ右向ノ方ニ候シメ給ヌ。其後出居ノ助仰ヲ奉テ陣ノ御座ニ出テ上達部ヲ召ス、上達部引上テ座著ヌ。凡今日ハ上達ア殿上人近衛ノ官皆青色ノ腋開ヲ著タリ。綾著タル人ハ綾ノ腋開、禁色ユリヌ人ハ無文ノ青色ヲナス〔〇〕。ン〕著タル。叓已ニ始リヌレバ日記ノ如クニ次第ニ行ハル。女ノ舞ハナニトモミヘネトモ舞臺ニ立並テ舞ヒラメケバ譤ミユ。樂ノ音ハ常ヨリモ殊ニ微妙ニ聞ユ、而間叓漸ク畢テ文講セラル。次ニ御遊アリ歌ヨリ始テ笙篳篥琵琶等皆上達部殿上人ナリ。人々皆興ニ入テ譤シキコトカギリナシ。御遊ヲハリヌレハ天皇イラセ給ヒヌ。然者人々皆マカリ出ヌ。其後内宴行テハ必殿上ノ賭弓アル叓ナレバ三月十日殿上ノ賭弓アルベシト仰下サレヌ。先十日

先テ頭二人殿上ニ居テ殿上人ヲコマトリニトリ分ツ。其頭ト云ハ源澄國朝臣頭弁藤原經信朝臣ナリ。其間天皇ハ殿上ノ御倚子ニ御ス。取分テ後殿上ノ小壁ニ押ツ、其後ニ前ノ方ノ籠ノ所ニ左近ノ府ヲ定タリ、後ノ方ノ籠ノ所ニハ右兵衛ノ府ヲ定タリ。取分テヨリ後ハ方之弓ヲナラシ挑ス𠮷カギリナシ。而間既ニ明日ニナリテ前ノ方ハ弘徽殿ニ籠ル、後ノ方ハ右兵衛ノ陣ニ籠ル、前ノ方後ヘノ方各シテ内ニ入ヌ方ノ人殿上人皆各相具テ入ヌ、前ノ方ノ休所ニハ一ノ上ノ宿所ヲシタリ、後ヘノ方ノ休所ニハ方ノ大將ノ宿所ヲシタリ、未時ニ射手ヲ引ク、射手ハ青色ノ腋開ヲ着タリ、出居ノ上達部加ヘラレテ後次ヲモテ射シム、五度射畢ルニ、前ノ方既ニ勝ヌ、其後殿上ノ童ヲモテ陵王ヲ舞シメ、後ヘノ方ハ負タレバ舞ベカラズトイヘドモ、殿上ノ童日比習タル舞ナレバ納曾利ヲ舞シメツ。其後同月廿日程ニ前ノ方ノ人等勝タルニヨテ願ヲハタサムカタメニ、前ノ方殿上人等擧テ賀茂ニ參タリ、返ル次ニ日ノ入方ノ程ニ齋院ノ前ヲ渡ルニ人ニ云合テ云ク、只ニスギンヨリハ去來參ラムトテ參タリ。人々東西ノ庇ニ參テ居ヌレバ、女房思カケヌ程ニ此人々參リタレバ、喜ヒ思氣色ミユ。女房ノ袖口ドモミナキヨゲニテ所々ニ出タリ。而間御箏琵琶ナト出サレタレバ、殿上

人所々ニ彈合セ笛吹遊フニ、物ノ子本末ニヒヽキテソヽロサムキマテ謡シ。夜アケテ人々カヘリ出ルニ鳥居ノトトニ歩ヒ出ル間、侍一人追テ來レリ、文持テ來レルヲ披テ見ニ、櫻重ノ薄様ニ糸ヲカシキ手ヲモテ

ひきつれてかゝるおりこそあつさゆみもろ矢もいさゝうれしかりけれ

集テ立カコミテ目出カリアヘリ。サテ陸奥カミノ丁子ノ香シミ返タルニ、松ノ炭ヲモテ、

うれしきはもろやのみかはあつさ弓君もかたひく心ありけり

侍ニトラセテ出ス、内裏ニテ御前ニ召ハ殿上人皆アルカギリ引參ル。天皇今日の事ドモ初ヨリトワセ給ケレバ、齋院ノ事マデツユヲトス事ナク語リ申セハ、天皇キコシメシテホメ感ゼサセ給ケリ。

賀殿　新樂　中曲　舞出時道行入時重吹急

常曲百拍子說有之極秘也　有甲　道行　詞同鳥急仍不書之

破二帖拍子各十　終帖加三度拍子一反時末二加拍子、一反二反共末四加說有之、又一反二反共末二加之常說也

急四帖拍子各廿 終帖加一拍子管絃時自二反(ヘン)頭加之

此曲ハ唐ヘ承和御門ノ時判官藤原貞敏ト云ケル物(イ者)ヲツカハシタリケルニ簾承武ト云人ニ琵琶ヲ習テ此朝ニハヒロメタルナリ 今急忍拍子 舞ハ同御門ノ御時ニ有勅一作ル舞一時以ニ嘉祥樂一爲レ破以ニ嘉殿一爲レ急以ニ伽陵頻ノ急一爲ニ道行一(イ以テリ)物師林直倉作之。或書ニハ大宋人ミミ然者儛ハ此朝作ト云々 此朝ヘ渡テ作歟 可尋尤不審ミミ

南宮笛譜ニハ終帖加三度拍子光時一說同之 博雅笛譜ニハ不レ加レ撥(ハテツ)急第四帖ヲバ名ニ更居突(サラキツキ)一タヤスク舞連叓ナシ殘シテ入綾ノ時一者舞之秘叓故也 於更居突者蒙別仰舞之 只ノ入綾ニハ居手ヲハ舞ベカラス。此曲入綾ハ四帖舞ハサル程ノ舞人ハマワヌナリ。

又光時ガ說云、急第二返ノ第六拍子ヨリ加一拍子自筆ノ舞譜ニ付之

抑承元々年ノ比閑院ノ内裏ニシテ舞御覽ノアリシニ、近房假一者トシテ參タリシヲ召弓場殿頭中將源雅淸奉勅今日賀殿太平樂ノ更居突御覽アルヘキヨシ被仰付處ニ申云、太平樂ノ更居突ハ如形仕ヘシ、賀殿ノ更居突ハ不習候ヨシ申上畢。然者其子孫ハ更不可舞殊ニ此更居突ハ大臣ノ大饗ニ用ラレヽナリ。

或古記曰。大國ニハ國王ノ大賀セサセ給時ハ奏此曲云々舞曲モ唐ニ候ケルニヤ、此舞ニ百拍子ノ說ト云事アリ。其習云、破二帖拍子二十（御相傳已後御覽有ベキ處也）急四帖拍子八十合百拍子ナリ。此說曰、破急ヲ連舞破第二切末二拍子早成テ加拍子、急ハ第四帖加拍子

私云。此說樂ニモ秘說奥書ヲトル内ナリ、（或記事憚外見者也）去大治三年ノ比依勅定光時一人舞著甲此樣ヲ天王寺ノ舞人シリタルヨシ申ナルハ狛行貞ガ南北二京ノ座ヲ擯出セラレテ彼寺ニ住シタリシ時、左舞ヲヲシヘツキタル内ニ、此百拍子ノ說ヲヲシヘタリケルニヤ。行貞モハカバカシクシラヌコソ候ケメ（雖右ノ記說悉教訓抄載之當家不相違聞書之）

江記曰、嘉保二年八月ノ比於院（閑院新造）相撲五番御覽アリシツイデニ舞樂ノサタアリケル内ニ万歳樂アルヘキヨシサタメアリケルヲ、匡房申曰、今日万歳樂ヲトヽメテ賀殿ヲ御覽アルヘシ其ユヘハマイノ與頗マサル、一ニハ此院新造也、賀殿儀尤相叶ヘリ、仍光季ニ仰テ曲ヲツクシタリケレバ万ニ相應シタリケリ。賢人ノハカラヒ申サレタリケルニヤ。彼閑院ハ代々帝王ノ吉所ニサタメラレテ于今内裏トセリ。

父者行高也而行光一向笛吹ナリ

或記曰、狛行光生年十六歳ニシテ父ニ賀殿ノ曲ヲ習其後春日社ヘ參詣ノ度コトニカタ〳〵ニ立寄テ密々ニ此曲ヲ舞テマイラスル叓年月ヲヘテ後重病ヲウケテ令逝去畢。冥途ニテモフク間貴客相副ヘリ、炎摩廳庭ニ參付時ニコクソツハケシクセントスル處ニ、此貴客マケテコヒウケ給フ、仍カヘサル、時ニ問云、コハタレ人ノソハセ給テ忝クコヒウケサセ給ソト申處ニ、貴客答云、我ハコレ春日大明神ナリ。汝年來我ニ心サシフカキコトアサカラス、其同心ヲホウセムカ爲也ト仰ラレテ、地獄ノアリサマユカシキカ、ミセント仰ラレテクセサセ給ニ、コレヲ見ルニ凢〔イ〕ニテ稱〕キモ心モウセヌル程ノ叓也。見終後ナク〳〵申云、イカヽシテ此ノクヲハナレ候ヘキト申セバ、父母ニケウヤウスルニスキタル叓ハナシ、ハヤク本國ニカヘリテ此ノヨシヲ語ヘシト仰ラルトヲホユレバ、貴客モ見ヘサセ給ス、又蘇生シヌ。其後仁平二年九月二日令逝去畢。生年六十三 御社撿記ニ解脱聖人貞慶ト申シテ世コソリテ生佛ノコトク貴タテマツリシ人ノ書ヲカセ給タリ。又說法ニモ度々セサセ給シナリ。然間件ノ行光ハ無下ニマチカキモノナルニ樂所ニハ舊記ニモ見ヘズ云傳タルコトモ侍子バカタ〳〵不審無極トイヘドモ、打ウケ給ハルカ目出貴ク侍レハ、心アラン人ハアヤシノ曲ナ

リトモ合掌テ廻向シタテマツルヘキナリ。仍テコレヲ注ナリ。〔朱〕教訓抄ニアリ

延長二年正月廿五日太上法皇ノ奉賀天皇骶算時舞ヲ奏セシ内ニ、含泉樂四人舞〔是賀殿異名ナリ〕古老賀殿ノ別名ト申處或目錄ニ黄鍾調ノ內アリ、然者別舞カ、不審ノコル可尋云々。續教訓抄載之〔朱〕

又名甘泉樂、又名含泉樂、又嘉ノ字通用。答舞。

長保樂　地久　延喜樂

頰義綿譜ニ曰、拍子ヲ不加ト云々〔此說ハ博雅三位笛譜ニ云ク、不加拍云々、其謂ハ古ハ拍子ヲ加トイヘドモ終帖絕テ今二反バカリアレバクワヘスト云々此說ハ謂歟〕而光時云ク、不然、一帖ノ時モ乃至二帖ノ時モ末二拍子ニ加三度拍子自六(○穴ナラン)上之也云々秘事也、天王寺說自第二反頭加之。又云二反時ハ末四拍子ヲ上云々、時元說也。

急終帖ニ加一拍子〔常說〕一說ニ云ク、加三度拍子、但常不用之、光時家一說畢時二反舞終帖ニ加拍子猶畢時一反ヲ舞半帖ヨリ加拍子。同秘說ニ云々急第二反ノ第二拍子ヨリ加拍子自筆舞譜ニ付之。

口傳云ク、四帖マワヌホドノ舞人ハ當曲ノ入綾ヲバ舞ベカラズトイヘリ。又云、近代多ハ左ニハ新樂ヲ用、右ニハ高麗ヲ用、而左右相共ニ同ジ新樂ニ用例アリ、春日社行幸アル時

執柄殿下ノ御休幕ニシテ童舞ヲ奏スル叓アリ。左万歳樂六人著左裝束、右賀殿著右裝束右裝束ヲ著シテ左舞ヲ奏スル例コレナリ。舞人各賜祿、大治三年二月ノ例ナリ、且此風情ハ中御門右府入道殿ノ御記ニモシルサセ給ト云々　又云、此叓殿下御春日詣ノ時、馬場黒木御所ニシテ童舞ヲ奏ス、其次第如先、此時ハ左一者舞師ニヨリテ必ス勸賞ヲカフルモノナリ。舞入時當急ヲ吹テ則一﨟舞人、入綾ヲ舞ナリ。三拍子許ノ後加拍子一說ニ（〇云々）舞人樂屋ニ向トキ加之、然ハアナカチニ三拍子ニサタムヘカラス。

又云。入時更居突ノ曲アリ、但別仰ニヨリテ舞之。又云童舞ノ時二頭アテ入綾アヘル叓アリ。文永七年三月廿七日醍醐櫻會ノ日一頭（乙有）二頭（毘沙王）二人入綾ヲ舞、但二頭ハ庭ノ手ハカリナリ。彼兒座主定濟寵童ニヨテ別ノ所望アル故也。

抑此曲ハ破ト急ト各別ノ曲ナリ、破ニヲイテハ我朝ノ樂舞ナリ、仁明天皇ノ御宇嘉祥年中笛師和尓部大田麿勅ヲ奉テコレヲ作、故ニ嘉祥樂トイウ、其證ヲヽキモノナリ。或說ニハ林ノ直倉作之云々。急ヲバ賀殿ト名ク、則唐家ノ樂ナリ、而ヲ承和遣唐ノトキ（判官）藤原貞敏琵琶ヲモテ引傳トコロナリ。（忠拍子圖）爰ニ勅アリテ林直倉舞ヲツクルトキ嘉祥樂ヲモテ破トシ、賀殿

ヲモテ急トス、烏急ヲモテ道行ト定ムルナリ。或云、件急嘉祥年中ニワタサル、仍コヽニ破ヲ作テ年號ヲモテ名トス、唐家ノ樂ヲモテ急トス、故ニ破ヲバ嘉祥樂トイヒ、急ヲバ賀殿ト云ナリ。

但貞敏ハ（承和二年爲美作使遣唐使准判官（原））承和五年ニ遣唐（マヽ）同六年八月歸朝ナリ、然ハ嘉祥年中ニ渡ル儀ハタカヘリ。此急承和年中ニ渡ルアヒタ嘉祥年中ニ舞ヲ作レルナリ。

私曰
狛行光忝モ春日大明神冥途ニテコヒウケサセ給テ地獄ノアリサマ見セシメテ歸サレタル時人ニ告ヘシトアリ。此地獄苦イカニシテカマヌカルヘキト尋申侍ハ、父母ニヨク孝養アルベシト仰ラル由記之ヲホツカナシ、何ノ法ヲ持信テ此苦ヲマヌカレ佛道ニ近付シタテマツラントコソアルヘケレ、カヤウノ叓ニテ人ハ後世ヲナヲサリニ思叓也、今生一端ノ親子ノ孝ニテマサニ佛ニ成コトアルヘカラズ、過去ニテ法華經ヲ持タル身カ不信ニメ久ク輪廻シタルモノカ昔ノ緣ニヒカレテ今（マヽ）サノ（世與（原））善ニヨリテ佛ニ成叓有ヘシ、其モ佛滅後二千年ノ衆生ノコトナルヘシ、末法ニ至テ曾アルヘカラスト定ラレ侍間此義理ヲ能々聞分テ正法ニアイタテマツルヘシ、只南無妙法蓮華經ノ一法ナルヘシト可信可仰云々。

北庭樂　新樂　中曲　舞出時調子入時重吹

當曲四帖拍子各十四終帖加三度拍子一反時末四加之

又北亭樂、或云名雙鼻麗云々

是ハ亭子院ノ御時不老門ノ北庭ニテ作之（作者不見）早物ナリ、常ハ一切舞皆終帖（加三度拍子略定一反ノ時末四拍子許ニ可加拍子）入時重吹當曲（則加之）此舞ニ入綾アリ、近代不舞之、

抑堀河院御時承德ノ比舞御覽ニ狛光季ニ召仰テ五常樂ノコトクニ次第ニ舞入ヘシト任勅定各曲ヲツクシタリケレバ頗有御感云々

保延元年十月廿九日內裏舞御覽日任承德之例次第ニ入綾可仕之由有御定舞四人（光時、行貞、行則、光近）舞之

或云、亭子院ノ御作云々此帝ハ衆曲ノ主殊ニ和琴曲スグレ御キ。或云、大國之法始成夫妻之日於家北面ニ奏此曲ヲ、必人妻ハ居北面云々

承和樂　新樂　中曲　舞出入調子四帖拍子各十終帖加三度拍子一反時末四或二加拍子又冬明樂ト云。又一隆樂　答樂　仁和樂

此曲（仁明天皇御）承和年中ニ黄菊ノ宴ト云事セサセ給ケルニ奉勅舞ハ三嶋武藏作之、樂者大戸清上作即以年號爲樂名

一說云、承和ノ帝作之、承和二年左司獻舞序アリケレトモ中古絶了

抑以當曲ヲ妓樂ノ内醉胡ニ用之非無不審

又云、仁明天皇御即位ノ樂ナリ、承和元年樂所預從五位上大中臣庶文作之。又云承和聖主ノ御製作

貞保親王譜ニ云ク、大戸眞縄作舞　長竹譜說同之

明竹譜云ク、大戸清上作。又云此樂ヲモテ妓樂ノ内醉胡ニ用之、イカナル由ト云事ヲシラズ可尋之、醉胡ハ一越調音ノモノナリ、秘スル時用此曲云々。

抑承和帝ハ殊ニ菊ヲ愛セサセ給シナリ、彼菊ニ四種ノ品アリ、一ニハ初生トハ稚生ノ時ナリ。二ニ円葉トハ盛ノ時ナリ。三ニハ日精トハ花ノ時ナリ。四ニ長秀トハ花ノ落ル時也。

菊ノ花ヲハ日精ト云、彭祖ト云モノアリキ、道ヲ行ニ廿許ナル冠者ノ八十許ナル翁ヲトラエテ打ヲミテ彭祖ガ云、何ノ咎ニヨテ此人ヲ打ゾト云テ、我ニ此咎ヲユルセト云ニ、冠者

ノ云ク、此翁ハ我子ナリ、而ニ我ハ酈縣ノ菊ヲ食タルカユヘニ三百歳ニナリタレドモカク
ノコトクワカク侍ルナリ。此冠者ハ我ガ敎ヲキカスシテモノウクシテ彼藥ヲクワサル故ニ
ワツカニ八十ニナルモノ、我ヨリ老面ニテ侍ルカ遺恨ナレバ打侍ルナリトイヒテ又打キ。
其次ニ君ハ慈悲御ス人ト云テ件ノ藥ヲ、シエタテマツラムト云テ酈縣ノ菊水ヲ、シエタリ
キ。仍服シタリケレバ彭祖カ命ハ七百歳延タルナリ。魏文帝ノ壽命ハ十五歳ニテアシマス
ヘカリシニ、彭祖帝德ヲ貴ヒテ酈縣ノ菊ヲ奉タルニ七十歳ニ延給ニキ。此帝生レ給シトキ
空ニ紫雲ノ蓋ヲ、ヘリキ。仍彭祖ハ貴ヒタテマツリシナリ。
或云、魏文帝ハ八歳ニシテ即位ナリ。相人云ク、君ハ妙王ナリ、但短ノ相アリト申ケレハ
イカヾスヘキト仰ラル。酈縣ノ菊ヲ服シテソヨカルヘキト申ニ、使ヲモテトリニツカハシ
タルニ、彭祖コレヲキヽテモチテマイル、此菊ヲ食スル人ハ五百歳ノ命ノアリシナリ。又
云、彭祖ハ五十三子ニハナレ、四十八ノ妻ニ別、八百年生タルユヘナリ。無用ノ生ト云々。
朗詠云{朱}谷水洗レ花、汲ニ下流一而得ニ上壽一者三十餘家。地脉和レ味、湌ニ日精一而、駐ニ年顏一者五百
箇歲。

十日菊

家法詩㊟

節去蜂愁蝶不知、曉庭還繞折殘枝、自緣今日人心別、未必秋香一夜衰

後成卿㊟

山人のおる袖にほふ菊の露うちはらふにも千代はへぬべし

中務㊟

我宿の菊の白露けふごとにいくよつもりて淵となるらし

九日㊟

燕知社日辭巢去、菊爲重陽冒雨開　皇甫冉詩㊟

霜蓬老鬢三分白露菊新花一半黄　九月九日

不是花中偏愛菊、此華開後更無花　菊花

菅（善ノ謬）相公御詩㊟

酈縣村閭皆潤屋、陶家兒子不垂堂。菊散一叢金

菅三品

蘭蕙苑嵐摧紫後、蓬萊洞月照霜中。菅相公　花寒菊點叢

心あてにおらばやおらん初霜のをきまごはせる白菊の花　躬恒

久方の雲のうへにてみるきくはあまつ星とぞあやまたれける　敏行

又江西ノ詩ニ　爲君不折都門柳、留待明年社雨前

胡飲酒　古樂　小曲　舞出時林邑亂聲此間勅使三度一曲之後止亂聲、次音取、次序、次破。入時重吹破　序二帖拍子各七　破七帖拍子各十四　舞樂管絃共自二反頭加拍子但舞樂時加樣說々有之搔一鼓拾鉦鼓　有別裝束　一名宴飲樂

蠻夷所作之胡國人飲酒醉テ奏此曲摸其姿乙舞曲桴者酒杓日此事不詳。又云、胡國王舞之、仍桴ハ笏也云々

或書云、承和年中奉勅舞者大戶眞縄作也。樂者大戶淸上作之　然者如靑海波此朝ニシテ作改タル歟又新作歟不詳可尋之

又兒女子牛飼童酒ニ醉鄕之姿作舞謬說歟

舞者源家ニ留土御門御一家　樂者被下坊家是習傳今有諸家　序二帖第二帖舞人居秘事內云　破七帖第二返之末籠二拍子打三ト拍子是多氏說第三之頭ヨリ打一拍子山村氏ノ說　舞五返時從第二反頭打三ト拍子　賴吉說第三反末加三ト拍子　惟季說打一拍子　此舞昔ヨリ右舞人多氏舞其故不知可尋云々

當時作法自右樂屋渡左樂屋著裝束頻饗應シテ一坏酒ヲ勸例也。先奏古樂亂聲御使三度太上天皇關白家御隨身勤之法皇之時ハ廳官左樂屋來テ右膝突テ仰ナリ。然承久二年水無瀨殿御覽日御隨身其右方仰タリキ御隨身尾籠ト上下申キ。

舞人出テ亂序一曲ノ後止亂聲各稱取如常　次序二帖舞有居事　次破一返舞踏ヲシテ如大輪舞廻其

姿如打輸(ウチワノ) 如此舞テ七帖ノ終ニ北廻向テ終也。而近來樂七反ニ舞不レ合(アハセ)間大旨八反九反吹也。是左舞部心得サル故ナリ。
承元二年十月廿四日吉水懺悔院御堂供養在御幸件日在胡飲酒舞人大宮亮源定仲仁平御賀ニ若
君ニテ此曲舞給年十一當日著裝束出給間ニメツラシキ振舞アリ。左大鼓鉦鼓ノ中ヲ通テ桙
ノ内ヨリ大鼓ノ面ヲ經テ逵(スイカヘ)ニ戌亥(イヌヰ)ヲ指シテ歩行テ舞臺ヲスキテ後立返直(ウハシク)登ニ舞臺舞始當曲
秘事内云々、又失錯歟 其勸賞敍三位追被仰下 入時重吹樂屋ニ向時加拍子入間度々召返、其時入綾舞也此内ニ勅(チ)定大鼓ノ
前手曰有秘事召返サレテ御前居桴頭ヲ地突手無左右秘事侍トカヤ
古記云、堀河院御時多資忠爲山村正貫被殺(サツカイ)害畢。仍大旨二道失了。仍聖主此道ノ絕事ヲ深
依有御歎間、彼資忠之子二人被尋出畢。大郎ハ十五忠方、次郎十二近方、則令元服テ以勅
定道ヲ被教繼也。右舞ハ東大寺職掌以紀末延令習傳。胡飲酒ハ右大臣源家ヨリ下給タリ。
採桒老ハ天王寺舞人召奏公員習寫。神樂ハ兄弟黑戸ニ召居テ令勅下御於秘事ハ二男近方ニ
下給タリ。或記曰。昔胡飲酒絕畢、嫡男某不レ傳二此曲一事ヲナケキテ臥タル夜ノ夢ニ父來テ
此曲ヲ敎寫了。夢サメテ後アハレ樂ニ合テコヽロミハヤト思處ニ可然所ニ管絃ヲセラレケ
ルヲ悦テ、無左右此樂ヲ所望シケレハ、即此樂ヲ爪。悦ナガラ進出テ此曲ヲ舞ケリ。人々

目ヲト、メテミケレバ舞手其姿叉カイキカヘリタルカトウタカヒツヘシ。仍件男ニ次第ヲ尋ケレバ、夢ノ狀ヲカタル。道ヲ繼コ、ロサシアハレナルコトナリトゾ申ケル。是ハ年代モナシ、其名モナケレハウタカハシケレトモ可然公卿ノ御日記ニ侍ナリ。

元永元年十二月十五日最勝寺供養忠方始舞賜勸賞（一男忠節傳之　二男忠成傳之）一男景節、而建永元年九月九日夜忠成爲景節子童被煞害畢。又胡飲酒絕了。

承元元年十一月廿九日最勝四天王院供養好方舞（依勅雅行中將授之）

今者上﨟モ二流定仲三位流（士御門大納言定通、多久行）雅行三位流（子孫侍從多好氏）惣胡飲酒（上二流　下二流）無念亨也。

弄搶　古樂　中曲　無舞（拍子十二）一反時末四加三度拍子打鞨鼓可吹四十返云。或兼新古。

昔ハ有舞狛ノ棹ノヤウナル棹ヲ持テ如太平樂躰ニ舞云（光時說）古ハ供花ノ樂ニシケリ。

十天樂出來ノ後ハ用十天樂忠拍子アリ。

又云、弄搶樂、又云、度數無定隨舞吹之、但近年舞絕畢。

南宮御譜云、四十帖（各拍子十二云々）又云供養樂ニ用之。又云、八幡放生會ノ御供樂也。林邑

樂屋ニ勤之

狛光時云ク、此舞ノ姿狛桙ニニタリ。狛桙ノ棹ノヤウナルモノヲモチテ舞之、帶釼シテ冠ヲ著タリ。太平樂ノコトク舞ト云々。則出入吹調子。同云、舞人大伴兼時マデハ舞此曲云々唐舞圖四人舞之右舞形ナリ。有打懸以赤緞結付冠上也。帶釼棹如狛桙ノ。着糸鞋ヲ曳尻ヲ未レ渡ニ此朝ニ由也云々。

承平五年相撲節七月廿九日拔出ノ日秦王ノ答舞ニ弄搶トイヘリ

又天慶七年七月晦日相撲節ニハ皇麞答舞弄搶ト云々。付之當曲ハ未ワタサレヌヨシ在之、然ドモ兩年ノ答舞現前ナリ。但皇麞ノ答ニ舞叓ハ共左方舞ナリ。此一曲ニカキリテカヤウニアワセラルベカラス愚推ヲメグラスニ弄搶トカキテホコトリトヨメリ、シカレハ狛桙ヲ思フテカヤウニカケルニヤ、不審無キ〔イニテ有〕ニアラス哉。

十天樂　古樂　中曲　無舞　拍子八　一反時末ニ加三度拍子打鞨鼓只拍子アリ　或小曲或兼新古或拍子十

此樂ハ東大寺講堂供養日天人十人空ヨリ下テ佛前ニ花ヲ供ケレハ始タル樂ヲ作テ可奏ト云

依宣旨笛師常世乙魚(ツネヨノヲトウヲ)(朱)之所作也。天人クタリタリシニヨツテ十天樂ト付ラレタル也。

或云、聖武天皇御時東大寺講堂前ニ天人十人下テ花ヲ供、常世ノ弟魚初テ新造之云々。但常世乙魚ハ聖武ノ御時ノ人ニアラサル歟。

彼講堂會年不審講堂供養ハ承和五年ナリ、又延長五年六月十六日會アリ、是等ノ日作之歟。

壹弄樂　新樂　中曲　無舞　拍子十 一反時末四加三度拍子也

又承天樂云　又一隆樂云

此樂者大戸清上作之、舞者大戸眞縄(マタヽ)作之云々

或譜云、此舞ハ玉手則清(タマテノノリキヨ)之家ヲ可尋ト申タレトモ、其子孫于今侍ドモ不傳習云々忠拍子アリ、有序ケレトモ絶畢 此破南宮説自中穴吹出也

河水樂　新樂　中曲　無舞　拍子十　一反時末二加三度拍子

近來登高座ノ樂ニ用之。有基之説云、此曲雨戀時ニ奏ハ必雨下、忠拍子アリ。

溢金樂　新樂　中曲　無舞　拍子十　一反時末二加三度拍子　又承杲樂云　又壹金樂云

此樂者和尓部大田麿作之。舞者犬上是成作之云々。但此舞絕畢。忠拍子アリ。

詔應樂　新樂　中曲　無舞　拍子十　一反時末四加三度拍子 詔ジフ之字一說
昔ハ舞ノアリケルニヤ 可吹五返中タリ 返吹初拍子 有習說 又梁州詔應樂ト云、忠拍子アリ。

廻杯樂　新樂　中曲　無舞　拍子八　一反時末四加三度拍子　有只拍子
昔ハ舞ノ侍ケルニヤ、序一帖 拍子四 破四帖 拍子八 注セリ。近來ハ唄師登樂ニ奏之。承和御時
殿上ニ被好此曲ケレドモ只一代ニテヤミニケリ。

溢河鳥　古樂　中曲　無舞　拍子十　一反時末二加三度拍子　或拍子十二　或（不舞アリ）新
古　溢泚字通用
此曲隋煬帝用汴溢河作之。序絕了。本者無喚頭中古出來云。行道用之

古記云
是隋煬帝於汴河此曲作云。序拍子十可吹二返、此曲者慈覺大師引聲ノ念佛横笛以令吹傳御
日本令渡御其音也云々 本說者尺八ニテ傳ナリ。
天曆五年正月廿三日内宴參音聲用、此曲 忠拍子アリ 又云、序拍子十舞アリトイヘトモ近來絕了。

新撰龍吟抄云。序無舞仍雖有譜序舞共絕了。破拍子十二 古樂時搔之。此曲大法會大行道ニ用之、仍爲新樂高麗行道垣破。又云、此樂新古ヲ兼タルニヘニ樂人鞨鼓ヲ打舞人一鼓ヲ舁〔イ搔〕ナリ。行道樂ニ用之。經信卿記云。此曲ハ可搔也ト云々 天曆三年二月十一日櫻花宴參音聲、參退通用之。

同五年正月廿二日內宴參音聲ニ用之。內教坊ノ別當左衞門督高明奉行之、中古ノ叓ニヤ、平等院一切經會ニ樂行叓樂屋ニ尒云ク、シフカハトリヲ奏スヘシト云希代ノ勝叓ナリ。醉鄕日月云ク、隋煬帝作新古兼。或云、大國唐ニ一ノ河アリ、澁河ト名ク。又一ノ鳥アリ、名テ合〔露令イニヨル〕利鳥ト云、件鳥轉音此曲ニ同ト云々。若合利鳥ヲアヤマル歟。又云、白樂天作之。此樂ハ引聲ノ音ニ相會ト云々。天台山慈覺大師、承和四年六月十七日入唐大聖竹林寺ニシテ法道和尙ニアイテ引聲念佛ヲ傳ヘシメ給間、大師ノ御音不足、仍其音曲習カタシ、而間笛ヲモテ傳ヘシメ給。件ノ所傳ノ笛ハ今此樂也。始終都テ引聲ニ合ト云々。嘉祥元年六月廿三〔イ六〕日皈朝即牙笛一傳之。一度ニ渡之。

歌曲子 新古不詳 中曲 無舞 拍子十六、又十二 一反時末四加三度拍子又歌曲子塲

延喜十一年相撲節有勅被弄ニ四拍子ニ以其詞同之故也雖然小部正清ハ尚用十六拍子云々。即最勝寺供養日 供花樂ニ用十六拍子 此場字舞姫名也 只拍子アリ

迦陵頻　古樂　中曲　童舞　舞出時林邑亂聲、次音取、次序、次破、次急不吹止此樂如右

舞次第舞入　又名鳥

序二帖 拍子各八 破三帖 拍子各十六 以二反爲一帖一反拍子八常一帖用之。其時末六如陵王破加拍子。一說鳥搔加之一反時末四加拍子只拍子時加搔三度拍子　急拍子八舞時大輪之後立定時加三度拍子管絃時自二反頭加拍子一搔拾鉦鼓

此曲ハ天竺祇園寺供養日伽陵頻來舞儀時妙音天奏此曲阿難傳之流布之云々。迦樓賓是梵語也。漢土教鳥此鳥鳴音中囀苦空无我常樂淨土也 銅拍子ヲ突音彼鳥アネブナリ

是僧正波羅門僧菩薩慈佛哲師等所傳也。伽婁賓件ノ鳥菩薩共舞見曲是并所妙音天降南天竺國傳此舞矣。爰波羅門僧正親傳得之後不留漢土先本朝傳云々。

序常ニハ一返舞、破モ一返舞 樂二反 從第十一拍子加拍子 古樂揚拍子 畧定時 用八拍子 末四拍子 加拍子 又有一說搔連打之 謂之鳥搔舞手ニ合云々 急 拍子八 大輪之後立定時 加三度拍子 不止樂音 次第舞入 出

時用亂聲　此舞ハ大神右舞人本トシテソナラヌ末舞人等知之舞師ソスルナリ。

此舞ヲ供樣ハ捧供花菩薩（左鳥舞、右蝶舞）對シテ持參畢。樂止反入時舞臺之上草墪（トン）ニ居（ヰ）ヌレハ菩薩ハ中ヲ通テ下了。吹出亂聲時舞臺ヨリ下テ始テ出テ舞ヲ供ス。此鳥者極樂世界ニスミテ佛ヲ供養シタテマツル。

安樂塩　古樂　或新樂　中曲無舞　拍子十二　一反時末四加三度打羯鼓　又曲ト云

此樂委ク申タル物ナシ、近來法用之時用之只拍子アリ又沙陁調曲云、古樂ニ用ル時大鼓搔之　桂譜說同之。又云、度數無定。南宮譜云、世俗現出安摩之時先爲此音聲、其惾無所見云々。又云常樂會ノ日安摩以前ニ吹之舞ノ奏ヲ進ス彼段ニ委細在之。抑此曲唐帝ノ御時依勅音重作之

壹德塩　古樂　或新樂　中曲　無舞　拍子十四　一反時末六拍子加之。打羯鼓只拍子アリ。

此樂モ同事ナリ、古樂トハアレモ打マカセテ羯鼓ヲ打ハ如此ノ樂ノ習也　經信卿譜云、此曲可昇（不搔）ナリ。近來導師咒願等ノ迎ニ用之。又云、常樂會十六日舞奏マイラスルニ吹之。其作法安樂塩ノゴトシ。安部友正云ク、ミタケマイリニ人ニ吹セテマイルケシキウ（鈔）

數調抄「ヲ」トス〕ハナレテ吹ベキナリ。件友正ハ未〔○末ノ誤〕樂人安頼ガ子也ト云々。

抑此曲ハ三嶋武藏ノ作所也　又云、漢王御即位ノ樂陽倒天作之。或陽例〔〇倒〕。〔倭音例〕天作之倒、例字イヅレトモ不分明

酒胡子　拍子十四　古樂　小曲　無舞　管絃自二反頭加一拍子　拾鉦鼓

此樂唐ニテハ名ニ醉公子(スイコウシ)一　是シナ玉名也　仍唐人倫件曲歟　又酒盛之時偶音聲云　早物四拍子　唐物加一拍子　但古老之說云、早八拍子ニ打鞨鼓之　加三度拍子　是退出音聲ノ通例歟　可尋　又云。亦作酒公子。又作酒酤子　公古字通用之　又云、一名酒飲子、一名醉公子、拍子一說十一、一說七、忠拍子アリ。其時加三度拍子、樂拍子時一拍子。但古老說云ク。加三度拍子云々。或云、下樂并退出音聲等ノ時ハ加三度拍子如長慶子ナリ。又云、如此ノ小曲ナレドモ仍加三度拍子　又云、古老說云ク、早八拍子物ナリ、仍三ト拍子　又云、此舞出入時林邑亂聲吹ト云々但已來舞絕畢

抑此曲胡人子息莫〔〇養〕長始別家時奏此曲飲酒云々唐頻〔〇類〕之飲酒之時奏此曲。

武德樂　新樂古樂不詳　小曲舞無之。拍子十二、管絃時自二反頭加一拍子。拾鉦鼓。又云破拍子十二急拍子十二

此曲武德漢高祖作之、則武德殿小五月會奏之。近來絕畢。

古記云

魏黄初四年有司奏改漢氏宋(ママ)(〇宗ノ誤。教訓抄宗)廟安世樂曰王世樂嘉至樂曰迎靈樂武德樂曰武頌樂昭容(区ノ不容)樂曰昭業樂雲翻舞曰鳳翔(〇翔ノ誤カ)舞育(臺月不ニヨル)命舞曰靈應舞武德舞曰武頌舞文昭舞曰大昭舞五行舞曰大武舞。又云、是爲相撲節獻舞左近衛權少將藤原忠房朝臣奉勅作改之破今世無知人可尋急上一拍子 但法用之時者打三度拍子 又云、序拍子十六、或十二、或六。但近來知人無之。破拍子十二諸家ノ日記ニ大旨絕タリトイヘリ。但六条入道蓮道知之。急。又云、下高座幷退出音聲法用之時(トキ)三度拍子加也。或者忠拍子ノ時加三度拍子。又渡海之時奏之。又將軍家ニテ奏之。

或記云、魏黄初四年有司奏。私云 此曲武德漢高祖作之、見漢書。

明竹譜云、是爲相撲節獻作左近權少將藤原忠房博雅三位譜云、左近少將藤原忠房作

菩薩 古樂 中曲 舞出時亂聲 道行兩說也。道行拍子四 以一鼓拍子十六爲大鼓一但破自嗘頭吹出也、仍不書之。序拍子六、破一帖拍子十六以樂二反爲一帖、一反拍子六也。但

加嘍頭時七也、二反時自嘍頭如ニ陵王破ニ加拍子一搔。

又云。序一帖有二説 破二帖有二説

是天竺舞樂也而僧正波羅門僧菩提并佛哲師等ノ化人等此朝所傳也。

先以此曲登五臺山欲供養文殊師利菩薩之時白頭翁相向云文殊支利菩薩者爲利益東土之衆生化生彼國土給了傳聞其名ヲ行基菩薩曰因レテ之波羅門來ニ此土ニ相逢テ行基ニ其時百歳許老翁有二人一者自生眼睟不見一者自生其聾不立共ニ言語不通而ニ二菩薩相向傳此樂時眼開腰立各舞悦、爰波羅門問云、是二人不知誰人如何。行基菩薩答云、是忉利天之天人靈山會同聞衆也、故今日向聖人覺知耳云々。天衆ナリケレハ宿業ニヨリテサルカタハモノトウマレタリケルナリ。此曲ノ目出度ハコレニテテシハカルベシ。

舞出樣有二説 一者吹林邑亂聲舞出畢ヌレバ吹止テ爾取黄鍾調音有二説 長爾取樣一説 短音取樣 近來用之 二者吹笙調子笛ニ壹越調ヲ爾取テ吹道行出也。拍子四以一鼓拍子十六爲一拍子 近來拍子十二 而近代常樂會後日ニ用道行トモ此説ヲ不打シレル伶人ノナキ故ナリ 明レ眼立レ腰聞ニ此曲ニ故也

序一帖拍子八 是モ長短ノ説アリ。長説ハ古説今不用之謂之大菩薩 短説ハ今世ニ用樣ナリ。拍

子ハチナシ數ナリ。
破一帖拍子十二此樂以二返爲一返（是京樣從輿頭加拍子古樂揚拍子）長說アリ（拍子十四又說拍子十六、又十八）是ハ古說大菩薩道行也。所習道行者自輿頭吹出テ則始拍子十六後加拍子　謂如陵王破也（號菩薩之此曲ハタシカナルヘキニ世末コトニシトケナクナレリ。ヨク〱サタスベシ）

古抄云、唐有菩薩蠻曲（何曲可尋之）

又云、菩薩序破之間有詠（大和國橘寺留ム此說）橘寺說（南無十方世界諸佛如來供養十種妓樂舞法會成就大菩薩衆是季長法師說）

合掌詠　其詞曰

南無佛法僧礼拜、南無極樂會同聞衆拜

又云、近來菩薩舞絶了。但大行道時一鼓ヲ打ニ鴨ノムナソリノ手ハ是菩薩ノ手也。（是舞人能貞說也。）

興福寺常樂會十六日可舞此手（仍前頭二人菩薩懸一鼓）

此并舞ハコノ世ニハ絶タルヤウニ承ル處ニ狛氏ニ季長入道ト云物アリキ、此舞ヲ令相傳由依令申於一寺ノ沙汰菩薩中眞〔中央〕ニ教繼了。雖然一切不見ニ其舞ノ手ト只入樣フツネナラス從

先頭中央ヘ舞入メル其外無二別手一（圑私曰、右ノ記說ハ大略教訓抄所載之）

新羅陵王急　拍子十二　管絃時自囀頭加一拍子　破不用常拍子十六可吹三返　古樂

此曲弘仁御時有勅左衛門府爲古樂件舞絕畢。仍近來天王寺ニ倍臚破用之。但用彼寺樣　有別說短樣拍子六京樣拍子十六各加三度拍子　是非惟季之說尾張則成傳之　教訓云圑、舞アルモノナレハ吹タキコトモソ出來トテ習侍ナリ。是体ノ樂ヲバ知テヲクヘキナリ

又円長樂云、弘仁御時有勅給左衛門府舞出吹急云々急ニ有三說、一者十二拍子說　四躅頭加一拍子　二者十六拍子說　四〻〻從第三返頭加三度拍子爲秘說　三者囀頭ヨリ吹始說コレハ吹物ニハイトモチイス曳物ニハ是ヲ本トシタリ。而相傳之上有時ニ不審ヲヒラキテ侍ナリ。打マカセテハ秘樂ノ内ニテ侍ヲ中々ニ京ノ辻吹ニテカシゲニ吹侍ナリ。一名圓長樂　雅三品譜円字僻事歟

又云搔鼓可加拍子、又云舞ト破ト絕了。又云破絕早、仍傳所ニ倍臚破ヲ用ト云々、但此說非ナリ。此破今ニ不絕ト云々

又云。囀頭アリ天王寺ニハ少シ吹替其モ秘スル也。一說云、樂拍子拍子八囀頭アリ、此時初拍子已後第二拍子已前兩所打大皷二天王寺舞時用之。

又云。天王寺ニ倍臚破ニ用之二反八拍子說終帖加之。但彼樂ニ用樣ハ別說アリ。或云、鳥羽院ノ御時元永元年九月廿二日舞時諸家中無傳說之由仍件日終無御覽云々

抑此曲ハ門陽公之所作不及奏之、此樂ハ古樂也。急古樂之間拍子之古樂其上樣以拔頭爲本法歟。而者此樂准拔頭ニ可上歟、將有他樣歟云々。

已上當時用樂也。仍載之。

壹團橋拍子十七　新樂

此樂者大戸清上作之。舞者三嶋武藏作之云々。但舞絕畢。雖有ニ惟季之傳一從輔大納言家行高重傳給了。

口傳云。吹一返後者始可除一拍子仍拍子十六早物四拍子加拍子樣有二說三度拍子一說一度拍子一說折フシニヨルベシ、世ニ耳遠キ樂ナリ、能々カクスヘシ（此一團橋者、堀川院御時有勅定、基綱卿家自琵琶譜中以基政所移吹橫笛也。

酒清司拍子八。又六　古樂

此樂入道左大臣殿御說傳給云々。催馬樂合謂眉止自女也。早物四拍子加三度拍子、一說八

拍子者有時說一說六拍子則成說有曉頭。

故入道大臣御談曰、酒淸司幷返鼻胡德之破從本無師說吹之、其故者是等皆催馬樂之哥也。

眉戸自女酒飲之〔○教訓抄「也」三作「ル」〕音振聊不違故也

私云

此二之樂當時不吹之譜ニハ明白也。何時モ勅定有之者改テ吹之モ不可有相違也。

著聞抄云。

陵王荒序ハ笛ニトリテハ最秘曲也。大神基政此曲ヲ習傳テ後、彼子孫ノ弟子ナラス者ハコレヲ吹叓ナシ。基賢、宗賢、景賢次第ニ相傳シ侍ケル程ニ、景賢ガ弟式〔○著聞集成〕賢傳タル由ヲ申ケレハ、景賢イキトヲリ由テ、後鳥羽院ノ御時此曲ニヲキテハ嫡々相傳シテ吹ベキ由院宣ヲ給テケリ。カヽル程ニ景賢ガ子景基ニ傳テ後父景賢ウセニケレハ、景基重服ニテ侍ケルニ、其年ノ放生會ニ荒序アルヘシトテ式賢ツカウマツルヘキ由キコヘケレバ、景基重服ノ身ナカラ、嚴重ノ神叓ノ庭ニ參テ此叓ヲウタヘ申ケリ。上卿源大納言通具卿別當幸淸式〔○著聞集成〕賢ヲヒキテフカセントセラレケリ。ステニ一笛ナリ。景基下﨟タル上當時重服也、ウタヘ申旨其謂ナキ由ヲ上卿下知セラレケルヲ、景基申ケルハ、上卿ハ神叓ノヤウヲオコナヒ給ヘシ、此道ノ事ニヲキテハ子細ヲシヽシメサス、一笛ニヨルヘカラサル叓ハ

先々叓キレ候畢。重服ノ身ニテ侍時、樓門ノ下ニテアマタリノ外ヘイテスシテツカウマツリタル叓先例候、ト悪口ニ及ケレバ、京ヘ入テハシラカシテ此由ヲ奏セラレケレバ、攝政殿此条ニヲキテハタヤスク仰下サレカタシ。且ハ神叓ヲサヘラル、叓其恐アリ。シカシ今度荒序ナカラムニハト仰ラレケレバト、マリニケルトナム。景基ユ、シクソ侍ケル、申ム子理ナリ。神慮重服ノ御イマシメモナシ、昇進トヾコホリナクシテイマタ家ニナキ五位將監マテノホリケルハ目出叓ナリ。

私曰圏
此叓能々見覺て一社ニ於ても此例あるへき事也。希代の曲所作の叓子細あるへき事こ覺
此曲所作叓將軍家御自筆ヲ被レ殘し給も如此之。上意こ忝し可仰之。

鳳笙調子安譜注

平調　　正四位下行豐原朝臣統秋撰

•乙合乙〕八才七具几丁一句　注云、乙ノ合竹ニテ乙八
ニ殘テ七ヲ具テ几ヲ打
毎度ノ句之終ノ氣ハ三氣延テ二息早ク吹ヘシ。本ハ
七氣ナリ。然ハ五息延テ二息ハヤク吹、當時略之
乚禾一合　前ノ句ノ乙八七具タル ニテ行几戈　一下具乞丁二句七ニ殘テ次第ニ一下ヲ具テ乞ヲ打ナリ。
氣　ヘウツリテ一ノ合竹ニテ氣ヲ替七第　毎句ノ初ハ前ノ句ノ終之合竹ナルベシ　「自是朱」
•乞丁乙禾几合　乞ヲ打テ乙ニウツリテ「乙八才　七具　乙八ニノコ几丁　イ几具　几ヲ打テ　次第ニ行「イ几
氣　几ノ合竹ニテ息ヲ替　リテ七ヲ具几第　氣　几ヲ具第氣ヲ替　（朱）自是
放行几ヲハ几丁　イ几具　几ヲ打テ次第ニ行　二反イ〕几放行几ヲハ几丁十禾十合几ヲ打テ次第ニ十ニ「十
ナシテ　第　氣　几ヲ具テ氣ヲ替　ナシテ　第　ウツリテ十ノ合竹
—七八戈　十七八ニ殘テ下丁イ具十合　丁ヲ打テ十ノ合竹二反十戈乙合上戈言合　十ニ殘テ乙ノ合竹ニテ
氣　行ヲ具　氣　氣　氣ヲ替テ上ニ殘テ言ヲ
シタル乙言戈•七•上才•乙合　言殘テ七上ヲ拾テ乙七戈　一下具乞丁三句七ニ殘テ次第ニ一•乞丁上禾乙
ノ合竹　氣　ノ合竹ニテ氣ヲ替　第　下ヲ具テ乞ヲ打
合乞ヲ打テ上ニウ上戈乙合八戈　上ニ殘テ乙ノ合竹七•イ•十才十合　七行十ト拾テ十ノ十戈　上具下丁十
氣　ツリテ乙ノ合竹　氣•　ニテ八ニノコリ　氣　合竹ニテ氣ヲ替　ニ

殘テ上ヲ具テ下ヲウツ七〕イ具十合氣下戈凢丁七行ヲ具テ十ノ合竹ニテ下ニノコリ凢ヲ打乙禾凢合氣乙〕八|戈七具乙ニウツリテ凢ノ合竹ニテ氣ヲ替テ乙八ニ殘テ七ヲ具

凢丁第|イ|凢具氣凢ヲ打テ次第ニ行凢ヲ具テ氣ヲ替〔自是(朱)〕イ凢放凢丁第|イ|凢具氣行凢ヲ放テ凢ヲ打テ次第ニイ凢ヲ具テ氣ヲ替二反イ〕凢放凢丁第|イ|

凢具スル時イ凢ヲ放テ凢ヲ打次第ニ行凢ヲ具凢戈工合氣凢氣卩具行凢ニ殘テ工ノ合竹ニテ氣ヲ替テ行乞ヲタ、キ具テ氣ヲ替凢戈凢合氣乙〕八|戈七具凢丁四句

行凢ニ殘テ凢ノ合竹ニテ氣ヲ替テ乙八ニ殘テ七ヲ具シテ凢ヲ打•凢丁イ禾下合氣下戈凢ヲ打テ行ニウツリテ下ノ合竹ニテ下ニノコリテ七•禾氣イ•下乙•凢•才七ニウツリテ

氣ヲ替テイ合工〕戈工合氣工ノ合竹ニテ氣ヲ替テ工美凢|戈イ具乙丁氣凢ニ殘テ行ヲ具テ乙ヲ打テ氣ヲ替凢押乍下合氣下戈

下乙凢ト拾工合氣工美〕戈工合氣ニ殘テ工ノ合竹ニテ氣ヲ替

凢ヲオサヘナガラ下ノ合•竹ニテ氣ヲ替テ下ニ殘凢•工•凢•才凢工凢ト拾テ工合氣工美〕戈工合氣工•戈工ノ合竹ニテ氣ヲ替テ工美ニ殘テ工ノ合竹ニテ氣ヲ替テ工ニ殘

一•乞才一乞ト拾工〕一タル|具乞合氣工一具タル乞ノ合竹ニテ氣ヲ替七•戈乍一•乞•一•才乞•丁七ニ殘ナガラ一乞

一ト拾テ乞ヲウツ工一|乞合氣工•戈凢•丁工一乞ノ合竹ニテ氣ヲ替工ニ殘テ凢ヲウツ一•乞才•一乞ト拾工一乞|

合工一乞ノ合竹七戈氣ニテ氣ヲ替第|一|下具七ニ殘テ次第ニ一下ヲ具乞丁第|イ|乞具氣乞ヲ打テ次第ニ行乞ヲ具テ氣ヲ替〔自是(朱)〕イ乞放乞丁第|

イ|乞具氣行乞ヲ放テ乞ヲ打テ行乞ヲ具テ氣ヲ替二反イ〕乞放乞丁イ禾醫合氣イ乞ヲ放テ乞ヲ打テイニウツリテ美ヲシタル乙ノ合竹ニテ氣替イ戈第|乞|乙具

行ニ殘テ次第ニ乞乙ヲ具テ五句此句ノ終二氣延口傳也•乞合氣乙〕八|戈七具凢丁乞ノ合竹ニテ乙八ニ殘テ七ヲ具テ凢ヲ打六句•凢丁イ禾下合氣行ニ移テ凢ヲ打テ

下ノ合竹ニ下戈七禾下ニ殘テ七ニウ亻・下・乙凢・オ工合行下乙几ト拾テ工工」美戈工合凢|戈亻具乙丁
テ氣ヲ替　氣　ツリテ氣ヲ替　氣ノ合竹ニテ氣ヲ替　氣　氣
工美ニ殘テ工ノ合竹ニテ凢ニ押下合下・戈凢工凢オ工合　凢ヲ押ナガラ下ノ合竹ニ成テ氣ヲ替テ下工」美
殘テ行ヲ具テ乙ヲ打テ氣ヲ替戸作　氣　氣　ニ殘テ几工几ト拾テ工ノ合竹ニテ氣ヲ替
戈工合工戈工美ニ殘テ工ノ合竹ニテ氣ヲ替テ工ニ殘一・乞オ・工一乞一合七戈　一乞ト拾テ工一乞ノ合竹ニ
氣　氣　作　テ氣ヲ替七ニ殘ナガラ
一・乞・一オ・乞丁一乞一ト拾一合工一乞氣工戈凢丁・工一乞ノ合竹ニテ一・乞オ・工一乞一合氣　一乞ト拾テ工一
テ乞ヲウツ　工ニ殘テ几ヲ打　乞ノ合竹ニテ氣
ヲ七戈第一下具乞丁七ニ殘テ次第ニ一七句・乞丁下戈・乞ヲ打テ乙・凢オ・凢合乙几ト拾テ几ノ凢戈乙
替　下ヲ具テ乞ヲ打　下ニ殘テ　氣　合竹ニテ氣ヲ替
丁亻具凢合几ニ殘テ乙ヲ打テ行伒戈下合下戈凢丁行几ニ殘リナガラ下ノ合竹ニ乙禾凢合一戈七具
氣ヲ具几ノ合竹氣ヲ替作氣　テ氣ヲ替テ下ニ殘テ几ヲ打　氣乙八
凢丁亻一凢具一亻・自是(朱)放乙ニウツリテ几ノ合竹ニテ乙八ニ殘テ七ヲ具シ凢丁第亻一凢具凢ヲ打テ次第ニ行
第　氣　テ几ヲ打テ次第ニ行凢具氣ヲ替テ行凢ヲハナツ　氣凢ヲ具テ氣ヲ替
二反亻一凢放凢丁十禾十合行凢ヲ放テ几ヲ打テ十ニ「十」自是(朱)七八戈下丁亻具十合十七八ニ殘テ下ヲ打テ具
氣移テ十ノ合竹ニテ氣ヲ替　氣　テ十ノ合竹ニテ氣ヲ替
二反十戈乙合上戈㠯合十ニ殘テ乙ノ合竹ニテ上言戈・七・上オ・言ニ殘テ合七戈一下具乞丁乙ノ合
氣　氣ニ殘テ言押タル乙ノ合竹　七上ト拾乙氣第　竹ニテ
氣ヲ替テ七ニ殘テ次第八句・□・丁上禾乙合上戈乙合乞ヲ打テ上ニ移リニ乙ノ合竹ニテ氣八戈・七・亻一十
氣　氣ヲ替テ上ニ殘テ乙ノ合竹ニテ氣ヲ替
ニ一下ヲ具テ乞ヲ打　十戈上具下丁十ニ殘テ上ヲ七亻一具十合下戈凢丁七行ヲ具テ十ノ合竹
具テ下ヲ打　氣　ニテ下ニ殘リテ几ヲ
オ・十合八ニノ一リテ七行十ト拾
氣テ十ノ合竹ニテ氣ヲ替

打乙禾几合氣乙八戈七具几丁 乙ニウツリテ几ノ合竹ニテ氣替 テ乙八ニ殘テ七ヲ具テ几ヲ打 七句・几丁十禾十合氣十戈 几ヲ打テ十ニウ ツリテ十ノ合竹

ニテ氣ヲ替テ 十ニノコリテ 七禾氣亻十扌下丁乙合氣 七ニウツリテ氣ヲ替テ行十トヒ ロイテ下ヲ打テ乙ノ合行氣ヲ替 一乙八戈七具 乙八ニ殘テ七ヲ具 几丁第

亻一几具 几ヲ打テ次第ニ行「一提(朱)亻几放几丁 氣 几ヲ具テ氣ヲ替 第亻一几具 行几ヲ放テ几ヲ打テ次 氣 第ニ行几ヲ具テ氣ヲ替 二反亻几放几丁十禾十合氣

行几放几ヲ打テ十ニウツ「一(自是朱)十七八戈下丁亻具十合氣 十七八ニ殘テ下ヲ打テ行 リテ十ノ合竹ニテ氣ヲ替 ヲ具テ十ノ合竹ニテ氣替 二反十戈乙合氣上戈亘合氣言

戈 十ニ殘テ乙ノ合竹ニテ氣ヲ替テ上ニノコリ テ言ヲシタル乙ノ合竹ニテ言ニノコリテ 七上扌乙合氣 七上ト拾テ乙ノ 合竹ニテ氣ヲ替 七戈第一下具乞丁 七ニ殘テ次 第ニ一下ヲ

具テ乞 ヲ打 十句・乞丁上禾亘合氣言戈亘合氣 乞ヲ打テ上ニウツリテ言ヲシタル乙ノ合竹ニテ氣 ヲ替テ言ニ殘テ言ヲシタル乙ノ合竹ニテ氣ヲ替 上戈乙合氣八戈乙丁

上ニ殘テ乙ノ合竹ニテ氣ヲ 替テ八ニノコリテ乙ヲ打 上禾乙合氣七戈乙丁 上ニウツリテ乙ノ合竹ニ テ氣ヲ替七ニ殘テ乙ヲ打 亻・十扌・十合氣十戈上具下丁十行

トヒロイテ十ノ合竹ニテ氣ヲ 替テ十ニ殘テ上ヲ具テ下ヲ打 七亻具十合氣下戈几丁乙禾几合氣 七行ヲ具シテ十ノ合竹ニテ氣ヲ替テ下ニ殘テ 几ヲ打テ乙ニウツリテ几ノ合竹ニテ氣ヲ替

乙八戈七具几丁 乙八ニノコリテ 七ヲ具テ几ヲ打 十一句 毎句之吹出始之息ハ二氣ナリ。昔ハ五氣ナント吹由注 侍、其モ用アリテ吹ト見タリ。今モ他流ニハ三氣吹

○音取

一合一七戈下具氣・ 一ノ合竹ニテ一七ニ 殘テ下ヲ具テ氣ヲ替 一・戈氣乞・十・扌氣下・一・乙第七八具 一ニ殘テ氣ヲ替テ乞十ト拾 テ氣ヲ替テ下一乙ト拾テ次

第二七八ヲ具

雙調

•𠘨合𠘨戈亻具乙丁𠘨ノ合竹ニテ𠘨ニ殘一句•𠘨合氣𠂎戈乙卩放　𠘨ノ合竹ニテ氣ヲ替テ行𠘨ニ　𠘨合氣七乙
テ行ヲ具テ乙ヲ打　ノコリテ乙ヲタ、キテ放ス
戈十禾十合𠘨ノ合竹ニテ氣ヲ替テ七乙ニ殘十戈上具下丁十ニノコリテ上二句•七禾亻具下丁乙禾七ニ
氣テ十ニウツリテ十ノ合竹氣ヲ替　ヲ具テ下ヲ打
ウツリテ行ヲ具テ下𠘨合𠂎卩具𠘨ノ合竹ニテ行𠘨ヲ𠘨戈亻具乙丁𠘨合𠘨ニ殘テ行ヲ具乙ヲ打テ氣𠂎戈
ヲ打テ乙ニウツリテ氣氣　タ、キ具テ氣ヲ替　氣氣ヲ替テ𠘨ノ合竹ニテ氣ヲ替
乙合七」乙戈𠘨丁十禾十合行𠘨ニ殘テ乙ノ合竹ニテ氣ヲ替七乙ニ殘テ七戈下丁第亻十具十合七ニノコ
氣　氣　𠘨ヲ打テ十ニウツリテ十ノ合竹ニテ氣ヲ替　氣リテ下ヲ
打テ次第ニ行十ヲ具テ亻戈下丁第七十具十合行ニノコリテ下ヲ打テ次第ニ七十戈上具下丁十ニ殘テ上
十ノ合竹ニテ氣ヲ替　氣　十ヲ具テ十ノ合竹ニテ氣ヲ替　ヲ具テ下ヲ
ウ三句•七禾亻具下丁乙禾𠘨合七ニ移テ行ヲ具テ下ヲ打テ乙ニ七」八戈上卩禾七禾亻具下丁七八ニ
ツ　氣　ウツリテ𠘨ノ合竹ニテ氣ヲ替　氣　殘テ上
ニタ、キ移テ氣ヲ替テ七ニ乙禾𠘨合𠂎卩具𠘨戈亻具乙丁乙ニ移テ𠘨ノ合竹ニテ氣ヲ替テ𠘨ニ殘行𠘨ヲ四
ウツリテ行ヲ具テ下ヲ打　氣氣　タ、キ具テ氣ヲ替テ𠘨ニ殘テ行ヲ具テ乙ヲ打
句•𠘨合𠂎戈乙卩放𠘨合𠘨ノ合竹ニテ氣ヲ替テ行𠘨ニ殘テ𠂎戈一合一」七戈乙丁•下乙ヰ行𠘨ニノコリ
氣　氣乙ヲ卩放テ𠘨ノ合竹ニテ氣ヲ替　氣　テ一ノ合竹一
テ氣ヲ替一七ニ殘テ𠘨合𠘨戈亻具乙丁𠘨ノ合竹ニテ氣ヲ替テ𠘨ニ五句•𠘨合七」乙戈十禾十合𠘨ノ合竹
乞ヲ打テ下乙ト拾テ氣　ノコリテ行ヲ具テ乙ヲウツ　氣　氣ニテ氣ヲ

替テ七乙ニ殘テ十ニウツ「七戈下（皇是（朱））丁亻十具十合三反七ニノコリテ下ヲ打テ次第ニ亻戈乞乙具行ニ
リテ十ノ合竹ニテ氣ヲ替第氣行十ヲ具テ十ノ合竹ニテ氣替第
ノコリテ次第ニ乞乙ヲ具六句。亻戈凡合凡戈。一禾。乞丁。尼禾一合行ニ殘テ凡ノ合竹ニテ氣ヲ替テ凡ニ
氣氣
ノコリテ一ニウツリテ乞ヲ打テ行凡ノ合竹ニテ氣ヲ替一ニウツリテ一「七戈乞丁下。乙キ。凡合一七ニノコ
氣リテ乞ヲ打
テ下乙ト拾テ凡ノ尼ア具凡戈亻具乙丁行凡卩具テ氣ヲ替テ凡七句。凡合尼戈乙卩放凡合乙殘凡丁凡禾
合竹ニテ氣ヲ替氣ニ殘テ行ヲ具テ乙ヲ打氣氣
凡ノ合竹ニテ氣ヲ替テ行凡ニ殘テ乙ヲタ、キハナ工丁。十禾。十合七戈工ヲ打テ十ニウツリテ十ノ合下丁
チテ凡ノ合竹ニテ氣ヲ替テ凡ヲ打テ凡ニウツリテ氣竹ニテ氣替テ七ニノコリテ第
亻十具十合下ヲ打テ次第ニ行十ヲ具亻戈乞乙具上禾十合行ニ殘テ次第乞乙ヲ具テ氣ヲ替テ七戈下
氣テ十ノ合竹ニテ氣ヲ替第氣氣上ニウツリテ十ノ合竹ニテ氣ヲ替
丁亻十具十合七ニノコリテ下ヲ打テ次第ニ行亻戈下丁七十具十合行ニノコリテ下ヲ打テ次第ニ
第氣十ヲ具テ十ノ合竹ニテ氣ヲ替第氣七ト十ヲ具テ十ノ合竹ニテ氣
ヲ十戈上具下丁十ニ殘テ上ヲ八句。七禾亻具下丁乙禾凡合七ニウツリテ行ヲ具テ下ヲ打テ乙戈凡丁
替具テ下ヲ打氣乙ニ移テ凡ノ合竹ニテ氣ヲ替
十禾十合乙ニウツリテ凡ヲ打テ十ニ十戈上具下丁十合十ニノコリテ上ヲ具テ下ヲ亻戈下丁十具下丁乙
氣移テ十ノ合竹ニテ氣ヲ替氣氣打テ十ノ合竹ニテ氣ヲ替氣
禾凡合行ニノコリテ下ヲ打テ氣ヲ替テ十ヲ具テ尼卩具凡戈亻具乙丁凡ヲタ、キ具テ氣ヲ替テ凡九句。
氣下ヲ打テ乙ニ移テ凡ノ合竹ニテ氣ヲ替氣ニノコリテ行ヲ具テ乙ヲ打
凡合尼戈乙卩放凡合凡ノ合竹ニテ行凡ニ殘テ乙ヲタ尼戈一合一「七戈行凡ニノコリテ一ノ合竹ニテ比合
氣氣、キ放テ凡ノ合竹ニテ氣ヲ替氣乍氣ヲ替テ一七ニノコリナガラ氣

比戈上卩放比合 比ノ合竹ニテ氣ヲ替テ比ニノコリテ上戈七禾彳具下丁乙禾 上ニノコリテ七ニウツリテ
氣 上ヲタ、キ放テ比ノ合竹ニテ氣ヲ替 行ヲ具テ下ヲ打テ乙ニウツ
ル 几合庇卩具几戈彳具乙丁 几ノ合竹ニテ氣ヲ替テ行 十句。几合庇戈乙卩放几合 几ノ合竹ニテ行几ニ殘テ
氣氣 几ヲタ、キ具テ氣ヲ替 氣 氣 乙ヲタ、キ放テ几ノ合竹
ニテ氣庇戈十合十戈上具 行几ニ殘ナカラ十ノ合行ニ下丁十合下戈几丁十禾十 下ヲ打テ氣ヲ替テ十
ヲ替 乍 氣 テ氣ヲ替テ十ニ殘テ上ヲ具 氣 氣 氣 ノ合竹ニテ下ニ殘テ
几ヲ打テ十ニウツリテ十戈上具下丁十合彳戈十ニノコリテ上ヲ具テ下ヲ打テ氣ヲ下丁十具下丁乙禾下
十ノ合竹ニテ氣ヲ替 氣 氣 替テ十ノ合竹ニテ氣ヲ替テ行殘テ 氣 ヲ
打テ氣ヲ替テ十ヲ具テ 几合庇卩具几戈彳具乙丁 几ノ合竹ニテ氣ヲ替行几ヲタ、キ具 十一句。几合庇戈
下ヲ打テ乙ニウツル 氣 氣 テ氣ヲ替テ几ニ殘テ行ヲ具テ乙ヲ打 氣
乙卩放几合 几ノ合竹ニテ行几ニ殘テ乙ヲタ庇戈一合一七戈乞丁行几ニノコリテ一ノ合竹ニテ下。乙ヰ几
氣、キ放テ几ノ合竹ニテ氣ヲ替 氣 氣ヲ替テ一七ニ殘テ乞ヲ打
合几戈彳具乙丁 下乙ト拾テ几ノ合竹ニテ氣ヲ替 十二句。几合七乙戈十禾十合 几ノ合竹ニテ氣ヲ替テ七
氣 テ几ニノコリテ行ヲ具テ乙ヲ打 氣 氣 氣
乙ニ殘テ十ニウツリテ十ノ合竹ニテ氣ヲ替［自是作］七戈下丁彳十具十合 三反七ニノコリテ行十ヲ具彳戈
第 氣 テ十ノ合竹ニテ氣ヲ替 第 乞
乙具行ニ殘テ次十三句。彳戈几合几戈。一禾。乞丁。行ニ殘テ几ノ合竹ニテ氣ヲ替庇禾一合一七戈乞丁
第乞乙ヲ具 氣 テ几ニ殘テ一ニウツリ乞ヲ打 氣
。下。乙ヰ行几ニウツテ一ノ合竹ニテ氣ヲ替 几合庇卩具几戈彳具乙丁 几ノ合竹ニテ氣ヲ替テ行几ヲタ、
テ一七ニ殘テ乞ヲ打テ下乙ト拾 氣 氣 キ具テ氣ヲ替テ几ニ殘テ行ヲ具テ
乙ヲ十四句。几合庇戈乙卩放几合乙ヰ。几丁 几ノ合竹ニテ氣ヲ替テ行几ニ殘テ（ノコリ）乙ヲタ、キテ（ウツ）几禾。工丁。
打 氣 氣 放テ几ノ合竹ニテ氣ヲ替ニ乙ニウツリテ几ヲ打

十禾●十合氣七戈 𠘨ニ移テ工ヲ打テ十ニウツリテ十下丁第イ十具十合氣 下ヲ打テ次第ニ行十ヲ具イ戈第乞
ノ合竹ニテ氣ヲ替テ七ニノコル　テ十ノ合竹ニテ氣ヲ替
乙具氣上禾十合氣七戈 行ニノコリテ次第ニ乞乙ヲ具テ氣ヲ替テ上ニ下丁第イ十具十合氣イ戈下丁第七十具十
ウツリテ十ノ合竹ニテ氣ヲ替テ七ニノコル
戈上具下丁 下ヲ打テ次第ニ行十ヲ具テ十ノ合竹ニテ氣ヲ替テ行ニノコリテ下ヲ打 十五句
テ次第ニ七十ヲ具テ十ノ合竹ニテ氣ヲ替テ十ニ殘テ上ヲ具テ下ヲ打

音取

𠘨合𠘨戈イ具氣十禾上具 𠘨ノ合竹ニテ𠘨ニ殘テ行ヲ具
テ氣ヲ替テ十ニ移テ上ヲ具

黄鐘調

●乙合乙八戈七具𠘨丁 乙ノ合竹ニテ乙八ニ 一句●𠘨丁イ禾乙合氣イ戈第乞乙具 𠘨ヲ打テ行ニウツリテ乙
殘テ七ヲ具テ𠘨ヲ打　ノ合竹ニテ氣ヲ替テ行ニ
殘テ次第ニ
乞乙ヲ具ル 二句●𢒼禾工合氣𢒼氣具𢒼戈下合氣下戈イ丁乙禾 行𠘨ニウツリテ工ノ合竹ニテ氣ヲ替テ行𠘨ヲ
ニテ氣ヲ替下ニ殘𠘨合氣乙八戈七具𠘨丁 𠘨ノ合竹ニテ氣ヲ替乙八 三句●𠘨イ禾下合氣下戈七禾 𠘨ヲ打テ
タヽキ具テ氣ヲ替テ行𠘨ニ殘ナカラ下ノ合竹
テ行ヲ打テ乙ニ移 ウツ　ニ殘テ七ヲ具テ𠘨ヲ打　氣 行ニ移テ
下ノ合竹ニテ氣ヲ替下ニイ●下●乙●𠘨工合氣工美戈工合氣 行下乙𠘨ト拾テ工ノ合竹ニテ氣ヲ替 𠘨戈イ具
殘テ七ニウツリテ氣ヲ替　テ工美ニ殘テ工ノ合竹ニテ氣ヲ替
乙丁氣𠘨押下合 𠘨ニノコリテ行ヲ具テ乙ヲ打テ氣ヲ替下戈𠘨●工●𠘨●工合 下ニノコリテ𠘨工𠘨トヒロウ
氣 𠘨ヲヲサヘナカラ下ノ合竹ニテ氣ヲ替　氣 テ工ノ合竹ニテ氣ヲ替

一工美戈工合氣工戈・一・乞キ・工ト美トニ殘テ工ノ合竹ニテ工ニノコリテ一乞トヒロウテ工一乞一合氣七乍戈一・乞・一キ・乞丁工一乞ノ合竹ニテ氣ヲ替七
ニ殘ナガラ一乞一ト拾テ乞ト打工一乞合氣工戈几丁・一・乞キ・工一乞ノ合竹ニテ氣ヲ替テ工ニ殘テ几ヲウチテ一乞トヒロイテ工一乞合氣七戈第一下具乞キ
工一乞ノ合竹ニテ氣ヲ替テ七ニノコリナカラ氣ヲ替テ七ニ殘テ次第ニ一下ヲ具テ乞ヲウツ四句・乞丁下戈・乙・几キ几合氣几戈乞ヲ打テ下ニ殘テ氣乙几ト拾テ几ノ合竹ニテ氣ヲ
替テ几ニ殘几工禾一丁工合氣工戈几丁几ニ殘テ工ニ移一ヲ打テ工ノ合竹ニテ氣ヲ替テ工ニノコリテ几ヲウツ乙禾几合氣乙八戈七具几丁乙ニウツリテ
几ノ合竹ニテ氣ヲ替テ乙八ニノコリテ七ヲ具テ几ヲ打五句・几丁イ禾下合氣下戈イ丁・几ヲ打テ行ニ移テ下ノ合竹ニテ氣ヲ替テ下ニノコリテ行ヲ打テ几・工・乙キ・下
合下戈氣・工禾・几丁・几工乙ト拾テ下ノ合竹ニテ氣ヲ替テ下ニ殘テ工ニウツリテ几ヲウツ一・乞キ・工一乞合氣七戈第一下具乞丁氣下戈一乞トヒロイテ工
一乞ノ合竹ニテ氣ヲ替テ七ニノコリテ次第ニ一下ヲ具テ乞ヲ打テ氣ヲ替テ下ニノコル乙几キ几合氣几戈・工禾・一丁・乙几ト拾テ几ノ合竹ニテ氣ヲ替テ
几ニ殘テ工ニ移リ一ヲウツ工合氣工戈几丁一・乞キ・工一乞一合氣一七戈工ノ合竹ニテ工ニ殘テ几ヲ打テ一乞ト拾テ工一乞ノ合竹ニテ氣ヲカヘテ
一七ニノコル乞丁イ禾侯合氣イ戈第乞乙具乞ヲ打テ行ニウツリ遂ノ合竹ニテ氣美ヲシタル乙ヲ替テ行ニノコリテ次第ニ乞乙ヲ具六句・イ戈下合氣下戈下合氣イ戈第
乞乙具氣行ニ殘テ下ノ合竹ニテ氣ヲ替テ下ニノコリテ下ノ十合竹ニテ氣ヲ替行ニ殘テ次第ニ乞乙ヲ具テ氣ヲ替十禾十合氣十戈・下・乙・十キ・下丁乙合氣十ニウツリテ十ノ
合竹ニテ氣ヲ替テ十ニノコリテ下乙十ト拾テ下ヲ打テ乙ノ合竹ニテ氣ヲ替乙八キ七具几丁乙六ニノコリテ七ヲ具テ几ヲ打七句・几丁七戈・イ・十キ十合氣几ヲ

打テ七ニ殘テ十ト拾テ　十・七・イ・十・イ戈｜十具下丁十合　十ニノコリテ七行十行ト拾テ氣ヲ替テ［自是(朱)七戈
十ノ合竹ニテ氣ヲ替　氣　氣　十ヲ具テ下ヲ打テ十ノ合竹ニテ氣ヲ替
下丁第｜イ｜十具｜十合　三反　七ニ殘テ下ヲ打テ次第ニ行十イ戈第｜乞｜乙具　行ニ殘テ次第　八句・乞合イ戈乙台
氣　ヲ具テ十ノ合竹ニテ氣ヲ替　ニ乞乙ヲ具　氣　氣
上戈イ禾・下・丁十禾｜十合　乞ノ合竹ニテ氣ヲ替テ行ニ殘テ乙ノ合竹ニテ氣ヲ替テ上ニ　十戈・下・乙・十ｵ・下
氣　殘テ行ニウツリテ下ヲ打テ十ニ移テ十ノ合竹ニテ氣ヲ替
丁・乙合　十ニ殘テ下乙十ト拾テ下ヲ｜乙八｜戈七具几丁　乙八ニ殘テ七
氣　打テ乙ノ合竹ニテ氣ヲ替　ヲ具テ几ヲ打九句・几丁七戈・イ・十ｵ｜十合　几ヲ
打テ七ニ殘テ行十ト拾テ十ノ合竹ニテ氣ヲ替テ・十戈・七・比・七イｵ十合　十ニノコリテ七比七行ト七戈
氣　氣　拾テ十ノ合竹ニテ氣ヲ替
下丁第｜イ｜十具｜十合　七ニノコリテ下ヲ打テ次第ニ行イ戈下丁第｜七｜十具｜十合　行ニ殘テ下ヲ打テ次第ニ七
氣　十ヲ具テ十ノ合竹ニテ氣ヲ替　氣　十ヲ具テ十ノ合竹ニテ氣ヲ
替　十戈上具下丁比戈・八・禾　十ニノコリテ氣ヲ替テ比ノ合　上・比ｵ・上丁・比合七戈比丁　上比ト拾テ上ヲ
氣　氣　竹ニテ氣ヲ替テ比ニノコリテ　氣　打テ比ノ合竹ニ
テ氣ヲ替テ七　十合［自是(朱)七戈下丁第｜イ｜十具｜十合　行十ト拾テ十ノ合竹ニテ氣ヲカヘテ七ニノコリテ下
ニ殘テ比ヲ打イ十ｵ　氣　氣　ヲ打テ次第ニ行十ヲ具テ十ノ合竹ニテ氣ヲ替
三反イ戈第｜乞｜乙具　行ニ殘テ次第　十句・イ戈比合　比戈｜八・禾上・比ｵ・上丁比合　行ニノコリテ比ノ合竹
ニ乞乙ト具　氣　氣　氣　ニテ氣ヲ替テ比ニ殘テ
八ニウツリテ氣ヲ替テ上比ト拾七戈・比丁・イ・十ｵ｜十合　七ニノコリテ比ヲ打テ行十ト［自是(朱)七戈下丁第｜イ｜十
テ上ヲ打テ比ノ合竹ニテ氣ヲ替　氣　拾テ十ノ合タケニテ氣ヲ替
具｜十合七ニノコリテ下ヲ打テ次第ニ行　三反イ戈第｜乞｜乙具氣　行ニ殘テ次第ニ乞乙ト具　十禾十合　十ニウ
氣　十ヲ具テ十ノ合竹ニテ氣ヲ替　又氣　テ氣ヲ替テ又氣ヲ替テ　氣　ツリテ

十ノ合竹ニ一自是イ戈下丁七十具十合行ニノコリテ次第ニ下ヲ打テ次第三反イ戈●七●上ヰ十具下丁十
テ氣ヲ替第第氣ニ七十ヲ具テ十ノ合竹ニテ氣ヲ替
合行ニノコリテ七上トヒロウテ十ヲ下戈凢丁乙禾凢合乙八戈七具凢丁下ニノコリテ凢ヲ打テ乙ニウツ
氣具テ下ヲ打テ十ノ合竹ニテ氣ヲ替氣リテ凢ノ合竹ニテ乙八ニノコリ
テ七ヲ具十一句●凢丁イ禾下七●禾凢ヲ打テ行ニ移テ下ノ合竹ニテ氣ヲイ●下●乙●凢ヰ●工合
テ凢ヲ打氣下戈氣替テ下ニノコリテ七ニ移テ氣ヲ替氣工
美戈工合イ下乙凢ト拾テ工ノ合竹ニテ氣ヲ替凢戈イ具乙丁凢作下合凢ニノコリテ行ヲ具テ乙ヲ打テ
氣テ工美ニ殘テ工ノ合竹ニテ氣ヲ替氣氣ヲ替テ凢押ナカラ下ノ合竹ニ
テ氣下戈凢●工●凢ヰ●工合下ニノコリテ凢工凢ト拾工美戈工合●一●乞ヰ●工一乞合工美ニ殘テ工
ヲ替氣テ工ノ合竹ニテ氣ヲ替氣工戈氣ノ合竹ニテ氣
ヲ替テ工ニノコリテ一乞ト拾七●戈一●乞●一ヰ●乞丁●工一乞合七ニノコリナカラ一乞一トヒロイテ工●戈
テ工一乞ノ合竹ニテ氣ヲ替作氣乞ヲ打テ工一乞ノ合竹ニテ氣ヲ替
凢丁●一●乞●ヰ工一乞合工ニノコリテ凢ヲ打テ一乞ト七戈第一下具乞丁七ニノコリテ次第ニ十二句●
氣拾テ工一乞ノ合竹ニテ氣ヲ替第一下ヲ具テ乞ヲ打
乞丁下戈●乙●凢ヰ●凢合乞ヲ打テ下ニ殘テ乙凢ト凢戈●工禾一●丁工合工戈凢丁乙禾凢合凢ニノコリテ工
氣拾テ凢ノ合竹ニテ氣ヲ替氣氣ニウツリテ一ヲ
打テ工ノ合竹ニテ氣ヲ替テ工ニノコリテ乙八戈七具凢丁乙八ニ殘テ七ヲ十三句●凢丁イ禾●下合下戈
凢ヲ打テ乙ニ移テ凢ノ合竹ニテ氣ヲ替具テ凢ヲウツ氣
イ丁凢ヲ打テ行ニウツリテ下ノ合竹ニ凢●工●乙ヰ●下合●下戈●工禾凢丁凢工乙トヒロイテ下ノ合竹ニテ
●テ氣ヲ替下ニノコリテ行ヲウツ氣●氣ヲ替テ下ニノコリテ工ニウツ
リテ凢一●乞ヰ●工一乞合七戈一下具一乞ト拾テ工一乞ノ合竹ニテ氣ヲ乞丁下戈●乙●凢ヰ●凢合凢●戈工
ヲ打氣第替テ七ニノコリテ次第ニ一下ヲ具具氣

禾・乞ヲ打テ氣ヲ替テ下ニノコリテ乙几トヒロ一・丁工合氣工・戈几・丁一・乞・扌工一乞合氣一ヲ打テ工ノ合竹ニ
イテ几ノ合竹ニテ几ニ殘リテ工ヘウツル　テ氣ヲ替テ工ニノコ
リテ几ヲ打テ一乞ト拾テ一七戈乞丁亻禾㐬合氣亻第戈乞乙具一七ニ殘テ乞ヲ打テ行ニウツリテ㐬ヲシタル
工一乞ノ合竹ニテ氣ヲ替　乙ノ合竹ニテ行ニノコリテ次第ニ乞乙ヲ具
十四句・乞合氣乙八戈七具几丁乞ノ合竹ニテ氣ヲ替テ乙八十五句・几丁亻禾下合氣七戈　几ヲ打テ行ニウ
ニノコリテ七ヲ具テ几ヲ打　ツリテ下ノ合竹
ニテ氣ヲ替下丁第亻十具十合氣　下ヲ打テ次第ニ行十ヲ具亻戈下丁第七十具十合氣　行ニノコリテ下ヲ打テ
テ七ニ殘ルノコ　テ十ノ合竹ニテ氣ヲ替　次第ニ七十ヲ具テ十ノ
合竹ニテ十戈上具下丁氣比合十ニ殘テ上ヲ具テ下ヲ打テ氣比戈・八・禾氣上・比扌上丁比合氣　比ニ殘テ八ニウツ
氣ヲ替　ヲ替テ比ノ合竹ニテ氣ヲ替　リテ氣ヲ替テ上比
ト拾テ上ヲ打テ比七戈・比丁・亻・十扌十合氣　七ニノコリテ比ヲ打テ行十〔七戈下丁第亻十具十合氣（自是朱）　七ニノ
ノ合竹ニテ氣ヲ替　ト拾テ十ノ合竹ニテ氣ヲ替　コリテ
下ヲ打テ次第ニ行十ト拾　三反亻戈第乞乙具　行ニ殘テ次第ニ乞乙ヲ具　十六句
テ十ノ合竹ニテ氣ヲ替

音取

乙合乙丁八戈七具氣・亻・几・工・一・引乙・扌色亻第一ケ乞乙具　乙ノ合竹ニテ乙八ニ殘テ七ヲ具テ氣ヲ替テ行几工
一引乙ト拾テ氣ヲ絕テ行ノ一竹ニテ　次第ニ乞乙ヲ
具此ノ一ヲハ少ヽ
延ト云心ナリ

大食調

●乙合乙八」戈七具凢丁乙ノ合竹ニテ乙八ニ殘テ七ヲ具テ凢ヲ打一句●乚禾一合氣七戈第一下具乞丁行凢ニ移一合竹ニテ氣ヲ替七ニノコリテ次第

ニ一下ヲ具テ乞ヲウツ二句●乞丁乙禾凢合氣乙八」戈七具凢丁氣乞ヲ打テ乙ニウツリテ凢ノ合竹ニテ乙八ニノコリテ七ヲクセテ凢ヲ打テ氣ヲ替乚禾工合氣乚卩具

氣乚作戈下合氣下戈亻丁行凢ニ移テ工ノ合竹ニテ氣替行凢ヲタ、キ具テ氣ヲ替テ行凢ニノコリナカラ下ノ合竹ニテ下ニ殘リテ行ヲ打乙八戈七具凢丁乙ニウツリテ凢ノ合竹

ニテ氣ヲ替テ乙八ニノコリテ七ヲ具テ凢ヲ打三句●凢丁亻禾医合氣亻戈医合氣美戈亻卩禾医合氣凢ヲ打テ行ニウツリテ美ヲシタル乙ノ合竹ニテ氣ヲ替テ行ニノコリテ從ヲシ

タル乙ノ合竹ニテ氣ヲ替テ美ニノコリテ行ヲタ、キウツリテ美押タル乙ノ合竹ニテ氣ヲ替亻戈亘合氣言戈乙丁七禾乙合氣行ニ殘テ言押タル乙ノ合竹ニテ氣ヲ替テ言ニ殘テ乙ヲ打テ七ニ

移テ乙ノ合竹ニテ氣ヲ替七戈第一下具乞丁七ニノコリテ次第ニ一下ヲ具テ乞ヲ打四句●乞丁上禾亘合氣言戈亘合氣七戈第一下具乞丁氣

乞ヲ打テ上ニ移テ言押タル乙ノ合竹ニテ氣ヲ替テ言ニノコリテ言ヲシタル乙ノ合竹ニテ氣ヲ替七ニノコリテ次第ニ一下ト具テ乞ヲ打テ氣ヲ替フ亻」上具氣亻戈美下亻●美●亻才●下合氣

行上ヲ具テ氣ヲ替テ行ニ殘テ美行美行ト拾テ下ノ合竹ニテ氣ヲ替下戈亻丁乙禾凢合氣下ニノコリテ行ヲ打テ乙ニ移テ凢ノ合竹ニテ氣ヲ替乙」八戈七具凢丁乙八ニノコリ

テ七ヲ具テ凢ヲ打五句●凢丁亻禾医合氣亻戈医合氣凢ヲ打テ行ニ移テ美押タル乙ノ合竹ニテ氣ヲ替テ行ニノコリテ美ヲシタル乙ノ合竹ニテ氣ヲ替七戈第一下具乞丁氣

又七ニノコリテ次第ニ一下ヲ具氣テ乞ヲ打テ氣ヲ替又一息吹テ乞丁亻禾医合氣亻戈第乞一乚具氣乞ヲ打テ行ニウツリテ美押タル乙ノ合竹ニテ氣ヲ替テ行ニノコリテ次第ニ乞乙ヲ具テ氣ヲ

替凢禾工合氣乚卩具乚作戈下合氣凢ニ移テ工ノ合竹ニテ氣ヲ替テ行凢ヲタ、キ具テ氣ヲ替氣ヲ替テ行凢ニノコリナガラ下ノ合竹ニテ氣ヲ替下戈七禾氣●亻●下●乙●凢才●

工合下ニノコリテ七ニウツリテ氣ヲ替テ」工美戈工合几戈彳具乙丁工美ニノコリテ工ノ合竹ニテ氣ヲ替
氣行下乙几ト拾テ工ノ合竹ニテ氣ヲ替 氣 氣 テ几ニ殘テ行ヲ具テ乙ヲ打氣ヲ替
几作下合下・戈・几・工・几・才几ヲ押ナガラ下ノ合竹ニテ氣ヲ工合工美戈工合工戈・一・乞・才工一乞合工
氣 替テ下ニ殘テ几工几トヒロウテ 氣 氣 氣
ノ合竹ニテ工美ニ殘テ工ノ合竹ニテ氣ヲ替テ工ニノコリテ一乞ト拾テ工一乞ノ合竹ニテ氣ヲ替 七戈作一・乞
一・才乞・丁工一乞合工戈・几・丁七ニノコリナガラ一乞一ト拾テ工一乞一・乞・才・工一乞合七戈第一下具乞
氣 ノ合竹ニテ氣ヲ替テ工ニ殘テ几ヲウツ 氣
丁 一乞ト拾テ工一乞ノ合竹ニテ氣ヲ替
テ七ニ殘テ次第ニ一下ヲ具テ乞ヲ打六句・乞丁下戈・乙・几・才几合几戈・工・一・才几合 乞ヲ打テ下ニノ
氣 氣 コリテ乙几ト拾
テ几殘テ工一ト拾テ一合一七戈下具乞丁工禾工合 行几ニ殘テ一合竹ニテ氣ヲ替テ一七ニ殘テ
几ノ合竹ニテ氣ヲ替 氐戈 氣 氣 下ヲ具テ乞ヲ打テ移テ工ノ合竹ニテ氣ヲ替工戈
几丁乙禾几合氐卩具工ニ殘テ几ヲ打テ乙ニウツリテ几ノ合竹 几戈彳具乙丁箎合彳戈箎合几ニノコリテ
氣 氣 ニテ氣ヲ替テ行几ヲタヽキ具テ氣ヲ替 氣 氣 行ヲ具テ乙ヲ
打テ美ヲシタル几ノ合竹ニテ氣ヲ替テ行 美戈 美ニノコリテ行ヲタヽキウツリテ美押タ
ニ殘テ美ヲシタル乙ノ合竹ニテ氣ヲ替 彳卩禾箎合彳戈箎合 ル乙ノ合竹ニテ行ニノコリテ言ヲシタル
氣 氣
乙ノ合竹ニ 言戈乙丁七禾乙合七戈第一下具乞丁 言ニ殘テ乙ヲ打七ニウツリテ乙ノ合竹ニテ氣ヲ替テ七ニ
テ氣ヲ替 氣
ノコリ次第ニ一下ヲ具テ乞ヲ打七句・乞丁上禾亶合言戈亶合七戈第一下具 乞ヲ打テ上ニウツリテ言ヲ押
氣 氣
テ言ヲシタル乙ノ合竹ニテ氣ヲ替 タル乙ノ合竹ニテ言ニノコリ
テ七ニノコリテ次第ニ一下ヲ具 乞丁彳上具彳・美・下・彳・美・彳・才下合下戈言具几丁乞ヲ打テ氣ヲ
氣 氣 氣 替テ行上ヲ具

テ氣ヲ替テ行ニ殘テ美下行美行ト拾テ　八句。几丁　上卩具氣　上戈下合氣七第戈　一下具乞丁几ヲ打テ上ヲタヽキ
下ノ合竹ニテ氣ヲ替テ言ヲ具テ几打　具テ氣ヲ替テ上ニノ
コリテ下ノ合竹ニテ氣ヲ替テ七ニ　九句。乞丁乙禾几合氣乙八戈七具几丁氣卮禾工合氣　乞ヲ打テ乙ニウツリテ
ノコリテ次第ニ一下ヲ具テ乞ヲ打　几ノ合竹ニテ氣ヲ替テ
乙八ニノコリテ七ヲ具テ几ヲ打テ氣ヲ替　卮卩具氣　卮戈作　下合氣下戈亻丁　行几ヲタヽキ具テ氣ヲ替テ行几ニ殘ナ
テ行几ニウツリテ工ノ合竹ニテ氣ヲ替　カラ下ノ合竹ニテ氣ヲ替テ下ニノコリ
テ行乙禾几合氣乙八戈七具几丁　乙ニウツリテ几ノ合竹ニテ氣ヲ替テ　十句
ヲ打　乙八ニノコリテ七ヲ具テ几ヲウツ

音取

一合一七戈乙亻上具氣上戈。一ノ合竹ニテ一七ニノコリテ乙亻。美キ。下合氣亻戈下合氣下戈　行美ト拾テ下ノ合
行上具テ氣ヲ替テ上ニノコル　竹ニテ氣ヲ替テ行
ニノコリテ下ノ合竹ニ亻丁乙禾几合氣乙八戈七具几丁　行ヲ打テ乙ニウツリテ几ノ合竹ニテ氣ヲ
テ氣ヲ替テ下ニノコル　替テ乙八ニノコリテ七ヲ具テ几ヲウツ

盤渉調

。下合下戈言具几丁　下ノ合竹ニテ下ニ殘　一句。几丁　上卩具氣　上戈下合氣七第戈　一下具乞丁几ヲ打テ上ヲタ
テ言ヲ具テ几ヲ打　ヽキ具テ氣ヲ替
テ上ニノコリテ下ノ合竹ニテ氣ヲ替　二句。乞丁下。戈乙。几キ。几合氣几戈乙丁亻禾醫合氣　乞ヲ打テ下ニ殘テ
テ七ニ殘テ次第ニ一下ヲ具テ乞ヲ打　乙几ト拾テ几ノ合
竹ニテ氣ヲ替テ几ニノコリテ乙ヲ打テ行　亻戈第乞乙具氣乞合氣七戈乙丁亻禾美丁。下合氣下。戈亻丁。乙。几キ。工
ニウツリテ美押タル乙ノ合竹ニテ氣ヲ替

合行ニ殘次第ニ乞乙ヲ具テ氣ヲ替乞ノ合竹ニテ氣ヲ替テ乙ヲ打テ行ニウツリテ美ヲ工]美戈工合氣几戈彳具
氣打テ下ノ合竹ニテ氣ヲ替テ下ニノコリテ行ヲ打テ乙几ト拾テ工ノ合竹ニテ氣ヲ替
乙氣丁几作|下合氣 工美ニ殘テ工ノ合竹ニテ氣ヲ替テ几ニノコリテ行ヲ具 テ乙ヲ打テ氣ヲ替テ几ヲ押ナカラ下ノ合竹ニテ氣ヲ替 下戈・几・工・几・扌・工合氣工]美戈工合氣
工・戈一・乞扌 下ニ殘テ几工几ト拾テ工ノ合竹ニテ氣ヲ替テ工美ニ 殘テ工ノ合竹ニテ氣ヲ替テ工ニノコリテ一乞ト拾 工一]乞合氣作 七・戈一・乞・一・扌・乞丁・工一]乞
合氣工・戈几丁・ 工一乞ノ合竹ニテ氣ヲ替テ七ニ殘ナガラ一乞一ト拾テ乞 ヲ打テ工一乞ノ合竹ニテ氣ヲ替テ工ニノコリテ几ヲ打テ 一・乞扌・工一]乞合氣七第戈|一|下具乞丁
一乞ト拾テ工一乞ノ合竹ニテ氣ヲ替 テ七ニ殘テ次第ニ一下ヲ具テ乞ヲ打 三句・乞丁下戈・乙・几扌・几合氣 几戈乙|丁彳具 几合氣七]乙戈下合氣下|戈
言具几丁 乞ヲ打テ下ニノコリテ乙几ト拾テ几ノ合竹ニテ氣ヲ替テ几ニ殘テ乙ヲ打テ行ヲ具テ 几ノ合竹ニテ氣ヲ替テ七乙ニノコリテ下ノ合竹ニテ下ニノコリテ言ヲ具テ几ヲ打 四句・几丁上
卩具上戈下合氣七戈第|一|下具乞丁 几ヲ打テ上ヲ叩具テ氣ヲ替テ上ニ殘テ下ノ合竹 ニテ氣ヲ替テ七ニ殘テ次第ニ一下ヲ具乞ヲ打 五句・乞丁上禾乙合氣上
氣
戈・八・上扌・言合氣 乞ヲ打テ上ニウツリテ乙ノ合竹ニテ氣ヲ替上ニノ コリテ八上ヲ拾テ言押タル乙ノ合竹ニテ氣ヲ替 言戈乙丁七禾乙合氣七戈第|一|下具乞丁
言ニノコリテ乙ヲ打テ七ニウツリテ乙ノ合竹ニテ氣ヲ替テ七ニ殘テ次第ニ一下ヲ具テ乞ヲ打 七戈第彳美具
合「七戈乙第丁|彳美具|醫合氣（自是(一)） 七ニノコリテ次第ニ行美ヲ具テ美ヲシタル乙ノ合竹ニテ氣ヲ替テ 二反・
醫氣 七ニ殘テ乙ヲ打テ次第ニ行美ヲ具テ美押タル乙ノ合竹ニテ氣ヲ替
七戈乙第丁彳美具下合氣七戈第一|下具乞丁 七ニ殘テ乙ヲ打テ次第ニ行美ヲ具テ下ノ合竹ニ テ氣ヲ替テ七ニノコリテ次第ニ下ヲ具テ乞ヲ打 六句・乞丁上

禾㠯合氣言戈㠯合氣上戈乙合氣 乞ヲ打テ上ニ移テ言ヲシタル乙ノ合竹ニテ氣ヲ替テ言ニノコリテ
㠯タル乙ノ合竹ニテ氣ヲ替テ上ニノコリテ乙ノ合竹ニテ氣ヲ替 七戈第一下具

乞丁氣イ・美・下ッイ・ㄔ美・丁下合氣下戈言具凢丁 七ニノコリテ次第ニ一下ヲ具テ乞ヲ打テ氣ヲ替テ行美下行
ト拾テ美ヲ打テ下ノ合竹ニテ氣ヲ替テ下ニ殘テ言ヲ具テ凢

ヲ打七句・凢丁上氣卩具下戈・乙・凢ㄔ・凢合氣 凢ヲ打テ上ヲタ、キ具テ氣ヲ替テ下ニノ㐌作戈下合氣下戈・乙・凢・ㄔ
コリテ乙凢ト拾テ凢ノ合竹ニテ氣ヲ替

工合氣行凢ニノコリナカラ下ノ合竹ニテ氣ヲ替テ卩具㐌氣凢作戈下合氣下戈言具凢厂行凢ヲタ、キ具テ氣ヲ替
下ニ殘リテ乙凢ト拾テ工ノ合竹ニテ氣ヲ替　テ凢ニ殘ナカラ下ノ合竹

ニテ氣ヲ替テ下ニノコ 八句・凢丁上氣卩具上戈下合氣七戈第一下具乞厂 凢ヲ打テ上ヲタ、キ具テ氣ヲ替テ上
リテ言ヲ具テ凢ヲ打　ニノコリテ下ノ合竹ニテ氣ヲ替テ七

ニ殘テ次第ニ一七戈第イ美具𢆶合氣七戈乙丁第イ美具 七ニ殘テ次第行美ヲ具美押タル乙ノ合竹ニテ氣下合氣
下具テ乞ヲ打　ヲ替テ七ニノコリテ乙ヲ打テ次第ニ行美ヲ具

七戈第一下具乞丁 下ノ合竹ニテ氣ヲ替テ七ニノ
コリ次第ニ一下ヲ具テ乞ヲ打 九句・乞丁上禾㠯合氣言戈㠯合氣 乞ヲ打テ上ニウツリテ言ヲ
シタル乙ノ合竹ニテ言ニノ

コリテ言押タル乙上戈乙合氣七戈第一下具乞丁氣イ・美・下・イ・ㄔ 上ニノコリテ乙ノ合竹ニテ氣ヲ替テ七ニノ
ノ合竹ニテ氣ヲ替　コリテ次第ニ一下ヲ具テ乞ヲ打テ氣ヲ替テ

行美下行美丁・下今氣下戈言具凢丁 美ヲ打下ノ合竹ニテ氣ヲ替テ 十句・凢厂上氣卩具下戈・乙・凢ㄔ・凢合氣 凢ヲ打テ
ト拾フ　下ニ殘テ言ヲ具テ凢ヲウツ

上ヲタ、キ具テ氣ヲ替テ下ニノコリ七戈・乙丁・イ禾・美丁・下合氣 七ニノコリテ乙ヲ打テ行ニウツリ 下戈・イ・厂
テ乙凢ト拾テ凢ノ合竹ニテ氣ヲ替　テ美ヲ打テ下ノ合竹ニテ氣ヲ替

乙・凢ㄔ・工合氣工美「戈工合氣 下ニ殘行ヲ打テ乙凢ト拾テ工ノ合竹凢戈イ具乙丁氣凢作下合氣下戈・凢・工凢ㄔ・
ニテ工美ニ殘テ工ノ合竹ニテ氣ヲ替

工合 几ニ殘テ行ヲ具乙ヲ打氣ヲ替几ヲ押ナガラ下ノ合竹ニ〕工美戈工合氣工戈一•乞才•工一乞合氣 工美ニノ
氣 テ氣ヲ替テ下ニ殘テ几工几ト拾テ工ノ合竹ニテ氣ヲ替 コリテ工
ノ合竹ニテ工ニ殘テ一乞ト拾 七戈一•乞•一•乞丁•工一乞合氣工戈•几丁一•乞•才 七ニ殘ナガラ一乞一ト拾
テ工一乞ノ合竹ニテ氣ヲ替 乍 テ乞ヲ打テ工一乞ノ合竹
ニテ氣ヲ替テ工ニノコ〕合氣七戈第一下具乞丁 工一乞ノ合竹ニテ氣ヲ替テ七ニ
リテ几ヲ打テ一乞ト拾工一乞 殘テ次第ニ一下ヲ具テ乞ヲウツ 十一句•乞丁下戈•乙•
几才•几合乞ヲ打テ下ニ殘テ乙几ト几戈乙丁イ具几合 言具几丁 几ニ殘テ乙ヲ打テ行ヲ
氣 拾テ几ノ合竹ニテ氣ヲ替 氣七乙〕戈下合氣下戈 具テ几ノ合竹ニテ氣ヲ
替テ七乙ニ殘テ下ノ合竹ニテ氣 十二句•几丁上卩具氣上戈下合氣七戈第一下具乞丁 几ヲ打テ上ヲタ、キ具テ
ヲ替テ下ニ殘テ言ヲ具テ几ヲ打 氣ヲ替上ニ殘テ下ノ合竹
ニテ氣ヲ替テ七ニ殘テ次、七戈第イ美具醫合氣 七ニノコリテ次第ニ行美ヲ具テ〔七戈(自是(朱))乙丁第イ美具醫合氣 七
第ニ一下ヲ具テ乞ヲ打 美ヲ押タル乙ノ合竹ニテ氣ヲ替、 ニ
ノコリテ乙ヲ打次第ニ行美ヲ具テ 二反七戈乙丁第イ美具下合氣七戈第一下具乞丁 七ニ殘テ乙ヲ打テ次第ニ
美ヲシタル乙ノ合竹ニテ氣ヲ替 行美ヲ具下合竹ニテ氣ヲ
替テ七ニ殘テ次第ニ 十三句•乞丁上禾宣合氣言戈宣合氣 乞ヲ打テ上ニウツリテ言ヲシタル乙ノ合竹ニテ上戈
一下ヲ具テ乞ヲ打 氣ヲ替テ言ニ殘テ言押タル乙ノ合竹ニテ氣ヲ替
乙合氣七戈第一下具乞•丁イ•美•下•イ•才美丁• 上ニ殘テ乙ノ合竹ニテ氣ヲ替七ニ殘テ次第ニ一下合氣下戈
下ヲ具乞ヲ打テ氣ヲ替行美下行ト拾テ美ヲ打
言具几丁 下ノ合竹ニテ氣ヲ替テ下ニ 十四句已上常用之〔几丁(自是組句秘之(朱))上卩具氣下戈•乙•几•才•乙•丁醫合氣 几ヲ打上
ノコリテ言ヲ具テ几ヲ打 ヲタ、キ
具テ氣ヲ替テ下ニ殘テ乙几ト拾テ乙イ戈宣合氣言戈乙丁七禾乙合氣 行ニ殘テ言ヲシタル乙ノ合竹ニテ氣ヲ替
ヲ打美ヲシタル几ノ合竹ニテ氣ヲ替 言ニ殘テ乙ヲ打七ニ移テ乙ノ合竹ニテ氣

ヲ七戈第一下具乞丁氣七ニノコリテ次第ニ一下ヲ具テ乞丁上禾亘合氣言戈亘合氣言戈・七・上才乙合氣乞ヲ打
替　又氣乞ヲ打テ氣ヲ替テ又氣ヲ替テ　テ上ニ
移テ言押タル乙ノ合竹ニテ氣ヲ替テ言ニノコリテ言押タル乙七戈第一下具乞丁又氣氣乞丁上禾亘合氣言戈亘合氣
ノ合竹ニテ氣ヲ替テ七ニ殘テ七上ト拾テ乙ノ合竹ニテ氣ヲ替
七ニ殘テ次第ニ一下ヲ具テ乞ヲ打テ氣ヲ替テ又氣ヲ替テ乞ヲ打テ上ニウツ上戈乙合氣八・上・禾莚合氣美戈莚合氣
リテ言ヲシタル乙ノ合竹ニテ言ニノコリテ言ヲシタル乙ノ合竹ニテ氣ヲ替
イ・戈上ニノコリテ乙ノ合竹ニテ氣ヲ替テ八ニノコリテ上ニウツリテ美ヲシタル乙美・下・イ才美丁・下合氣下
ノ合竹ニテ氣ヲ替テ美ニ殘テ美ヲシタル乙ノ合竹ニテ氣ヲ替テ行ニノコル
戈言具几丁美下行ト拾テ美ヲ打テ下ノ合竹ニテ十五句・几丁上具氣下・戈乙几・才乙・丁莚合氣イ戈亘合氣言
氣ヲ替テ下ニ殘テ言ヲ具テ几ヲ打
戈・上・言・七才几ヲ打上ヲタ、キ具テ氣ヲ替テ下ニ殘テ乙几ト拾テ乙ヲ打テ美ヲシタル几ノ乙合氣七戈第一
合竹ニテ氣ヲ替テ行ニ殘テ言ヲシタル乙ノ合竹ニテ言ニノコリテ上言七ト拾
下具乞丁イ禾莚合氣美戈乙丁イ禾莚合氣七戈乙丁　乙ノ合竹ニテ氣ヲ替テ七ニ殘テ次第ニ一下ト具テ乞ヲ打
テ行ニウツリテ美押タル乙ノ合竹ニテ氣ヲ替テ美ニ殘テ
乙ヲ打テ行ニ移リテ美ヲシタル乙ノ合イ禾莚合氣イ戈第乞乙具七美具美戈莚合行ニウツリテ美ヲシタル乙
竹ニテ氣ヲ替テ七ニノコリテ乙ヲ打　氣ノ合竹ニテ氣ヲ替テ行ニ殘
テ次第ニ乞乙ヲ具テ氣ヲ替テ七美ヲ具テ上戈乙合氣八・上・禾亘合氣言・戈乙丁・七・禾乙合氣七戈第一下具乞丁上
美ニ殘テ美押タル乙ノ合竹ニテ氣ヲ替　ニ
殘テ乙ノ合竹ニテ氣ヲ替テ八ニ殘テ上ニウツリテ言押タル乙ノ合竹ニテ氣ヲ替テ言ニノコ
リテ乙ヲ打テ七ニノコリテ乙ノ合竹ニテ氣ヲ替テ七ニノコリテ次第ニ一下ヲ具テ乞ヲ打　十六句　已上乱
句

乞丁上禾乙合氣上戈•八•上•扌亘合氣　乞ヲ打テ上ニウツリテ乙ノ合竹ニテ氣ヲ替テ上ニ殘テ八上ト拾テ言押タル乙ノ合竹ニテ氣ヲ替　言戈乙丁七禾乙合氣七戈第

一|下具乞丁　言ニノコリテ乙ヲ打テ七ニウツリテ乙ノ合竹ニテ氣ヲ替テ七ニ殘次第ニ一下ヲ具テ乞ヲ打　七戈第|彳|美具莨合氣　〔自是(朱)〕七戈乙丁第|彳|美具莨合氣

七ニ殘テ次第ニ行美ヲ具テ美押タル乙ノ合竹ニテ七ニノコリテ乙ヲ打テ次第ニ行美ヲ具テ美押タル乙ノ合竹ニテ氣ヲ替　二反　〔自是(朱)〕七戈乙丁第|彳|美具下合氣七戈第一|下具乞

丁　七ニ殘テ乙ヲ打テ次第ニ行美ヲ具テ下ノ合竹ニテ一下ヲ具テ乞ヲ打　十七句•乞丁上禾亘合氣言戈亘合氣上戈乙合氣　乞ヲ打テ上ニ移テ言押タル乙ノ合竹ニテ氣ヲ替テ

言ニノコリテ言ヲシタル乙ノ合竹ニテ氣ヲ替テ上ニ殘テ乙ノ合竹ニテ氣ヲ替　七戈第|一|下具乞丁氣•彳•美•下•彳•扌•美丁下合氣　七ニ殘テ次第ニ一下ヲ具テ乞ヲ打テ氣ヲ行美

下行ト拾テ美ヲ打テ下ノ合竹ニテ氣ヲ替　下|戈言具几丁　下ニノコリテ言ヲ具テ几ヲ打　十八句•几丁•上卩具氣下戈•乙•几扌•几合氣　几ヲ打テ上ヲタ、キ具

テ氣ヲ替テ下ニノコリテ乙几ト拾テ几ノ合竹ニテ氣ヲ替　七戈•乙丁•彳禾•美丁•下合氣　七ニノコリテ乙ヲ打テ行ニウツリテ美ヲ打テ下ノ合竹ニテ氣ヲ替　下戈•行丁•乙•几扌•

工合氣工〕美戈　下ニノコリテ行ヲ打テ乙几ト拾テ工ノ合竹ニテ氣ヲ替テ工美ニノコル　工合氣几|戈彳具乙丁氣几|乍下合氣　工ノ合竹ニテ氣ヲ替テ几ニノコリテ行ヲ具テ乙ヲ

打テ氣ヲ替テ几ヲ押ナカラ下ノ合竹ニテ氣ヲ替　下戈•几•工•几扌•工合氣工〕美戈工合氣　下ニノコリテ几工几ト拾テ工ノ合竹ニテ氣ヲ替フ　工戈•一•乞扌•工一

乞」合氣七戈乍•一•乞•一•扌•乞丁　工ニ殘一乞トヒロウテ工一乞ノ合竹ニテ氣ヲ替テ七ニ殘ナカラ一乞一ト拾テ乞ヲ打　合氣工一乞工戈•几丁•一•乞扌•工一

乞」合氣　工一乞ノ合竹ニテ氣ヲ替工ニノコリテ几ヲ打テ一乞ト拾テ工一乞ノ合竹ニテ氣ヲ替　七戈第|一|下具乞丁　七ニ殘テ次第ニ一下ヲ具乞ヲ打　十九句

•乞丁下•戈乙•凢•ヰ凢合氣凢戈乙丁イ具凢合氣拾乞ヲ打ニ下ニ殘テ乙凢ヲ拾テ凢ノ合竹ニテ氣ヲ替七〕乙戈下合氣下戈言具凢丁殘テ下七乙ニ
ノ合竹ニテ氣ヲ替下ニノ　廿句•凢丁上氣卩具上戈下合氣七戈第一下具乞丁凢ヲ打テ上ヲタヽキ具テ氣ヲ替上
コリテ言ヲ具テ凢ヲ打　ニ殘テ下ノ合竹ニテ氣ヲ替テ次第
ニ一下ヲ具　廿一句
テ乞ヲ打

音取

下合下戈言具氣•下•戈氣下ノ合竹ニテ下ニ殘テ言ヲ具テ乙•凢引•下キ色•七第一ケ一下具乞丁乙凢下ト拾フ此ノ
氣ヲ替下ニノコリテ氣ヲ替テ　凢ヲ延テ下ニウツ
リテ音ヲ絕シテ七ノ一竹ニテ
次第ニ一下ヲ具テ乞ヲ打ヘシ

壹越調

•凢合凢戈イ具乙丁凢ノ合竹ニテ凢ニノコ　一句•凢合氣凢戈乙卩放凢合氣凢ノ合竹ニテ氣ヲ替テ凢行ニ殘
リテ行ヲ具テ乙ヲ打　テ乙ヲタヽキハナイテ凢ノ合竹
ニテ氣七戈第一下具乞丁七ニノコリテ次第ニ　二句•乞丁イ禾凢合氣イ戈第乞乙具氣乞合氣乞ヲ打テ移テ美
ヲ替　一下ヲ具テ乞ヲ打　押タル乙ノ合竹
ニテ氣ヲ替テ行ニノコリテ次第ニ乞乙七戈第一下具乞丁第イ乞具氣七ニ殘テ次第ニ一下ヲ具テ乞「一」皇(本)
ヲ具テ氣ヲ替テ乞ノ合竹ニテ氣ヲ替　ヲ打次第ニ行乞ヲ具テ氣ヲ替　イ乞放
乞丁第イ乞具氣第ニ行乞ヲ放テ乞ヲ打テ次二反〕イ乞放乞丁凢禾一氣合行乞ヲ放テ乞ヲ打テ行凢ニウ　一七戈乞
ツリテ一ノ合竹ニテ氣ヲ替
第ニ行乞ヲ具テ氣ヲ替

・丁・下。乙ㇳ・几合氣尼氣卩具 一七ニノコリテ乞ヲ打下乙ト拾テ几ノ合竹ニテ氣ヲ替テ行几ヲタ、ホ具テ氣ヲ替 几戊|亻具乙丁 几ニノコリテ行ヲ具テ乙ヲ打 三句・几
合氣尼戊乙卩放几合氣 几ノ合竹ニテ氣ヲ替テ行几ニ殘テ乙ヲタ、キ放テ几ノ合竹ニテ氣ヲ替 尼戊作|下合氣下戊几丁十禾十合氣 行几ニ殘ナガラ下ノ合竹ニテ氣ヲ替テ下
ニノコリテ氣ヲ替テ几ヲ打テ十ニ移テ十ノ合竹ニテ氣ヲ替 十戊|上具下丁十合氣「七戊下丁|亻具|十合氣(自是(朱)) 十ニ殘テ上ヲ具テ下ヲ打テ氣ヲ替十ノ合竹ニテ氣ヲ替七ニノコリテ
下ヲ打テ行ニウツリテ十ノ合竹ニテ氣ヲ替 三反亻戊第乞乙具氣又氣 十禾十合氣 行ニノコリテ次第ニ乞乙ヲ具テ氣ヲ替テ又氣ヲ替テ十ニ移テ十ノ合竹ニテ氣ヲ替「亻戊下(自是(朱))
|丁|七具|十合氣 行ニ殘テ下ヲ打テ七ヲ具テ十ノ合竹ニテ氣ヲ替 三反亻戊・七・上ㇳ|十具下丁十合氣 行ニ殘テ七上ト拾テ十ヲ具テ下ヲ打テ十ノ合竹ニテ氣ヲ替
下戊几丁乙禾几合氣乙八|戊七具几丁 下ニ殘テ几ヲ打テ乙ニウツリテ几ノ合竹ニテ氣ヲ替テ乙八ニ殘テ七ヲ具テ几ヲ打 四句・几丁亻禾下合氣下戊・
乙・禾下合氣 几ヲ打テ行ニ移テ下ノ合竹ニテ氣ヲ替テ下ニノコリテ乙ニウツリテ下ノ合竹ニテ氣ヲ替 下戊・亻卩禾・
莢合氣亻第乞乙具氣乞合氣 下ニ殘テ行ヲタ、キ移テ美ヲシタル乙ノ合竹ニテ氣ヲ替テ行ニノコリ次第ニ乞乙ヲ具テ氣ヲ替テ乞ノ合竹ニテ氣ヲ替フ 七戊・乙丁・亻・美・亻
・ㇳ下合氣 七ニ殘テ乙ヲ打テ行美行ト拾下ノ合竹ニテ氣ヲ替 下戊亻丁乙禾几合氣乙八|戊七具 下ニ殘リ行ヲ打乙ニウツリテ几ノ合竹ニテ氣ヲ替テ乙八ニ殘テ七ヲ具 几丁氣
下合氣亻戊下禾下合氣 几ヲ打テ氣ヲ替テ下ノ合竹ニテ氣ヲ替テ行ニノコリテ下ニウツリテ下ノ合竹ニテ氣ヲ替 下戊亻丁乙禾几合氣尼氣卩具 下ニノコリテ行ヲ打乙ニ移
テ几ノ合竹ニテ氣ヲ替テ行几ヲ叩(タヽキ)具テ氣ヲ替 几戊|亻具乙丁 几ニ殘テ行ヲ具乙ヲウツ 五句・几合氣尼戊乙卩放几合氣尼作|下合氣 几ノ合竹ニテ氣ヲ替テ行几

ニ殘テ乙ヲタ、キ放テ凡ノ合竹ニテ氣ヲ替下戈亻禾十具下丁十合下ニノコリテ行ニ移テ氣ヲ替テ十ヲ七
テ行凡ニノコリナガラ下ノ合竹ニテ氣ヲ替　氣　氣　具テ下ヲ打テ十ノ合竹ニテ氣ヲ替
戈一下具乞丁亻乞具〕亻乞放乞丁亻乞具七ニ殘テ次第ニ一下ヲ具テ乞ヲ打テ次第ニ行乞ヲ具テ二
第　第　氣　第　氣　氣ヲ替行乞ヲ放テ乞ヲ打テ次第ニ行乞ヲ具テ氣ヲ替
反亻〕乞放乞丁亻禾䒭合戈乞乙具行乞ヲ放テ乞ヲ打テ行ニウツリ美押タル乙六句。乞合戈七
氣亻第　ノ合竹ニテ氣ヲ替テ行ニ殘テ次第乞乙ヲ具　氣乙八
具凡丁乞ノ合竹ニテ氣ヲ替テ乙七句。凡丁亻禾下合下戈亻禾十具凡ヲ打テ行ニウツリテ下ノ合竹ニテ
八ニ殘テ七ヲ具凡ヲ打　氣下　氣　氣ヲ替テ下ニ殘テ行ニ移テ氣ヲ替テ
十ヲ下丁十合七戈第一下具乞丁第亻乞具下ヲ打テ十ノ合竹ニテ氣ヲ替テ七ニノコリテ次第〕放乞（自是朱）
具　氣　氣　ニ一下ヲ具テ乞ヲ打テ次第ニ亻乞ヲ具テ氣ヲ替フ　亻乞
丁亻乞具行乞ヲ放テ乞ヲ打テ次二反亻〕乞放乞丁㡳禾一合一〕七戈乞丁。下。乙才。凡合行乞ヲ放テ乞ヲ
第　氣　第ニ行乞ヲ具テ氣ヲ替　氣　氣　打テ行凡ニ移テ
一ノ合竹ニテ氣ヲ替テ一七ニ殘テ乞ヲ㡳卩具凡戈亻具乙丁行凡ヲタ、キ具テ氣ヲ替テ八句。凡合㡳戈乙
打下乙ト拾テ凡ノ合竹ニテ氣ヲ替フ　氣　凡ニ殘テ行ヲ具テ乙ヲ打　氣
卩放凡合㡳戈一合一〕七戈乞丁凡ノ合竹ニテ氣ヲ替テ行凡ニ殘テ乙ヲタ、キ放テ凡ノ合竹ニテ下具一一
氣　氣　氣ヲ替行凡ニ殘テ一ノ合竹ニテ氣ヲ替テ一七ニノコリテ乞ヲ打　亻乞
具下戈言具凡丁下ヲ具テ行乞ヲ具テ氣ヲ替九句。凡丁上卩具下。乙禾。凡合凡ヲ打テ上ヲタ、キ具テ
氣　テ下ニ殘テ言ヲ具テ乙ヲ打　氣　氣　氣ヲ替下ニ殘テ乙ニウツ
リテ凡ノ合竹乙〕八戈七具凡丁乙八ニ殘テ七ヲ十句。凡丁亻禾下合下。戈乙禾。下合凡ヲ打テ行ニウツリ
ニテ氣ヲ替　具テ凡ヲウツ　氣　氣　テ下ノ合竹ニテ氣ヲ
替テ下ニ殘テ乙ニ移テ下戈。亻。卩䒭合戈具乞合下ニノコリテ行ヲタ、キ禾テ美ヲシタル乙ノ合竹
下ノ合竹ニテ氣ヲ替　禾　氣亻第乞乙　氣　氣　ニテ氣ヲ替行ニノコリテ次第ニ乞乙ヲ具テ氣ヲ替

テ乞ノ合竹ニテ氣ヲ替七戈•乙丁•亻•美•亻•ヰ•下合氣下戈亻丁乙禾几合氣　七ニ殘テ乙ヲ打テ行美行ト拾テ下ノ合竹ニテ氣ヲ替テ下ニノコリテ行ヲ打テ乙ニ移テ几ノ合竹
ニテ氣乙]八|戈七具几丁氣下合氣亻戈下禾下合氣　乙八ニ殘テ七ヲ具テ几ヲ打テ氣ヲ替下ノ合竹ニ亻戈下合氣下戈
ヲ替　テ氣ヲ替行ニ殘テ下ニ移下ノ合竹ニテ氣ヲ替
亻丁乙禾几合氣　行ニ殘テ下ノ合竹ニテ氣ヲ替テ下ニ殘リ(ノコリ)厄卩具几戈|亻具乙丁　行几ヲタ、キ具テ氣ヲ替テ
氣　テ行ヲ打テ乙ニ移テ几ノ合竹ニテ氣ヲ替厄氣　几ニノコリテ行ヲ具テ乙ヲ
打
十一句•几合氣厄戈乙卩放几合氣厄戈乍|下合氣「下戈(自是朱)几丁•十禾•十合氣　几ノ合竹ニテ氣ヲ替テ行几ニノコリテ乙ヲ
乍下ノ合竹ニテ氣ヲ替テ下ニ殘テ几十戈|上具下丁氣十合氣　タ、キ放テ几ノ合竹ニテ氣ヲ替テ行几ニ殘
ヲ打十ニ移十ノ合タケニテ氣ヲ替　十ニノコリテ上ヲ具テ下ヲ打　三反|七八戈上卩禾氣
テ氣ヲ替十ノ合竹ニテ氣ヲ替
七禾亻具十合氣　七八ニ殘テ上ヲタ、キウツリテ氣ヲ替テ七「(自是朱)七戈下丁|亻具十合氣　七ニノコリテ下ヲ打テ行
ニウツリテ行ヲ具テ十ノ合竹ニテ氣ヲ替　ヲ具十ノ合竹ニテ氣ヲ替
フ　三反亻戈第乞乙具氣十合　行ニ殘テ次第ニ乞乙ヲ具テ氣ヲ替又氣「(自是)亻戈下丁|七具十合氣　行ニ殘テ下ヲ
又氣十氣　ヲ替テ十ニウツリテ十ノ合竹ニテ氣替　打テ七ヲ具テ
十ノ合竹ニ　三反亻戈•七•上ヰ|十具下丁十合氣　行ニ殘テ七上ト拾テ十ヲ具テ下戈几丁乙禾几合氣乙]八|戈七
テ氣ヲ替　下ヲ打テ十ノ合竹ニテ氣ヲ替
具几丁　下ニノコリテ几ヲ打テ乙ニウツリテ几ノ合
竹ニテ氣ヲ替テ乙八ニ殘テ七ヲ具テ几ヲ打十二句•几丁亻禾下合氣下戈乙禾下合氣　几ヲ打テ行ニウツリテ下ノ合竹ニテ
氣ヲ替テ下ニ殘テ乙ニ移　下•亻卩醫合氣亻第乞乙具氣乞合氣　下ニノコリテ行ヲタ、キ移テ美押タル乙ノ合竹
テ下ノ合竹ニテ氣ヲ替　禾　ニテ氣ヲ替テ行ニ殘テ次第ニ乞乙ヲ具テ氣ヲ替
テ乞ノ合竹七戈•乙丁•亻•美•亻•ヰ•下合氣　七ニノコリテ乙ヲ打テ行美行下戈•亻丁•乙禾几合氣乙]八|戈七具几丁氣
ニテ氣ヲ替　ト拾フテ下ノ合竹ニテ氣ヲ替

下合 下ニ殘テ行ヲ打テ乙ニウツリテ几ノ合竹ニテ氣ヲ替テ乙戈亻。下禾。下合亻戈下合下戈亻丁乙禾几合
氣 八ニ殘テ七ヲ具テ几ヲ打テ氣ヲ替テ下ノ合竹ニテ氣ヲ替 氣 氣 氣
行ニ殘テ下ニ移テ下ノ合竹ニテ氣ヲ替テ行ニノコリテ下ノ合竹卩具几戊亻具乙丁 行几ヲタヽキ具テ氣
ニテ氣ヲ替下ニ殘テ行ヲ打テ乙ニウツリテ几ノ合竹ニテ氣ヲ替氣 ヲ替テ几ニ殘テ行ヲ
具テ乙　十三句
ヲ打

音取

几合乙。戈下。亻。ｵ下。乙。几ｵ 亻具 几ノ合竹ニテ乙ニノコリテ下行ト
氣 拾テ氣ヲ替テ下乙几ト拾テ行ヲ具

於調子唱哥者雖レ述二舌端一之由先哲爲由傳至末學今所注付非無其恐雖然未練子孫定而可及迷惑且者爲家且者存忠厚間忘嘲記之猶所殘音取幷付物等以此才學可吹明此案注似安尤難解者歟併不可出門外而已

永正十一年霜月上旬　　雅樂寮預　豐原朝臣在判　生年六十五歲

困此雅樂寮ハ勿論ナリ、預トアル叓人不審アルベキナリ。アマリニ當道埋ハテタル叓ニナリテ昔ノ子細ヲ不知不審有之者可咨村上御記ニ康保二年召雅樂〔雅王冈ニヨル〕笙師有秋令吹〔冈ニテ和〕笙ト被遊タリ他家ニ無此

義、然者希代之上者于今預申道也ト云心ナリ縦雖ヲ蒙トモ當家之義勢ナリ〳〵。

一曹植字子建魏ノ文帝忌ニ其才ヲ欲レ害レ之令レ作レ詩ヲ限ニ七歩ヲ成ニ植應レ聲ニ曰ク煮レ豆燃ニ豆ノ萁ヲ豆ハ在テ釜中ニ泣ク本是レ同根ノ豆ノ、相イ煎ルコト何太タ急ナル

魏ノ文帝ハ子建ガ兄曹操字孟徳ガ事也

一玄宗時天寶年中ニ胡旋ノ舞出來胡旋ハ戎之樂ナリ、霓裳羽衣ハ法曲ナリ、法曲ハ政ヲ和ケ世ヲヲサムル音ナリ

一亡國音事

杜淹ガ曰、陳マサニ亡ナント（底ナシ イニヨル）セシニ玉樹ヲ作、齊ノ亡シナントセシ半呂ヲ作所謂亡國事也云々

一烟霞痼疾泉石膏肓　田遊岩事

一二句三年得一吟双涙流　賈島

虫之記（此記ハ私宅山里ニテ壁ニ有虫ヲ見テ閑日ノアマリ且者信心ヲ進メムガ為書之者也）

やよひの廿日よひなれば月もなく花もちりはて〻春のゆくゑしらまほしきうたゝねの手枕にふすこしもなきみしか夜の明ぼのかすみわたりてそこはかとなきに、たれか家の木すへにか鶯の二聲三聲なくは、雪のうちにき〻しにもおとらず、これも春の別をした〔匿と〔イ〕ニヨル〕ふこのみものさびたる山がくれなれば、雨後の葉底こころごころに殘花もやとあたりの戸ぼそをしひらきて、すこしまがきのほかにあゆみいで侍るに、ふりぬる壁に生るはいつまでぐさといふにやと立よりてみれば、一寸ばかりなる虫の靑かこりつきてまろく踞てあり。なにの心に草の葉にもゐずして土にありけるやとばかりみてその日はくれぬ。又の朝何となく出て見侍るに、此むし有所もかはらすあり、ふしきにおもひなから又かへりぬ。其後二日はかりありて見侍れは、猶おなし所にあり、さては此虫壁にむかふ心もやと、いたいけに心ありかほなるも閑日のなぐさめにこのま〻おきありさまみむの心にて又かへりぬ。このたひわざとその明る朝に行てみれは、半身黒く土の色に變す、不思儀におもひて、其夕かた又見侍れは、角のやうなるものあまたいてきたり、きいのおもひをなして朝夕つとめてまもり侍るに、十日あまりに成りしかいつのまにいてつらね蟬のぬけからのやふにせ

なかをわりて出ゆきける。いかなるもの丶何にか成おほせてかとおもへば、色々さま〲のこと思ひ出侍る中に、うつせみの巻に有つるこうちきを、御そのしたにひきいれて、おほとのこもりうちやすみ給へとねられ給はす、御すゝりめして

うつせみの身をかへてける木の本に猶人からのなつかしきかな

とかき給へることこれにて面白くもゆへありて、つら〲となをぬぎをけるからをみ侍るに、いかさま蝶などのたぐひになりて飛ゆきけんと思ふにも同物語の小蝶のまきに

花そのの小てふをさへやした草に秋まつ虫はうとくみるらん

と侍る、そのいてゆくおりふしあたりに侍る虫はいかに見侍りつらむ、壁よりいてさる虫なれはきり〲すなとそねたく見侍りけむおほつかなし。かくのとくのふしきをみ侍るにつけて、我等か本身なにものそや、地水火風かりに集合して有侍(ママ)〔○待ノ誤〕の身となれると申義分はたれもさこそとおほゆ、本因妙のそのかみ迷ゝとまよふは衆生となり悟ゝとさとるは妙覺の佛躰といふにや。爰以末顯爲衆生已顯爲佛陀と尺せられたる也。誠に内證所具の妙法叓相にあらはるゝを悟の佛といひ不顯を衆生と有ことはり明かなるものか、さてな

にものかこれらの種となると思へば妙の一字因果とひらくるを、又報身の佛といひ利益をほどこすを應身と名付法躰にこれをあらはすを妙法蓮花とす。是はこれ父母の胎内にして五躰身分かたのごとく整足して胎出のおりと次第に成仁して親とひとしき身となるは幼稚の形にもかはりて有し虫のやうに角なごこそなけれども美麗のすかたとなるは一生のうちにかたちをかへたるへし。さて後にはいかなるものに成へきと思へは、五十轉々の人をほめ給隨喜功徳品の下の御尺に頻伽在鷇聲勝衆鳥と有は此鳥かひこの内より音微妙にして、かひこをわりぬれは親とひとしきこゑと成て虚空にかけるをたとへにひき給。さては此虫もおやのやうに成へき事不審なかるべし。されとも何の時にか虫の身を轉へきや。介爾有心即具三千と尺して、もとより蜫蟻蚊虻にいたるまて佛性をそなへすといふ事はなし。しかれとも人界にうまれて法花經に緣をむすはすは、いかてか忽佛には成ゆへきと思ふにも、如我等无異の御詞たのもし。然は妙薬のふしきをうたかはす、つねにこれを口唱し、心中にふかく信敬申はこの世の緣かきりありて後閉たる眼をひらくならは、人の目にこそ不淨の床に穢すかたにふすと思ふも、佛は三十二相八十種好紫磨黄金の身と變し、又六根清淨

を得つと見給へし、其時は有つる虫のあらさるすかたとなるいはれをもしり、我身胎内にして人となりしこと、或は無始より此かた幾千万の身をうけ苦海に沒在し、適人と生くれとも正法につゐにあはすして、久しく迷の衆生となりしか、時至て悪世のいまにうまれあひながら、八品所顯の妙法を持たてまつる身となり、即身成佛せりとしらむこと更にうたかふへからす。おなじくは有つるむしも此ことはりを聞て龍女かいにしへにこたへて南の籬の下にして即成道をとなへ、をのがたくひ、ここには蓁の螢の白身の冥火を清凉の池の水にてけし、古庭の蝸の角のうへにあらそふ修羅の因を柔和忍辱の衣に取つきて轉せよと教化すへし。可咲々萬事に心をつけてみれば、悉以一生のことわさ世間のふしきも信心のひとつにきすへし。よろこはしきかな朝夕わするゝひまなく南無妙法蓮花經ととなへて、人をもすゝめ、速に佛身を成就すへきこと漸身の上にちかつき侍ることしるべし而已(マヽ)

永正第十暦沽洗下旬　　法名忠霽記之 六十四歳

一永正十一年正月佳例十首前内府家御點

むつき
なからへて世にふるかひや白雲のうへしらぬ身も春にあひぬる

のこりのゆき
かた岡の松にのこりてたれみよと春ふる雪のさえかへるらん

こと
波の音に松かせかよふ琴のねのこれや岩こすしらへならまし
圏右ノ岩コスト云詞懸身始哥ニヨミ出侍、内府家御稱
美アリ。琴ニモロ傳不知人琴ノ巻ニ注御點面目至也。

ふゑ
笛竹のたゞ一ふしのこゑの中によゝの調は有としらなむ

いと
あふことのかたいといまはくりためて法のころものたてぬきにせん
神無月一日ころ閨中にかひたる松虫の、なき
からしたるこゑを曉かたに聞て、明日朝には
なちつかはし侍るとて短尺にかきてそへ侍る
霜の後雪のうちにもかれやらておのが秋まで野べの松虫

正月佳例十首前内府家御點之内

子日

あさ霞引手に春をこめながら子日の小松あは雪ぞふる

若菜

春とに野澤のわかな出てみむ年をばつまぬためし有やと

梅遠薫

歸りみる立枝はよそにかすめ（こすめるみ）も袖にわかれぬ梅がかぞする

梅

春の夜は月の桂の追風も霞におちて梅がかぞする

春野

一こせの色の千種を立こめてかつ〳〵かすむ武藏野の原

初花

ふもとより先さきそめてよし野山花に日數の遠き春哉

花有遲速

尋くる人さへ山にこくおそき心を花もわきてさくらん
　春獸
春きても雪かきわふる奥山のふするのかるも床やさむけき
　春戀
しられしな忍ふのみたれかすか野の霞のしたにもえわたるとも
　春祝
春とに老ゆく身こそあはれなれ君は千代ませと猶祈つゝ
　紅葉
時雨をもまたて色こき紅葉こそちらてももろき程はみへけれ
　山紅葉
秋ふけぬ時雨も露もそれながら心こそそむるみねのもみちは
　忍戀
さのみ又忍こゝろもつれなしと人よりもらすなさけとも哉
　海眺望

浪のをこも春になるおの浦かせにいつればかすむ海士の釣舟
人之勸進百首中に梅風此十二首いつれも前内府家御褒美也
秋よいさ春のよさむのうたゝねは身にしむ風も梅かかそする
春田
ゆきてみむ春やむかしの石上ふるきをかへす山田成せは
寄露花
花にをくつゆたにしらぬ山さくらにほふはかりや春の朝かせ
夕卯花
なのらねど色にそしるきたそかれの卯花月よ今さかりなり
深山鹿
たれか又槇の葉しほる秋かせに鹿の音さむきね覺しつらん
海邊擣衣
深にけりまたねぬ人や浦かせにありそのわたり衣うつらん
山家暮秋

山にてもなをうき時の秋そこはおもへこおしき有明の比

池氷

いつまてか波もこすけのかせさへてこほり初たるまのゝ池水

後朝戀

こりすまに猶立かへる面影の入江の月にいてし舟人

舊戀

なかめつる夕くれとの風の音にしらす心の松もふりにき

秋述懷

秋はたゞわか身ひとりこ思ふよに猶明殘かねのこゑ哉

名所濱

行かへり千鳥なくてふ長濱の眞砂は君が御代の數かも

一弘決云　五音則屬ニ五藏ニ故返以五音治五藏又

次第禪門云

當知人身雖少其義相宛天地文

又弘決云　取意

自阿一音生九音叓則是常住佛界一音隨緣九音生也

一妙音院相國令造給妙音院〈匠ハ不ニヨル〉本尊男形ノ妙音天四条ノ北室町東也。每月十八日妙音講ヲ行ル調子平盤黃此ノ三ノ調子ノ樂ヲ次第ニマワリテセラレケリ。講ハテヽ催馬樂朗詠アリ　因緣日ヲ十八日ニ被定〈匠實不ニヨル〉叓ハ如何不審也。觀音緣日同前一向佛法ニナキコトナリ。永觀律師說ナリ。不可用第一也

一箏譜被名仁智譜叓

仁智者天地也陽也陰也甲之圓ハ主レ天腹之平ハ主レ地仍表ニ其形ニ名ニ仁智ニ云々

一十五首歌よみて前內府家へ御點申請侍しに

曉雪

泊瀨山みねの檜原の雪折にひこりは明ぬかねの聲哉

此哥十五首之內也前の雪哥は十二卷に書侍

夕雪
白妙の藤江の雪にかへらすはくるゝもわかしあまの釣舟
草雪
いつはあれご雪うちちりて草かれの小野の山陰〔西影イニヨル〕こふ人もなし
待戀
おきゐつゝ月をあはれこ思ふまにたのめしよひもやゝふけにけり
逢戀
あくるたに惜こ思ふよに命こてあたなる物をかへむこやせし
別戀
こゝむへきかとたになしわかれ路に生る葛葉も霜ふかくして
尺教而打擲之避走遠住猶高聲唱言を
あらくうつ波もいこはて立かへり〔西るイニヨル〕猶こゑたかき磯千鳥かな

一八幡宮正月神宴　信秋自筆寫之書

朔日御節　寶前　先新樂乱聲三節

次万歳樂先笙調子篳篥音取調子一句吹之次笛音取吹出當曲

次長慶子笙　篳篥　音取笛不音取吹出之

若宮　三臺破　笙　篳篥　笛音取吹出之

若宮殿　五常樂破　同急　每度御節次第大畧准之

同夜修正

先乱聲　初夜導師下高座之時吹出之後夜導師從僧置居莒之時止之

次登高座　喜春樂破先笙調子次篳篥音取調子次笛音取吹出之

次黃鐘調々子一反笛不音取吹出調子

次三十二相六反次烏急二反次稽首八幡三反笛一者吹之狛笛ニテ一人吹之三皷太鼓三度拍子加之

次舞　万歳樂　地久　次偈頌十二反此已後上首輩退出

次下高座　長慶子　每夜修正次第大畧同之

二日　御節

寶前　万秋樂破　千秋樂　若宮　鳥向樂　若宮殿　宗明樂　白柱

同夜修正　自今夜登高座之樂不定但黃鐘樂用之

舞　賀殿　延喜樂

三日　御節

寶前　太平樂破　同急　若宮　髮頭樂　若宮殿　五常樂破　同急

同夜修正　舞　太平樂　古鳥蘇

四日修正　舞　三臺　皇仁

五日修正　舞　甘州　林哥

六日修正　舞　散手　貴德

偈頌已後餅廻有之撿校（イ本ニテ補）勾當進東樓門之時笙吹調子笛音取吹出鳥向樂　置餅於

御前退出之時止樂

七日　御節　今日双調笛調子一反吹之

寶前春庭楽/胡飲酒破若宮鳥破若宮殿賀殿破/同急　〔囲〕各狩衣/ヲ着ル

同夜修正　乱聲　登高座　舞　此外叓等無之

舞　陵王　納蘇利

今夜儀職叓無催促面々可早参　六位皆上結五位下結如元　社務出仕路用伶人舞人着座

中樂所無礼節

舞以後經僧持來牛玉、樂所笛一座請取之渡職叓、面々分取即退出之退音聲無之

八日　若宮　晝舞　七ヶ夜舞皆有之

先集會乱聲三ヶ日舞童惣後社務出仕此時又/乱聲　着座之後笛一臈持參樂目六進舞臺半從僧行向

請取即進社務笛一臈〔イニテ補〕皈着座之後舞始之座敷西ノ北ヨリ次第ニ南東下臈ニ着座前ノ

北座舞童着座舞師相交樂人着座無舞童之時舞師着彼座今日儀無横座　散手貴德桙立役十節

輩内末座役也

同夜護國寺修正　其儀同社頭但舞無之

九日夜修正　同前　十日　十一日　十二日　十三日
十四日　夜修正乱聲登高座之外無之鬼走
十五日　御節　三臺破　同急　若宮　慶雲樂　若宮殿五常樂破同急
同夜踏歌
先出仕役人各着座飯殿但常時此所無之用若宮御節座　行饗饌但當時無之　役人等取挿頭花着之、次立和琴
柱、此間宮方導師登樂廻坏樂　傳供十天樂　三十二相二反　鳥急二反　其後御所櫻木下次第列立十童
同之。但依無此處列立若宮殿前、次音取哥万春樂、又哥我家、經御寶前殿後廻西南東入
東門同北小門各列立敘（〔邇欽〕〔不〕ニヨル）御前北、上首　次雙調々子一反　又哥万春樂、一廻入井墻内
哥此殿、又一廻次着座、此間人長以下進出行事、次奎音取立座哥何曾毛一廻、又所着本
座行酒肴、次導師下樂自宮方吹之、次兩方皆退出、面々束帶但近來或用衣冠宮方各着淨衣
十九日　心經會　陵王　納蘇利　。
廿三日　御節
寶前鳥向樂千秋樂若宮採桑老　若宮殿宗明樂白柱

二月初卯日　六日　十五日　三月　三日　四月一日　八日　十七日　五月　五日　六日卅
日　七月七日　十五日　八月十五日　九月九日　十月一日　十一月初卯日　十二月十五日

已上正月十五日御節樂打替々用之

玄六云〔臨之図ニヨル〕若相似爲隔生不忘名字觀行爲隔生即忘或有不忘矣　私云此叓信者之上ニテモ一大叓也。能々ツヽシミチソレテ佛ニ祈可申也。

永正第十二暦正月佳例十首題前内府家ヨリ被下

遲

ふるさとのよしのの深雪いつきえて人にまたれぬ花とみえまし

速

ことの葉はかきもなかさて石まゆく花もとまらぬ水のさか月

聽?

笛竹の調につけて物そ思ふ世にあはぬねは有もかひなし

淸

なかめつゝすめるは空と思ふにも月の都はくまなかるらん

舊

あらためておこさすとてもせめて世にふりぬるまゝの道と思はは

右五首者十首之内御點也　二首述懷者今度樂所一同ニ禁裡ヘ欲申事有之暫よろしき無御返事時於愚心述懷申趣也。取分奥哥眞實胸中此事也。併不謀無是非道理彌後生者稽古ヲ專スベシ至當年樂所申旨達テ御成敗也粗忝由致也

楮尾殘ニ間思出次第ニ載也。教訓抄ニ曰。諸ノ道に地獄アリ、其直アルユヘニ、管絃ニハ地獄ナシ、其料物ナキユヘニ、此題ニテ大神基政

うれしくもつみなきことをしけるかな數ならぬ身はこれそかしこき

とあり。基政ハ笛ノ堪能トコソ思ひ侍しに、かやうに歌をもよみ侍事よ。古人の哥よまぬはなきと申これにてしらるゝ者也。末代は此さかひ一大事也。さのみ人の無能にて我道ひとつの外はさたすべからざるよしにて、さしよりに物いふもこは〳〵しく、かたくなゝるも又如何にそや。あなかちに漢才をいひませ源氏の物かたり已下和哥の詞をつゝけなとせ

ねども、さすかいやしからず、ものこしは女ならねど男もはづかしきものなり。又たれもよむ論語孝經などなれども、たよりもなき所にていふとこはかりに引いたしたるも中〳〵いはぬにはおとりたる心ちし侍る。又藝なきは心うきこと思ひて、希代の家に生て、其道をばさしおきて、他藝に心をとゞめ侍て如形も道の主あるにもはゞからず、利口ましりにしりかほなるもかたはらいたきわざ也。萬につけてよき程に身上ははからふへきと也。前の哥に樂道に地獄なきよしこそ信かたき事なれ、むかしといまの時代とはかはるへし、これもよく分別すべき事なり。佛法をきかさるものは、後世の道はわきまへかたし、かたよりにたゞ親先祖われはなにの宗にてあれば、他宗の申事はいやにてある事と申て、耳をとち頭をふりなどして未得爲語なるはあちきなき事なるへし。つゐに今生まて正法にあひたてまつらざる事を歎詞に云

一劫受生骨雖高毘浮羅山爲佛法修行不捨一塵恩愛(マヽ)〔○愛〕別離涙雖深蒼迷海爲聞法隨喜不可一滴と侍るこの理をよく案し調て法の淺深を分別し、後世をはなけくべきとなり。

日蓮大聖御書〔保〕

觀心本尊〔〇ニテ彌〕抄云、今ニ本時ノ娑婆世界ハ離ニ三災ヲ出ニタル四劫ヲ常住ノ淨土之、佛既ニ過去ニ不

レ滅未來ニ不レ生所化以テ同躰ク、此即チ己心ノ三千具足三種ノ世間也迹門十四品ニ未レタ說レ之於ニ法華經內ニ時機未ダ熟セザリシ故歟此ノ本門ノ肝心於テハ南無妙法蓮華經五字ニ佛猶文殊藥王等ニ不ニ付屬ニ何ニ況ンヤ其已下ヲ乎、但召テ地涌千界ヲ說テ八品ヲ付囑之、乃至在世四十餘年ニ無之八年之間但タ限ニレリ八品ニ

法貴レバ人貴シ、人貴レバ所貴シト侍ハ本門宗の我等か所住のありさま天人常充滿こ侍ればたのもし、諸天擊天皷常作衆妓樂こあり、今生の執心なれは殊更可遊樂事本意也可仰可信之

一孔子みちをすき給けるに老翁一人あひたり、孔子にむかひて三度口をあきてものをはいはさりけり。孔子これをあんし給ひける、三度口をあくこもとはないたしそこをしへけるこそ心得給ひける。或文にはしは〳〵多言をここして三緘のいましめをかへりみすこかけるは此ここなりこそ。これらにて心得へきなり。

或人云、人はよき友にあはむとをねがふへきなり。麻の中のよもきはためさるに身つからなをしこいふたこへあり。蓬は枝さしなをからぬ草なれこ、あさにましはりぬればゆかみ

ゆく道のなきまゝに、心ならすうるはしく生のほるなり。心あしき人なれどうるはしくうちある人の中にましりぬれは、さすかかれこれをはゝかる程にをのづからなをくも成なり、これによりてよき友にあはむことを經にも文にもすゝめたり。顔氏家訓には與二善人一居如レ入二芝蘭之室一、久ノ與自芳也。與二惡人一居ハ如レ入二鮑魚之肆一、久ノ與自臭也といへり。又或文には人心は水の入物にしたかふかことしとも有。ゆめ／＼心あしからん人には友なふべからず。芝澗にすみし四人のおきな、竹林にこもりし七賢類、さとこそおもはしきともなりけめ。子猷は雪月の空にあくがれてはるかに剡縣の安道をたつれ、劉惔は清風朗月に玄度なきことをぞうらみける。まことに心にかなふともなからむには、いかなる興宴ももの うく覺ぬべし。されば梁の孝王は鄒牧ふたりの臣さりにしかば菟園の遊をとゞめ給き。魯の仲尼は子路といひしおもはしき弟子におくれて後は、たかひにすゝめけるものをもすて給ひけり。又云。與善人居ハ譬ハ如行霧中此心者シラス衣ノ濕也。

戈人善人ニ交ハ不知ヨリ成物ヲ知コトアルナリ

清和第九の皇子貞眞親王の作給ける

鄒牧散シテ後平臺靜ナリ　空遺ニ春風ニ只斷レ腸

文選第廿一魏文帝與呉質書云

昔ハ伯牙絶絃於鍾期、仲尼覆醢於子路、痛知音之難遇、傷門人之無逮也。

村上帝かくれさせ給て後枇杷大納言延光卿朝夕戀忍ひたてまつりて御かたみの色を一生ぬぎ給はさりけり。或夜夢に御製を給はせけり。

月輪ハ日本ニ雖相別　溫ハ意清涼ノ昔ニ至誠　都率ノ最高處ニ歸内院ニ　如今於彼ニ語卿名

大納言夢おごろきてこれに和したてまつる

再拜聖顏一寢程　恩言芳處奏中情　夢中覺〇夢中〇（〇〇ハ落字ノシルシカ）縦盡トモ一生豈空驚

かの小野小町が哥思ひいてられて

思ひつゝぬればや人のみえつらん夢としりせはさめさらましを

一俊頼朝臣語云、白河院淀に遠望の行幸アリけるに、五月許の事にや有けむ、女房殿上人の舟なごあまた有けるに曉に成程に、むかひの方に郭公の聲ほのかにきこえてすぐ。俊頼

一首詠せまほしくおほえしに、女房の舟のうちに忍ひたる聲にて、よそのわたりのまた夜ふかきにとなかめられし、時に臨てめてたかりき。人々感歎しき、今にわすれず。あわたゞしくよみたらんにはまされりとなむいはれける。

これにてよろづに心つき侍へき事なり。哥道によらす何事にもこの心はへは有ぬへき事なり。佛法にも絶言歎といふとあり。こと葉にいたしたるよりも心にいかめしう思ひたるけしきは、なににつけてもよろこはしきものなり。

一逍遙臺東坡自注莊子祠堂在闕元寺卽墓爲堂也　蘇東坡二之卷

常怪劉伶死ハ便埋ト云ヲ　豈伊忘レテ死未レ忘レ骸　烏鳶奪得與ニ螻蟻一　誰信先生ニ無ニ此ノ懷一

晉ノ劉伶常テ乗テ鹿車ニ一携ニ一壺ノ酒一使ニレ人ヲ荷レ鍤ヲ隨ニ之曰死ハ便チ埋レト我

莊子將レニ死ントス、弟子欲ノ厚葬之曰、吾恐クハ烏鳶ノ之食夫子ヲ也莊子カ曰、在テ上ニ烏

蔦食在レ下螘蟻食奪レテ彼カレ予レフ此何ソ其偏ソレヘンナルナル也。

南無妙法蓮華經

豐原朝臣統秋在判

日本古典全集既刊書目總覽

（洋數字ハ全集册數。無記入ハ他卷併綴。＊ハ古典文庫編入ノ印。（狩）ハ棭齋全集。（西）ハ西鶴全集ノ略符。）

【第一期刊行書目】

＊出雲風土記 1
＊常陸風土記 1
＊播磨風土記
＊豐後風土記
＊肥前風土記
萬葉集＊略解 8
懷風藻 1
凌雲集
文華秀麗集
＊校本日本靈異記（狩） 1
經國集
本草和名 2
＊御堂關白記・附歌集 2
本朝麗藻
源氏物語 5
榮華物語 3
平家物語 2
＊吾妻鏡 8
＊曾我物語 1
法然上人集 1
易林本節用集 1
＊好色一代男（西） 1
好色二代男（西） 1
＊西鶴諸國咄（西） 1
近代艷隱者（西）
好色一代女（西） 1
日本永代藏（西）
新可笑記（西）
本朝櫻陰比事（西） 1
世間胸算用（西）
俗つれづれ（西）
芭蕉全集 2
＊玉かつま 2
日本靈異記攷證（狩） 1
京遊筆記（狩）
轉注說（狩） 1
扶桑略記校譌（狩）
稜條千金（狩）
大隈言道全集 2

【第二期刊行書目】

＊古事記 1
＊採輯諸國風土記 1
＊竹取物語 1
古今和歌集・附教長注 1
土佐日記 1
＊大和物語
＊住吉物語
後撰和歌集 1
＊片假名本後撰集
＊延喜式 7
＊拾遺和歌集・附公任集 1
蜻蛉日記
更級日記
＊清少納言（枕草紙）家集 1
＊紫式部日記・附家集
和泉式部全集 1
＊唐物語
＊舞圖（信西古樂圖） 1
教訓抄 2
＊保元物語 1
＊平治物語
＊宇治拾遺物語 1
長秋詠艸 1
山家集
＊承久記
＊義經記 1
徒然艸 1
謠曲百番 4
＊諸勘分物 1
＊塵劫記 1
＊竪亥錄
＊因歸算歌
＊ぎやどぺかどる 1
＊妙貞問答 1
＊破提宇子
＊顯偽錄
好色五人女（西） 1
本朝廿不孝（西）
男色大鑑（西） 1
懷硯（西）
武道傳來記（西） 1
武家義理物語（西） 1
＊好色盛衰記（西） 1
＊一目玉鉾（西）
＊西鶴置土產（西） 1
西鶴織留（西）
萬の文反古（西）
名殘の友（西）
參考讀史餘論 1
＊賀茂眞淵集 1
與謝蕪村集 1
江漢西游日記 1
＊本朝度量權衡攷（狩） 2
＊錢幣考譜（狩）
＊錢幣考譜圖錄（狩） 1
日本現在書目證注（狩） 1
說文檢字篇（狩） 1
文教溫故批考（狩）
＊上宮聖德法王帝說（狩）
古京遺文（狩） 1
＊萬葉集品物圖繪 2

【第三期刊行書目】

日本書紀 4
伊勢物語 1
うつほ物語 5
後拾遺和歌集 1
金葉和歌集 1
詞花和歌集
千載和歌集 1
新古今和歌集 1
古今著聞集 2
伊呂波字類抄 8
人倫訓蒙圖彙 1
古押譜 2
五畿內志 3
物類品隲 1
雲根志 2
近世畸人傳（正續） 2
＊重訂本草綱目啓蒙 4
假字遣奧山路 2
＊歌舞妓年代記 3
歌儛品目 2
＊埋麝發香 1
＊觀古雜帖・附忠友歌集
蝦夷日誌集 3

昭和八年四月五日印刷
昭和八年四月十日發行

日本古典全集
【非賣品】

體源鈔 一

編纂者 正宗敦夫
東京市豐島區長崎東町三丁目一六二
發行者 合資會社 日本古典全集刊行會 代表社員 長島東一
東京市豐島區長崎東町三丁目一六二
印刷所 不二製版印刷所 印刷者 高瀨淸吉
東京市豐島區長崎東町三丁目一六二
裝幀者 廣川松五郎
發行所 合資會社 日本古典全集刊行會 振替東京七三〇二二

UNIVERSITY OF TORONTO
LIBRARY

WILLIAM H. DONNER
COLLECTION

purchased from
a gift by

THE DONNER CANADIAN
FOUNDATION

EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 03123 8579